

日本女子大学 博士学位論文

自己認識欲求モデルとその実証的研究

上 瀬 由 美 子

①

日本女子大学博士学位論文

自己認識欲求モデルとその実証的研究

上 瀬 由美子

目次

第1章 自己論文発表に関する は し が き	1
------------------------	---

これは、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第4条第2項により、平成8（1996）年10月24日に本学において博士（文学）の学位を授与した者の論文である。

第2章 学位論文の審査に関する事項	10
第1節 自己論文の審査に関する事項	10
第1項 自己論文の審査の目的	10
第2項 自己論文の審査の範囲	10
第3項 自己論文の審査の方法	10
第4項 自己論文の審査の結果	10
第2節 学位論文の審査に関する事項	10
第1項 学位論文の審査の目的	10
第2項 学位論文の審査の範囲	10
第3項 学位論文の審査の方法	10
第4項 学位論文の審査の結果	10

目次

序章	(1)
第 I 部 自己認識欲求に関する理論的背景	(4)
第 1 章 自己の構造に関する研究	(5)
第 1 節 W.Jamesによる自己研究の開始	(5)
第 2 節 初期の自己概念研究	(6)
第 3 節 認知心理学的アプローチによる自己概念研究	(7)
第 2 章 自己探求行動に関する研究	(13)
第 1 節 自己情報収集行動を規定する動機研究	(13)
第 2 節 自己焦点化と自己探求行動	(23)
第 3 節 自己情報収集行動に関する研究	(27)
第 4 節 アイデンティティ研究	(29)
第 3 章 自己認識欲求	(33)
第 1 節 自己査定動機理論の問題点	(33)
第 2 節 自己認識欲求の基本的仮説	(34)
第 3 節 自己認識欲求概念提出の有効性	(41)

第II部 自己認識欲求に関する実証的検討 (45)

第1章 自己認識欲求測定尺度の作成と、日常生活の不適応感との関連 (47)

- 第1節 目的 (47)
- 第2節 方法 (50)
- 第3節 結果 (51)
- 第4節 考察 (56)

第2章 自己概念不明確感と自己認識欲求の関連 (60)

- 第1節 目的 (60)
- 第2節 方法 (63)
- 第3節 結果 (65)
- 第4節 考察 (73)

第3章 自己概念不明確感の背景と自己認識欲求喚起 (76)

- 第1節 目的 (76)
- 第2節 方法 (78)
- 第3節 結果 (79)
- 第4節 考察 (84)

第4章 自己認識欲求喚起による情報収集行動の実験的研究 (86)

- 第1節 目的 (86)
- 第2節 方法 (88)
- 第3節 結果 (90)
- 第4節 考察 (93)

第5章 自己認識欲求喚起と、心理テストへの接近に関する研究	-----	(97)
第1節 目的	-----	(97)
第2節 方法	-----	(99)
第3節 結果	-----	(100)
第4節 考察	-----	(105)
第6章 自己認識欲求喚起に関する実験	-----	(107)
第1節 目的	-----	(107)
第2節 方法	-----	(109)
第3節 結果	-----	(114)
第4節 考察	-----	(122)
第7章 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の関連	-----	(126)
第1節 目的	-----	(126)
第2節 方法	-----	(129)
第3節 結果	-----	(131)
第4節 考察	-----	(135)
第8章 収集される情報と収集手段の関連	-----	(138)
第1節 目的	-----	(138)
第2節 方法	-----	(138)
第3節 結果	-----	(139)
第4節 考察	-----	(144)
第9章 自己認識欲求と他のパーソナリティとの関連	-----	(145)
第1節 目的	-----	(145)
第2節 調査1	-----	(145)
第3節 調査2	-----	(147)
第4節 調査3	-----	(150)
第5節 全体的考察	-----	(154)

第10章 自己認識欲求の構造と情報収集行動	(155)
第1節 目的	(155)
第2節 方法	(156)
第3節 結果	(156)
第4節 考察	(164)
第11章 高校生にみる自己認識欲求	(167)
第1節 目的	(167)
第2節 方法	(170)
第3節 結果	(174)
第4節 考察	(180)
第12章 中高年にみる自己認識欲求	(185)
第1節 目的	(185)
第2節 方法	(188)
第3節 結果	(190)
第4節 考察	(201)
第13章 高校生・大学生・中高年の自己認識欲求の比較	(204)
第1節 目的	(204)
第2節 方法	(204)
第3節 結果	(205)
第4節 考察	(211)
第14章 子供をもつ母親にみる自己認識欲求	(215)
第1節 目的	(215)
第2節 方法	(218)
第3節 結果	(220)
第4節 考察	(230)

第III部 総括 ----- (232)

第1章 各章の要約 ----- (233)

第2章 自己認識欲求の仮説モデルの検討と研究の意義 ----- (240)

第1節 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度の

信頼性・妥当性 ----- (240)

第2節 自己認識欲求仮説モデルの検討 ----- (243)

第3節 既存研究との関連 ----- (256)

第4節 本研究の意義 ----- (263)

第3章 課題と展望 ----- (268)

引用文献 ----- (272)

謝辞

序章

自己に関心をもち、自己をより理解しようとする傾向を、人間の特徴として位置づける考えは、一般的に広く普及している。自己への関心を人間古来のものとする考えとしてしばしば引用されるのが、ギリシア時代にソクラテスがアポロンの神殿で授かった「汝自身を知れ」との神託である。

実際に、古来より哲学や宗教学あるいは文学の分野でも自己とは何かの回答を求めるために多くの研究者が心血を注いできた。また近年では動物社会学、脳生理学あるいは免疫論など様々な分野で「自己」が扱われ始めている（例えば、真木,1993;多田・中村・養老,1994;多田,1993 など）。これは「自分とは何か」「自分を知りたい」との問いが形を変えて人々の間に持ち続けられていることを示す証であろう。

このように「自分を知りたい」とする傾向を人間に普遍的なものとする考えがある一方で、Baumeister(1987)のように、自己への興味そのものを現代的なものとして指摘する研究者もいる。Baumeisterは、現代のような自己追求を求める傾向は、社会的変革によって自己定義や自己概念が不明瞭になったことから生じていると指摘している。すなわち、以前の固定的な社会構造の中では、個々人の身分や役割が明確な行動指標をもっており、個人が「自分とは何か」を考える必要はなかった。自分とは、身分や役割によって決定されるものであるからである。彼は前述の「汝自身を知れ」という神託の意味は自身の分を知るという意味にあり、現在一般的にイメージされている意味と異なっていたと解釈している。言い替えれば、現在我々が自分を知りたいと感じる「自分」と、当時の「自分」の間には意識のズレが存在しているとの考えである。ただし、人間が社会生活を営む存在であることを考えれば、自己を知ることの意味はそれぞれの人が置かれた社会状況によって大きく異なるのは当然である。前近代的な社会にあっては、例えば与えられた役割を適切に遂行するために自己を知る必要があったのであり、現代では役割そのものを見つけるために自己を知る必要があるとも推測される。従って、自己を知ろうとする傾向は人間の心のメカニズムに基づく普遍的なものであり、その対象や欲求の強さが社会状況によって変化してきたものと位置づけるのが妥当と考えられる。

近年わが国でも「内向の時代」(梶田,1994)などとの表現で、自己への関心の高まりが問題とされており、これらの心理の背景について様々な論考がなされている。例えば伊藤(1995)は、精神的レベルの貧困化・テンポの速すぎる社会的変化・価値観の多様化・家庭崩壊現象・難病の出現などによる不確実な社会を背景に生まれたものと解説しており、その影響が特に若者に強くみられると論じている。また、鏝(1990)は日本人の自我のあり方の変化を「予定ア

アイデンティティ」から「選択的アイデンティティ」への移行との視点からとらえ、これが自分は何をしたいのか、何をもちめられているのかを自分の内側に常に問かけながら生活していかなければならないことにつながったと論じている。

このような現代の「自己を知りたい」との心理は、自己情報を得るための様々な手段に対する人気の高まりを取り上げて論じられることが多い。例えば読売新聞1992年5月27日号では、サラリーマンの間で自分自身が周囲からどのように評価されているのかを興信所に調査させる依頼が増加していることが取り上げられている。また、自己開発セミナーあるいは自己啓発セミナーとよばれるものへの参加も、その背後には強い「自己探求」の心理が存在すると指摘されている(福本,1993)。また堀野・上瀬(1994)は現代の大学生を対象とした意識調査から、彼らの間に「自分を知りたい」という希望が強く存在していることを指摘すると共に、カウンセリングや精神分析などを受けてみたいという心理が強いことを示している。その他にも、“心理テスト”の氾濫(上瀬,1991)、占いの人気や宗教ブームあるいは“新・新宗教”の台頭なども自己探求の心理と結び付いていることが推測されている(伊藤,1995;島蘭,1992;酒井,1995)。

自己を知りたいとする心理の背景要因については、このように様々な論考がなされているものの、いずれも推測にとどまり実証的な研究は少ない。しかし伊藤(1995)が指摘するように、占いや新・新宗教の隆盛という現象をブームとして片付けるのではなく、自己への関心の背後にある心理的メカニズムを明らかにすることが重要である。言い替えば自己への関心についての人間の普遍的な心的メカニズムを明らかに出来れば、現代社会においてなぜ自己への関心が高まるのかをより明確に説明することができるからである。

人間の心の問題を扱う心理学では、人がなぜ自己を知ろうとするのかという問題をこれまで様々な視点から論じてきた。近代心理学の祖であるW.Jamesは「心理学」(James,1890)の中で自己の問題に多くの頁を割いている。近代思想に大きな影響を与えたFreudの精神分析理論(Freud,1923など)を始めとして、臨床的な心理学でも自己の構造やメカニズムを研究の中心としてきた。発達心理学の分野でも人が自己に関心をもつ時期や、自分を自分として認識する時期について、多くの実証研究を残している。

また社会心理学の分野で近年行われている自己知覚や自己過程に関する研究は、自己について関心をもち自己に関する様々な情報を集める自己探求行動の心理的メカニズムを様々な実験や調査によって実証的に明らかにしている。これらの研究知見は、現在の社会現象を説明する上で有効である。ただし、社会心理学ではこれまで様々な理論が自己を知るための様々な行動やその背景を研究対象として扱ってきてはいるが、実際には個々の研究が限定された範囲で自

己への関心を扱っているために、全体として自己への関心がどのように説明されているのかが明確となっていない。

そこで本研究では、この問題に対する従来の社会心理学的視点に「自己認識欲求」という新たな仮説的構成概念を提出し、自己への関心についての社会心理学的な研究知見を自己認識欲求の視点からまとめることを試みる。続いて、自己認識欲求の喚起と解消のモデルの妥当性を、調査研究を通じて確認することを目的とする。従って本研究は「自己とは何か」ということを追求するためのものではなく、自己を知りたいとする欲求が喚起されまた解消されるプロセスを実証的に検討するものである。本研究では、新概念の導入により自己についての理解が促進され、自己への関心にかかわる様々な個人的・社会的現象の解釈に役立つと考えている。

ところで、冒頭で述べたように、自己を知りたいとする人間の心理を明らかにするには、社会心理学的な視点以外からもこれを捉えることも可能である。ただし、本研究では特に次の点を考慮し、社会心理学における自己研究の枠組みでこれを解明することとする。

まず、実証研究を行う上で操作定義や研究方法が整備されているという点である。先に述べたように、社会心理学における既存の自己研究では、自己探求に関する動機や自己への関心が生じるメカニズム等について実証的な結果が提出されている。その際には、各々の研究で扱われる欲求や動機づけあるいは関心の高さなどが明確に定義されている。また当該の心理を測定あるいは検証するための実験方法や研究枠組みが整備されている。これに対し、哲学・文学・社会学などの分野で提出される視点は、実証することに困難が伴う。同様にして、臨床心理的な研究枠組みから提出された概念も、用語の定義や操作的定義が困難なものが多い。例えば自己探求に関連して用いられることの多いアイデンティティという用語は、多義的に用いられることも多く、明確な定義には困難が伴うことが指摘されている(鑑,1984)。上記に挙げた様々な視点は自己探求行動を説明する上で有効な手がかりを提示するものであろう。ただし本研究では、科学的実証性のための利点から社会心理学的視点に限定し自己探求の問題を検討する。

また、人が自分を知らうとする背景には、他者と自分、あるいは社会と自分といった関係が大きく関連している。自己への関心の問題を実証的に扱う研究は社会心理学以外にも、例えば生理心理学における自己意識の問題など様々に行われている。ただし本研究では、関心の対象となっている「自己」は社会的存在であるという前提に立ち、特に社会心理学的な研究枠組みからこの問題を扱うことを試みる。

第 I 部 自己認識欲求に関する理論的背景

本論文では、自己に関する情報収集行動を生起させるものとして、自己認識欲求の仮說的構成概念を提出し、概念の妥当性を検証することを目的としている。

まず第 I 部では、この仮說的構成概念の提出を試みる。

このうち第 1 章では、従来の心理学で、自己に関する情報の集合体としての自己概念がどのように研究されてきたのかを概観する。

第 2 章では、自己に関する情報収集行動を扱った研究を概観する。

最後に第 3 章では、自己認識欲求の概念を提出し、既存の研究をその中に位置づけるとともに研究の意義を述べる。

第1章 自己の構造に関する研究

人が知りたいと感じる「自己」は、どのようなものであろうか。人が自己についてもっている知識の総体は自己概念と呼ばれている。本研究では社会心理学的な枠組みをふまえ、人が客体的に知る自分としての「自己」を、この自己概念としてとらえる。

本章では、社会心理学の分野でこの自己概念がどのようなものとして理解されているかを概観する。これに従い、まず第1節では心理学における自己研究の創始者であるW. Jamesの自己研究を簡略にまとめる。続く第2節でJames以降の自己概念研究を概観する。そして3節では、自己概念の構造について近年の情報処理的アプローチ研究を中心に解説する。

第1節 W. Jamesによる自己研究の開始

近代心理学の体系における「自己」研究は、W. Jamesに始まるといわれる。James (1890) は、自己を心理学の主要な研究テーマとして位置づけたが、その際に自己を、「知るもの(Knower)」と「知られるもの(Known)」という2つに分類した。前者は主我(I)、後者は客我(me)と呼ばれる。

このうち主我は、純粹自我(pure ego)とも呼ばれることもある。後にDamon & Hart (1988) が指摘するように、主我の働きは次の4点に集約される。第1に自己の作用への注目(agency)であり、これは自分で経験をまとめていけるという確信になる。第2に経験の独自性への注目(distinctness)であり、自己の安定に結び付く。第3に個人の連続性への注目(continuity)で、個性や個人の感覚の基となる。第4に自己への注目(reflection)で、個人的同一性の形成や自己意識を形成する。ただしJamesによれば、主我は主観的・不明確で、時によって変化するものであって心理学の対象としては不適当とされている。

一方客我は、経験的自己(empirical self)であり、個人が彼のものと呼びうるもの、個人の身体・能力・友人・職業その他一切のものとの総和とされる。客我は主我と異なり限定されているため、心理学者はこちらを研究対象とすべきと位置づけられている。またJamesは、客我を構成する成分として物質的自己・社会的自己・精神的自己の3つを挙げている。第1の物質的自己とは、個人の身体や衣服などで、失われると自分の一部が失われたように感じるものである。第2の社会的自己とは、他人から見られている自分の姿であって、他人の数だけ社会的客我が存在する。さらに第3の精神的自己とは意識に表れた主我の姿で、性格・能力・内的経験などである。

自己を認識する主体と、認識される対象に二分するJamesの視点は、ヨーロッパの伝統的な

認識論の考えに立脚したものといえる。しかし、それ以前の哲学や宗教学の分野が形而上学的な統一原理を「自己」という言葉で表現していたのとは異なり、Jamesは「自己」のもつ実際の機能の心理学的な解明を試みた点で、大きな意味をもっている。彼の研究は自己の問題を総合的に記述したものであり、今日の社会心理学における自己研究の源泉となっている。特に、次の3点において以降の自己研究に大きな影響を与えたとされる。

まず、認識される対象としての客我を心理学の研究対象としてふさわしいものと論じた点である。この客我は、経験に基づく自己に関する知識の総体ともいえ、現在一般に「自己概念」と呼ばれているものにあたる。

第2に、自己を社会的なものとして位置づけた点である。Jamesの理論では、社会的自己の形成は、個人と他者とのフィードバックを仮説している。つまり自己はそもそも社会的・対人的な相互作用の中で形成され、存在意義をもつものであり、必然的に文化や集団に影響されるとの前提が存在している。

自己が社会的なものであるという視点は、その後Meadの自己理論(Mead,1934)などに引き継がれている。

第3に自己の多元性を指摘した点である。客我を3つの構成要素に分類する視点は、その後の自己概念の構造研究に結び付いていると考えられる。

第2節 初期の自己概念研究

James(1890)からCooley(1902)に続く自己研究は、その後、行動主義全盛時代に、一時停滞する。社会心理学で自己が研究対象とはなることは少なく、自己の問題はこの間、Freud(1923)らの精神分析的アプローチや、Rogers(1956,1963など)の現象学的アプローチ、Mead(1934)など社会学における象徴的作用理論などで研究が進められてきた。

1950年代に入り、自己概念測定についての様々なアプローチが現れてきた。ここでは、個人が自己をどのように評価しているかを自己報告尺度によって測定することが試みられた。この段階では、Rogers(1951)のQ-sort法、Bugenthal & Zelen(1950)の「Who Are You? (WAY) test」、Kuhn & Mcpartland(1954)の「20答法/Who Am I? test」などがある。これらの研究は、自己概念の内容を明らかにするとともに、どのような次元から成立しているかという構造研究を念頭においていた。

この時期の最も典型的な自己概念研究としてRosenberg(1979)のものが挙げられる。ここで指摘される自己概念の内容は、「1.社会的地位」「2.信念や利益の類似性、文化の共有や起源の共通性、身体的または宗教的接近を基にした成員集団」「3.判事・医師・公共機関などの証

明的代理者による社会的ラベリングに基づくもの」「4. その人の個人史または生育歴に起源をもつもの」「5. 社会的に知覚されている趣味、態度、性格、習慣などについての症候による社会的タイプに基づくもの」「6. その人に独自に割り当てられたラベルによる個人的同一性」である(井上,1992)。また、自己概念の次元は他の一般的な態度構造と同様の次元をもつとされている。すなわち、内容・方向・強度・突出性・一貫性・安定性・明確性・正確さ・立証性の各次元である。さらに、Rosenbergの理論における自己概念の構造とは、これらの構成要因間についての以下の3つの関係として表現される(井上,1992)。「1. 自己概念の構成要因は人の関心事のうちで等しくない中心性があり、自己価値システムの中で階層的に組織化されている」「2. 自己概念は特殊な水準と全体的な水準の両方で見ることができる」「3. 自己は具体的および抽象的条件で概念化される」

第3節 認知心理学的アプローチによる自己概念研究

1970年代後半から、自己概念研究には認知心理学的視点が影響を与え始めた。認知心理学は、人間を情報処理システムとみなして、そのしくみや情報処理の仕方を記述するという情報処理的アプローチに特徴がある。すなわちコンピュータ・シミュレーションにおける「入力→符号化→処理→出力」というモデルで人間を捉えることが試みられている。

社会心理学においても、様々な研究者が、対人認知・印象形成・ステレオタイプ・態度理論・態度変容など様々な分野で認知心理学の概念・理論・方法を応用し始めた。

Linville & Carlston (1994) は、認知心理学的アプローチが影響を与えた近年の自己研究について、自己の構造に関する基本的仮説を次の3点にまとめている。すなわち、「Multiple selves (多元的自己)」「Declarative plus procedural self-knowledge (宣言的・手続き的自己知識)」「Shifting activation (活性化の移行)」である。多元的自己とは、自己は複雑な構造をもち、様々な側面より成立するものとする考えである。宣言的・手続き的自己知識は、自己概念が実際の行動に関連する過程で、JamesがIと呼んだ働きをする自己の認知的プロセスも取り上げる考えである。さらに活性化の移行とは、自己概念が常に意識化されるのではなく、部分的に活性化し行動に影響を与えるとする考えである。これらの点はいずれも初期の自己概念研究と大きく異なっている。自己に関するこれらの仮説は、本研究で扱う自己を知りたいとする欲求や自己情報収集行動のあり方にも深く関連するため、以下に説明を加える。

1. 多元的自己

(1) 様々な認知モデル

James (1890) は知られる自己 (Me) を社会的・精神的・物質的の3側面に分類しているが、これは自己が多面的であることを捉えてのものである。その他にも、Allport (1955) は、自己について8つの要素を提出している。(ただし、Allportは自己という表現は用いず、パーソナリティの内的統一を助長するあらゆる側面を包括するものとしてproprium (プロプリウム) という概念を提出している。) その他、役割理論で扱われてきた自己もその多元性を想定していたものといえる (例えば、Mead, 1934)。

自己が多面的であるという考え方に対し、Rosenbergの自己研究などは自己をひとつのまとまりとして捉えようとするものである。ここでは自己概念に様々な要素や次元が設定されながらも、それらの要素はお互いに順位づけられ評価されている。

自己を多元的なものとして捉える方がよいのか、あるいは単一のものとして捉える方がよいのかということは、自己研究において以前から大きな論争のひとつであったが、近年の認知モデルでは自己を多元的なものと考えている。さらに、以前の自己研究との大きな違いは、自己を他の認知構造と同様の構造をもつものと仮説している点である。自己の情報処理的アプローチを用いる自己研究では、これまでの認知心理学で行われてきた記憶モデルを自己構造にもあてはめ、その妥当性を検討している。

多元的自己を示した代表的なモデルとして、Markus (1977) のセルフスキーマモデル (Self-schema model)、Rogers & Kuiper (1979) のプロトタイプモデル (Prototype model)、Bower & Gilligan (1979) の連想ネットワークモデル (Associative network model) などがある。

このうちセルフスキーマモデルは、認知心理学で用いられていたスキーマの概念を自己にあてはめたものである。人は様々な出来事に遭遇した時、それぞれを新たな個別の出来事とは認識しない。過去の経験から形成された知識のまとまりにそれぞれを当てはめて、解釈し理解している。この認知の枠組みはスキーマと呼ばれている。スキーマには様々なものがあるが、この中で自分自身に関する知識のまとまりがセルフスキーマと呼ばれている。Markus (1977) は次のような実験を行っている。まず、自分を独立的と考える「独立的セルフスキーマ」をもつ人と、自分を依存的と考える「依存的セルフスキーマ」をもつ人を性格判断によって分類する。続いて様々な形容詞が自分にあてはまるか否かを判断させ、その反応潜時を両群間で比較する。すると「独立的セルフスキーマ」をもつ人は独立性に関する形容詞の判断において、「依存的セルフスキーマ」をもつ人は依存性に関する形容詞の判断において他群よりも反応潜時が短かった。Markusらはセルフスキーマを形成することによって、自己に関する情報の判断がすばやく行われたと解釈としている。その他の研究結果を含め、セルフスキーマが形成されることによる影響として、過去の行動にスキーマを関連づけて意味づけする、その特性にあった将来の行

動を予測する、スキーマに反する情報に抵抗が強くなるなどのことが指摘されている。

プロトタイプモデルでは、自己とは最も典型的な特性・態度・行動、すなわちプロトタイプの特性のリストによって表象されるものと仮説している。例えばRogers & Kuiper (1979)の実験では、自己をプロトタイプ (Prototype) として考える視点を提案している。プロトタイプは、「典型」と訳されるように、あるカテゴリーに結び付いた典型的な例である。Rogersらは、自己に関する知識を、様々な特性や態度や行動などの典型的な自己の特徴がまとまった、複雑で大きなプロトタイプと考えた。彼らは「フォールス・アラーム (False alarms)」という現象を利用して、認知的プロトタイプとしての自己の機能を示している。フォールス・アラームとは、記憶の再認に関する実験場面で現れる現象で、実際には提示されていない項目が、前に見たものとして間違えて判断されてしまうというものである。これは、前に提示された項目群によってあるプロトタイプのカテゴリーが形成された時、その後提示した項目が実際にはその前には提示されていない新奇な項目なのにもかかわらず、形成されたプロトタイプのカテゴリーに合致したため、あたかも以前に存在していたかのように判断が混乱してしまったために生じたと解釈されている。フォールス・アラーム効果は、認知構造がプロトタイプ的かどうかを判断する材料となっている。もし自己に関する知識が、自己判断の際にプロトタイプとして機能するならば、自己に関する記憶実験でもフォールス・アラームが生じるはずである。Rogersらは実験の結果、自己に関連があると判断された形容詞ほど、その後の記憶課題でフォールス・アラーム効果が示されることを示した。これはフォールス・アラームの現象がみられたことから、自己が他のプロトタイプ的な認知構造と同じように機能することを確証したものと説明されている。

一方、Bower & Gilligan (1979) は、記憶研究で提出されたACT (Adaptive control of thought) モデル (Anderson, 1976) を用い、自己を様々な概念のネットワークとして捉えるモデルを提出している。Bower & Gilligan (1979) の理論においては、自己の構造は、他者に対する知識の構造と基本的には同一であるが、知識の量や分化度が異なっていると仮説されている。彼らは実験の結果から、自己の構造は他に対する概念構造と本質的には差異はないと結論づけている。そして彼らの連想ネットワークモデルでは、一般的な情報と同様に、自己概念についての特定の事実も主語-述語の概念ユニットから成るネットワークを形成していると仮説されている。

(2) 要素間の結び付き

これらの自己の認知モデルでは、自己の特性とそれらに関連する行動が直接結び付いている。

さらに近年、この結び付きの形が、様々な心理現象の背景となっていることが明らかになってきている。

例えば Linville (1985) は、自己複雑性と感情変動の関連を検討している。同じ失敗をしても、それがきっかけになって「自分はダメだ」と落ち込んでしまう人もいれば、「他のことはうまくできる」と気分を切り替えられる人もいる。Linville (1985) は、このような失敗や成功時の感情や評価の変動が、「自己複雑性 (self-complexity)」に関連していると考えた。自己複雑性とは、自己を様々な次元から捉えられる程度のことで、自分を捉える側面の数が多いほど、またそれらの側面が互いに独立しているほど複雑性が高いと仮説されている。自己複雑性が低い場合には、自己の特定の側面についての失敗経験が、他の側面や自己全体の感情や評価に大きく関連してしまう。一方、自己複雑性が高い場合には、影響は自己の特定の部分に限定されるため、感情や評価の変動は全体として少ないと考えられている。この研究では自己複雑性の低い人が失敗・成功経験の後で感情や自己評価が大きくゆれること、自己複雑性の低い人ほど2週間の調査期間内での感情の変動が大きいことが確認されている。これらの結果を日常場面にあてはめると、自己複雑性の低い人が否定的出来事に遭遇した場合、高い人よりも肯定的感情や自己評価が大きく低下すると推測される。Linville は、単純な自己構造をもつ人は、ちょっとした出来事によっても抑うつ的になりやすいのではないかと指摘するとともに、自己複雑性が、失敗経験によって生じる抑うつ・悲しみ・不安といった感情を緩和する要因になると考察している。

一方、Higgins (1987,1989) の Self-discrepancy model では、自己の要素間の関連が感情状態に影響を与えることを示している。このモデルでは、自己は actual self・ideal self・ought self・can self・future self の5つに分けられ、この要素間のズレが感情の苦痛を生じるとされている。

2. 宣言的・手続き的自己知識

宣言的知識・手続き的知識の分類は、認知心理学のACTモデルに始まる。このACTモデルが自己概念研究にも影響を与え、宣言的自己知識をJamesのMe、手続き的自己知識をIとする考え方が生じた。James以来、社会心理学では自己概念を研究対象としてきたが、近年では、自己関連の仮説や、意志決定といったものに対する認知的手続きも研究対象とされるようになった。例えば、第2章で詳しく述べる Scheier と Carver (Carver & Scheier, 1981, 1990; Scheier & Carver, 1988) の自己制御理論 (Self-regulation theory) は、自己についての意識とそ

れに伴う行動の制御のメカニズムを理論化している。これらの研究は、自己の構造を明らかにするだけでなく、自己を知るためにどうするのかという手続きや、その行為を統制するメカニズムについても扱う必要があると考えられるようになったために生じたものである。

3. 活性化の移行

自己が変動するものか、あるいは変動せずに安定したものなのかとの論争は長い間続けられてきた。しかし、近年の自己研究では、多元的自己において、自己知識の異なった側面に対する活性化が変化することを明らかにした。この結果、自己は安定したものであると同時に、変化するものと理解されるようになった。

自己概念は様々な知識から成立しているが、その全てが常に意識化されているわけではない。この意識化され、情報検索の対象としてアクセスしやすい状態におかれることを、活性化(Activation)と呼んでいる。

ただし、自己概念を活性化するものとして捉える考え方は、認知的な考え方だけに特有のものではない。例えば梶田(1988)は、JamesのMeを自己意識と自己概念とに分類している。ここで自己意識は「自分自身の何かに対して、あるいは自分自身そのものに対して現に注がれている意識」、自己概念は「ある時点でそれが現実の意識として存在しているかどうかとは関わりなく、その時点において暗黙のうちにいだかれていると見てよい各種のイメージや感情の全体構造」「自分自身についての意識や記憶、感情や価値づけ、等々からなる構造的ゲシュタルトであって、必ずしもその全てが現実の意識として現れるわけではないが、その時々自己意識をその土台において支え、枠づけているものとして考えられる」としている。ここでは、自己概念の中でも特に現時点で意識に上っている部分を自己意識として定義している。

この活性化の概念が、自己概念の安定性と変動性を考察する手がかりとなる。自己概念の中で活性化された側面は、その時に自己に関連する判断に影響を与える。さらに、活性化する自己概念の側面は、その時の文脈によって異なる。従って、時によって自己が異なるように見えるのは、その時に行動を導き判断の指標を提供する活性化された自己が異なっていたためであり、全体としての自己の構造は変化しないものとして捉えられる。

先に述べたLinvilleの自己複雑性モデルにおいて、側面の結び付きが強い場合とは、特定の側面から別の側面に活性化が生じ易い性質をもった自己概念として捉えることができる。

また、Markus & Nurius(1986)は自己の可能性について、どの側面が活性化しやすいかで行動が大きく異なると指摘している。Markusらは自己に関する知識のうち、可能性としての自己の部分をPossible self(ポシブルセルフ・可能自己)と呼んだ。マーカスらはポシブル・

セルフを以下の理由で重要と考えている。

1. 将来の行動に対する誘因として機能する。

自分は何ができるのか・どのようになりたいのか・どのようになりたくないのかに関する知識は、われわれの行動に枠組みや方向付けを与えてくれる。また、飢えや渇きが直接に行動を活性化させるのとは異なり、動機の中にはそのままでは行動と直結しないものがある。例えば達成動機が喚起された時には、自分には何ができるか・どのくらい可能かということ（ポシブル・セルフ）が媒介となり具体的な形が与えられ行動につながっていくと考えられている。

2. 現在の自己に関する見方に、評価的・解釈的文脈を与える。

我々が自分を評価する時には、常にポシブル・セルフが基準として機能している。例えば、5キロ太ったという自己概念は、「私は痩せられるだろう」というポシブル・セルフに結び付く時と、「私はもっと太ってしまうだろう」というポシブル・セルフに結び付く時とでは、意味が異なってくる。

また、ポシブル・セルフは、環境によって変化する自己概念の一要素として位置づけられている。自己概念に反したり矛盾する情報を受け取った時、自己像全体は変化しないように見える時がある。例えば「自分は有能だ」という考えを抱いている人が、ある試験で悪い成績をとったからといって、その自己像が全く変化してしまうというわけではない。しかしこの際でも、ポシブル・セルフの一部に変化が生じている場合がある。「落第するかもしれない」「失敗するかもしれない」といった可能性に対する考えに変化が生じるのである。さらにこのポシブル・セルフの変化が、現在の自己に対する解釈の文脈を提供していき、長期的には自己を変化させることにつながると推定されている。

また、自己概念（例：自分は有能である）がどのようなポシブル・セルフと関連するかは年齢によって変化・発達する（例：「自立すること（17歳）」「よい親になること（40歳）」）。この意味で、自己概念にはある種の安定性があると同時に変化するものでもあるといえる。

第2章 自己探求行動に関する研究

第1章ではまず、「自己を知りたい」と感じる際の、知る対象としての自己が社会心理学でどのようなものとして捉えられているのかを概観した。第1章で取り上げた自己概念構造の研究は、既に形成された後の構造に主として関心が向けられていたが、自己研究ではその他に自己情報収集行動の背景となる動機づけが大きな研究テーマとなっている。その理由は、結果として生じる情報収集行動が自己概念の形成・変化・維持にかかわってくるためである。

これらの動機づけ研究では、人がなぜ自己に関する情報を収集するのか、自己を探求しようとするのかを研究テーマとし、そのメカニズムを明らかにすることを目的として行われてきた。前述のように本研究では「自己を知りたい」という心理が喚起され、解消されていくメカニズムを明らかにすることを目的とする。この心理は、既存の自己研究の枠組みの中では、自己情報収集行動を生起させる動機づけのひとつとして位置づけるのが妥当であろう。

そこで第2章では従来の研究が、自己探求行動をどのような視点から捉えていたのかを概観する。まず第1節では、自己情報の収集行動を生起させる動機について扱った研究を概観し、続く第2節では自己探求行動を自己焦点化という視点から理論化した自覚状態理論および、それをさらに発展させた自己制御理論について概観する。さらに第3節では、自己情報の収集手段に関する研究を取り上げる。最後に第4節では、自己を知るという問題を現代の現象として捉えた場合に用いられることの多いアイデンティティ研究について触れる。

第1節 自己情報収集行動を規定する動機研究

本節では、自己に関する情報収集行動を生じさせるメカニズムとして欲求あるいは動機という概念を用いた研究をまとめる。

1. 社会的欲求・社会的動機

人が何かをしたいと感じる時に、その人の中には生理的・心理的な不足や不均衡状態が生じている。これを満足・均衡状態に回復しようとする行動を発現させる内的状態を欲求という。欲求には生命維持のために身体的・生理的に必要な一時的欲求（生理的欲求）と、人が社会で生活するなかで獲得してきた二次的欲求（社会的欲求）に分けられる。一次的欲求の例として食欲・睡眠などが、二次的欲求の例として達成・親和などが挙げられる。さらに、これらの欲求を解消する方向に行動を起こそうとする内的状態を動機という。従って動機にも、その背景となる欲求の性質によって、一次的動機・二次的動機と分類される。

欲求と動機は次のような関係としてまとめられる。すなわち、人が欲求を喚起すると、それを解消しようとする方向に行動を起こそうとする動機が生じて行動が生起し、目標に到達すると欲求は解消される。「1. 欲求 - 2. 動機 - 3. 目標 (誘因) に到達」、という3側面の一連の過程の維持状態を、動機づけという」(有斐閣社会心理学小辞典, 1994)。従って、欲求が喚起され、それを解消する誘因が存在していても、一連の動機づけ過程が成立しなければ行動としては現れないことになる。例えば、自分の置かれている立場を明らかにするために自己に関する情報が欲しいと望んでも、それを知ることによって自己評価が下がる恐れがある場合には、自己情報収集行動が生じないという場合が考えられる。

2. 自己情報収集行動と動機

自己概念研究では、その構造研究の他に自己情報収集行動の背景となる動機づけが大きな研究テーマとなっている。その理由は、結果として生じる情報収集行動が自己概念の構造にかかわってくるためである。

さらに近年では、自己概念の安定化と変容それぞれが、異なる動機づけを背景とした情報収集行動によって生じることが明らかとなっている。そして、この動機づけそのものが、自己の主要な機能として論じられている(蘭, 1990)。

さて、これまで自己情報収集行動を喚起させる背景としての動機づけ研究が行われているが、現在の時点ではその動機づけは大きく3つに分類されている。すなわち、「自己査定動機」「自己確証動機」「自己高揚動機」である(Linville & Carlston, 1994; 和田, 1992など)。

3. 自己査定 (self-assessment) 動機

(1) 自己の正確な把握

従来より、自己を正確に知ることが適応や精神的健康に重要であるとの考えが存在している(Damon & Hart, 1988; Campbell, 1990など)。この考え方は、メンタルヘルス研究では一般的である。

Freud (1923) は、その精神分析理論の中でidの本能的衝動を意識することが不都合な時には、egoがそれを抑圧という方法を用いて意識にのぼることを避けようとするメカニズムを論じている。これについてMaslow (1962) は次のように述べている。「…フロイトの最も偉大な発見は、多くの心理的疾患の主な原因が、自己—自身的情緒、衝動、記憶、可能性、運命—を知ることのおそれにあるとしたことである」(マスロー, 1964, P.90)。Maslowは最高度に健康な人間として自己実現した人間を設定したが、そこで自己実現する人のひとつの特徴として

自分自身、そして自分の欠点や長所を受け入れ、不平や悩みをもたないことを挙げている。Maslowの言う最高に健康な人でも弱点や不完全な点をもってはいるが、彼らは自分の性質をあるがままに受け入れられるが故に、それについて恥や罪を感じないと論じられている。ただしMaslowは「…内的な問題と、外的な問題とは、密接な類似性を持ち、たがいに関係しあっている。したがって、われわれは、あまり明確に内面のおそれと外界のおそれとを区別せずに、ただ単に一般的な知ることのおそれとして話してゆきたい」(Maslow, 1964, P.90) と記しており、彼が自己を知ることと環境を知ることを特に区別していなかったことが指摘できる。

一方Allport (1961) は、成熟したパーソナリティの特徴のひとつとして「自己客観視」を挙げている。自己客観視を行うためには、「彼が自分でもっていると考えているところのもの」と「他人が、彼がもっていると考えているところのもの」について正確な判断を下すことが必要とされている。

以上のようなメンタルヘルスに関わる論文では、深い洞察がなされているものの、自己の正確な認知と不適応はどの程度結び付いているのか、この動機が実際にどのような具体的情報収集行動に結び付いているのかなどの実証的研究が十分ではない。

ただし近年では、社会心理学や発達心理学の分野で、正確な自己認知と不適応との関連が様々な研究によって実証されてきている。

例えばDamon & Hart (1988) は、子供・青年を対象とした調査から、Self-understandingの遅れが不適応に結び付くことを明らかにしている。この場合Self-understandingは、「人の主観的・客観的自己の概念」と定義されているため、自己概念とほぼ同様の意味で用いられていると考えられる。彼らは、心理的に適応している青年と不適応の青年を対象とし、自己理解とメンタルヘルスとの関連を明らかにしている。そしてそれ以前に検討されたような自己評価が高いか低いかの視点だけでは、メンタルヘルスとの関連を明確にすることはできないと指摘している。

(2) 自己査定動機

自己を正確に知ることの重要性は上記のような研究において多く指摘されてきたが、実際にこれが自己情報収集行動に与える影響を動機づけの視点から理論化したものが、自己査定動機の研究である。

自己情報収集行動の目的に、正確な自己情報獲得を仮説した初期の研究として、Festinger (1954) の社会的比較過程理論があげられる。ここでは、「人には自己の意見や能力を評価しようとする欲求がある」を基本的仮説とし、そのために社会的比較が起こることを示している。

この問題について理論化をさらに進めたのがTrope (1975, 1986) の自己査定理論に関する一

連の研究である。原因帰属に関する一連の研究の中で、自己能力情報が重要な手がかりになることが知られている (Jones, Rock, Shaver, Goethals, & Ward, 1968)。この場合、有効な目標達成において、行為者が自己に関する情報をどの程度得られるかが重要であることが示唆されている (Meyer, Folks, & Weiner, 1976; Weiner & Kukla, 1970)。Trope は、これらの研究をふまえ、達成行動を自己に関する能力の正確な評定から検討することを提案し、自己査定理論を提出した。

まず Trope (1975) は、自己査定理論の妥当性を明確にするために、従来の達成動機研究における課題選択状況を実験場面として用い、達成動機の高さを測定するだけでは課題選択を正確に予測することは困難であることを示した。

さらに Trope (1980) は、課題選択パラダイムを用いて自己査定理論の妥当性を検証している。ここでは次のような4つの課題が提示され、様々な条件におかれた被験者がどの課題を選択するかを従属変数とする。4つの課題は、それぞれ自己の高能力と低能力が明確に診断できる程度が異なっている。課題Aでは、高能力の人が取りうる得点の範囲と低能力の人が取りうる得点の範囲が大きく重なっている。従って、この課題を選択して得点を算出しても、被験者は自己の能力が高いか低いかを明確に知ることはできない。課題Bは、高能力の人の取りうる得点の範囲が広いが、低能力の人が取りうる得点の範囲は狭く高能力の人の得点範囲と重なっている。従って、課題を選択して得点を算出した場合、高能力か否かは明確になるが低能力か否かは明確にはならない。課題Cは、課題Bとは逆に、低能力の人の取りうる得点の範囲が広いが、高能力の人が取りうる得点の範囲は狭く低能力の人の得点範囲と重なっている。従って、課題を選択して得点を算出した場合、低能力か否かは明確になるが高能力か否かは明確にはならない。最後の課題Dは、低能力・高能力とも取りうる得点の範囲は広く、両者の重なりも少ない。従って、自己が高能力か低能力かは明確に診断できる課題といえる。自己査定理論では、自己能力が正確に診断される課題ほど好むと推測される。Trope (1980) は、課題Dが最も選択されたことからこの仮説の妥当性が検証されたとしている。

また、Trope & Ben-Yair (1982) では、自己能力の査定と、課題遂行前の能力に関する事前不確定性の量の2要因と、課題選択の関連を検討している。

以上のように自己査定動機に関する理論では、人は自己の能力を正確に判断し能力を明確化したいという動機づけをもっており、課題選択の実験場面でその傾向が示されたといえる。

(3) 自己査定理論の問題点

自己査定理論は、自己情報収集行動を説明する自己査定動機を様々な実証研究をもって明確化した点が有効な研究であった。しかしながら、いくつかの問題点も指摘できる。

第1の問題は、この理論が扱う自己の側面が能力中心である点である。自己査定理論では、能力評価の明確化を求める傾向を仮説しており、実際の研究対象も、自己の能力に限定されている。これは、情報収集の目的を、有効な目標遂行行動においていることに関連している。

しかし先に述べたように、従来の自己研究において正確に知る必要があるとされてきたのは特定の側面ではない。第1章で述べたように、これまでの自己概念研究から、自己は多元的であることが示されている。この場合、不明確になるのはTropeらが実験で問題としたような特定の自己知識だけでなく、あらゆる側面においてである。従って、側面を限定せずに理論化を進めることが望ましい。またこの際、自己の性格や生き方といった明確な評価を下すのが困難な側面では、Tropeが示した結果とは異なる傾向が示される可能性もある。最近になり、自己概念のその他の側面（性格など）を対象とする研究も行われるようになったが（沼崎・工藤,1995）、その数は少ない。課題選択など特定の手段では正確な評価を得ることができない側面（例えば、Markus & Nurius (1986) の Possible self）も含めて、「自己を明確に知る」という行動を広く扱う必要がある。

さらに、最近の自己表象モデルでは、自己概念は様々な自己知識のネットワークから形成されていると仮説されている。自己概念の不明確が特定の側面に限定された場合と、不明確が自己概念の広い部分に活性化した場合にも同様の仮説が成り立つかについても不明である。能力側面の実験のみで導かれた「不確定が高いほど収集行動が生じやすい」傾向は、上限がないのか等について検討する必要がある。例えば「自分がわからない」とか「自分をもっと知りたい」という表現で、漠然と自己概念全体の不明確感が表現される場合も、その程度が高いほど自己情報収集行動が起こりやすいのか等についてである。

次に、第2の問題として指摘できるのが、仮定された欲求を測定していない点である。Tropeはその理論の中で、自己査定欲求という構成概念を提出しているが、その妥当性検証の多くが課題選択パラダイムを用いている。自己査定理論では、能力評価が不明確な場合には明確化しようとする欲求が喚起され、情報収集行動が生じることを述べているが、実際には欲求は測定されていない。

3. 自己確証 (self-verification) 動機

(1) 認知的斉合性に関する理論

自己が人の認知や行動に影響を及ぼす際の重要な傾向として挙げられているもののひとつに、

認知的斉合性を求める傾向がある。

人が認知的斉合性を求めて行動する傾向については、バランス理論 (Heider, 1958)、適合性理論 (Osgood & Tannenbaum, 1955)、不協和理論 (Festinger, 1957) などの理論に基づく多くの研究がある。これらの理論に共通している考えは、「人は、彼の認知システムの内的斉合性を最大にする (非斉合を最小にする) ように行動する」ということである (水原, 1981)。内的斉合性とは、お互いに関連づけられた認知内の一連の要素が、調和的に適合している状態のことである。要素間に矛盾があったり一貫性がない場合には、不快感や心理的緊張が生じて、それを解消させるように圧力が働くことをこれらの理論は指摘している。

自己概念を自己に関する知識の集合体として捉えた場合、それは認知的斉合性を求める対象のひとつとして位置づけられる。

実際に Lecky (1945) は、人のもつ自己概念の一貫性を求める傾向を強調している。彼は、自己概念の一貫性すなわち「統合させている体制の維持」を人の基本的欲求として定義している。そしてその保持のために、自己概念の統合を確実にし支持するようなタイプの経験を求め、それを妨げることが予期される経験を拒否するとしている。

Duval & Wicklund (1972) が提出した自覚状態理論 (Self-awareness theory) は、自己に関心が向いた状態での人の行動の変化を扱ったものであるが、その行動変容の解釈も認知的斉合性の考え方が関連している。例えば、自覚状態の時の遂行量が非自覚状態の時と比較して促進されるとの結果や、自覚状態では態度と一貫するような行動をとるなどの実験結果がある。これについて自覚状態理論では、意識が自己に向かうとその場面での基準と自己の状態を比較し、基準に合うよう行動を変化させると解釈している。言い替えば、自分は有能であるとか、〇〇の態度を持っているという自己概念に一致するように、行動が意識的に行われると考えられているのである。自覚状態理論 (Self-awareness theory) については、次節で再度述べる。

人が自己概念の一貫性を保つように動機づけられ、様々な認知傾向・行動を示すことについては数多くの研究がなされているが、これらの研究を精力的にまとめ理論化したのが Swann (1983) の自己確証理論 (Self-verification theory) である。

(2) 自己確証動機

Swann (1983) は、以上のような認知的整合性理論を基にして自己確証理論 (Self-verification theory) を提出している。この理論では、「人々は、自分の予測やコントロールの知覚を支持する自己概念化を確証することを求める」(自己確証動機) との仮説を前提とし、人が既存の自己概念を確証し確かなものにする社会的現実を、現実の社会や自分の心の中に、

作り出す過程に注目している。

例えば自己確認しやすい環境をつくるために、「自分が何者かを示すサインやシンボルを提示する」「自分に適した相手や環境を選択する」「特定の対人方略をとる」などが説明されている。まず、自分を示すサインやシンボルとは、他者が気づき、それによって他者が特定の反応をし、かつ自分がコントロールできるものである。例えば外見（化粧・洋服）、家、職業などがこれにあたる。

次に、自分に適した相手や環境の選択とは、人が自分の自己概念を安定させる人と一緒にいたり、自己概念と一致するような環境を好むことを示している（例えば Broxton, 1963）。

さらに、これら2つの過程に失敗をしても、別の方法で自己概念を維持することができる。Swann & Hill (1982) は、この過程を実験によって実証している。被験者には前もって、自分についてどの程度支配的であると考えているかを測定しておく。実験場面では被験者にサクラと一緒にゲームに参加するが、不一致条件ではサクラはわざと被験者の支配性に関する自己概念に不一致なこと述べる（例：自分は支配的と回答した被験者に、「あなたは本当に Forceful で支配的タイプって感じにはみえないですね」と告げる）。一致条件では被験者の支配性に関する自己概念に一致することを述べる（例：自分は支配的と回答した被験者に、「あなたは本当に Forceful で支配的タイプにみえますね」と告げる）。ゲーム場面での被験者の行動が支配的か従順かを測定すると、不一致条件では一致条件よりも自分の自己概念に一致するような行動をとる傾向がみられた。同様に Swann & Read (1981a) でも、他者からの評価が自己概念と不一致であった場合に、特に自己概念に一致するフィードバックを求めることが示された。

また自己確認理論では、情報処理の過程において生じる傾向として「自己概念を確認する情報により注目する」「自己概念を確認する情報をよく記憶する」「自己概念確認する方法で、その情報の妥当性や重要性を解釈する」などが挙げられている。

まず自己確認する情報に注意を向ける傾向については、Swann & Read (1981b) が実証している。ここでは被験者は、別の学生が被験者について肯定的あるいは否定的な印象を抱いたと告げられる。さらに被験者はその学生が被験者について書いた文章（肯定的・否定的・ニュートラル）を渡されるが、その時間読にかかった時間を従属変数としている。結果として、前もって自分の自己概念に一致する情報を得ると知った被験者は、特に情報に注目した。逆に、自己概念に不一致な情報を得ると知った被験者は注目が低いことが示された。

次に、一致情報の記憶であるが、これはいくつかの古典的研究で、実験状況についての想起を求めたところ自己一致のフィードバックの方が不一致のものよりも記憶がよかったという結果が示されている (Crary, 1966; Silverman, 1964)。Swann & Read (1981b) でも同様に、自

己に一致した情報を被験者はよく想起し、その傾向は与えられる情報が自己概念に一致するか否かあらかじめ知らされていた場合により強かった。この理由についてSwannらは、一致情報はコード化したり検索しようとする動機が強く働き、また記憶にコード化したり貯蔵する方法が簡単だからと論じている。

自己概念を確証する方法で、その情報の妥当性や重要性を解釈することについては、いくつかの研究が行われている。例えばテストに参加した被験者がテストの妥当性を認めるのは、そのスコアが自己概念に一致している時だけであることが示されている (Crary, 1966; Markus, 1977)。またフィードバックそれ自体を否定しないにしても、自己概念に不一致な情報は一致した情報と異なる扱いを受けることが指摘されている。例えばFeather & Simonの一連の研究では、被験者が自分の予測と一致した結果を得た時にはそれを能力に原因帰属し、逆に不一致の場合には運に帰属することが指摘されている(Feather, 1969など)。またSwann(1983)は、情報を歪めて解釈する他に、そのインパクトを低下させる方略についても論じている。

Swannはこれら情報処理に関する一連の方略は、その状況に応じて最も適切なものが選択されるとしながらも、実際には自己確証が非常にうまくいくわけではないと推測している。すなわち、自己確証が完全なものであれば個人が持つ自己概念は現実の自己の姿と大きく食い違うものとなってしまう、不適応や精神的に病むものになってしまうからである。

さらに、Swann(1983)によれば、これら一連の確証過程は一般には自動的に生じるという。つまり特に意識化されることなく、情報処理過程が生じていると考えられている。ただし、例外として「自分は何者か」を問うような自分らしさ (selfhood) の危機的状況では、情報処理過程が意識的に行われると指摘されている。Swannらの言う危機的状況とは、選択的状況(例: キャリアか結婚か) や自己概念に不一致なフィードバックを受けた時である。さらにこの危機的自己確証は、相対的に自己概念の確信が中程度の人にみられ、確信が非常に強いあるいは非常に弱い人にはみられないと仮説されている。ただし、意識的な情報処理と自動的な情報処理の差については十分な説明は行われていない。

(3) 問題点

自己確証動機で問題とする情報収集行動は、自己概念が既に形成され、かつ自己概念が明確であることを前提としている。従って、「既存の知識のない自己の側面について新たに知識を獲得しようとする場合」「自己を変革しようとして情報収集を行う場合」の行動予測については不十分である。同時に、自己概念が不明確である場合の情報収集行動をこの理論で説明することはできない。

この理論で一部扱われている危機的自己確証は、既存の自己概念と不一致で、自己概念が不

明確になる可能性を含む場面である。しかしこの場合の自己確証については、十分な検討が行われていない。特に、危機的自己確証では、自己概念が中程度に明確な場合に動機づけが生じると状況が限定されているが、中程度に明確な状態が不明確な状態とどのように違うのかについても疑問である。

確証過程についても十分成功することはないとされながらも、その不成功がどのような理由によって生じるかについては論じられていない。

4. 自己高揚 (Self-Enhancement) 動機

(1) 理論的背景

人には、自己を価値的に向上させ自己の評価 (自尊心) を高めるとともに、自分を好ましいものとして認知したいという基本的欲求があると考えられている。この欲求に基づく一連の心的状態は、自己高揚動機 (Self-enhancement motive) と呼ばれている。

社会心理学においては、人が自己評価を高め維持しようとするようとすることを自明の理としてきた。例えば Adler (1927) の理論では劣等感を人間の動機づけの背景として重視し、劣等感を改善し自己の優越感を高めようとするために人は様々な行動を生じると論じている。

この考えによれば、人は自己評価が高まれば肯定的な感情を経験し、逆に自己評価が低まれば否定的な感情状態となる。このため人は、自己の評価を高めるような肯定的なフィードバックを好み、それを得るような行動を起こし、逆に否定的なフィードバックを嫌い避けようとするのである。

さらに、自己高揚の重要性を強調する研究者は、高い自己評価をもつことによって、困難な課題に挑んだり困難にあっても努力を続けるために、人はより有利に生きられると論じている。

(2) 自己高揚動機

自己高揚動機が、自己の認知・行動に与える影響を扱った代表的研究として、Tesser & Campbell (1983) の Self-evaluation maintenance model (SEMモデル) である。この理論では、「人は肯定的な自己評価を維持したいという欲求をもっている」を基本的仮説とし、自己評価維持を行うための次の2つの過程に注目している。一つは反映過程 (reflection process) と呼ばれ他者の優れた遂行を自分自身に結び付ける過程、もう一方は比較過程 (comparison process) と呼ばれ他者の遂行を自分自身のものと比較する過程である。自分より優れた他者との反映過程と、自分より劣った他者との比較過程は自己評価を高揚するのに役立つ。

SEMモデルではこのような自己評価維持過程をさらに細かく予測するために、過程にかかわ

る3つの要因を提出している。すなわち、他者と自分の心理的な近さ (Closeness)・ある課題での他者と自分の遂行 (Performance)・課題と自分の関連性 (Relevance) である。例えば関連性が低く心理的距離が近い時には、より反映過程が生じやすく、関連性が高く心理的距離が遠い時には比較過程生じ易いと推測される。

Tesserらは、このモデルを検証するためにいくつかの研究を行っている。例えば、Pleban & Tesser (1981) では心理的近さについて、Tesser, Campbell, & Smith (1984) では遂行について、Tesser & Paulhus (1983) では関連性について、それぞれモデル検証を行っている。

SEMモデルの他にも、従来帰属研究において注目されてきた Self-serving bias や Self-handicapping strategy も、背景として自己高揚動機を前提として研究を進めている点では同様である。Self serving bias とは、「自分に都合のよいように判断をゆがめること。具体的には、成功、失敗の帰属において、成功は自分の能力や努力に帰属し、失敗は外的要因に帰属してその責任を否定する傾向をいう」(有斐閣社会心理学小辞典, 1994)。また Self-handicapping strategy は、「ある行為によって自己のイメージが脅かされる結果が生じることが予期される場合、結果がでる時点で自分に有利や帰属がなされるように、あらかじめハンディキャップを自分に与えるような行動をとったり、ハンディキャップがあることを主張しておく行為」(有斐閣社会心理学小辞典, 1994) である。Self serving bias は、結果として自己評価が低下するのを防いだり、自己を高揚させることに結び付く。

また、Self-handicapping strategy は、自己評価の低下があらかじめ予測できる時に、この行動によってそれが防げるのである。

(3) 問題点

自己高揚動機から自己情報収集行動を捉えた場合、次の問題がある。まず、自己高揚動機は、欲求をみだしすぎると正確な自己認識を阻害する恐れがある。自己高揚のみを目的として情報収集行動を行う場合には、正確な情報を必ずしも獲得できない。従って、歪んだ不正確な自己認知は、最終的には自己の環境に対する適応能力を低下させることにつながる恐れがある。従って、自己査定動機との組合せで行動を明らかにしていく必要がある。実際にこの問題は、自己査定動機との対立という視点に基づき多くの研究が行われている。その結果どちらの動機が優位になるかについては、情報の性質等によって異なることが明らかにされている (沼崎, 1992など)。

ただし、その一方で近年、自己認知の歪みを積極的に精神的健康と結び付けようとする研究も現れている。例えば Taylor & Brown (1988) は、健康な人には自己を非現実的に肯定的に見、自己コントロールを課題評価し、非現実的に楽観主義な傾向があることを指摘し、これを

Positive illusion と名付けている。また、Taylor らの研究では、抑うつ傾向の人とそうでない人に対する様々な実験結果を引用しているが (Alloy & Abramson, 1979) ここでは抑うつ傾向の人の方が、自己のコントロールを正しく認識していることが指摘されている。この現象は抑うつのリアリズムと呼ばれている。Positive illusion の研究では、その illusion が自己高揚と直接関連づけられているのではない。ここで扱われている現象は、Positive illusion をもつ人の方が、ネガティブな出来事に遭遇しても楽観的に物事を判断するために、精神的に健康でいやすいということである。この問題は、自己制御理論が扱った、結果の予期の問題とかかわる。例えば Taylor, Kemeny, Aspinwall, Schneider, Rodriguez & Herbert (1992) はエイズ患者を対象とし、Positive illusion をもつものの方が、病気に適切に対応していることを指摘している。これは、肯定的な結果の予期が (治療) 行動を持続させるとも言い替えられる。

5. 3つの理論の位置づけ

以上のような動機づけ研究は、それぞれが個々に異なる行動を扱ってきたため、一連の情報収集過程における各理論の位置づけについては検討段階にある。

その中で和田 (1992) は、自己能力関連情報の収集過程において、各理論が関わる部分を次のように整理している。まず、自己能力の不確実性が高い時には自己査定的な情報収集が行われる。そして情報収集によって自己の能力が明確になると、自己査定動機に基づく行動は終了する。従って、目標達成行動において自己能力評価が不確定な場合には、自己査定による自己能力関連情報の収集が予測されると指摘している。続いて、自己能力に対する不確実性が低減された後には、自己高揚動機と自己確証動機が、情報収集行動に関連してくる。ただし、両者は自己の低能力が明確になる場合の情報収集を行うか否かという点で対立することになる。

和田の視点は、各理論を整理する上で有効なものである。ただし和田の指摘は目標達成のための能力関連情報の収集ということに場面を限定しており、さらにこの分類については論考にとどまっている。従って、自己情報収集の対象を自己概念全体にした時の一連の情報収集行動の過程で、各動機がどのように位置づけられるのかを、実証的に確認する必要がある。

第2節 自己焦点化と自己探求行動

1. 自覚状態理論

James以来自己研究は主として自己の構造に研究の主眼をおいていたが、先に述べたように

近年自己の機能・作用をシステマティックに研究しようという流れが生じている。

これらの研究では、人の行動は状況の解釈と目的の決定を行う、認知的なスキーマによって制御されている。認知的スキーマが、新しく出会ったものや出来事を認識したり理解するために用いられることについては、従来より認知心理学が指摘している。ただし、自己研究では、この認知的構造がある状況における我々の行動をどのようにコントロールしているのか、認知と行動の関連を明らかにすることを重視している。

これらの研究が盛んに行われるきっかけとなったのは、Duval & Wicklund (1972) の、「*自覚状態理論 (Self-awareness theory)*」あるいは「*客体的自覚理論 (objective self-awareness theory)*」である。個人の注意は、外界に向いている時と自己に向いている時の2つの状態があるといわれている。このうち自己に注意が焦点づけられた状態を、彼らは「*客体的自己意識 (objective self-awareness)*」と命名した。そして、自己焦点化によって我々の行動が変化することが、様々な研究によって指摘されるようになった。例えば、Wicklund & Duval (1971) では自覚状態によって行動が変化することを3つの実験によって示している。実験1では、録音した自分の声を聞いた被験者は、他者の声を聞いた者よりも、大学生の代表的意見の方向に意見が変化した。実験2では、ビデオカメラのいる前にいる被験者は、意見と行動の違いを少なくしようとする様子が示された。実験3では、鏡の前で作業をした被験者は、そうでない者よりも作業量が多いことが示された。

その後の研究から、自己焦点化効果については次の2つの特徴のあることが指摘されている (Scheier & Carver, 1988)。

第1は、行動が基準に比して適切かを照らし合わせる活動を、行動をガイドするフィードバック・システムに従事させることである。例えば Schier & Carver (1983) では、被験者に自分の遂行がどの程度うまくできたか具体的な情報を探す機会が与えられ、有効な情報をどれだけ探すかを測定した。その結果、自己焦点化をした被験者の方が、比較過程を促進させる具体的な情報を求めることが示された。

第2は、自己焦点化はよりよい制御を促進する。自己に注意が向かうほど、現行の行動と重要な行動指標との間の一致を高める傾向を促進させる。例えば、Carver (1975) は、被験者がもつ「罰」に対する態度を予め測定しておいた。そして実験室に鏡がある条件と、そうでない条件で、罰を与えることを求める実験場面でどのような行動を生じるかを測定した。その結果、鏡がなく自覚状態が低い場合には、事前に被験者がもっていた態度は影響がみられなかった。しかし、鏡があり自覚状態が高まった場合には、罰に肯定的な人はサクラに強い電気ショックを、罰に否定的な人は弱い電気ショックを与えることが示された。

自己焦点化によってこのような現象が生じるのはどのような理由からだろうか。Duval & Wicklund (1972) は、次のように説明している。自己の特定の次元・側面に意識が向かうと、自己評価的な認知活動が生じる。そして、その次元について理想の基準と現実の自己の比較が行われる。多くの場合、現実の自己は理想の基準に達していない。そこで、人は自尊心の低下やネガティブな感情を経験し、その解消のための行動が生じる。ネガティブな状態から抜け出す方法の一つは、自己が基準に達するように行動することであり、もう一つは注意をそらすことである。

現実の自己と理想の基準が一致する場合もありうる。しかし、多くの場合理想は高くなるため、自覚状態では不快感情が多く伴うと推測される。自覚状態が、不快感情を伴うという指摘は、その後様々な臨床事例についても応用されている。例えば、アルコール依存の研究では、依存症の背景には酒によって自己意識から逃避しようとする心理が働いていることが指摘される。また、Baumeister (1991) は、自殺の背景にも同様に自己意識からの逃避が存在していると指摘している。

このように、自覚状態は否定的に捉えられることもあるが、自覚状態の高まりが被暗示性を低下させることを示した実験がある。Scheier, Carver & Gibbons (1979) の実験では、男子大学生の被験者が女性のヌード写真の魅力の判定を行う。ここで用いられる写真について、半数の被験者には他の学生が「魅力的でない」と判断した旨を伝え、残りの被験者には「魅力的」と判断されたと伝える。ただし、実際の事前調査ではどちらともいえないことがわかっている。さらに、全体の被験者のうち半数は、写真がスクリーンから消えている間に、自分の姿が鏡のように映り自己意識が高まるように操作されていた。実験の結果、自覚状態の高まった被験者は、そうでない者よりも事前情報による態度の変化が少なかった。これは、自己に注意を向けた者は、他人の意見にあまり影響されることなく、自分自身をより正確に判断できることを示唆している。

2. 自己意識特性

Duval & Wicklundの自覚状態理論は、状況によって変化する自己意識について分析したものである。その一方で、自分に注意を向け、自分を意識しやすい傾向には個人差のあることが知られている。

個人差を初めて測定したのは、Fenigstein, Scheier & Buss (1975) である。ここでは様々な自覚状態に関する質問を因子分析している。その結果、自覚状態には2つあり他者からみられた自分を意識する「公的自意識 (Public self-consciousness)」、自己の内面について意識

モニタリングの役割をとっているという。

Scheierらは、不一致低減のための行動を退却することについて、それが適切な時もあるし不適切な時もあると指摘している。そして、社会的分脈や物理的環境が許さない時や、行動を中止すると高次のレベルコントロールに矛盾が生じる場合などは、退却が難しいと説明している。

4. 自己探求行動とのかかわり

自己焦点化に関する上記の研究は、自己に意識が向いた場合の行動との関連を分析したものである。従って、特に自己を知るための意識や行動は扱われていない。ただし、現実自己と規準との不一致が生じ、それを解消しようとする行動が行われている時には、下位目的として自己に関する情報収集行動が生じると考えられる。言い替えれば、自己を知るという目的のために行われる現実行動は、自己制御理論に沿った形で生じると考えられる。

第3節 自己情報収集行動に関する研究

Mettee & Smith (1977) および高田 (1992a) は、自己認識の源泉を次の4つにまとめている。

- ・自分と他者との行動や特性の比較 (社会的比較)
- ・自分自身の行動やその決定要因の省察 (自己観察)
- ・象徴的相互作用を通じた他者の視点や評価の取入れ (社会的フィードバック)
- ・自分の行動が環境に対してもたらす様々な効果 (非社会的環境からの直接的フィードバック)

本節では、Metteeらのこの分類に基づき、自己情報収集行動がこれまでどのような理論背景をもって研究されてきたかを概説する。

1. 社会的比較

自分の行動や意見を他者と比較することで自分を知る方法である。これはFestinger (1954) の社会的比較理論で扱われた過程である。社会的比較過程理論では、人には自分のもつ意見や能力を評価しようとする欲求があることを基本的仮説のひとつとして設定している。さらにこの意見や能力評価の手段として、次の2つが挙げられている。ひとつは客観的・物理的手段を用いることであり、もうひとつは自分の意見・能力を他者と比較する方法である。個人の意見や能力は前者のような物理的現実により確認することは難しいため、多くは後者の社会的比較という形がとられることになる。また社会的比較のためには、自分と類似した他者が選ばれや

すいことも基本的仮説のひとつとなっている。

2. 自己観察

Bem (1972) は自己知覚理論 (Self-perception theory) を提出している。この理論では自己理解の過程を他者理解と同様のものとして捉えている。すなわち、人間は他者の行動を観察することによって他者の内的状態を推測しているが、自己についても自分の行動やそれが生じた状況を自分で観察することによって自分の態度や内的状態を知るというものである。

また、Duval & Wicklund (1972) の、自覚状態理論も自己に注意を向けることによって観察することによって自己の姿を明確に知ろうとする過程を扱っているとも解釈できる (高田, 1992a)。

これらの理論で扱われている自己認識の方法は、自分自身を手かがりにし、自己観察を自己情報収集手段として位置づけるものである。

3. 社会的フィードバック

これは他者が直接的・間接的に示す言葉や反応を通じて自己を知る方法である。Cooley (1902) の鏡映自己 (looking glass self) や、Mead (1934) の役割取得など象徴的相互作用派の理論で扱われた過程がこれにあたる。

例えばCooley (1902) は、我々は他者の目に映る自分がどのようなものかを想像することによって自分自身を知ると論じている。言い替えれば他者が、我々を移す鏡になっているのであり、このようにして示された自分の姿は鏡映自己と呼ばれている。またMead (1934) によれば、我々が他者と接する時にはお互いに相手の行動や反応を理解し、相手が期待する役割を自分の中に取り入れるという。そしてこの経験を積み重ね、一般化された他者の立場を自分で想像しそれを取り入れることによって、自己認識が行われると論じられている。

4. 非社会的環境からの直接的フィードバック

この自己情報収集手段は、コンピテンス (competence) の獲得と関連している。White (1959) は、有機体はその環境と効果的に相互交渉する潜在的能力をコンピテンスと呼んだ。そして、我々は環境に対して積極的に働きかけ、操作し、変化させようとする傾向をもっているとしている。このコンピテンスをもっているか否かの自覚は、個人が行動した結果、非社会的環境からもたらされるフィードバックによって形成される。言い替えれば、自分が環境に対して起こした行動の結果をもとに、自分を知る方法といえる。

第4節 アイデンティティ研究

本論文では、社会心理学における実証的な自己研究の文脈にのっとり調査・研究をすすめることとし、定義あるいは測定や実証が困難である用語や概念の使用を避ける意図について冒頭で述べた。

一般的には、自己への関心の高まりや自己探求の問題は、アイデンティティという用語を用いて解説されることが多いが、上記のような理由から本研究で目的とする自己への関心の喚起・解消過程の説明にはアイデンティティの概念を積極的に用いることは避ける。

しかしながら、アイデンティティの視点から提出されたパラダイムは、自己研究のひとつの視点として、本研究で提出を試みる自己認識欲求の解釈に膨らみをもたせることにつながる。このため、本節では従来のアイデンティティ研究および、自己への関心の問題とそれがどのように関連づけて論じられたのかを概観する。さらに、このアイデンティティの視点から、自己探求の問題を捉えることの問題点を指摘する。

1. アイデンティティ (identity)

平凡社心理学事典(1981)では、アイデンティティ (identity) について以下のように解説している。「エリクソン Erikson, E. によって定義された精神分析的自我心理学の基本概念。同一性と訳されている。「自分であること」「自己の存在証明」「真の自分」「主体性」などの意味をもつ。第1に、自己の単一性、連続性、不変性、独自性の感覚を意味し、第2に、一定の対象(人格)との間、あるいは一定の集団(およびそのメンバー)との間で、是認された役割の達成、共通の価値観の共有を介して得られる連帯感、安定感に基礎づけられた自己価値 self-esteem および肯定的な自己像を意味する。…」

出生以降、人は様々な社会的自己とその同一性を形成していくが、これらを統合する人格的な同一性を特に自我同一性 (ego identity) と呼ぶこともある。

Erikson (1950) は、人間の生涯全体を、変化していく主体の発達として捉える「ライフサイクル」論を展開している。ここでは、人間の生涯は8つの段階から成立し、その各段階で要求される社会的課題があるとされている。このうち第5段階に位置づけられている青年期は、アイデンティティ形成がその課題とされている。幼児期から青年期にかけて、人は様々な集団や役割に自己を同一化する試みを繰り返す。つまり他の人の考えや行動をそのまま受け入れ、同様にふるまい、その人と自分を同一化することを行う。しかし青年期後期には、人はこれまでの実験的な同一化を選択し、まとめ、自我同一性の確立を要求される。自我同一性を確立し

た状態は、「自分を自分たらしめている自我の性質であり、他者の中で自己が独自の存在であることを認める（自分は他人と違う）と同時に、自己の生育史から一貫した自分らしさの感覚（自分は自分）を維持できている状態」（鑑,1984）である。

しかし人によっては、自我同一性の確立を行うことが困難となり、これを他者に任せ回避したり、決定を延期することがある。同一性確立と対をなす、この状態は同一性拡散（Identity diffusion）、あるいは同一性混乱（Identity confusion）と呼ばれている。「自我同一性の確立状態の中にもこれらの負の性質が必ず混合している。『自分が何かわからない』『自分がバラバラ』の感じ、経験を指す」（鑑,1984）。混乱状態は病的状態であるのに対し、拡散状態は必ずしも常に病的な状態を示さない。

同一性形成は早期幼児期にその根元をもち、同一性形成は青年期以降にも続く無意識的な発達過程とされている（Erikson,1968）。ただし、青年期ではアイデンティティが発達課題として設定されているため、青年期はEriksonの発達理論でも大きな意味をもっている。

ところで、鑑・宮下・岡本（1984）は、アイデンティティ研究論文を以下のカテゴリーに分類し、整理している。すなわち、「同一性形成に関する研究」「家族同一性に関する研究」「同一性ステータスに関する研究」「職業的同一性に関する研究」「民族的同一性と社会変動の影響に関する研究」「性的同一性に関する研究」の6カテゴリーである。いずれも様々な同一性形成の現在の状態を記述したり、背景や影響要因を臨床的な視点から考察したものが中心である。

2. 自己への関心の高まりとアイデンティティ

自己を知るという問題を現代の現象として捉えた場合、アイデンティティという用語を用いて解説されることが多い。なぜ現代でアイデンティティが注目されているかということについて、Baumeister（1987）はアイデンティティを規定する要因の歴史的变化という視点から論じている。ここで取り上げられた要因は、地域的移動、先祖とのつながり、結婚、仕事・職業、社会的階層、性別、年齢、身体的特徴、道徳的価値、宗教である。これら要因の社会における意味合いが拡大・縮小している、あるいは平均化、希薄化しているということがアイデンティティの意識に関連していると論じられている。

例えば仕事・職業の要因からみると、現代社会では個人に職業の選択を著しく増大させている。以前の社会では、個人が就くべき職業は親の職業や地域的な問題によって制限されていた。しかし社会階層制度の崩壊や地理的移動の可能性から、個人が選択できる職業の範囲は飛躍的に高まった。これにより、個人が職業的アイデンティティを形成しようとする場合には、努力が必要となり、その過程で混乱が生じることとなる。これが、アイデンティティへの注目を高

めている。

性別についても同様に、伝統的な性役割社会ではそれぞれの性によって生き方に制約があった。しかし、現代社会ではこれらの制約が希薄化し、個人の意志によって選択できる生き方の幅が拡大した。このため、個人がアイデンティティを形成する際に、性別が決定する役割は減少し、アイデンティティを形成しにくくなっているといえる。

また、鱈(1990)は、現代日本の社会的変化に伴い、わが国が「選択するアイデンティティの時代」に移行したと論じている。以前の社会では、自分の役割や道は身分制度や性別によって、生まれた時にほぼ決定していた。ここでは、決められた道、決められた役割を選択の余地のないままに受け入れていくことになる。これは葛藤は少ない。しかし、現在では自分の役割や道を自分で努力して見つけ、選択し、獲得しなければならない。

「日本のすべての人が、この選択の方向で努力を強いられるようになってきたということは、たいへんなことである。定められたことをやっていたらよかったのに、これからは努力をして探さねばならないのである。…これからは『何をつくるか』『何を求められているか』『自分は何をしたいのか』といったことを、常に自分の内面に問いかけながら生活をしていかねばならない。これにはこれまでと違った新しいエネルギーが必要となる。このような中での選択の『迷い』は深刻なものになっていくだろう。」(鱈,1990,P167-168)。

3. アイデンティティ研究の問題点

上記のように、自己への関心の高まりを示す社会現象の説明として、アイデンティティは多く用いられている。

ただし、これら多くの指摘にも関わらず、実際にアイデンティティと自己への関心の問題を直接測定したものは少ない。

この一因に、アイデンティティという用語の曖昧さが挙げられる。鱈(1990)による次の言葉はこの概念の複雑さを示すものである。

「アイデンティティ理論の全体を概観してみてもわかることは、この概念が「個」としての自我ないしは自己を中心に据えながらも、それらに密接に結びついた多くの局面を見通す包括的で多義的な意味を担っているということである。ある時は、他者とは異なり、呑込まれることのない人間の個性・独自性の意識ないしは「自覚」を指すこともあれば、外的変化と内的葛藤に直面しながらも一貫した自分であり続けようとする主体的な自我の統合過程を意味していることもある。さらに、自らの存在をより確かなものにするために歴史的・社会的な価値体系に積極的に根をおろし、その根を共有する仲間との連帯や帰属意識に強調点がおかれることもあ

る…。」(P36)

本論文の目的は、冒頭に述べたように、人がもつ「自己を知りたい」とする傾向を人間に普遍的な社会的欲求として位置づけ、その欲求が生じる背景、具体的な行動との関連を社会心理学的な視点から検討することにある。この自己を知りたいという心理の背景には、同一性拡散や混乱の問題が関わっていることは十分考えられる。ただし、アイデンティティという用語そのものの定義があいまいであることを鑑みると、自己への関心が高まり解消していくメカニズムを客観的に解明しようとする際に「アイデンティティの喪失」という曖昧な言葉を説明に用いることは、必ずしも適切ではない。

特に、本研究では自己を知りたいと感じ、情報収集行動を起こす意識的な心理過程を扱うため、青年期以降に無意識的に関わると論じられる同一化過程は含めない。

さらに、前節で述べたように自己探求行動を生起させる動機には、アイデンティティ以外にも様々な心理過程が存在している。本論文では、自己への関心を検討するにあたり、アイデンティティという限定された部分ではなく、自己概念全体という広い範囲で捉えたい。

以上のような点をふまえ、本論文ではアイデンティティの喪失した状態、同一性混乱などを自己探求行動の背景として念頭に置くが、自己情報収集行動生起のメカニズムの説明には直接含めないこととする。

第3章 自己認識欲求

第3章では、本論文で新たに提出する自己認識欲求の概念について説明することを目的とする。

本論文の中心目的は、従来の社会心理学的視点に「自己認識欲求」という新たな仮説的構成概念を提出することにある。新概念の提出の意図は、この導入により既存の概念を用いるよりも自己についての理解が促進され、自己への関心にかかわる様々な個人的・社会的現象の解釈に役立つと考えるためである。

第3章では、本論文が仮説する自己認識欲求の概念を提出する。これにあたりまず第1節では、自己認識欲求の概念にもっとも関連が深いと推測される自己査定理論を取り上げ、その問題点を指摘しながら自己認識欲求の概念提出の必要性を述べる。続いて第2節では、自己認識欲求の基本的仮説を述べる。さらに第3節では、従来の研究知見との差異と概念提出の有効性について述べる。

第1節 自己査定理論の問題点

本研究では、人のもつ自己に注目し自己を知りたいとする心理を実証的に検討することを目的としている。これまで述べてきたように、既存の様々な自己理論がこの心理と類似の傾向を扱ってきている。その中でも、この心理に最も近く、かつ実証的な検討を行っている理論は自己査定動機理論であろう。前述のように、自己査定理論では、明確化の対象が能力に限定されているが、それが不明確になった時に様々な手段を用いて自己の能力を知ろうとする行動が生じることを明らかにしている。しかし、自己査定理論は序章で述べたような近年の自己への関心の高まり現象を説明するには不十分である。

この理由を以下に記す。

まず第1に、自己査定理論が扱う自己の認知側面が能力中心であることが挙げられる。前述のように自己査定理論が実際に研究対象としているのは、自己の能力に限定されている。しかし実際に近年の社会現象として問題となっているのは、自己の性格や生き方といった明確な評価を下すのが困難な側面であることが多い。また、「自分がわからない」とか「自分をもっと知りたい」という表現で、漠然と自己概念全体の不明確感が表現されることもある。第2章で述べたように、最近の自己の構造に関するモデルでは、自己概念は様々な自己知識のネットワークから形成されていると仮説されている。この場合、不明確になるのはTropeらが実験で問題としたような特定の自己知識だけでなく、あらゆる側面に関連する可能性が高い。従って、特

定の能力の評価だけでなく、その他の自己の側面についても情報収集行動が喚起されることを想定した理論が必要である。

自己査定理論の第2の問題は、仮定された欲求を測定していないことにある。Tropeはその理論の中で、自己査定欲求という構成概念を提出しているが、その研究で測定対象となっているのは自己概念不明確と査定行動である。Festingerの認知的不協和理論も含め、情報収集行動に関する従来の研究では、その背景にある欲求を仮説しながらも測定を行っていない。しかし、結果として生じた行動が同様であっても、内的過程が異なる場合があると考えられる。特に、自己情報行動では3つの理論が提出されているが、先に述べたようにどの欲求が強く影響するかは、情報の重要度など様々な要因で異なっている。背景要因に関するこれまでの研究では、最終的に現れた行動がどちらの理論で説明されるかで、背景と欲求の関連を検討している。例えば沼崎(1992)の研究でも課題選択が従属変数として用いられているが、背後にある心理については測定されておらず、結果からの推測に留まっている。実際の内的過程には、各欲求がダイナミックに関連していると想定される。従って、どの欲求が相対的に強く喚起されたかではなく、どの欲求が各々どの程度喚起された結果どちらがより行動に影響したかを明らかにする必要がある。そのためには、欲求の強さそのものを測定することが必要と考えられる。

第2節 自己認識欲求の基本的仮説

前節で述べたように、人のもつ自己に注目し自己を知りたいとする心理を実証的に検討することを求めた時、既存の理論の中でも最も有効な自己査定理論でも十分な説明ができない。このため、本研究では、自己への関心にかかわる個人的・社会的現象をより適切に説明するための新しい仮説的構成概念として、自己認識欲求を提出する。

本節は本研究が提出する自己認識欲求の定義および基本的仮説について述べる。

1. 自己認識欲求の規定

本研究では自己認識欲求を次のように規定する。自己認識欲求とは、「自己に対する認識体系を明確にしたいとする欲求である。この認識体系とは自己に関する知識の総体であり、またそれが構造化されたものである。この自己認識体系が不明確になった時、自己に関する情報収集行動を促すものである。」

ここで自己は自己概念と同義であり、自分自身に関する知識の総体を意味し、認識体系の明確化とはその知識が社会的行動を起こすのに十分な量を持ち、知識同士が矛盾なく統合されている状態と考える。また、自己認識欲求は社会的欲求のひとつであり、自己知識の不足や不均

衡な状態を回復させようとする行動を発現させる内的状態である。自己認識欲求の理論では、この自己認識欲求の喚起および解消の過程という、一連の動機づけ過程をモデルとして提出することを試みる。この場合、一連の過程を考慮すると自己認識欲求よりも自己認識動機と呼んだ方が適切かもしれないが、本研究では行動を生起させる内的状態に特に注目し、欲求との表現を使用した。

2. 自己認識欲求の基本的仮説

自己認識欲求とは、以下のような3つの基本的仮説をもつ仮説的構成概念である。

1. 自己認識欲求は自己概念の明確化を求める欲求である
2. 自己認識欲求は自己概念不明確感によって喚起される。
3. 自己認識欲求は自己関連情報の収集行動を促す。

以下ではこの3つの仮説について述べる。

(1) 自己認識欲求は自己概念の明確化を求める欲求である

人が社会に適応していくためには、周りの状況や環境だけでなく、自分自身について正確で明確な知識をもつことが必要である。自分には何が出来るのか、社会の中でどのような位置づけにあるのかなどについて自分を明確に把握していない人は、目標となる課題を達成できなかつたり、あるいは対人関係で不適応を起こすことにもなる。逆に、明確な自己の知識を出来るだけたくさん手に入れることによって、人はこれらの知識を用いて効果的に社会的行動を起こしたり、自己の行動を予測したりすることができる。従って、人々は自己について正確で確実な情報を出来る限り入手しようとするのである。

Trope (1975,1986) の自己査定理論は、能力の現実的な評価は環境にうまく対処することを助長するため、人は自己の能力についての情報を得るように動機づけられていると考えている。自己認識欲求の理論は、この自己査定理論の研究知見を最も類似した研究として位置づける。ただし、自己査定動機は能力の明確な評価を求めるものであった。本仮説ではこれを自己概念全体の把握にもあてはまるものとして、人のもつ自己概念明確化を求める欲求として自己認識欲求の概念を提出する。そして、本欲求は自己査定動機と同様に、認知から生じる内発的動機づけのひとつとして位置づけられ、自己概念を明確にしようとする一連の動機づけ過程をもたらすものと仮定する。

さらに本仮説における自己概念の明確化は、自己知識が矛盾なく一貫しており、社会的行動を行うに十分な情報量をもつことと定義される。

Festinger (1954) や Trope (1975,1986) の理論では、意見や能力の明確化を求める欲求を

研究対象としているが、これらは比較的客観的な評価を得やすい側面といえる。Festingerの社会的比較過程理論では、客観的な指標が得にくい場合には社会的比較等の方法で社会的な指標を得ると仮説されている。しかし、自己概念の中でも、将来像や生きる目的などは社会的比較等の手段をもって、客観的な指標が得にくい側面が存在する。このような問題を考慮し、自己認識欲求の仮説では明確な「評価」ということには限定せず、明確化を自己知識の一貫性と、十分な情報量とによって成立するものとする。つまり、一貫性があり社会的行動を行うのに十分な情報があれば、自己を明確に把握しているとする。

(2) 自己認識欲求は、自己概念不明確感によって喚起される。

前述の理由で、人は常に自己概念明確化を求めている。このため、この自己概念明確化が崩れ、自己概念が不明確になったと感じられる時にはそれを回復するために自己認識欲求が喚起されるのである。

自己認識欲求喚起を生じさせる自己概念の不明確感はこの2つの状況に総括される。ひとつは「自己知識の非一貫性・矛盾が意識された時」、次に「自己知識の量が、社会的な行動を行うには十分でないと意識された時」である。

1. 自己知識の非一貫性・矛盾が意識された時。

自己知識の非一貫性・矛盾によって動機づけが生じるというこの状態は、自己確証動機の理論で扱われた状況と類似する。ただし、自己確証動機では、自己概念が明確化している場合に自己概念の一貫性を保持するための情報処理が行われると想定されており、この状態で矛盾や不一致情報を得た場合に、これを排除するために確証過程が生じることを明らかにしている。これに対し自己認識欲求では自己概念が不明確な場合に情報処理が生じると考える。すなわち、矛盾や不一致情報を得た状態を自己概念不明確感とし、その矛盾や不一致を解消するための行動を導くものとして自己認識欲求を仮説するのである。従って、既存の知識との一貫性を考える必要がないので、診断性の高さ以外に情報選択の規準はない。

さらに、意識化を仮説に含めた理由は以下の通りである。自己概念内の知識が矛盾なく統合されている必要性については先に述べたが、パーソナリティ研究の分野では自己の様々な内容が、実際には矛盾する現象を指摘している(例えば桑原,1991)。この研究結果は、自己の一貫性を主張する認知的斉合性理論とは矛盾するものであるが、矛盾が意識化されていない場合には両立しうる。自己概念は自己に関する様々な知識で構成されているが、その全てが常に意識に上っているわけではない。前述のように、状況によってその一部のみが活性化する。従って意識化された複数の知識の不整合が確認された時にはじめて、矛盾を解消するための行動が生じると推測される。自己認識欲求は、この後者の場合を想定して、自己知識の非一貫性・矛盾

が意識化される必要を強調する。この状況として考えられるのは、例えば他者から自己概念に不一致な情報を得たり、自己の考えと行動に矛盾を感じたりという場面などがある。

2. 自己知識の量が、社会的行動を行うには十分でない意識された時。

自己知識量の妥当性は側面や状況によって変化する。例えば、新たな状況に自己が対応できない場合には、従来の量の自己知識では不十分であることになる。また、自己について意志決定を行う必要が生じた時には、様々な自己知識が活性化されるが、判断の基準となる自己知識が存在しない場合には同様に自己概念が不明確なものとして意識される。

Trope (1979) では、ある問題について自己が高能力か否かが不明確である場合には高能力の診断性が高い課題が、逆に低能力か否かが不明確である場合には低能力の診断性が高い課題が、それぞれ実験場面で選択される割合が高いことを示した。この場合の不明確さとは、その能力についての知識が不足している状況と理解できる。同様に Trope & Ben-Yair (1982) においても、課題選択に影響を与えた課題遂行前の能力に関する事前不確定性は、その能力についての自己知識が不足している程度を示していると考えられる。このように、特定の状況において対応する知識が不足している場合に、知識を得ようとする行動が生じると推測される。

自己への関心の高まりを問題とする場合、社会心理学では Scheier & Carver (1988) の自己制御理論をはじめとして、自己知識の非一貫性・矛盾を自己への関心と結び付けて論じることが中心であった。その一方で、近年の自己関心の高まりの背景として展開される一般論では、知識不足への意識が論じられることが多い。例えば伊藤 (1995) はテンポの速すぎる社会的変化・価値観の多様化などを指摘しているが、これは社会の変化に自己知識がついていかないため、適切な社会行動をする上で自己知識が不足している状況と理解することができる。

ところで、知識量の不足の意識は、広い意味では自己知識の非一貫性・矛盾として位置づけることも可能である。社会的行動を行うのに知識が不足していると意識するということは、現実場面で適切な行動を実行できていないという状況でもある。従ってポジティブな自己像と不一致が生じた状態であるとも解釈できる。しかし、自己知識内の矛盾や非一貫性は既に獲得された情報と間の不一致であるのに対し、知識量の不足は知識が獲得されていないための不一致である。従って、自己概念を明確にするための自己情報収集行動には差異が生じると推測される。このため、本研究では自己認識欲求喚起の背景である自己概念不明確感の状況として、この2つを分けて理論化する。

以上のような矛盾・非一貫性や知識量の不足の意識は、特定の自己の側面に限定される場合もある。これは自己査定動機が扱った特定の能力の不明確を解消するための情報収集場面や、自己確証動機の実験場面で被験者の自己知識に反する情報を与えたような場合に対応する。し

かし、自己の認知モデルでは個々の自己知識はお互いに結び付くことが示唆されており、実際にLinvilleの抑うつ認知モデル研究のように、ひとつの自己知識の変化が自己概念全体に影響を及ぼすことが明らかとなっている。従って、特定の自己知識の矛盾・非一貫性や量の不足の意識が、自己概念全体の不明確感を生じさせる場合があると想定される。

(3) 自己認識欲求は自己関連情報の収集行動を促す。

自己認識欲求は他の社会的動機づけ過程と同様に、欲求が喚起された場合には、その解消を求める行動が生起し、目標到達によって欲求は解消される。この一連の動機づけ過程によって、自己概念が明確になるのである。

この場合、解消をもとめる行動とは自己概念を明確にするための様々な情報（自己情報）を収集することであり、目標到達とは自己概念の明確化である。従って収集される情報は、第1の場合に自己知識の矛盾・非一貫性を解消するものであり、第2の場合これまで獲得されていない新たな情報であり、これらが既存の自己概念に統合されることによって自己概念の明確化が完了する。

第1の場合の自己知識の矛盾・非一貫性の解消には、矛盾を統合するような知識を獲得したり、古い知識を捨て新たな知識を獲得することなどが考えられる。第2の場合には、新たな知識を獲得し知識が量的に増加することが想定される。

さらに、自己概念不明確感が自己概念の多くの側面にわたる場合には、明確化に必要な情報が多くなると推測され、自己情報収集行動も相対的に増加すると推測される。

3. 自己概念不明確感が生起する場面

ところで、自己概念不明確感が生起する場面とは、具体的にはどのような場面なのであろうか。既存の研究を手かがりにすれば、例として同一性混乱・ライフスタイルの変化・不適応状況・意志決定場面などが挙げられる。

同一性混乱状況やライフスタイルが変化した場面は、これまでアイデンティティ研究や人生移行研究（山本・ワップナー,1992）において、自己の変化が求められる状況として論じられてきたものである。このような場面は、既存の自己概念と新たな自己概念との間に変化が必要とされる場面である。従って、自己知識間に矛盾や非一貫性が生じやすいと推測される。同時に新しい状況に自己を対応させるために、新たな自己知識も必要となる。一方、不適応状況にある個人が自己に関心をもち知りたいと感じることについては、臨床的研究で多く指摘されている（町沢,1990）。不適応状況は、適切な自己の姿とはズレた自分を意識する場面であり、同時にその解決に向けて新たな自己知識を必要とする場面でもある。これらの点から、自己概念

不明確感を生起するものと推測される。さらに、意志決定場面については、例えばBaumeister (1987)が現代社会で自己への関心が高まるのは、自分で様々なことを自由に決められるようになったためと推測している。様々な選択状況で自分がとるべき行動を適切に決定するためには、自分の能力や社会的位置づけなど様々な自己知識を必要とする。従って、意志決定場面も自己概念不明確感を生じる状況として設定することができると思う。

3. 自己認識欲求喚起と解消のモデル

以上のような仮説をふまえた、自己認識欲求の喚起-解消の仮説モデルを Figure 1-3-1 に示す。

まず、不適応や失敗、あるいは意志決定場面やライフスタイルの変化などから、自己知識の一貫性や自己知識量の不足が意識されるという、自己概念の不明確感が生じる。この自己概念不明確感が、「自分を知りたい」とする自己認識欲求を喚起させる。自己認識欲求喚起によって、情報収集行動が促され、結果として自己概念が明確化する。



Figure 1-3-1 自己認識欲求の喚起と解消のモデル

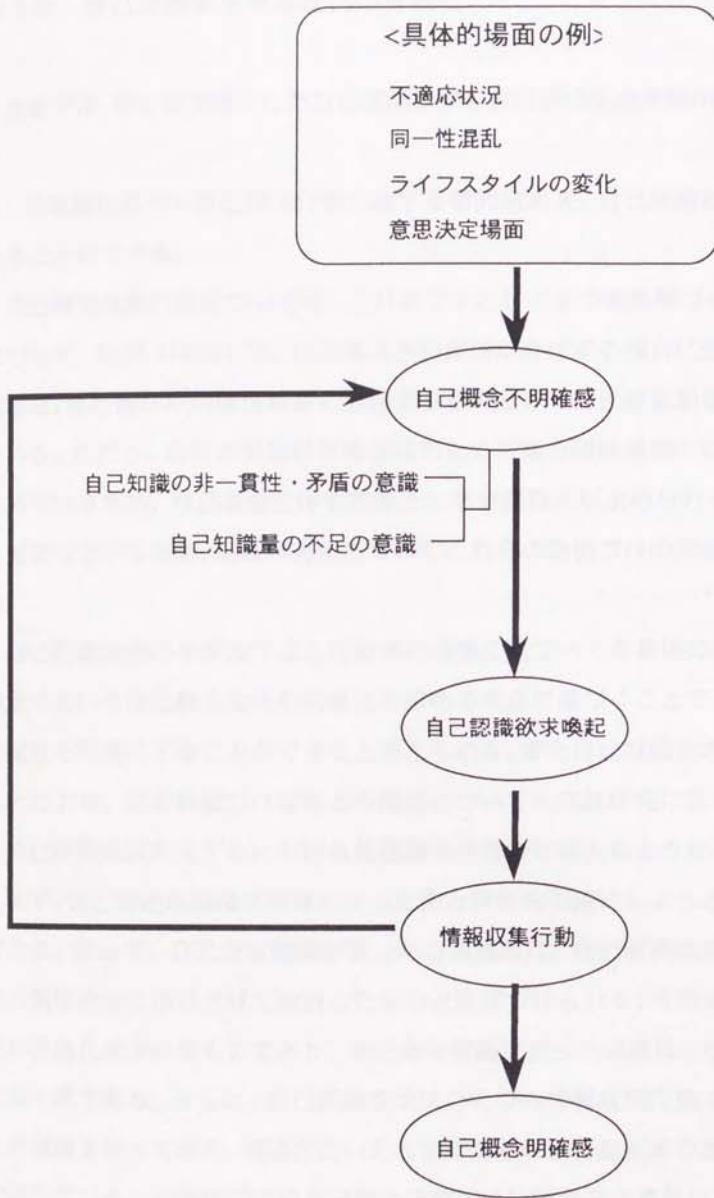


Figure 1-3-1 自己認識欲求の仮説モデル

第3節 自己認識欲求概念提出の有効性

本節では、第2節で提示した自己認識欲求の仮説構成概念を提出することの有効性を述べる。

1. 各理論に基づく自己探求行動に関する研究結果を、自己認識欲求の視点から結び付けて考えることができる。

自己情報収集行動については、これまで主として3つの動機づけ理論が関わっていた。これについて、和田(1992)は、自己概念不明確感が存在する場合に生起するものとして自己査定理論を、自己概念が明確な場合に生起するものとして自己確証動機と自己高揚動機を位置づけている。ただし、和田の知見は目標達成のための能力関連情報の収集行動に限定して理論をまとめているため、自己概念全体を対象とした分類視点が求められる。さらにこの分類は論考にとどまっているため、実証研究に基づいてこれらの動機づけの関連を確認することが必要である。

自己認識欲求のモデルではこの和田の指摘に基づいて各動機の位置づけを考えるが、自己認識欲求という自己概念全体の明確化を求める視点に基づくことで、より広い視点から理論同士の関連を明確にすることができると考えられる。また自己認識欲求の過程を実証的に検討することにより、他の動機づけ理論との関連についても実証研究に基づく考察ができると考える。

自己認識欲求のモデルにおける他理論の位置づけは次のようになることが推定される。

まず、自己査定理論は不明確になった能力評価を明確にしようとする心的過程を扱ったものである。従って、自己査定理論が扱った心的過程は、自己認識欲求によって生じる過程のうち能力側面を特に取り上げて検討したものと位置づけられる。すなわち自己認識欲求は、自己概念の明確化を求めるものであり、自己査定理論で扱った過程は、自己認識欲求の喚起と解消過程の一部である。さらに、自己認識欲求はひとつの情報収集行動では明確に出来ない複雑な自己の側面を扱っており、明確化にいたるまで情報収集行動が繰り返される形をモデルによって表現している。現実場面では自己概念明確化には複数回の情報収集が行われると推測される。特に、客観的な把握が難しい自己の側面については、自己認識欲求の概念導入によって自己情報収集行動をより現実に近い形で説明できると考えられる。

一方、自己確証理論と自己高揚理論は自己概念が明確な場合にのみ生起すると位置づけられている。このため、自己認識欲求によって自己概念の明確化がもたらされた後に、情報収集行動に関連するものと考えられる。

さらに、自己認識欲求の理論には動機づけ理論の他に、アイデンティティ研究の文脈で行われてきた研究知見も対応させることが可能である。アイデンティティ研究では、従来、自己に注目し自己を確立しようとする傾向を青年期特有のものとして位置づけていた（久世・加藤・五味・江見・鈴木・斎藤,1980 など）。その一方で、青年期以降にも同一性混乱現象が生じることが近年注目され始めている（岡本,1985 など）。これらの研究では青年期以降に生じる「心身の変化」「ライフイベント」などの特定の状況による心理的な危機的状況が同一性混乱を生じているとの説明をしている。自己認識欲求のモデルに位置づければ、これらはいずれも自己概念不明確感を生起する場面である。つまり、自己知識の非一貫性や知識量の不足を意識する場面として捉えられるのである。このように、中高年における自己への関心も、青年期同様のメカニズムで自己認識欲求が喚起された状況と理解できる。

2. 現実の自己情報収集行動の把握に有効である

自己認識欲求の概念は、次の2つの視点において、現実の自己情報収集行動の把握に有効である。ひとつは、「自己を知りたい」とする個人の心理状態を説明できる点であり、もうひとつは現在の社会的状況と個人のつながりを捉える視点を提供する点である。

(1) 内的混乱と自己認識欲求

近年の自己への関心の高まりに伴って自己を知ることを目的とする様々な本が出ているが、多くはカウンセリングなどの臨床的な視点から記されている。これらの本では自己に関心を向けることが一般的な心理であるとしながらも、例えば様々な不適應者と自分とを比較することによって自分を知るための手がかりにすることなどが行われており（例えば近藤,1995a）、自己への関心を相対的に不適應的な人々の心理として位置づける傾向が強い。

これに対し、自己認識欲求は、自己への関心を抱くことが普遍的なメカニズムであることを強調する。欲求喚起の背景としては対人関係でうまくいかないといった不適應感も、小さな失敗をして自己概念に不一致な情報を得てしまったということとも同様に位置づけられる。また、自分の目標とする状況の達成を社会的行動のひとつとするならば、行動を起こすのに十分な自己知識を得ようとすることも同様に自己認識欲求喚起の場面と成り得る。これにより、個人が置かれた状況を特殊なものとしてではなく、一般的場面と関連づけて説明することができる。

さらに「本当の自分」（近藤,1995b）を知りたいという表現で表される曖昧な不適應心理を、従来の社会心理学的な枠組みから捉えることができる。自己認識欲求の視点から、自己概念不明確感やそれに伴う自己への関心の関連を実証的に示すことができれば、自己不全になった人を救う基礎的な手がかりを与える可能性がある。

(2) 現代社会と自己認識欲求

近年「内向の時代」と称される自己へ関心が向いた社会的状況について、様々な原因が挙げられていた。しかしいずれも背景となるメカニズムにはふれておらず、実証研究は少ない。

社会心理学の視点からは、自己査定理論などいくつかの実証研究が提出されていたが、いずれも現実行動を説明するには限定された理論であった。自己認識欲求の仮説的構成概念は、人が自分自身について明確化したい対象を能力以外に広く設定している。従って、「自分の将来を知りたい」「自分の過去の意味を知りたい」「いま自分がしたいことをみつけない」といった現象について、以前の理論よりも適切に説明できる。

また、自己認識欲求では自己認識欲求の解消を、自己概念の「明確化」として設定することによっても、現実行動をより適切に示すことができると考える。例えば、自己探求行動を扱った理論の中には、自己制御理論に代表されるように、基準と自己のズレを行動の背景として強調するものがある。ただしこの理論では、自己を評価する規準が明確でない場合には適用することができない。むしろ近年の自己関心の高まりをもたらす心理を考える場合には、自己が進むべき方向を決める指針が分からないなど、基準そのものが不明確である状況が問題となっている。自己認識欲求の理論では、自己知識間のズレがなくなり、社会的行動を起こすのに十分な自己知識量をもつことができれば自己認識欲求は解消されると考え、基準との比較を特に考慮していない。従って自己が一般の基準と離れていたとしても個人が社会的行動を支障なく行っていたり、あるいは指針が分からなくても不適応が解消されれば自己探求行動が生起しないことを予測するなど、より現実場面に近い説明が可能といえる。

3. 社会心理学における自己研究の枠組みに、発達の視点を導入することができる。

従来の社会心理学における自己の構造研究の多くは、既に形成された自己概念の構造を明らかにすることを目的としていた。このため、自己がどのように形成されていくのかという発達の視点はほとんど導入されていない。同様にして、自己探求行動に関する動機づけの研究で扱われた理論は、自己の形成に関わる動機であるが、これらの理論研究では長期に渡る自己概念形成に及ぼす影響については多くは考察されていない。

自己認識欲求は、自己概念の不明確感から自己情報収集行動を促すものであるが、情報収集行動と結び付くが故に、自己の構造化と大きく関わる心理である。自己認識欲求が様々な年代でどのような背景と結び付いて現れてくるか、また自己認識欲求の強さは年代でどのように変化するのかといったことを明らかにすることで、社会心理学的な自己研究に、自己概念の発達の視点を導入することが可能と考えられる。

本研究では、この発達の視点の導入の意義を考慮し、自己認識欲求の仮説モデルの検証を様々な年代を対象として検討する。

以上のように、本章では自己認識欲求の概念を提出し、既存の研究をその中に位置づけ、また概念提出の意義を述べた。ただしこれらは仮説に留まっており、理論の正当性を認めるためには実証研究が必要である。そこで、第II部では自己認識欲求の仮説モデルを検証するための実証研究を行う。このうち第1章から第9章までは大学生を対象として調査・実験を行い、自己認識欲求の仮説モデルの検証を行う。さらに第10章から第14章までは、高校生から60代までの様々な年代を対象とした質問紙調査を行い、9章までに示された結果を確認するとともに、各年代の自己への関心が自己認識欲求モデルによってどのように説明できるかを検討する。

第II部 自己認識欲求に関する実証的検討

第II部では、第I部で提出した自己認識欲求の仮説的構成概念およびその仮説モデルを検証するために実施された、11の調査と2つの実験を、14章に分けて報告する。調査・実験は大きく次の2段階に分かれる。

第1に、自己認識欲求の仮説の検証。第2に発達的な視点を含めた、自己認識欲求の仮説の検証である。

このうち第1段階は、第1章から第9章までを含む。ここではいずれも大学生を対象とし、自己認識欲求の仮説の検証を行う。自己認識欲求の仮説は、欲求の喚起に関わる部分と、欲求解消のための情報収集行動の2つの部分に大別されるが、第1章から第2章は主として欲求喚起の仮説検証を、続く3章から8章は主として自己認識欲求が情報収集行動を生起させるとの仮説検証を目的として行った。また9章は、自己認識欲求の性質を明確にするために、他のパーソナリティ特性との関連分析を行った。

このうち第1章では、自己認識欲求を測定する尺度の作成と、自己概念不明確感をもたらすと推測される日常生活の不適応感と自己認識欲求の関連を分析する。

第2章では、自己概念不明確感の指標のひとつとして自己概念変動性を取り上げ、自己認識欲求の強さの関連を検討する。

第3章では、自己概念不明確感と自己認識欲求喚起の関連を検討する。

第4章では、集団実験法を用いて、自己認識欲求喚起と情報収集行動の関連を検討する。

第5章では、自己認識欲求と、情報収集手段のひとつとしての“雑誌心理テスト”への接近性の関連を検討する。

第6章では、自己概念不明確感を生じる実験場面を設定し、自己認識欲求や情報収集行動の関連を検討する。

第7章では、場面想定法を用いて様々な情報収集行動と自己認識欲求との関連を検討する。

第8章では、自己認識欲求喚起に伴う情報収集行動の構造の変化を検討する。

そして第9章では、他のパーソナリティ特性と自己認識欲求の関連分析を行う。

第2段階は、第10章から第14章に当たる。ここでは、高校生男女から60代男女の幅広い年代を対象として、自己認識欲求のモデルによって各年代の自己への関心がどのように説明できるか、モデルの妥当性を検討する。

このうち第10章では、10代から60代までの女性に、自己認識欲求の内容・喚起要因・情報

収集行動について自由記述法で尋ね、自己認識欲求のモデルの妥当性を検証するとともに、年代による変化を分析する。

第11章では、高校生を対象としてランダムサンプリングで標本抽出をした調査を行い、自己認識欲求の仮説モデルの妥当性検証とともに、高校生の自己認識欲求喚起の背景を分析する。

第12章では、中高年（40代・60代）を対象としてランダムサンプリングに基づく調査を行い、自己認識欲求の仮説モデルの妥当性検証とともに、中高年の自己認識欲求喚起の背景を分析する。

第13章では、11章・12章と類似の質問紙を大学生に実施し、その回答傾向を高校生・中高年と比較することによって、自己認識欲求の発達的变化を検討する。

第14章では、30代を中心とする母親を対象としてランダムサンプリングで標本抽出をした調査を行い、自己認識欲求の仮説モデルの妥当性検証とともに、中高年の自己認識欲求喚起の背景を分析する。

第1章 自己認識欲求測定尺度の作成と、日常生活の不適応感との関連¹⁾

1) 本章は、「上瀬由美子 1992a 『自己認識欲求の構造と機能に関する研究—女子青年を対象として—』 心理学研究, 63, 30-37.」に加筆したものである。

第1節 目的

本章では質問紙調査を行い、自己認識欲求の理論を検証する第1の段階として、自己認識欲求を測定する尺度を作成することを試みる。その際には、従来の自己概念研究を元に自己認識欲求の構造について検討を行い、この結果をふまえて尺度作成を行うこととする。さらに、次の段階として自己認識欲求の仮説モデルのうち、自己概念不明確感の背景として位置づけられている日常生活の不適応感を取り上げ、自己認識欲求との関連を検討する。

1. 自己認識欲求の構造

本調査ではまず、自己認識欲求の構造について検討することを第1の目的とする。

自己認識欲求は自己知識の非一貫性・矛盾や知識量の不足を意識することによって生じると仮説されている。このような自己概念不明確を感じる状態とは、自己概念の当該側面が活性化し意識化された状態であると言い替えることができる。自己認識欲求の理論では自己概念不明確感が生じる側面を特に限定しておらず、理論的には意識化可能な自己知識のあらゆる部分について不明確感が生じる可能性がある。

ただし、従来の自己概念の構造研究では自己知識はある程度のまとまりをもって構造化され、また意識化されることが明らかとなっている。従って、不明確感が意識されたりそれに伴って知りたいと感じ情報収集が行われる自己知識も、自己概念の認知構造に影響を受けるとの推測も成り立つ。

本調査では自己認識欲求の構造を検討することを目的のひとつとするが、以上の点をふまえ、自己概念の構造研究を参考にしながら調査を行うこととする。ただし、近年の認知心理学的アプローチによる自己の構造研究の多くは、自己知識の一部のみを取り上げてその構造化を検討しており、自己知識のまとまりについての知見は抽象的なものである。また自己概念全体を包括的にとらえることも行っていないため、本調査が求めるような、自己認識欲求は知識のあらゆる部分について個別に生じるのかあるいは自己概念の側面に沿って生じるのかといったことを調査する際には参考としにくい。逆に Bugenthal & Zelen (1950) や Rosenberg (1979)

のような初期の自己概念研究では、自己概念を包括的に捉えて、その中の側面のまとまりを可能な限り抽出しようと試みているため、自己認識欲求の構造を検討する際には有効な視点と考えられる。ただし、自己知識の内容やその知識同士のまとまりについては様々な社会的影響を受けると推測されるため、BugenthalらやRosenbergの研究は時代が古いことが問題である。この中でわが国で行われた近年の山本・松井・山成（1982）の研究は自己の認知構造を明らかにし、さらに自己評価との関連を分析した点で、自己認識欲求の構造研究に有効な視点を提供するものと考えられる。山本らは、Bugenthalらの研究をふまえ、大学生を対象とした調査を行った。そして、自己の様々な側面についての回答を因子分析した結果から、大学生が自己を認知する際には11の側面から捉えることを示している。11の側面とは、「社交」「スポーツ能力」「知性」「優しさ」「性」「容貌」「生き方」「経済力」「趣味や特技」「まじめさ」「学校の評判」である。

以上の点をふまえ本調査では、自己認識欲求の構造を検討することを試みる。その際には、山本らの自己認知の諸側面の研究をもとに、各側面について知りたいと感じるか否かを尋ねる項目を作成し、その回答にどのような構造がみられるかを分析する。

なお、山本らの自己認知構造の研究は大学生を対象にして行ったものである。従って、この認知構造が大学生以外でも同様であるかは不明である。そこで本調査でも調査対象者を同様の大学生に限定して行うこととする。また、これまでの自己探求行動や自己への関心が一般に問題とされる場合には、この心理は青年期の自己形成の問題と結び付けられて論じられることが多かった。既存の研究に位置づける意味でも、まず大学生を対象として自己認識欲求の構造を明らかにすることは妥当であると考えられる。

2. 自己認識欲求を測定する尺度の作成

第1部で指摘したように、これまで自己情報収集行動を問題とした従来の研究では、人の持つ自己を知ろうとする欲求を仮説していたが、その測定は行っていなかった。そこで本調査では、自己認識欲求の構造を明らかにした上で、その強さを測定する尺度を作成することを第2の目的とする。

3. 日常生活の不適応感と自己認識欲求

また、自己認識欲求は自己概念不明確感によって喚起されると仮説されている（Figure 2-1-1）。この自己概念不明確感とは（1）自己知識の一貫性・矛盾が意識された時（2）自己知識の量が、社会的行動を行うには十分でないと意識された時の2つの状況で生じると仮定されて

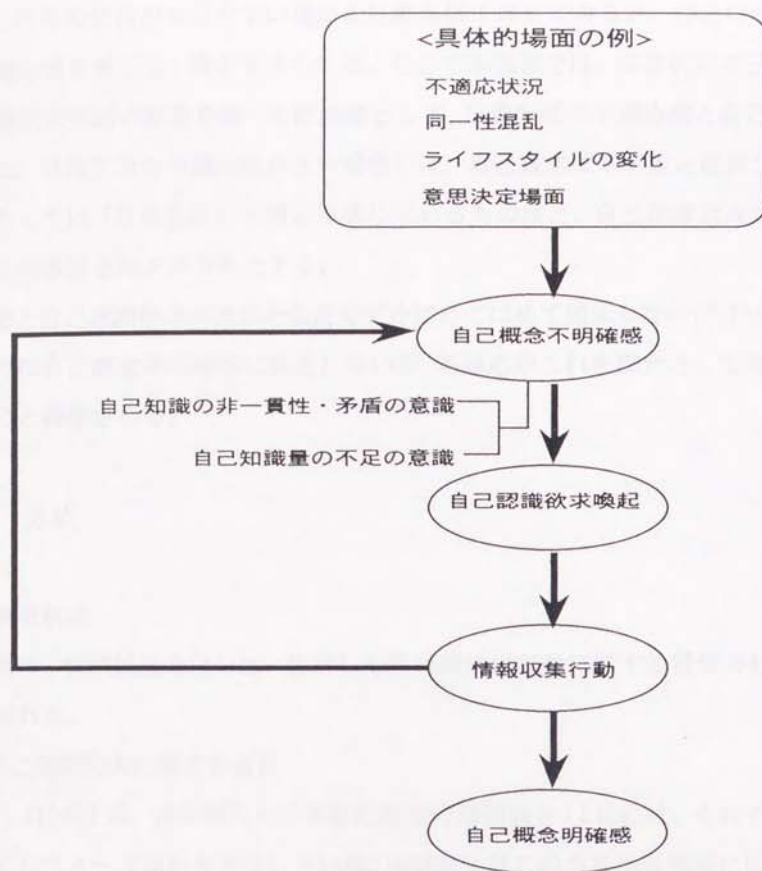


Figure 2-1-1 自己認識欲求の仮説モデル



Figure 2-1-2 本調査の作業仮説

いる。これらの状況が生じやすい場面を日常生活で考えてみると、ひとつの例として「日常生活に不応感を感じる」時が考えられる。そこで本調査では、直接的に自己概念の不明感と自己認識欲求喚起の関連を調べる前段階として、日常生活の不応感と自己認識欲求の関連を検討する。日常生活の不応感が高い場合には、自己概念は不明感と推測される。従って、調査にあたっては「日常生活に不応を感じているものほど、自己認識欲求が高い」との仮説をたて、この検証を第3の目的とする。

不応と自己認識欲求の関係を仮説モデルにあてはめて図示したのが、Figure 2-1-2である。本調査では自己概念不明感測定しないが、不応がこれを媒介として自己認識欲求喚起に結び付くと推測される。

第2節 方法

1. 質問紙構成

本調査は、質問紙法を用いた。使用した質問紙には年齢に関する質問の他、次の2つの項目群が含まれる。

(1) 自己認識欲求に関する項目

山本ら(1982)は、青年期における自己認知の諸側面を11にわけ、それぞれの側面を代表する内容として4~3項目を列挙している。本調査ではこのうち当該側面に因子負荷量が高い項目を側面ごとに2項目づつ使用し、「自分の~について知りたい」という形の質問項目を、独自に22項目作成した。さらに、「自分に関して知りたい」「自分に関して知りたくない」という自己認識欲求に関する気持を尋ねる30項目を独自に作成した。自己認識欲求に関する質問項目は、合計52項目である(項目の例については、Table 2-1-1参照)。回答は「そう思う」から「全くそう思わない」の5段階評定法で求めた。

(2) 日常生活の不応感に関する項目

対人関係の不応感に関する項目10項目、恋愛関係の不応感に関する項目8項目、将来に対する項目10項目、計28項目を独自に作成した。回答は「そう思う」から「全くそう思わない」の5段階評定法で求めた。

2. 調査対象者

都内公立短期大学女子学生93名。都内私立大学女子学生48名。首都圏専門学校女子学生101名。回答の2割以上が無回答であったものを除き、計239名を有効回答者とした。平均年齢は、

19.0歳であった。

3. 調査時期・方法

調査は、1989年7月に各学校内の教室に於いて授業終了後、集合調査形式で行なわれた。対象者には「大学生の意識に関するアンケートを行う」と教示してから質問紙を配布し、約20分後用紙を回収した。

第3節 結果

1. 自己認識欲求に関する項目の分析

自己認識欲求に関する項目のうち回答分布に偏りのみられない42項目に対し、初期解を主成分分解（相関行列の対角成分を1としたままの主因子解）とし、Varimax回転を行う方法で因子分析を行った。因子分析にあたっては、回答の「そう思う」を5点と得点化し、以下4点から1点までの点数を各回答に与えた。分析の結果、固有値の推移から1.0以上の基準を満たす3因子を抽出した（Table 2-1-1）。

第1因子に負荷量の高い項目は「自分の性的魅力がどのくらいあるのか知りたい」などで、山本ら（1982）による自己の側面がほぼ網羅的にあがり、それについて知りたいとするものであった。第2因子に負荷量の大きな項目は「自分について聞かなければよかったと思うことがある」などで、自己について知りたくないというものであった。また、その知りたくないものは自己に関してネガティブな内容を持つものであった。第3因子に負荷量の高い項目は「自分については自分が一番よく知っている」などで、自分に関する理解程度を表わすものであった。

以上の因子分析の結果に基づき、第1因子は「自己認識欲求」因子、第2因子は「ネガティブ情報回避欲求」因子、第3因子は「自己認識度」因子と解釈された。しかし、第3因子の自己認識度は負荷量の高い項目が少なく、本調査では自己認識に関する欲求を扱うことを目的としているため、以下の分析からは第3因子を除くこととした。

3因子以上に因子数を増加して因子分析を行ってもいるが、第1因子および第2因子の項目はほとんど変化せず、先に述べた3因子に含まれなかった項目が数項目づつまとまって因子を形成した。この点から、自己認識欲求の構造は1次元であることが示唆された。

Table 2-1-1 自己認識欲求に関する項目の因子分析 N=222

項 目	第1因子	第2因子	第3因子
○1 自分の性的魅力が、どのくらいあるのか知りたい	0.718	0.007	-0.035
○2 自分の知識は、人に比べて多いのか、少ないのか知りたい	0.701	0.028	-0.117
○3 客観的に見て、自分の容貌にはどの程度の魅力があるのか知りたい	0.697	-0.035	0.001
○4 自分には、責任感があるのかを知りたい	0.657	-0.013	0.112
○5 他の人と比べて、自分の知的能力は、どのくらいあるのか知りたい	0.652	0.036	-0.126
○6 自分は異性とうまくつき合っているのかどうか知りたい	0.645	0.016	-0.005
○7 自分の異性との付き合い方は進んでいるのか遅れているのか知りたい	0.609	0.129	-0.165
8 自分が本当に思いやりのある人間なのか知りたい	0.596	0.102	0.237
○9 自分の家庭の経済的地位は、どのくらいにあるのか、知りたい	0.584	0.093	-0.138
○10 自分が、どのくらい自分に対して厳しいのか、知りたい	0.576	-0.097	0.128
○11 自分の社交的な能力が、どのくらいあるのか知りたい	0.571	-0.025	0.285
12 自分の友達の数、人に比べて多いのか、少ないのか知りたい	0.560	0.224	-0.006
○13 自分の出身高校の評判は、今どうなのかを知りたい	0.502	-0.078	-0.024
○14 自分の大学は、世間でどう評価されているのか、知りたい	0.500	-0.026	-0.012
15 自分がどういう人物であるかについて出来るだけ多くの情報がほしい	0.484	-0.209	0.371
○16 他の人がどんな物に、どのくらい、お金を使っているのか知りたい	0.478	0.114	-0.046
○17 自分に合った生き方を、教えてほしい	0.470	0.114	0.129
18 回りにいる人だけでなく、もっと違う人と自分を比べてみたい	0.432	0.045	-0.098
△19 自分について、聞かなければよかったと思うことが、たくさんある	0.056	0.613	0.120
△20 自分について、知りたくない部分がある	0.133	0.556	0.204
△21 自分について、人の評価を聞くのは怖い	0.191	0.506	-0.020
△22 自分についての悪口でも、真実だったら出来るだけ聞きたいと思う	0.232	-0.499	0.146
△23 知らずに犯したあやまち、知らせて欲しくない	0.063	0.458	-0.039
24 自分について、これ以上知りたいとは思わない	-0.160	0.456	-0.427
△25 他の人が、自分について言う事はマトハズレな事が多い	-0.010	0.447	-0.168
△26 自分に関する、良くないうわさは聞きたくない	0.107	0.379	-0.137
27 自分について、よく理解している	0.101	-0.090	-0.697
28 自分については、自分が一番よく知っている	0.238	0.100	-0.671
29 本当の自分は、自分自身には分かりにくいものだ	0.199	0.192	0.461
30 自分についてもっと知りたい	0.316	-0.338	0.439
31 (自分の性格などについて) もっと知っていたらと後悔することがある	0.353	0.298	0.411
32 自分より、他人の方が、 自分について冷静で適切な判断を与えることが出来る	0.034	0.153	0.403
33 自分についてあれこれ言われるのは気に入らない	-0.096	0.290	-0.165
34 自分を知りたい場合には、 出来るだけ自分と似たような人を探して比較する	0.323	0.247	-0.176
35 自分のことが全て分かってしまったらつまらない	-0.010	0.335	0.203
36 嫌われ者は自分を分かっていることが多い	0.220	0.223	-0.009
37 人は自分についてあまり考えない方がうまく生きていける	0.165	0.373	-0.096
38 自分の色々な面を知っているほど、うまく生きていける	0.202	-0.189	-0.185
39 一般に、他人の人と比較することによって自分を知ることができる	0.398	0.081	-0.260
40 自分のしていることが、正しいのかわからなくなった時には、 他の人と比べればよい	0.297	0.186	-0.166
41 一般に人は、自分について知りたいと思っている	0.294	-0.297	0.104
42 自分について知りすぎると、かえって自由に行動できなくなるものだ	0.213	0.380	0.174
寄与率	17.3%	7.5%	6.4%

○を自己認識欲求の尺度項目、△をネガティブ情報回避欲求の尺度項目として利用した。

2. 自己認識欲求尺度・ネガティブ情報回避欲求尺度の作成

そこで、第1因子に負荷量の高い項目から14項目を自己認識欲求の尺度、第2因子に負荷量の高い項目から7項目をネガティブ情報回避欲求の尺度とし、各項目の合計得点を尺度得点とした。ここでは、得点が高い回答者ほど当該欲求が高いことを意味している。

尺度項目作成選定に当たっては、精練された尺度を構成するために、2つ以上の因子に重なって負荷量の高い項目、およびTable 2-1-1の項目について因子分析をした結果負荷量が低かった項目を削除し、残りを尺後項目として使用した。

次に、作成した各尺度について折半法によるSpearman-Brownの修正値を求めたところ、信頼性係数は、自己認識欲求尺度0.98 (N=224)、ネガティブ情報回避欲求尺度0.78 (N=224)であった。

3. 自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の関連

両尺度の尺度得点の相関を求めた結果、相関係数は $r=0.13$ ($P<.05$)であった。このことから、両因子が相対的に独立する内容ではあるものの、完全には無関連ではないことが示唆された。

さらに、両尺度得点の分布を併せて平面上にプロットした結果、Figure 2-1-3に示すようになった。これをみると全体としては右上がりの分布になっているが、自己認識欲求が高くネガティブ情報回避欲求の低いものも存在していることがわかる。しかし、自己認識欲求が低くネガティブ情報回避欲求のみが高いものは少ない。この結果から、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求に伴って喚起される。ただし自己認識欲求が喚起されても、ネガティブ情報回避欲求が喚起されない場合のあることが推測される。

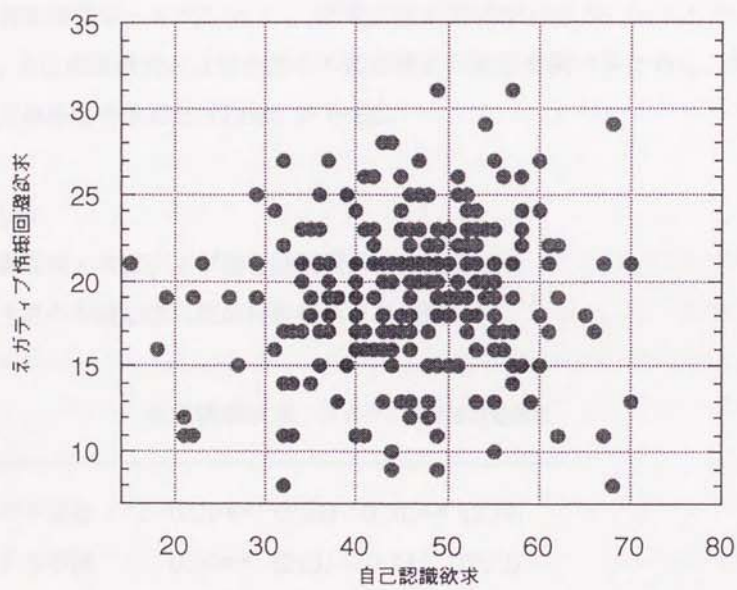


Figure 2-1-3
自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度得点プロット

4. 日常生活の不適応感と自己認識欲求との関係

日常生活の不適応感に関する28項目に対し、因子分析を行った結果、3つの因子が抽出された。この結果に基づいて「対人関係の不適応感」「恋愛に関する不満」「将来展望の不安定」をそれぞれ測定する、3つの尺度が作成された。

因子分析は、主成分解・Varimax回転を用い、各因子に負荷量.35以上の項目を尺度項目とした。対人関係の不適応感尺度は「自分の事を本当に理解してくれる人がいない」など10項目、恋愛に関する不満尺度は「自分にぴったり合った恋人がほしい」など4項目、将来展望の不安定尺度は「将来の事など今は考えたくない」など5項目である。項目の合計得点をそれぞれの尺度得点としており、得点が高いほどその問題における不適応感が強い事を示している。折半法によるSpearman-Brownの修正値を求めたところ、各尺度の信頼性係数は対人関係の不適応感の尺度が0.87 (N=224)、恋愛に関する不満の尺度が0.79 (N=223)、将来展望の不安定の尺度が0.60 (N=225)であった。各尺度得点の相関は、対人関係と恋愛が $r=0.23$ ($P<.01$)、対人関係と将来展望が $r=0.02$ (n.s.)、恋愛と将来展望が $r=0.08$ (n.s.)であった。

さらに、自己認識欲求と日常生活の不適応感との関係を調べるために、作成した2つの尺度の尺度得点の相関を求めた (Table 2-1-2)。

Table 2-1-2

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の尺度得点と
日常生活の不適応感尺度の尺度得点との相関

	自己認識欲求	ネガティブ情報回避欲求
対人関係の不適応	0.29** (224)	0.30** (224)
恋愛に関する不満	0.30** (223)	0.11 (223)
将来展望の不安定	0.14* (225)	0.09 (225)

* $P<.05$ ** $P<.01$ ()内の数値はNを示している。

その結果自己認識欲求は、日常生活の不適応感に関する3つの尺度いずれとも、有意な相関がみられ、ネガティブ情報回避欲求は、対人関係の不適応感とのみ有意な相関がみられた。

第4節 考察

1. 自己認識欲求の構造

(1) 自己認識欲求

本調査の目的として、自己認識欲求の構造を明らかにすることがあった。自己の様々な側面について知りたいかどうかを尋ねる項目を因子分析した結果、3つの因子が検出され、そのうちの第1因子が自己認識欲求を表わす因子であると解釈されたので、この14項目を自己認識欲求の尺度項目とした。この項目をみると、山本ら(1982)による自己の側面がほぼ網羅的にあがっている。自己認知の側面別に因子が抽出されなかったことから、自己認識欲求の構造は自己認知の構造とは一致しないことが示唆される。さらに自己の様々な側面についての項目が挙がっていることから、自己認識欲求の内容は、社会的比較理論や自己査定理論で扱われた意見や能力の評価には限らず、自己の様々な側面に関連していることが明らかとなった。

また自己認識欲求を示す各項目の関連は強く、自己認識欲求の1次元性が示唆された。この点から、大学生女子の場合、自己認識欲求が喚起される場合には、「自分の〇〇について知りたい」という意識よりも「自分について知りたい」といった形の、より全体的な欲求喚起がなされる可能性が高いことが推測される。

(2) ネガティブ情報回避欲求

自己認識欲求尺度作成の際に、第2因子としてネガティブ情報回避欲求が検出された。項目の内容からこの欲求は、人間の持っている自己認識欲求を歪め、自分に都合の良い情報のみを取り入れようとする欲求であると考えられる。従来、自己情報収集行動については、自己を明確化しようとする自己査定動機と対立する動機として、自己高揚動機が存在していた。本調査で提出されたネガティブ情報回避欲求の因子は、情報収集行動において高揚動機が顕在することを確認するものといえる。自己高揚動機については、これまでセルフ・ハンディキャッピング尺度などを用いて測定が試みられてきたが、情報収集行動におけるこの傾向を直接測定するものではなかった。従って、本調査で作成されたネガティブ情報回避欲求尺度は、自己情報収集行動における自己を高揚させようとする動機づけに対応するものと考えられる。

両欲求の尺度得点の分布を併せてみた結果、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求に付随して発生するものと推測された。ただし自己認識欲求が喚起しても必ずしもネガティブ情報回避欲求が伴わない回答者もいる。この点から、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求によって自己への関心が高まった際のある特定の状況で発生し、自己情報収集行動を自己評価を維持させる形に限定させるものと考えられる。

2. 尺度作成

本調査の第2の目的は、自己認識欲求を測定する尺度を測定することにあつた。構造の分析の結果、自己認識欲求が1次元であることが確認されたために、自己の各側面に対する知りたい程度を加算する形で自己認識欲求測定尺度を作成した。これによって、従来の研究では直接測定されることのなかった情報収集に関する欲求を尺度作成によって測定することが出来たと位置づけられる。

なお、本調査では自己認識欲求尺度の信頼性確認を行い、高い信頼性係数を得ている。

3. 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と日常生活の不適応感の関連

次に自己認識欲求と日常生活の不適応感との関連であるが、分析の結果、対人関係の不適応感・恋愛に関する不満・将来展望の不安定のいずれの側面においても、自己認識欲求と有意な相関がみられた。このことから、日常生活に不適応を感じている者ほど自己認識欲求が高いという仮説及びFigure 2-1-2に示したモデルが支持されたと考えられる。

ただし、本調査では、日常生活の不適応感は自己概念不明確感をもたらすと推測した上で、自己認識欲求との関連を検討している。このため第2章では自己概念不明確感と直接関連をみることによってモデル検証を行う。

4. 自己認識欲求の仮説モデルとの対応

本調査では、自己認識欲求の喚起に関する仮説を検証した。自己概念の不明確感をもたらすと想定される日常生活の不適応感と、自己認識欲求の関連を分析した結果、3種の不適応感いずれについても、それが高いものほど自己認識欲求が高いことが示された。この結果は、自己概念の不明確感が自己認識欲求を喚起させるという仮説モデルを支持するものである。

続いて、ネガティブ情報回避欲求の位置づけであるが、これは自己認識欲求と併せた得点分布や、対人関係とのみ関連がみられた点などから、Figure 2-1-4に示す位置にあると推測される。自己認識欲求との関連を点線で示したのは、状況によって喚起が変化することを図示するためである。またネガティブ情報回避欲求と情報収集行動との関連も点線であるが、これは特定の行動を阻止する時もあれば、関連しない時もあると推測したためである。ネガティブ情報回避欲求の喚起がどのような時に限定されるのかは、次章以降で引続き検討する。

5. 本調査の問題点と他章との関連

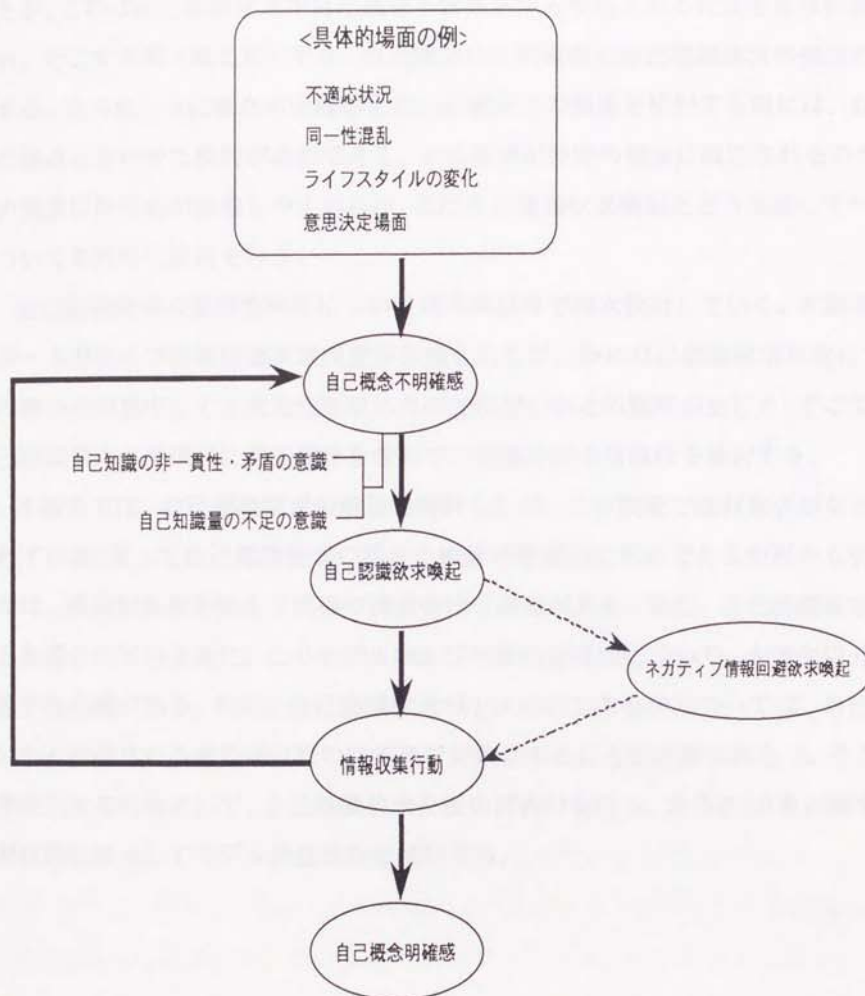


Figure 2-1-4 調査1の結果から導かれる仮説モデル

本調査では自己認識欲求のモデルに基づき日常生活の不適応が自己認識欲求に関連することを示したが、これは自己認識欲求が自己概念不明確感から喚起される仮説を直接検証したものではない。そこで次章（第2章）では、自己概念の不明確感と自己認識欲求の強さの関連を直接分析する。さらに、自己概念不明確感と自己認識欲求の関連を検討する際には、自己概念不明確感の構造と合わせた検討が必要である。不明確感が特定の側面に限定されるのか、あるいは多くの側面に活性化が拡散しやすいのか、また自己認識欲求喚起とどう関連しているのか等問題についても同時に検討を行う。

また、自己認識欲求の妥当性検証については本章以降で順次検討していく。本調査では自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度が作成されたが、特に自己認識欲求尺度については、肯定的内容のみが集中して1次元性を示したのではないかとの疑問が生じた。そこで第5章では、自己認識欲求尺度項目に逆転項目を含めて、再度尺度の信頼性を検討する。

なお、本調査では、自己認識欲求の構造を検討したが、この調査では対象者が女子大学生に限定されている。従って自己認識欲求の構造や機能が普遍的なものであるか否かを明らかにするためには、再度対象者を変えて同様の調査を行う必要がある。また、自己認識欲求が普遍的であると仮説されている為に、このモデルおよび尺度の妥当性について、大学生以外を対象として確認する必要がある。特に、自己認識欲求が1次元であるかについては、自己が明確になっていると推測される青年期以降の回答者を対象にすることが必要であろう。そこで、3章では大学生男女を対象として、自己認識欲求尺度の再検討を行う。さらに10章以降では、対象を青年期以降に拡大してモデルの妥当性を検討する。

第2章 自己概念不明確感と自己認識欲求の関連 1)

1)本章は、「上瀬由美子 1996 『自己認識欲求と自己概念不明確感の関連』 東京女子大学紀要<論集>,46,83-98.」を加筆・修正したものである。

第1節 目的

1. 自己認識欲求モデルの検証

本章は、自己認識欲求仮説モデルのうち、「自己知識の非一貫性・矛盾の意識から生じる自己概念不明確感が、自己認識欲求を喚起させる」との仮説を検証することを第1の目的とする。

Figure 2-2-1 は第1章の結果を受けて一部修正された、自己認識欲求仮説モデルである。このうち自己認識欲求喚起については、自己概念の不明確感が要因として仮説されている。第1章では、自己概念不明確感を生じると推測される日常生活の不応感と自己認識欲求の関連を検討し、不応感の強い者ほど自己認識欲求が高いことを確認した。しかしこれは、不明確感が自己認識欲求を喚起するとの仮説を直接的に検討するものではなかった。そこで本章では質問紙調査を行い、自己認識欲求喚起についての仮説を直接検証することを試みる。

自己認識欲求のモデルでは、自己概念の不明確感は「自己知識の非一貫性・矛盾が意識された時」「自己知識の量が、社会的行動を起こすには十分でない意識された時」の2つの状況で生じると仮説されている。このうち本章では「自己知識の非一貫性・矛盾の意識化」を取り上げ、「自己概念不明確感が自己認識欲求を喚起する」との仮説を検証する第1の段階とする。

自己知識の非一貫性・矛盾の意識化を測定するには、いくつかの方法が考えられるが、本調査では次の2つを指標として用いる。

第1に、自己概念の変動性に対する意識である。この場合変動性とは、不安定で変わりやすい程度を示す。一貫性が必要な自己概念において、変動性が高いことは、状況によって自己に関する不一致な情報が増え、自己概念不明確感につながると考えられる。質問紙調査では、自己の各側面に対する自分の考えがどの程度変わりやすいかを直接尋ねる形で測定を行った。仮説に従うなら、変動性の意識が高いほど、自己認識欲求が高く喚起されると予測される。自己概念の変動性を測定する場合には、一般には自己概念の測定を複数回行い、その差を検討することが多い。ただし、この方法では変動性を対象者が意識しているか否かは明らかではない。

自己認識欲求の仮説では、非一貫性の意識化を必要としているため、本調査ではその測定を、自己の各側面に対する自分の考えがどの程度変わりやすいかを直接尋ねる形で測定を行った。

第2の指標は、自己知識の矛盾の有無である。自己認識欲求喚起には自己の不明確感を個人が「意識化する」ことを前提としている。従って、自己概念内の知識が非一貫しており矛盾していても、それを意識化することがなければ、自己認識欲求は喚起されないと考える。従って、本人が意識化しない自己概念の矛盾の有無は、自己認識欲求喚起に無関係と予測される。本調査では互いに反する意味をもつ一対の形容詞が、自分にあてはまるか否かを判断させ、その構造に矛盾が生じているか否かを基に、意識化されない自己知識の矛盾を測定することを試みる。

ところで、自己認識欲求の仮説モデルでは、自己概念不明確感を生じる場面として、第1章で関連分析を行った不適応状況の他に、同一性混乱・ライフスタイルの変化・意志決定場面などが挙げられている。このうち同一性混乱は、従来より青年心理学で自己発達の問題と結び付けて論議されることが多い状況である。発達心理における青年期研究では、青年期は同一性混乱の時期とされ、ここで青年は自己を再構成すると論じられている。この同一性混乱の場面は、自己概念が不安定で変動している場面と考えることができるが、同時に、大人としての自己に直面し、将来について意志決定を必要としている状況でもある。このため同一性混乱状況にある個人は、自己知識が非一貫的で矛盾していると意識したり、社会的行動を起こすには知識が十分ではないとの意識をもつと推測される。従って、自己認識欲求のモデルからは、同一性混乱から自己概念不明確感が生じ、自己認識欲求喚起に結び付くと予測される。本調査では同一性混乱を砂田（1979）の尺度を用いて測定し、自己知識の非一貫性・矛盾の意識との関連を検討することを第2の目的とする。

以上のような問題をふまえ、本調査で検証する仮説をまとめると次のようになる。まず、同一性混乱が自己概念変動性の意識に結び付き、自己認識欲求を喚起させる。一方、自己知識の矛盾は、自己認識欲求と関連しない。

以上の仮説をFigure 2-2-1に対応させ図示したものを、Figure 2-2-2 に示す。

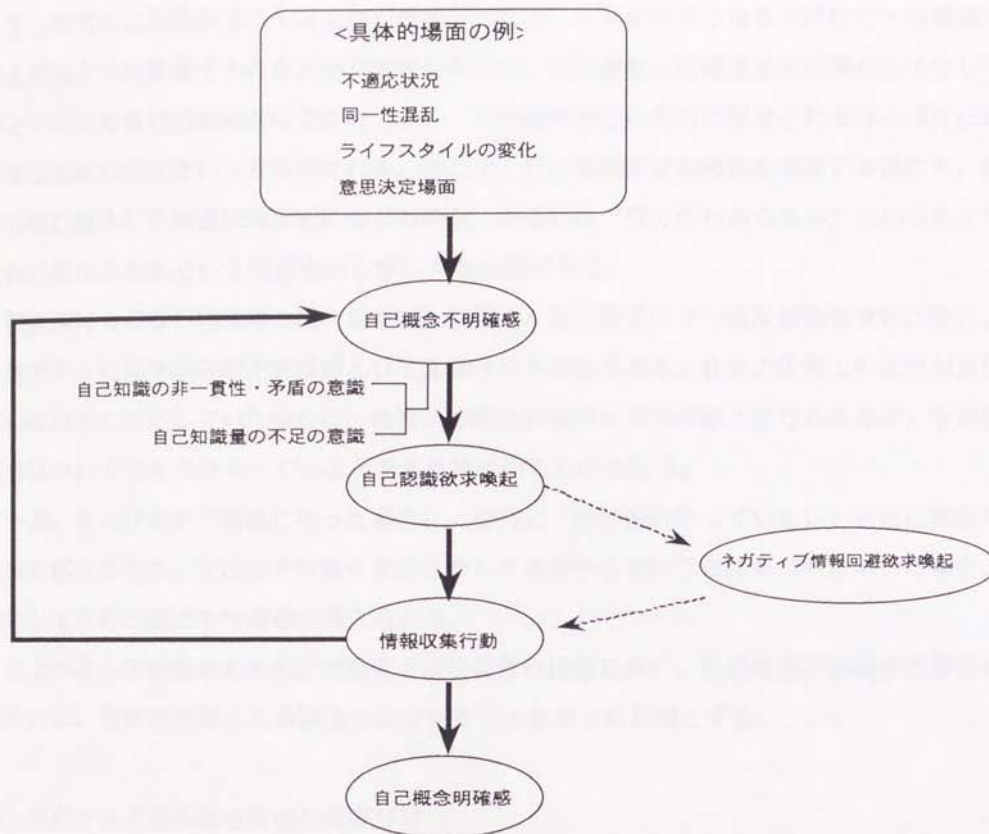


Figure 2-2-1 自己認識欲求の仮説モデル
(第1章の結果により修正されたもの)

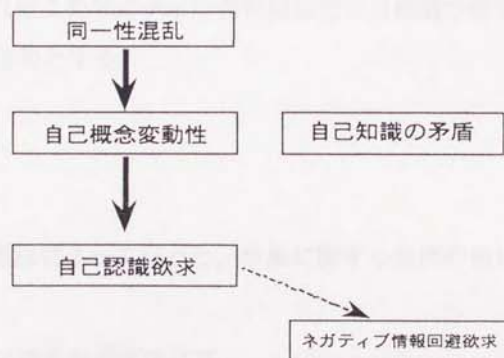


Figure 2-2-2 本調査の作業仮説

2. 自己概念の不明確感

第1章で自己認識欲求の1次元性が確認されたが、これが背景となる自己概念不明確感の構造とどのように関連するのかという問題が生じた。不明確が自己概念全体に関わって生じやすいとするなら自己認識欲求は全体的となり、不明確が特定の側面に限定されるならば自己認識欲求も側面に限定されると推測される。そこで、自己認識欲求の構造を確認する為にも、青年期の自己概念不明確感は側面別に生じるのか、あるいは「自分がわからない」といったように全体に生じるのかという問題を明らかにする必要がある。

側面別に生じる不明確感とは、例えば、外部から自己概念に不一致な情報を受けた場合、不一致であった部分のみが不明確感として意識される状況である。自分の仕事上の能力が自覚していた以上に不足していた場合に、仕事上の能力評価のみが不明確と感ぜられるが、その他の部分についてはよく分かっていると考える場合がこれにあたる。

一方、能力評価が不明確になった場合に、漠然と「自分がわかっていない」と自己概念の不明確を感じるとか、自己のその他の部分についても分からないことに気づくといった場合、全体としての自己概念不明確感と考えられる。

以上のような問題をふまえ、本調査では変動性の指標を用い、自己概念不明確感の構造を明らかにし、自己認識欲求との関連を検討することを第3の目的とする。

3. ネガティブ情報回避欲求の位置づけ

第1章では、自己認識欲求の構造分析の際に、自己に都合のよい情報のみを取り入れようとする欲求としてネガティブ情報回避欲求が提出されている。この欲求は、自己認識欲求の喚起をもたらす状況のうち特定の場合に喚起されると推測される。ネガティブ情報回避欲求と自己認識欲求の関連仮説をFigure 2-2-2に図示した。

本調査では、第1章で示唆されたこのネガティブ情報回避欲求の位置づけが妥当なものか否かを再度確認することを第4の目的とする。

第2節 方法

1. 質問紙構成 本調査は質問紙法によって行った。年齢に関する質問の他に、以下の項目について回答を求めた。

(1) 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度

上瀬(1992a) (第5章で解説する)の自己認識欲求尺度13項目、およびネガティブ情報回避

欲求尺度8項目を使用した。得点化は上瀬（1992a）と同様の5件法で行った。

（2）自己概念不明確感の測定

本調査では自己概念の不明確感について以下の3つの方法で測定した。

1. 認知された自己概念の変動性

本間・上瀬・布川（1993）の自己の認知側面測定項目をもとに、自己のそれぞれの側面が「どの程度変わりやすいか」を尋ねる34項目を作成し、「5.とても変わりやすい」から「1.全く変わらない」までの5段階評定で回答を求めた。

2. 自己知識の矛盾

長島・藤原・原野・斎藤・堀（1967）の大学生用自己概念測定尺度（Self-Differential Form A）の形容詞47対の中から23対を抜き出し、「あてはまるものはひとつもない」を加えた47個の形容詞を使用した。ただし選択の際には、当該研究で設定された因子ができるだけ散らばるように考慮した。

回答結果を得た後、対になっている項目のうち、両方ともに「あてはまる」とした場合に、自己知識に矛盾があるものと位置づけた。矛盾の個数の分布を算出したところ、矛盾する回答をひとつでも行ったものと、全く矛盾しなかったものとで分布が大きく二分された。そこで、知識内の矛盾がひとつでも存在した場合を「矛盾あり群」N=65、全く見られなかった場合を「矛盾なし群」N=36と2群に分けた。

（3）同一性混乱の程度

砂田（1979）の同一性混乱尺度を用い、回答は「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の3件法で求め、砂田（1979）と同様に得点化した。

（4）自己の各側面について知りたい程度

自己認識欲求尺度項目と、上記の「認知された自己概念の変動性」項目は尋ねる自己の側面が同一ではない。変動性の高い特定の側面が、特定の側面における自己認識欲求を喚起させるか否かを分析するために、自己概念変動性測定項目で尋ねた自己の34側面について知りたい程度を、「5.（知りたいに）あてはまる」から「1.あてはまらない」の5件法で尋ねた。

2. 調査対象者

首都圏公立大学および私立大学の学生102名（男子32名・女子70名）。

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の構造および尺度の妥当性検証の為に、男女別に分けて分析を行うことが望ましいが、被験者数が少なく男女の比率も大きく偏っていたため、本章の分析は男女を併せて行った。

3. 調査期日および実施方法

1993年1月、各大学の教室において授業終了後、質問紙による集団実施法で行った。

第3節 結果

1. 自己概念変動性の構造

自己概念の変動性を尋ねる34項目について回答を因子分析（主成分分解・Varimax回転）した結果、7因子が抽出された（Table2-2-1）。各因子に負荷量の高い項目から各因子は「対異性能力」「個性的生き方」「社会的地位」「社交能力」「性格」「将来展望」「体力」と命名された。本間ら（1993）は、自己認知の側面として「対異性能力」「社交」「達成志向」「趣味」「やさしさ」「運動能力」「社会的背景」を提出している。本調査で抽出した因子は、これらの因子とほぼ対応している。また、第1章で参考とした山本ら（1982）の研究では自己認知の側面を「社交」「スポーツ能力」「知性」「優しさ」「性」「容貌」「生き方」「経済力」「趣味や特技」「まじめさ」「学校の評判」の11に分けている。この調査結果とも、本分析で抽出された因子はおおよそ対応している。この点から、自分についての考えが変わりやすく不明確であるか否かの認知の構造は、自己認知の構造に対応しているといえる。

この結果をもとに、各因子に負荷量の高い項目の回答を単純加算する方式で、各側面別の自己概念の変動性の程度を測定する尺度とした。またこれら全ての項目の得点を合計し、自己概念の全体的な変動性を測定する尺度とした。

各側面の測定尺度の相関は、Table 2-2-2 に示すようになった。各側面の相関は総じて有意であり、また全体の変動性とも高い相関係数を示していた。以上の結果から、自己概念の変動性は自己概念の側面に応じて認知されるが、各側面は独立とはいえず関連は強いことが示された。

Table 2-2-1 変動性項目の因子分析結果 (Varimax回転後の因子負荷量)

変数名	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6	因子 7
(2) 1. 適性	-0.188	0.472	0.082	0.318	0.339	-0.195	-0.251
(5) 2. 性格	-0.049	-0.007	-0.012	-0.193	0.618	-0.148	-0.275
(7) 3. 体力・スポーツ能力	-0.184	0.056	-0.278	0.071	-0.136	-0.094	-0.592
(5) 4. 短所・長所	-0.219	0.308	-0.035	-0.153	0.415	-0.149	-0.348
(5) 5. 意志の強さ	-0.138	0.033	-0.145	-0.343	0.587	-0.168	0.148
6. 個性	-0.235	0.452	0.135	-0.122	0.556	-0.061	-0.047
7. 他者からどう見られるか	-0.197	0.092	0.277	-0.022	0.333	-0.262	0.015
(6) 8. 本当にしたいこと	0.001	0.070	-0.103	-0.126	0.073	-0.827	0.057
(6) 9. 可能性	-0.230	0.053	0.136	-0.097	0.259	-0.687	-0.004
(1) 10. 異性にもてるか	-0.718	0.046	0.123	-0.149	0.104	-0.134	-0.068
(1) 11. 異性をひきつける容姿か	-0.839	0.030	-0.062	0.101	-0.019	-0.109	-0.054
(1) 12. 女(男)らしい魅力あるか	-0.765	-0.009	-0.120	-0.040	0.247	-0.018	-0.045
(1) 13. 恋愛経験豊富か	-0.646	0.180	-0.158	-0.170	-0.135	-0.138	-0.064
(1) 14. 目鼻立ちすっきりか	-0.679	-0.056	-0.237	-0.060	-0.017	0.261	0.089
15. 流行に敏感な程度	-0.258	0.412	-0.244	-0.464	-0.365	-0.229	0.044
(4) 16. 積極的か	-0.095	0.143	-0.026	-0.782	0.190	-0.100	-0.080
(4) 17. 交際範囲の広さ	-0.104	0.026	-0.191	-0.686	0.009	-0.257	-0.159
(4) 18. 陽気か	-0.024	0.152	-0.026	-0.757	0.077	0.005	-0.065
(4) 19. バイタリティの程度	0.123	0.144	-0.014	-0.659	0.298	-0.044	-0.081
(6) 20. 将来設計のしっかりさ	-0.121	0.174	0.020	-0.132	-0.163	-0.481	-0.322
(2) 21. 幅広い教養があるか	-0.321	0.683	0.074	0.012	0.125	0.071	-0.211
(2) 22. 充実した趣味があるか	-0.052	0.715	-0.138	-0.283	0.059	0.116	-0.047
(2) 23. 熱中できる趣味は何か	0.065	0.791	-0.106	-0.138	-0.034	-0.095	-0.149
(2) 24. 自分なりの生き方か	0.117	0.532	-0.129	-0.171	0.280	-0.389	0.183
(2) 25. 個性的な生き方か	0.159	0.636	-0.037	-0.115	0.261	-0.304	0.140
(5) 26. 誠実な人間か	-0.022	0.233	-0.129	-0.234	0.570	0.030	-0.185
(5) 27. 思いやりの程度	-0.085	0.096	-0.202	-0.160	0.511	-0.105	0.241
(5) 28. 人の気持ちわかってるか	0.088	0.266	-0.232	0.005	0.544	-0.273	0.132
(3) 29. 得意なスポーツは何か	-0.279	-0.055	-0.435	-0.149	-0.154	0.008	-0.072
(7) 30. 丈夫さの程度	-0.029	0.164	-0.274	-0.278	0.056	0.074	-0.592
(7) 31. 体力の程度	0.006	0.107	-0.355	-0.213	0.121	0.104	-0.699
(3) 32. 家庭が裕福か	-0.013	0.038	-0.813	-0.193	0.026	-0.089	-0.253
(3) 33. 親の社会的地位	-0.129	0.114	-0.858	0.002	0.001	0.070	0.010
(3) 34. 家柄の良さ	-0.066	0.007	-0.858	-0.002	0.114	-0.042	-0.139
因子の寄与率 (%)	9.847	9.786	9.209	9.169	8.851	6.514	5.782

(注) 7 因子の累積寄与率は、59.2%であった。

項目についての番号は、その数字の因子を測定する尺度項目として使用したことを示す。

Table 2-2-2 変動性各側面の相関

変数名	対異性	趣味	地位	社交	性格	将来	体力	変動性
対異性能力	-----	0.13	0.24*	0.14	0.20*	0.20*	0.20*	0.50***
趣味・生き方	(101) -----	-----	0.12	0.33***	0.48***	0.34***	0.24*	0.70***
社会的地位	(101) (101) -----	(101) -----	-----	0.22*	0.20*	0.06	0.46***	0.48***
社交能力	(101) (101) (102) -----	(101) (101) (102) -----	(102) -----	-----	0.45***	0.28**	0.29**	0.66***
性格	(101) (101) (102) (102) -----	(101) (101) (102) (102) -----	(102) (102) -----	-----	0.33***	0.23*	0.75***	
将来展望	(101) (101) (102) (102) (102) -----	(101) (101) (102) (102) (102) -----	(102) (102) (102) -----	(102) (102) -----	-----	0.13	0.53***	
体力	(101) (101) (102) (102) (102) (102) -----	(101) (101) (102) (102) (102) (102) -----	(102) (102) (102) (102) -----	(102) (102) (102) -----	(102) (102) -----	-----	0.54***	
変動性合計	(101) (101) (101) (101) (101) (101) (101) -----	(101) (101) (101) (101) (101) (101) (101) -----	(101) (101) (101) (101) (101) (101) (101) -----	(101) (101) (101) (101) (101) (101) (101) -----	(101) (101) (101) (101) (101) (101) (101) -----	(101) (101) (101) (101) (101) (101) (101) -----	(101) (101) (101) (101) (101) (101) (101) -----	-----

(注) ***P<.001 **P<.01 *P<.05

()内はNを示している。

2. 項目別に見た、変動性と知りたい程度

本調査では、変動性について尋ねた34の項目について、それぞれの側面をどの程度知りたいかを尋ねている。

各側面の変動性得点平均値と自己認識欲求平均値を同時にプロットしたところ、Figure 2-2-3 に示すようになった。

分布をみると変動性の得点の高い項目ほど知りたい程度も高い。この結果から、側面にかかわらず変動性が高い場合には、その側面についてもっと知りたいする欲求が強くなることが示唆されている。

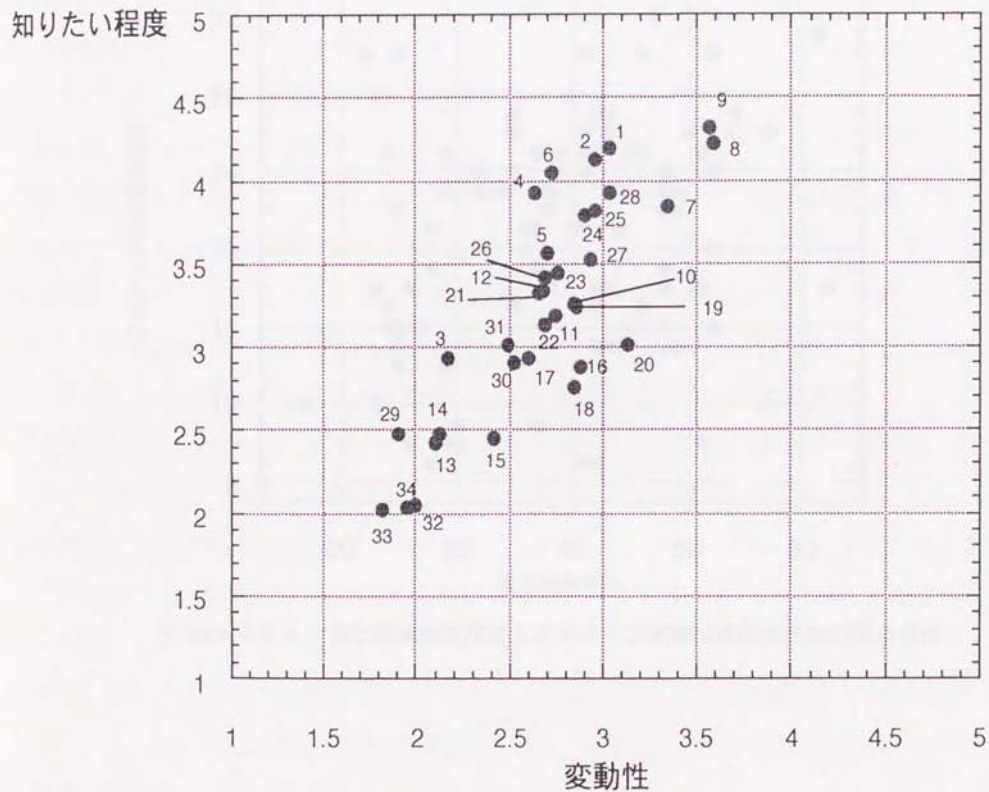


Figure 2-2-3 側面別の変動性と知りたい程度

注 いずれの尺度得点も、1~5点に分布する。
番号は、Table 2-2-1の項目番号に対応している。

3. 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と、他の変数の関連

(1) 自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の関連

自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の尺度得点の相関は $r=0.23$ ($P<.05$)であった。また、両得点の分布を合わせて図示したのが、Figure 2-2-4である。ここにみられる弱い正の相関は第1章の結果と同様である。ただし分布の形は第1章の結果と類似しているものの、ネガティブ情報回避欲求が高く自己認識欲求が低い回答者も少数だが存在している。

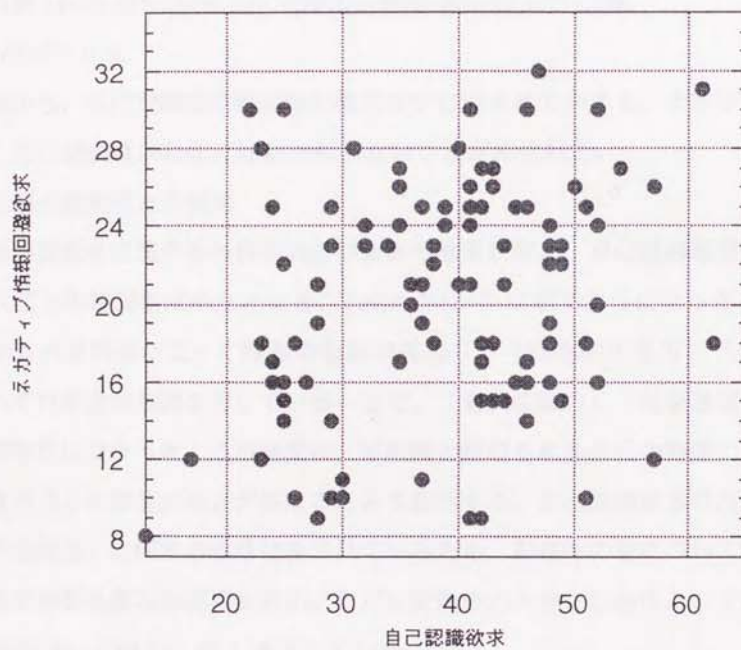


Figure 2-2-4 自己認識欲求尺度とネガティブ情報回避欲求尺度の得点分布

(2) 自己知識の矛盾との関連

自己知識の矛盾の有無に基づく2群間で、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の尺度得点の差の検定を行った。その結果、いずれの尺度得点についても2群間の差はみられなかった。

・自己認識欲求

矛盾あり群 M=37.9(S.D.=9.92) 矛盾なし群 M=39.9(S.D.=10.25)

t=0.94 df=99 n.s.

・ネガティブ情報回避欲求

矛盾あり群 M=10.4(S.D.=9.12) 矛盾なし群 M=10.7(S.D.=5.38)

t=0.25 df=99 n.s.

この結果から、自己知識の矛盾が自己概念の中に含まれていても、それが意識されていない場合には、自己認識欲求喚起には結び付かないことが示された。

(3) 自己概念変動性との関連

自己概念の変動性に関する各側面および全体の測定尺度と、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度との相関を求めたところ、Table 2-2-3 に示すようになった。これを見ると、変動性の示される側面によって関連の程度が異なり、「個性的生き方」「性格」「社会的地位」がそれぞれ有意な相関を示している一方で、「対異性能力」「将来展望」といった側面については関連性は低かった。この結果は、不明確と感じられる自己の側面によって、自己認識欲求の尺度得点との関連の強さが異なることを意味する。自己認識欲求の尺度項目には、「対異性」「将来展望」に関する項目は含まれているため、関連性の差については、各側面がもつ意味を含めて検討を重ねる必要がある。ただし変動性の大きさは全体としては、自己認識欲求と有意な相関 ($r=0.30$ $P<.01$) を示している。

(4) 同一性混乱尺度との関連

同一性混乱尺度と自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との相関は、Table 2-2-3 に示すようになった。その結果、自己認識欲求は、同一性混乱尺度と有意ではないが正の相関の傾向を示している。

Table 2-2-3

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と各尺度との相関

	自己認識欲求	ネガティブ情報回避欲求
対異性能力	0.04 (101)	0.06 (101)
個性的生き方	0.29** (101)	0.07 (101)
社会的地位	0.27** (102)	0.19 (102)
社交能力	0.18 (102)	0.02 (102)
性格	0.25* (102)	0.03 (102)
将来展望	0.07 (102)	-0.06 (102)
体力	0.10 (102)	0.08 (102)
変動性合計	0.31** (101)	0.10 (101)
同一性混乱尺度	0.18* (99)	-0.02 (99)

** P< .01 * P< .05

4. 各変数の関連

Figure 2-2-2 の仮説を検証するために、パス解析を行ったところ、Table 2-2-4 に示す結果となった。これを図示したのがFigure 2-2-5 である。

Table 2-2-4 重回帰分析の結果 (標準偏回帰係数)

N=97

基準変数				
説明変数	ネガティブ情報回避欲求	自己認識欲求	変動性	自己知識の矛盾
自己認識欲求	0.20			
変動性	0.05	0.28**		0.10
矛盾の有無	0.01	-0.11	0.09	
同一性混乱	-0.06	0.10	0.28**	-0.01
重相関係数	0.22	0.33*	0.30*	0.09

注) 自己知識の矛盾は、「矛盾あり」を2点、「矛盾なし」を1点として得点化した。

** P< .01 * P< .05

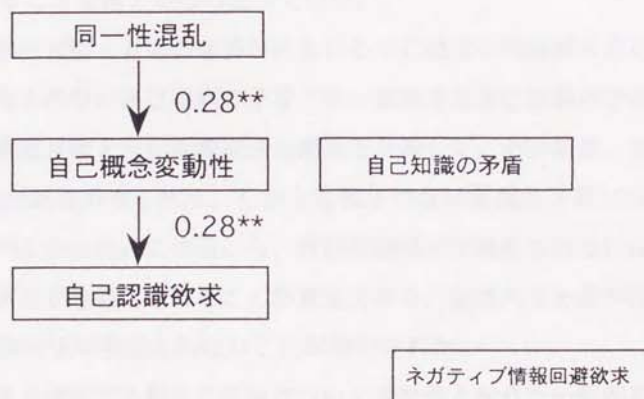


Figure 2-2-5 各変数の関連(数値はパス係数)

注)標準偏回帰係数の検定の結果、有意なもののみを図に示した。

** P< .01

自己認識欲求には、自己概念変動性が有意なパスを示し、さらに自己概念変動性には同一性混乱が有意なパスを示した。この流れは、Figure 2-2-2 に示すものと一致しており、同一性混乱から生じる自己概念不明確感が自己認識欲求を喚起するとのモデルの妥当性が検証されたと考えられる。同一性混乱が、直接自己認識欲求には関連しない点から、同一性混乱は自己概念の不明確さを意識化する過程をへて、はじめて自己認識欲求喚起に結びつくものと位置づけられる。

逆に、自己知識の矛盾の有無は自己概念変動性や自己認識欲求とは有意なパスを示していない。この結果は、自己認識欲求は自己知識の非一貫性を意識することによってのみ喚起されることを、改めて示唆したものと考えられる。

一方、ネガティブ情報回避欲求はいずれの変数とも、有意な関連を示していない。

第4節 考察

1. 自己概念の不明確感と自己認識欲求喚起

本調査では、自己知識の非一貫性・矛盾の意識から生じる自己概念不明確感が自己認識欲求を喚起させるとの仮説を検証することを第1の目的としていた。

その目的に従い、自己知識の非一貫性・矛盾の意識から生じる自己概念不明確感を自己概念変動性尺度を用いて、また意識化されない自己知識の矛盾・非一貫性を各自己知識の矛盾の程度を用いて測定した。そして両指標尺度と自己認識欲求の関連を分析した。その結果、自己概念変動性は自己認識欲求と有意な関連がみられた。しかし意識されない知識の矛盾については、自己認識欲求と関連がみられなかった。この点から、自己認識欲求が喚起されるには、あくまでも自己概念の矛盾・非一貫性が意識化されることが重要であり、知識内で矛盾が存在していても気付かなければ自己認識欲求は喚起されないことが確認された。

本調査ではこの他に、自己概念を構成する個々の知識について変動性と知りたい程度を測定し、その関連についても検討を行った。解析の結果、総じて変動性の高い部分ほど、その内容をもっと知りたいとする傾向がみられた。

以上の結果より、自己概念の不明確感が自己認識欲求を喚起するという仮説の妥当性が示唆されたと考えられる。

また、本調査の第2の目的は、同一性混乱と、自己知識の矛盾・非一貫性の意識との関連を検討することであった。解析の結果、同一性混乱は、自己概念変動性を介して自己認識欲求に

結びつくことが示された。この点から、Figure 2-2-2に示す「同一性混乱から自己概念変動性の意識が生じ、自己認識欲求喚起に結び付く」モデルの妥当性が示された。青年期に自己への関心が高まることは、これまで多くの研究が指摘してきたことである。しかしながら、自己認識欲求のモデルにあてはめて再確認することによって、自己が不明確であると感じなければ自己への探求には結び付かないということを主張できる。

2. 変動性の構造と自己認識欲求喚起との関連

本調査の第3の目的は、自己概念不明確感の構造を明らかにすることにあつた。本調査では自己概念不明確感の指標のひとつとして自己概念変動性を取り上げ、その構造を分析した。その結果、自己概念の変動性は、自己概念の側面に従って認知されるが、各側面の関連は強かつた。またいずれの側面の変動性得点とも、変動性全体の尺度得点と高い相関を示していた。以上の点から、自己に対する評価や考えの変わりやすさは、全体として変わりやすいか、変わりにくいかという1次元的に捉えることが可能と推測された。

ただし、変動性を個々の知識別にみると変動性の得点にはばらつきがみられ、変動性が低い知識については知りたい程度は低くなっている。この点から、特定の知識に不明確感が限定されるが自己認識欲求も特定の知識のみを知りたいという形で喚起されると推測される。

3. ネガティブ情報回避欲求の位置づけ

本調査の第4の目的は、Figure 2-2-2に示すネガティブ情報回避欲求の位置づけを確認することにあつた。

分析の結果、第1章と同様に、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求との間には、弱いが有意な相関がみられた。ネガティブ情報回避欲求が自己認識欲求喚起に伴うものということが、この点から推測される。しかしながら、ネガティブ情報回避欲求を基準変数、その他の要因を説明変数としてパス解析を行ったところ、有意なパスを示すものはみられなかった。これは第1章で考察したように、自己認識欲求喚起によってネガティブ情報回避欲求が生じるのは特定の状況に限定されることに原因があると考えられる。

4. 自己認識欲求の仮説モデルとの対応

本調査の結果明らかになったことを自己認識欲求の仮説モデルに対応させると次のようになる。まず、自己概念不明確感を喚起する背景のひとつとして、同一性混乱のあることが確認された。さらに自己知識の非一貫正・矛盾が意識されることによって自己認識欲求が喚起される

ことが確認された。一方、自己知識感に矛盾があったとしても、それが意識化されない場合には、自己認識欲求は喚起されないことが示された。

さらに、自己認識欲求喚起とネガティブ情報回避欲求の間には低いが正の相関がみられ、自己認識欲求喚起に伴ってネガティブ情報回避欲求が喚起されることが示唆された。

5. 本調査の問題点と他章との関連

自己認識欲求喚起に関する仮説では、自己概念不明確感は自己知識の矛盾・非一貫性の意識化と同時に自己知識の不足によって生じるとされている。本調査では、このうち自己知識の矛盾・非一貫性のみを取り上げて検証を行ったが、12章では自己知識の不足に関する質問項目も含めて自己概念不明確感測定尺度を作成し、自己認識欲求との関連を検討する。また、第6章では、自己知識の不足感を実験場面で操作し、自己認識欲求喚起との関連を検討する。

また、本調査では調査対象者が少数であったことを考慮し男女差は検討していない。しかしモデルや自己認識欲求尺度の妥当性確認の為に、男女別に分析を行い男子でも構造が同じであるか否かを検討する必要も残されている。この点については次章（第3章）で扱う。

第3章 自己概念不明確感の背景と自己認識欲求喚起 1)

1) 本章は、「上瀬由美子・堀野緑 1995 『自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景 — 青年期を対象として—』 教育心理学研究, 43, 1-9.」を共同執筆者の許可を得て転載し、加筆したものである。

第1節 目的

1. 問題の所在

自己認識欲求は自己概念不明確感によって喚起すると仮説されている。この仮説については、第1章では日常生活の不適應感、第2章では自己概念変動性との関連分析から、妥当性が示されている。しかし第1章では不明確感は直接測定されておらず、第2章では自己概念変動性を自己知識の非一貫性・矛盾のひとつの形として使用した。この点から、自己概念不明確感を直接測定し、自己認識欲求との関連を検討する必要が残された。本章では質問紙法による調査を行い、自己概念不明確感と自己認識欲求の関連分析を行うことを第1の目的とする。

また第2章では、自己概念変動性の背景として同一性混乱が存在することが示唆された。本章では自己概念不明確感を直接測定した上で、同一性混乱との関連を再度確認することを第2の目的とする。

さらに、自己認識欲求はその喚起によって情報収集行動が生じると仮説されている。本章ではこの点を検証することを第3の目的とするが、この際情報収集行動のうち近年自己を知る手段として取り上げられることの多い“雑誌心理テスト”に注目し、これを使用する。本調査で扱う“雑誌心理テスト”は、雑誌等で掲載されている、いくつかの質問に回答することによって自分や他人に関する何らかの情報を得るという形態をとったテストを総称したものである。すなわち、心理学の分野で専門的に使用されている標準化されたテストではなく、いわば興味本位的に作成されたものが対象である。上瀬(1991)はこれが広く受け入れられる背景に、自分を知りたいという欲求(自己認識欲求)が関わっていることを推測している。そこで情報収集手段の例として、本調査ではこれを取り上げ自己認識欲求およびネガティブ情報回避欲求との関連を検討する。上瀬(1991)は、大学生女子を対象にした調査から、これら“雑誌心理テスト”の信憑性が必ずしも高く認知されているわけではないが、広く普及し、行動変容を促す要因の一つとなっていることを明らかにしている。この信憑性の低さは、“雑誌心理テスト”の普

及を解明する上で重要である。“雑誌心理テスト”の曖昧な表記は受け手の自己概念と一致しやすい傾向を生んでいるが(上瀬・堀野・関口,1989)、否定的な結果を提示してもその信憑性の低さから結果を否定・無視することも可能である。従ってネガティブ情報回避欲求の高い人も“雑誌心理テスト”には接近しやすいと推測される。

自己認識欲求のモデル (Figure 2-3-1) に本調査で取り上げる要因を対応させると、Figure

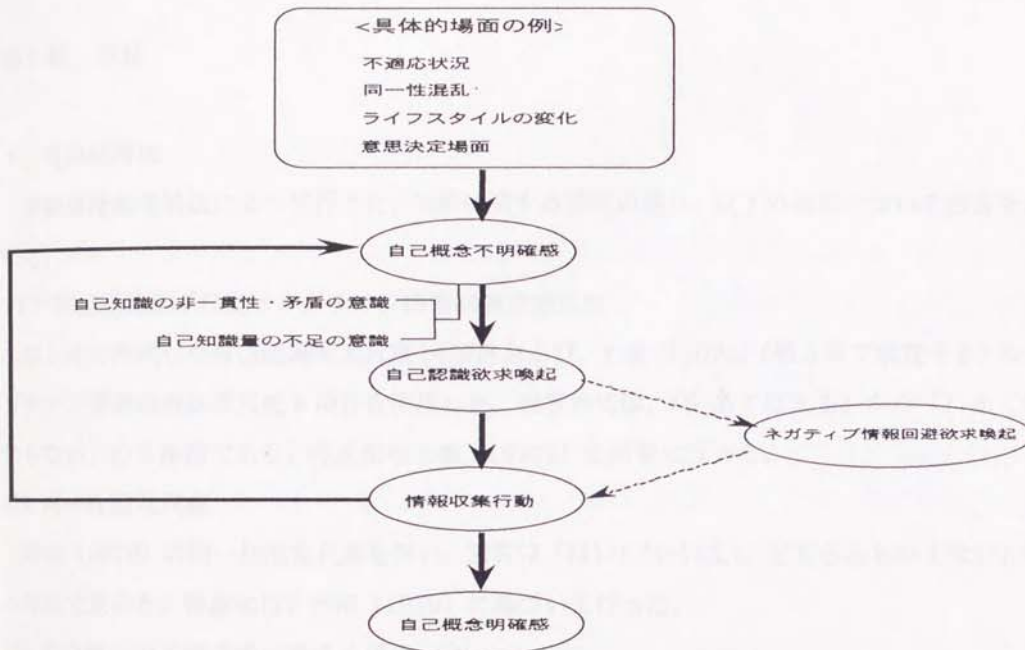


Figure 2-3-1 自己認識欲求の仮説モデル (第1章で修正されたもの)

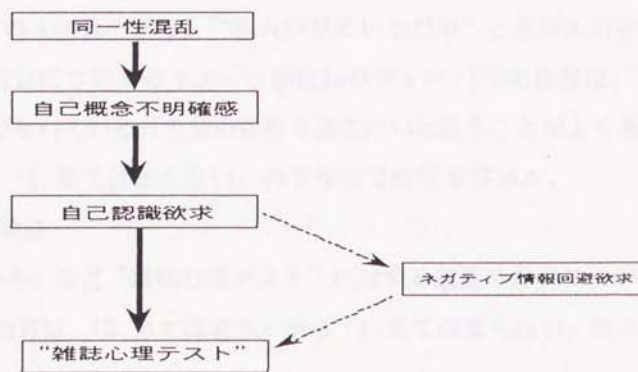


Figure 2-3-2 本調査の作業仮説

2-3-2に示すようになる。

さらに、本調査の第4の目的は、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の尺度の妥当性検証を行うことにある。両尺度とも大学生女子の回答をもとに作成しているため、同じ青年期でも男子に妥当であるか否かは不明である。そこで、本調査では男子大学生を回答者に加え、男女の自己認識欲求の構造および尺度得点の比較を行う。

第2節 方法

1. 質問紙構成

本調査は質問紙法によって行った。年齢に関する質問の他に、以下の項目について回答を求めた。

(1) 自己認識欲求尺度・ネガティブ情報回避欲求尺度

第1章で作成した自己認識欲求尺度14項目および、上瀬(1992a)(第5章で解説する)のネガティブ情報回避欲求尺度8項目を使用した。回答形式は、「5.あてはまる」から「1.あてはまらない」の5件法であり、得点化も上瀬(1992a)と同様に行った。

(2) 同一性混乱尺度

砂田(1979)の同一性混乱尺度を用い、回答は「はい」「いいえ」「どちらともいえない」の3件法で求めた。得点化は、砂田(1979)に基づいて行った。

(3) 自己概念の不明確感に関する項目

本調査では、自己概念不明確感について、再度自己知識の矛盾・非一貫性を取り上げて自己認識欲求との関連を検討する。この際、矛盾・非一貫性を測定するのに、側面別に細かに測定するのではなく、全体としての矛盾・非一貫性を意識しているか否かを測定することとした。独自に作成した項目は、以下の4項目である。「“他人が見ている自分”と本当の自分との間にズレを感じることもある」「自分についてのイメージが変わりやすい」「今の自分は、“こうありたい”という自分の姿とかけはなれている」「自分の性格を変えたいと思うことがよくある」。いずれも、「5.あてはまる」から「1.あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

(4) “雑誌心理テスト”に対する態度

「“雑誌心理テスト”が好きである」など“雑誌心理テスト”に対する態度や意見について尋ねる24項目を独自に作成した。回答は、「5.あてはまる」から「1.あてはまらない」の5件法で求めた。

2. 調査対象者

調査対象者は、首都圏の国立大学・私立大学・女子短期大学の学生655名（男子196名・女子457名・不明2名）。平均年齢は18.6歳である。

3. 調査期日および実施方法

1993年4月、各大学の教室において心理学概論の授業終了後、質問紙による集団実施法で行った。

第3節 結果

1. 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の尺度作成

第1章の自己認識欲求尺度は女子青年を対象として作成されている。本調査では、男子青年を対象として使用するにあたり、まず男女別に自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求に関する項目を併せて因子分析（主成分分解）を行った。男女とも、固有値の変化から2因子が抽出され、この2因子についてVarimax回転を行った。各因子の寄与率は、男子の第1因子36.8%、第2因子12.1%、女子の第1因子27.5%、第2因子13.1%である。

このうち第1因子は第1章で提示された自己認識欲求、第2因子はネガティブ情報回避欲求に対応するものであった。また、第1因子に負荷量の高い項目は、第1章で作成した自己認識欲求尺度項目に一致していた。以上の結果から、自己認識欲求尺度は男子青年に対しても女子と同様に使用することが可能であると考えられた。

そこで回答を単純加算する形式で尺度化を行った。自己認識欲求の得点は $M=45.7$ ($S.D.=11.34$)であった。これを男女別に算出したところ、男子は $M=44.2$ ($S.D.=12.95$)、女子は $M=46.3$ ($S.D.=10.53$)であった。男女の平均値の差を検定（Welchの検定）した結果、女子に得点の高い傾向がみられたが、有意ではなかった ($t=1.96$ $df=302.14$ $P<.1$)。

ネガティブ情報回避欲求の得点は、 $M=22.0$ ($S.D.=5.45$)であった。これを男女別に算出したところ、男子は $M=22.0$ ($S.D.=5.58$)、女子は $M=22.0$ ($S.D.=5.40$)であった。男女の平均値の差を検定した結果、有意差はみられなかった ($t=0.91$ $df=646$ $n.s.$)。

さらに、この2尺度の相関は、 $r=0.22$ ($P<.001$)となった。

この両尺度の得点分布は、Figure 2-3-3に示す通りである。右上がり、かつネガティブ情報回避欲求のみが高い回答者が少ない点で、この結果は第1章と対応している。

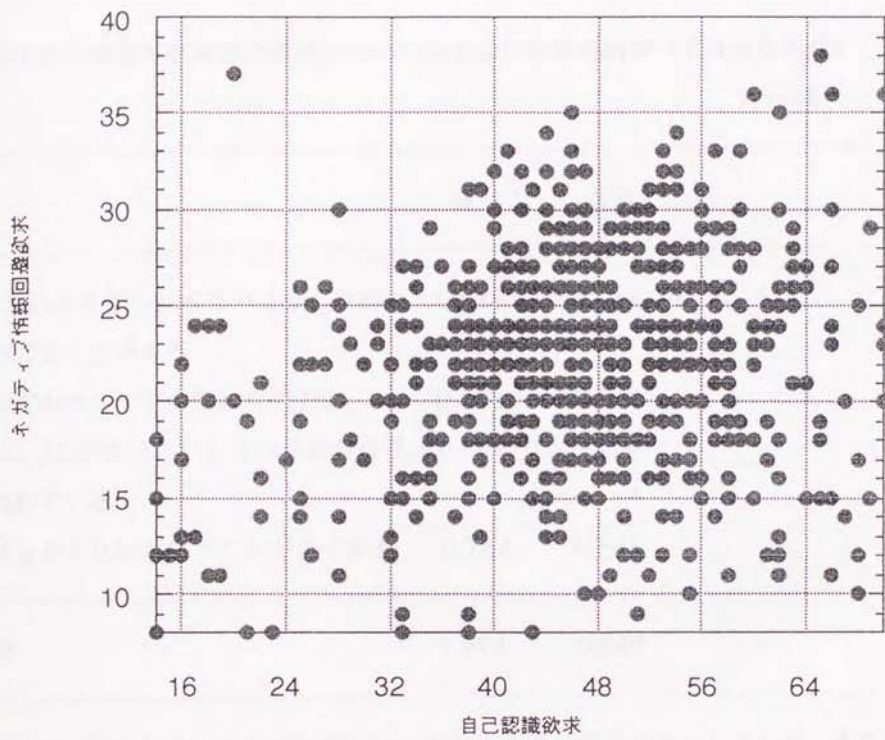


Figure 2-3-3

自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求尺度得点分布

2. 自己概念の不明確感の尺度作成

本調査では、自己概念の不明確感について独自に項目を作成している。尺度の内的一貫性を確認するために主成分分析を行った結果 Table 2-3-1 に示すようになった。

Table 2-3-1 自己概念不明確感の項目についての主成分分析の結果（主成分負荷量）

N=648

	成分1	成分2
「他人が見ている自分」と本当の自分との間にズレを感じることもある	0.619	-0.487
自分についてのイメージが変わりやすい	0.569	-0.613
今の自分は、「こうありたい」という自分の姿とかけはなれている	0.809	0.377
自分の性格を変えたいと思うことがよくある	0.783	0.441
固有値	1.974	0.949

これをみると、第1主成分に全ての項目が0.40以上の高い負荷量を示している。そこで、自己概念の不明確感はこの4項目の得点を単純加算する形式で尺度得点を算出した。尺度の α 係数は $\alpha=0.73$ である。

3. “雑誌心理テスト”への態度

“雑誌心理テスト”に対する態度項目について因子分析（主成分分解）し、固有値の変化から5因子を抽出しVarimax回転を行った。その結果、「自己理解機能認知」「他者理解機能認知」「娯楽機能認知」「信用度」「行動調整的利用」の5因子が示された。この5因子の累積寄与率は75.1%である。各因子に負荷量が高い項目をその側面を測定する項目とし、単純加算をもって尺度得点とした。さらに5つの尺度得点を合計し、“雑誌心理テスト”全体に対する接近度を示す得点（「接近度」）とした。本調査では仮説に沿って、この「接近度」のみを解析要因として使用する。

4. 各変数の関連

Figure 2-3-2 に示された仮説モデルの検討を行うために、パス解析を行ったところTable2-3-2 に示す結果が得られた。

Table 2-3-2 重回帰分析の結果 (標準偏回帰係数)

説明変数	基 準 変 数			
	自己概念不安定 (616)	自己認識欲求 (604)	ネガティブ情報回避 (604)	雑誌心理テスト接近 (598)
同一性混乱	0.67***	-0.01	0.19***	-0.03
自己概念不安定		0.31***	0.10	0.02
自己認識欲求			0.16***	0.37***
雑誌情報回避欲求				-0.03
重相関係数	0.67***	0.31***	0.35***	0.38***

() 内はN ***P< .001 **P< .01 *P< .05

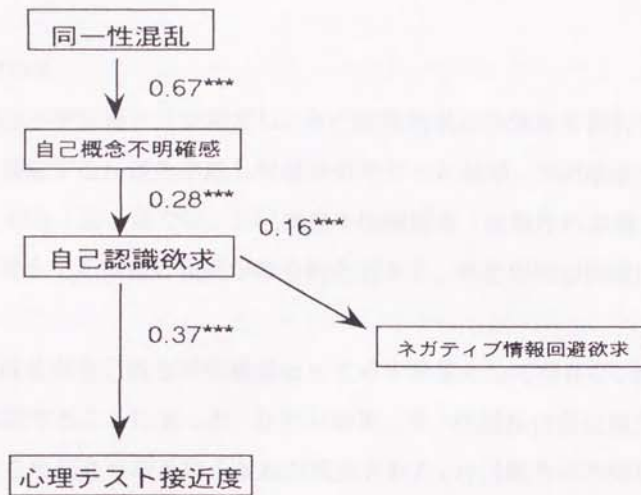


Figure 2-3-4 各変数の関連(数値はパス係数)

注 標準偏回帰係数の検定の結果、有意なもののみを図に示した
 *** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

この結果を Figure 2-3-2 に対応させて図示したのが Figure 2-3-4 である。

Figure 2-3-4 からわかるように、同一性混乱と自己概念不明確感との間 ($\beta = .67 P < .001$)、自己概念不明確感と自己認識欲求との間 ($\beta = .30 P < .001$) に、それぞれ有意なパスが示されている。同一性混乱と自己認識欲求との間には、直接パスはみられていない。この結果から、同一性混乱は、自己概念不明確感を媒介として自己認識欲求に影響することが明らかとなった。

また、“雑誌心理テスト”接近度は、自己認識欲求 ($\beta = .38 P < .001$) の間に有意なパスを示している。この結果は、自己認識欲求が情報収集行動を喚起させるという全体仮説を支持している。

一方、ネガティブ情報回避欲求については、“雑誌心理テスト”接近度とは有意な関連はみられず、自己認識欲求との間に有意なパスが示された。

第4節 考察

1. 自己認識欲求喚起の背景について

本調査の第1の目的は、自己概念不明確感を直接測定し、自己認識欲求との関連を検討することであった。自己概念不明確を測定する尺度を作成し関連分析を行った結果、不明確感から自己認識欲求に有意なパスが示された。第2章では、自己概念不明確感を「変動性の意識」に限定して測定したが、測定方法を変えても同様の傾向がみられた点から、両者の間の関連は明確なものと言える。

本調査の第2の目的は、同一性混乱が自己概念不明確感をもたらす背景として存在し、自己認識欲求喚起につながることを確認することであった。分析の結果、同一性混乱は自己概念不明確感を媒介として自己認識欲求を喚起させるという仮説が検証された。自己概念の不明確感が自己認識欲求の喚起要因であるとの結果は、第2章の結果と対応している。また、同一性混乱が自己概念不明確感の原因となるとの結果も、同様に第2章の結果と対応するものである。

以上の結果から、大学生を対象とした場合、同一性混乱が自己概念不明確感を媒介として自己認識欲求を喚起させるとの仮説モデルの妥当性が示されている。

2. 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動について

本調査の第3の目的として、自己認識欲求喚起が情報収集行動を生じるという仮説の確認があった。本調査では、近年注目されることの多い“雑誌心理テスト”を自己情報収集手段のひとつとして取り上げ、これに対する接近度と自己認識欲求およびネガティブ情報回避欲求との関連を検討した。その結果、自己認識欲求が“雑誌心理テスト”接近につながる事が確認された。自己認識欲求喚起に関するこの結果は、自己認識欲求喚起が自己情報収集行動を促すという、自己認識欲求のモデルの妥当性を示している。

ただし仮説モデルにおけるネガティブ情報回避欲求の位置については確認されなかった。解析の結果、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求と有意な相関を示し、自己認識欲求がネガティブ情報回避欲求に結び付くことは示された。しかし“雑誌心理テスト”とは直接パスは示されなかった。この点からネガティブ情報回避欲求は、自己評価を低下させないために、信憑性の低い手段を求めるものではないと推測される。逆に自己認識欲求喚起によって情報収集行動が行われる時、自己評価低下が予測される場合にのみ、情報収集行動に影響を与えると推測される。本調査で用いた“雑誌心理テスト”はその性質からこれを用いても特に自己評価の低

下を予期されない。このためネガティブ情報回避欲求と無関係であったことが考えられる。

3. 自己認識欲求の仮説モデルとの対応

本調査の結果明らかになったことを自己認識欲求の仮説モデルに対応させると次のようになる。まず、同一性混乱から自己概念不明確感が生じ、これによって自己認識欲求が喚起されるという一連の過程が確認された。さらに自己認識欲求が喚起された者は、“雑誌心理テスト”といった自己情報収集行動を積極的に起こすことが確認された。

一方、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求喚起に伴って生起することが示されたが、“雑誌心理テスト”とは関連がみられなかった。この点から、ネガティブ情報回避欲求が情報収集行動に影響を及ぼすのは、収集される情報によって自己評価を低下させるような場合に限定されることが推測された。

4. 本調査の問題点と他章との関連

本調査では自己概念不明確感について、独自に項目を作成し自己認識欲求との関連を検討した。第2章では自己概念不明確感のひとつの指標として自己概念の変動性について測定したが、本調査は不明確感を異なる尺度で測定し、検討したものである。本章の自己概念不明確感の項目は特に側面を限定することなく全体としての自己概念の不明確感を測定したものである。分析の結果、自己概念不明確感とは同一性混乱と有意なバスを示している。同一性混乱の状況とは、自己に関する様々な知識がお互いに統合されておらず、認知的にひとつのものとして形成されていない場合を示すと推測される。従って、同一性混乱の状況が自己概念不明確感の尺度と有意な関連をみせたことは、本章で用いた不明確感尺度の妥当性を示すものであろう。しかしながら、項目の内容は自己知識の非一貫性・矛盾から生じる自己概念不明確感に偏っており、自己知識の不足感は含まれていない。従って、自己知識の不足感から生じる自己概念不明確感も同様に自己認識欲求喚起に結び付くか否かは改めて検討する必要がある。この点は第6章で検討する。

また本章では、情報収集手段として“雑誌心理テスト”のみを取り上げたが、この心理テストによって得られる情報がどのような性質であるかがあいまいである。特にネガティブ情報回避欲求と情報収集行動との関連を明らかにする為には、情報収集によって得られる自己情報が自己評価の低下を予期させるようなものを設定して関連分析を行う必要がある。そこで次章(第4章)では、収集される情報の性質を明らかにするような形でモデル検証を行う。

第4章 自己認識欲求喚起による情報収集行動の実験的研究¹⁾

1) 本章は、「上瀬由美子・堀野緑 1991 『情報収集行動と自己認識欲求の関連について』 日本グループダイナミクス学会第39回大会発表論文集, 101-102.」を共同執筆者の許可を得て転載し、加筆したものである。

第1節 目的

1. 問題の所在

自己認識欲求は自己概念不明確感によって喚起され、それによって自己情報収集行動が生起すると仮説されている。第1章～第3章では質問紙法を用いて自己概念不明確感によって自己認識欲求が喚起されることを示してきた。ただし、前章までに測定された自己概念不明確感は、不適応感や同一性混乱との関連に示されるような、一定以上の時間継続している傾向であった。また第2章で示されたように自己概念全体の不明確という傾向が強い。しかし、自己認識欲求の仮説では、不明確感は特定の側面に限定される場合があると想定されている。従って特定の側面に限定された不明確感も、自己認識欲求喚起をもたらすことを検証する必要がある。そこで本章では、自己概念の特定の側面について不明確感をもたらす状況を実験場面として設定し、自己認識欲求喚起との関連を改めて検討することを第1の目的とする。

自己概念不明確感とは、自己知識の矛盾・非一貫性の意識化、および自己知識の不足の意識によって生じると仮説されている。本実験では、この状態を作るために被験者に偽の自己情報(パーソナリティテストの結果)を与えた。情報が自己概念と矛盾していた場合には自己概念不明確感が生起すると推測され、これによって自己認識欲求が喚起されると仮説される。

さらに、自己認識欲求はその喚起によって自己情報収集行動を生起させると仮説されている。第3章では自己認識欲求喚起と“雑誌心理テスト”への接近度との関連分析から、欲求喚起が情報収集行動に結び付くとの仮説を検証した。しかしながら、“心理テスト”との関連分析に用いた尺度は“接近”という態度を測定したものであり、実際の行動を測定したものではない。自己認識欲求モデルおよび第1章で作成された自己認識欲求尺度の妥当性を検証するためにも、尺度得点と実際の情報収集行動との関連を明らかにすることが求められる。そこで本実験では、自己認識欲求喚起が自己情報収集行動を生起するという仮説を、実験場面で改めて検証することを第2の目的とする。

自己認識欲求喚起によって生起する情報収集行動では、自己概念を明確化するための情報が

収集される。本実験では自己概念不明確感をもたらすような偽の自己情報を与えたが、その情報の性質についての情報を求める量を情報収集行動の指標の一つとした。非整合情報を受け取った場合の行動についてはこれまでいくつかの研究が行われている。例えば下斗米（1990）は、整合・不整合情報を受け取った後の対処行動を因子分析し、9つの因子を抽出している。このうちの第7因子として抽出されたのが「相手に理由を尋ねる」「第三者に評価の真偽を確かめる」といった項目に負荷量の高い「情報収集行動」の因子であった。これらの行動によって得られる情報は、事前に入取られた自己情報を解釈し自己概念に取り入れるか否かを決定するために用いられる。言い替えれば、自己概念不明確感を解消し自己認識欲求を低減させるための情報である。自己認識欲求のモデルにこれをあてはめ、本実験では「自己認識欲求が喚起されたものは、テストに関する情報を求める」との仮説を検証する。

一方、ネガティブ情報回避欲求は、前章までの結果から、自己認識欲求に伴って喚起され、自己情報収集行動によって自己評価の低下が予期される場合に自己評価維持のために情報収集行動を限定させるものと推測された。第3章では、“雑誌心理テスト”を用いてその影響を検討したが、この手段が自己評価提起が予期されないものであったために、情報収集行動との関連は明確にはならなかったと考察された。そこで本実験では、このネガティブ情報回避欲求の性質を明らかにするために、情報収集が行われた結果得られる情報が肯定的か否定的かを明確にした上でネガティブ情報回避欲求が与える影響について再度検討することを第3の目的とする。

この目的のため、本実験では対人関係に関するパーソナリティテストを実施し、偽の結果を被験者に提示し自己概念との整合性の程度を操作する。さらに提示された自己情報を肯定的にうけとめたか、否定的に受け止めたかを測定し分析に加えた。

2. 本実験の仮説

本実験では上記の目的の達成のため、以下の仮説を設定し、その検証を試みる。

仮説1：自己概念に不一致な情報を受け取ったものは、一致情報を受け取ったものよりも自己認識欲求尺度得点が高い。

仮説2：否定的結果を受け取ったものは、ネガティブ情報回避欲求を高く喚起する。

仮説3：自己認識欲求尺度得点の高いものはそうでないものよりも、テストに関する情報収集量が多い。

仮説4：ネガティブ情報回避欲求の高いものは、情報収集量が低い。

第2節 方法

本実験は質問紙操作による実験法によって行われた。

1. 調査時期・場所

実験は1991年2月に首都圏国立大学の大学校内の教室において行われた。

2. 被験者

被験者は首都圏国立大学1年生。男子39名、女子20名。

3. 実験手続き

(1) 実験の流れ

実験は Table 2-4-1 に示す形で行われた。

Table 2-4-1 実験の流れ

-
1. 人に好かれる程度測定テストの実施
 2. テスト結果の提示
 3. テスト結果についての質問紙の実施
 4. デブリーフィング
-

被験者は心理学の授業前に「人に好かれる程度」を測定すると教示され、偽の心理テストに回答する。約10分後、質問紙は回収される。授業終了後に実験者は再び来室し、被験者は実験者からテスト結果を手渡される。被験者はその結果を読んだ後に、テスト結果についての感想を尋ねる質問紙に回答する。約20分後に質問紙は回収されデブリーフィングが行われた。

実験操作にあたるのは、「2. テストの結果の提示」である。本実験では提示するテスト結果について、独立変数として提示結果の内容（肯定群・否定群）を操作した。

従属変数として用いるのは、「3. テスト結果についての質問紙実施」での「自己概念との一致度」「テストについて知りたい程度」「自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度得点」「結果の受け止め方（肯定的か否定的か）」である。

(2) 人に好かれる程度測定テスト

人に好かれる程度を測定すると説明された偽のテストは、本研究で独自に作成されたものである。これは、「EPPSテスト」から対人関係にふれた質問を20組選択し、強制選択形式で回答を求るものである（例：(A)「自分に都合が悪くなると、他の人を責めたくなる」(B)「責任や義務は避けたい」）。このテストは実験上作成したもので分析には用いていない。

(3) テスト結果の提示

被験者は結果を提示する際に、ランダムに肯定群・否定群に振り分けられる。肯定群の被験者には「あなたの点数は__点です。これはあなたが人に好かれていることを示しています。(肯定群 N=34)」（点数は93-97点）と書かれた結果を手渡す。逆に否定群の被験者には、「あなたの点数は__点です。これはあなたが人に好かれていないことを示しています。(否定群 N=25)」（点数は33-37点）と書かれたテスト結果を手渡す。

(4) テスト結果に関する質問紙

テスト結果に関する質問紙は、以下の4部分から構成されている。

1. 自己概念との整合性

「結果はあなたが考える自分の姿とどのくらい一致していたか」の質問について「5. 一致していた」から「1. 一致していない」までの5段階評定で回答を求めた。

2. テストについて知りたい情報

「このテストに関して以下のことをどのくらい知りたいか」との質問で、「どのような手続きで点数化したのか」「だれが作成したのか」など15項目（Table 2-4-2参照）について「5. 知りたい」から「1. 知りたくない」までの5段階評定で回答を求めた。

3. 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求に関する項目

上瀬(1992a)（第5章）の自己認識欲求尺度13項目およびネガティブ情報回避欲求尺度8項目を用い、5段階評定で回答を求めた。

4. 結果の受け止め方

「テストの結果として受け取ったのは、よい結果でしたか。それとも悪い結果でしたか。」の質問について、「5. よい結果だった」～「1. 悪い結果だった」の5段階評定で回答を求めた。

(5) デブリーフィング

上記の手続き終了後、実験者は被験者に対しデブリーフィングを行った。その結果実験手続きに疑問を示した被験者はいなかったため、59名全員を分析対象者とした。

第3節 結果

1. 結果の整合性と自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求

本実験の第1の仮説は、「自己概念に不一致な情報を受け取ったものは、一致情報を受け取ったものよりも自己認識欲求尺度得点が高い」というものであった。

この仮説を検証するために、受け取った結果が自分で考える自分の姿に「一致していた」「やや一致していた」と回答した者を「一致群 (N=25)」、 「あまり一致していない」「一致していない」と回答した者を「不一致群 (N=20)」とした。さらにこの2群間で、自己認識欲求尺度得点を比較した。その結果、一致群 $M=40.2$ (S.D.=11.56)、不一致群 $M=44.0$ (S.D.=13.4) であり、尺度得点の平均値に有意な差はみられなかった ($t=0.86$ $df=43$ n.s.)。

以上の点から、仮説1は支持されなかった。

さらに、2群間で、ネガティブ情報回避欲求に差がみられるかについても検討を行った。その結果尺度得点の平均値は、整合群 $M=13.1$ (S.D.=5.83)、不整合群 $M=14.7$ (S.D.=6.31) であり、有意な差はみられなかった ($t=0.87$ $df=43$ n.s.)。

2. 結果の肯定・否定と自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求

本実験の第2の仮説は、「否定的結果を受け取ったものは、ネガティブ情報回避欲求を高く喚起する」である。

この仮説検証のために、まず「テストの結果として受け取ったのは、よい結果でしたか。それとも悪い結果でしたか。」の質問について、「よい結果だった」「ややよい結果だった」としたものを肯定群 (N=33)、「悪い結果だった」「やや悪い結果だった」としたものを否定群 (N=25) とし、全体を2群に分けた。「どちらともいえない」としたものは群分けからは削除した。

この2群間で、自己認識欲求の得点に差がみられるかを検討した。その結果、肯定群 $M=41.1$ (S.D.=13.35)、否定群 $M=40.96$ (S.D.=11.34) であり、尺度得点の平均値に有意な差はみられなかった ($t=0.07$ $df=56$ n.s.)。

さらに、2群間で、ネガティブ情報回避欲求に差がみられるかについても検討を行った。その結果尺度得点の平均値は、肯定群 $M=28.8$ (S.D.=7.76)、否定群 $M=27.6$ (S.D.=6.37) であり、有意な差はみられなかった ($t=0.27$ $df=56$ n.s.)。

以上の結果により、仮説2は支持されなかった。

また、ネガティブ情報回避欲求について、自己認識欲求高低×肯定・否定の2要因の分散分析を行った結果、自己認識欲求については有意な主効果がみられた ($F(1,54)=12.10$ $P<.01$)。

しかし肯定・否定 ($F(1,54) = 0.03$ n.s.) については有意な主効果はみられず、交互作用 ($F(1,54) = 3.14$ $P < .1$) も傾向差がみられたものの有意ではなかった。

3. 情報収集行動の構造

次いでテストに関する15の情報について「知りたい」を5点「知りたくない」を1点としてし、群ごとに15項目それぞれの平均点を算出した。その結果、両群とも平均点の高かった項目は「どのような手続きで点数化したのか」「どのような手続きで作られたのか」などで、逆に平均点の低かったのは「分析は人がしているのかそれともコンピュータか」「何年くらい使われているのか」などであった。さらに各群ごとに15項目について主成分分析を行ったところ、Table 2-4-2 のようになった。

Table 2-4-2 主成分分析の結果 (主成分負荷量)

	成分 1	成分 2	成分 3
1 誰が作ったのか	0.720	-0.162	0.004
2 どのくらい一般に使われているか	0.768	0.106	-0.045
3 どのような手続きで作られたのか	0.812	0.017	-0.384
4 どのような手続きで点数化したのか	0.765	-0.393	-0.377
5 どのくらい信頼できるか	0.843	0.220	-0.163
6 科学的なテストかどうか	0.863	0.124	-0.162
7 どのような統計的手法で解析しているのか	0.781	0.041	-0.314
8 分析は人が計算しているのかそれともコンピュータか	0.758	0.179	0.410
9 世間での評価	0.809	0.069	0.350
10 全体の平均点	0.716	-0.496	0.375
11 点数のばらつき (分散)	0.712	-0.614	0.037
12 何の目的で使われるテストか	0.770	0.288	0.111
13 学校や企業で使われているのか	0.808	0.286	-0.104
14 他人と自分をどれだけ区別できるか	0.751	-0.112	0.127
15 何年くらい使われているか	0.836	0.275	0.201
固有値	9.175	1.170	0.955

これをみると、第1主成分の固有値が高く、1次元構造が示唆されている。

この分析を整合群・不整合群に分けて個別に分析したが、整合群では第1主成分の固有値が7.43、第2主成分の固有値が1.85、第3主成分の固有値が1.38、不整合群では第1主成分の固有値が11.68、第2主成分の固有値が1.97、第3主成分の固有値が1.57と推移した。両群とも、共に1次元構造であると解釈された。

以上のことから、収集される関連情報の内容は自己概念との整合性には大きく影響されず、内容は全体としてまとまって分化していないことが示唆された。

そこで15項目について「知りたい」を5点「知りたくない」を1点として、各項目の単純加算をもって情報収集量の指標とした。

4. 自己認識欲求と情報収集行動

本実験の第3の仮説は、「自己認識欲求が喚起されたものは、喚起されないものよりも情報収集行動を多く行う」であった。

自己認識欲求の高さで全体を2群（自己認識欲求高群 N=29 自己認識欲求低群 N=30）に分け、情報収集量に差がみられるかを検討した。その結果尺度得点の平均値は、自己認識欲求高群 M=63.6 (S.D.=9.38)、自己認識欲求低群 M=48.8 (S.D.=10.1) であり、自己認識欲求高群の方が有意に情報を多く求めることが示された ($t=3.74$ $df=57$ $P<.001$)。

この結果から、仮説3は支持された。

また、結果の肯定・否定×自己認識欲求の高低で情報収集量について2×2の分散分析を行った。その結果、自己認識欲求のみ有意な主効果がみられた ($F(1,54)=15.56$ $P<.001$ 自己認識欲求高群 M=63.6 自己認識欲求低群 M=47.9)。結果の肯定・否定 ($F(1,54)=1.01$ n.s. 肯定群 M=53.7 否定群 M=58.4) の主効果および、交互作用 ($F(1,54)=0.03$ n.s.) については有意ではなかった。

5. ネガティブ情報回避欲求と情報収集量

本実験の第4の仮説は「ネガティブ情報回避欲求の高いものは、情報収集量が低い」であった。

ネガティブ情報回避欲求の高さで全体を2群（ネガティブ高群 N=31 ネガティブ低群 N=28）に分け、情報収集量に差がみられるかを検討した。その結果尺度得点の平均値は、ネガティブ高群 M=51.9 (S.D.=18.69)、ネガティブ低群 M=60.7 (S.D.=13.12) であり、ネガティブ高群の

方が有意に情報を多く求めることが示された ($t=2.07$ $df=57$ $P<.05$)。

これは、ネガティブ情報回避欲求の高いものの方が情報を求めていることを示し、仮説とは逆の結果になっている。

また、結果の肯定・否定×ネガティブ情報回避欲求の高低で情報収集量について 2×2 の分散分析を行った。その結果、自己認識欲求 ($F(1,54)=2.04$ n.s. ネガティブ高群 $M=59.5$ ネガティブ低群 $M=53.1$)、結果の肯定・否定 ($F(1,54)=1.04$ n.s. 肯定群 $M=53.7$ 否定群 $M=58.4$)、および交互作用 ($F(1,54)=2.27$ n.s.) いずれについても有意な傾向はみられなかった。

5. 自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の関連

自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の尺度得点の相関は、 $r=0.35$ ($P<.01$ $N=59$) であった。

さらに、自己認識欲求の高低×ネガティブ情報回避欲求の高低で、情報収集量について2要因の分散分析を行った。その結果、自己認識欲求の有意な主効果がみられたが ($F(1,55)=10.55$ $P<.05$)、ネガティブ情報回避欲求の有意な主効果はみられず ($F(1,55)=0.00$ n.s.)、交互作用もみられなかった。この点からも、情報収集行動に直接影響を与えるのは、自己認識欲求であることが確認された。

第4節 考察

本実験では、自己認識欲求のモデルに基づき4つの仮説を設定しその検証を試みた。

1. 仮説1について

本実験では、「自己概念に不一致な情報を受け取ったものは、一致情報を受け取ったものよりも自己認識欲求尺度得点が高い」を第1の仮説とした。

被験者に偽のフィードバックを与え、その受け止め方から全体を、自己概念に一致した情報を受け取った整合群、不一致の情報を受け取った不整合群に二分した。両群の自己認識欲求尺度得点を比較した結果、有意な差はみられず、仮説1は支持されなかった。

仮説が支持されなかった理由として、自己認識欲求喚起を測定する尺度が不適切であったことが挙げられる。本実験では自己概念の不明確感を特定の側面にのみ限定して生じさせたが、自己認識欲求喚起を測定する尺度は自己概念の様々な側面を総合して全体としての自己認識欲求の強さを測定するものであった。第2章で指摘されたように、自己概念不明確感が特定の側面

に限定される時は、自己認識欲求との関連が低くなることが考えられる。本実験では対人関係という特定の側面にのみ不明確感が生じるように操作を行っている。特定の側面に限定して自己概念不明確感が生じた場合には、特定の側面に限定した自己認識欲求が喚起すると考えられ、その測定に際しては適切な測定尺度を用いる必要があると考えられる。この点をふまえ、第6章では特定の側面の自己認識欲求を測定し、再度仮説の検証を行う。

仮説1が支持されなかった理由として、次に考えられるのは不一致情報が自己認識欲求喚起の要因となる自己概念不明確感を生じさせなかったことが考えられる。自己認識欲求は自己概念不明確感によって喚起されると仮説されている。自己概念不明確感とは、自己知識の非一貫性・矛盾を意識化することで生じるとされているため、本実験では既存の自己知識と一致しない自己情報を提示する手続きをとった。しかし、自己知識と矛盾する情報をうけとって、それを自己知識の一部とせず排除することがある。これは、自己確証過程で示された方略のひとつである。この場合には、自己概念を不明確にさせることはなかったとも推測される。

本実験では、不一致情報を入手した被験者がどの程度自己概念の不明確感を感じたかを測定していないため、上記2つの理由のどちらが正確であるのかは不明である。第6章では不一致情報の他に、自己概念不明確感が生じたか否かを測定し、不明確感と自己認識欲求の関連を明らかにすることも検討課題とする。

2. 仮説2について

本実験では、仮説2として「否定的結果を受け取ったものは、ネガティブ情報回避欲求を高く喚起する」を設定した。分析の結果、結果の肯定・否定性によってネガティブ情報回避欲求尺度得点には有意な差はみられず、仮説は支持されなかった。また、自己認識欲求の高低×結果の肯定・否定で、ネガティブ情報回避欲求について2要因の分散分析を行った結果でも、自己認識欲求の主効果のみがみられ交互作用や結果の性質の主効果は見られなかった。

仮説が支持されなかった理由として次のことが考えられる。ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求が喚起され、かつ情報収集によって自己評価低下が予期される時に生じて情報収集行動に影響を与えると考えられている。本実験では否定的な結果を受け取ったとしても、自己確証過程の研究が明らかにしたように、情報を無視したり取り入れないことが可能であるため(下斗米,1990) 直接関連しなかったとも考察できる。

3. 仮説3について

本実験では、「自己認識欲求尺度得点の高いものはそうでないものよりも、テストに関する情

報収集量が多い。」を第3の仮説とした。

フィードバックを受けた後の自己認識欲求の高低で全体を二分し、結果に関するその他の情報をどの程度求めるかで、収集行動の量を比較した。その結果、自己認識欲求高群の方が情報を多く求めることが示され、仮説は支持された。

4. ネガティブ情報回避欲求と情報収集行動

本実験の第4の目的は、ネガティブ情報回避欲求と情報収集行動の関連について検討を行うことにあった。分析の結果、ネガティブ情報回避欲求の高いもののほうが、情報を多くもとめることが示され、仮説4は支持されなかった。

また、情報収集量について、自己認識欲求の高低とネガティブ情報回避欲求の高低の2要因の分散分析を行った結果、有意な主効果がみられたのは自己認識欲求のみで、ネガティブ情報回避欲求が情報収集行動に与える影響については明確にならなかった。

仮説4が支持されなかった大きな理由は、本実験操作によってネガティブ情報回避欲求が喚起されなかったことにあると推測される。すなわち仮説2に関する考察で述べたように、情報が収集されても自己評価を低下させる可能性が低いと判断され、ネガティブ情報回避欲求が喚起されなかったと推測される。

また、自己にとって都合の悪いフィードバックを得た場合、その時点でフィードバックを拒否し情報収集を行わない場合と、フィードバックを否定するために情報収集を行う場合の両方があることが推測されるが、本実験では、収集する情報の内容特に分類しなかったため、両者の差異が明確にならなかった。従って今後は、収集の意図が区別されるような形をとった上で情報収集量を測定し、再度ネガティブ情報回避欲求との関係を検討する必要がある。

5. 自己認識欲求の仮説モデルとの対応

自己認識欲求の仮説モデルでは、自己概念不明確感→自己認識欲求喚起→自己情報収集行動の生起という一連の流れを設定していた。このうち本実験では、自己認識欲求喚起が情報収集行動を生起することが実証された。

6. 本実験の問題点と他章との関連

本実験の結果、自己認識欲求喚起が情報収集行動を生起することは実証されたが、自己概念不明確感が自己認識欲求を喚起させるという点については確認することができなかった。この理由については、前述のように尺度の問題と、実験状況の問題がある。自己認識欲求尺度が、特

定の側面のみが不明確になった状況を測定するのに適していないならば、測定方法を検討して仮説の検証を行う必要がある。そこで第6章では本実験と類似の実験を行い、不明確感を生じた特定の側面のみを自己認識欲求を測定する項目を含めて、仮説検証を行う。

一方、自己概念の不明確感が適切に操作できなかつたのに、自己認識欲求の喚起に個人差がみられ、かつその差が情報収集行動にも影響を与えた。第1章～第4章でこの尺度と関連を示したのは、日常生活の不応感や同一性の混乱といった比較的永続的な特性であった。この点から、自己認識欲求を、比較的永続的な特性のひとつ、すなわち個人差として位置づけることが可能である。パーソナリティ特性としての自己認識欲求については、第9章で他のパーソナリティ尺度関連分析を行い、その性質を明らかにする。

また本章では自己認識欲求の喚起が情報収集行動を生起させるという仮説が実証されたが、この点についても実際のモデルとの対応については問題がある。最も重要な問題は、本実験で測定した行動が、テストに関する情報収集量であるという点である。情報収集行動の目的が自己概念明確化にあるとするならば、不明確になった自己知識の部分についての情報収集行動を測定するほうが望ましい。また、ネガティブ情報回避欲求の喚起や情報収集行動に及ぼす影響が明確ではなかつた理由にも、この点が関連している。つまり直接に自己に関する情報収集ではないために評価の低下は予期されず、情報収集行動を阻害することに結びつかなかつたとも考えられる。さらに本章では、収集される情報が自己評価を低下・維持のいずれの目的で行われるかが不明確であつたのも、本実験の問題のひとつである。このため、第5章・第6章では、収集される情報の内容を自己評価を低下させるものと明らかにしたうえで、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の喚起との関連を検討する。

第5章 自己認識欲求喚起と、心理テストへの接近に関する研究¹⁾

¹⁾本章は、「上瀬由美子 1992a 『自己認識欲求の構造と機能に関する研究—女子青年を対象として—』心理学研究, 63, 30-37.」に加筆したものである。

第1節 目的

本章の目的は、次の2点にある。

まず第1に、自己認識欲求およびネガティブ情報回避欲求が、自己情報収集行動に及ぼす影響を明確にすることである。

自己認識欲求の仮説では、自己認識欲求喚起によって自己情報の収集行動が生じるとしている。第3章および第4章では自己認識欲求が喚起が情報収集行動を生起させることが確認された。ただし収集される情報の性質が明確ではなかったため、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の関連の仕方が明らかにならなかった。そこで、本章では情報収集手段として“専門家の心理テスト”“ネガティブな心理テスト”“雑誌心理テスト”の3つを取り上げ、これら3手段と欲求との関係を質問紙法による調査を用いて検討する。ここでの“雑誌心理テスト”は、第3章で取り上げた“雑誌心理テスト”と同様のものを示している。

この3手段を取り上げたのは、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求が情報収集行動に与える影響をより明確にすることを目的としたからである。本調査では、当該手段を選択することによって自己評価の低下が予想される情報収集手段として“ネガティブな心理テスト”を、逆に低下が予想されないものとして“雑誌心理テスト”を、その中間として“専門家による心理テスト”を設定し、各欲求との関連を検討する。自己認識欲求の仮説モデル (Figure 2-5-1) に当てはめると、自己認識欲求が喚起された場合には、いずれの手段についてもそれを用いようとする傾向が高まる。ただし第3章の結果から、情報収集行動によって自己評価の低下が予想される場合にはネガティブ情報回避欲求が生起し、結果として情報収集行動は少なくなると推測される。本調査で取り上げる変数を、自己認識欲求仮説モデル (Figure 2-5-1) にあてはめたのが、Figure 2-5-2である。

本調査の第2の目的は、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と、パーソナリティ特性との関連を明らかにすることである。自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求ともに、状況によって喚起されるものと仮説されている。ただし第4章までの結果で、両欲求が比較的永続的な傾向をもつことが示唆されている。両欲求の性質を明らかにするために、他のパーソナリティ特性との関連を検討する必要がある。本調査では、当欲求に関連が深いと考えられる自尊

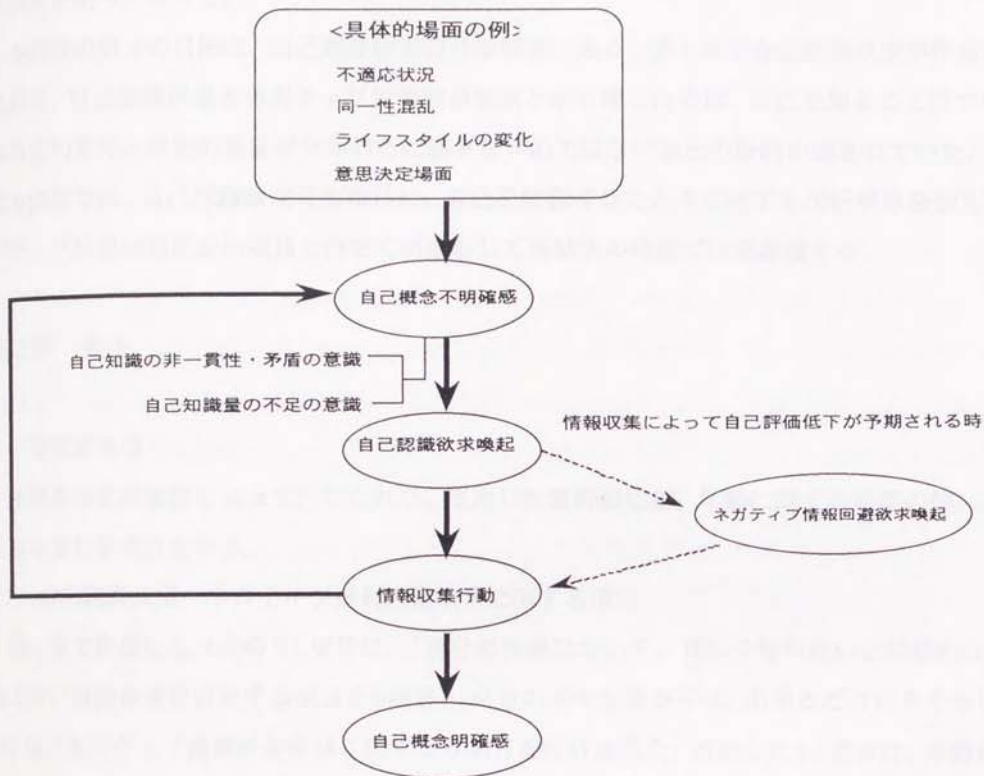


Figure 2-5-1 自己認識欲求の仮説モデル
(第1章で修正されたもの)

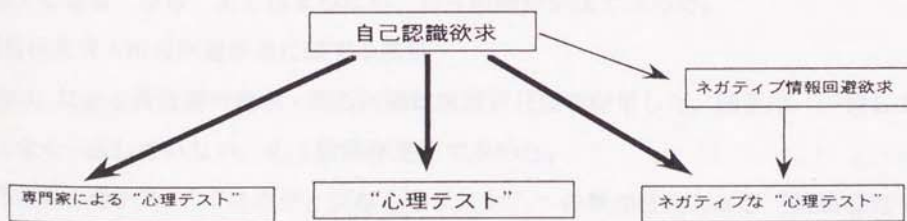


Figure 2-5-2 本調査の作業仮説

感情と、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求を取り上げ、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求との関連を明らかにする。

本調査の第3の目的は、自己認識欲求の尺度精錬にある。第1章で自己認識欲求が作成された際に、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求とが分離したのは、自己を知ることについての肯定的意見と否定的意見が分かれたに過ぎないのではないかとの疑問が残されていた。そこで本調査では、自己認識欲求尺度項目に、自己を認識することを否定する逆転項目を加え、ネガティブ情報回避欲求の項目と併せて再解析して両欲求の位置づけを確認する。

第2節 方法

1. 質問紙構成

本調査は質問紙法によって行なわれた。使用した質問紙には、年齢に関する質問の他、次の5つの項目群が含まれる。

(1) 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求に関する項目

第1章で作成した尺度の21項目に、「自分の性格について、詳しく知りたいとは思わない」など自己認識欲求を否定する項目を6項目、「自分のイヤな面からは、出来るだけ目をそらしたい」などネガティブ情報回避欲求に関する6項目を付け加えた。追加した12項目は、本調査で独自に作成されたものである。項目は合計33項目で、回答は「そう思う」から「全くそう思わない」の5段階評定法で求めた。

(2) 自尊感情に関する項目

Rosenberg, M. (1965) の Self Esteem Scale を安藤 (1987) が翻訳したものをを使用した。回答は“あてはまる”から“あてはまらない”の4段階評定法で求めた。

(3) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求に関する項目

菅原 (1986) による賞賛獲得欲求・拒否回避欲求測定尺度を使用した。回答は「一致している」から「全く一致していない」の5段階評定法で求めた。

(4) “専門家の心理テスト” “ネガティブな心理テスト” への参加意欲および“雑誌心理テスト” への“接近” の項目

“専門家の心理テスト” への参加意欲については「専門家の手による本格的な心理テストを受ける機会があったら、あなたは積極的に参加しますか」という質問に「ぜひ参加したい」から「絶対に参加したくない」までの4段階評定法で回答を求めた。また“ネガティブな心理テスト” については「その(専門家の行なう心理) テストがあなたの悪い面・劣っている面だけを、

特に見付け出すような内容であったら、あなたはそれに参加しますか”という質問に「ぜひ参加したい」から「絶対に参加したくない」までの4段階評定法で回答を求めた。“雑誌心理テスト”への“接近”については、別に行った質問紙調査から作成した“雑誌心理テスト”態度尺度の“接近尺度”を使用した。

“雑誌心理テスト”態度尺度”は以下の手づきによって作成された。“雑誌心理テスト”に関する29項目に対し主成分解を用いVarimax回転を行なう因子分析を行い、2つの因子を抽出した。この結果に基づき、第1因子に負荷量.40以上の8項目を“雑誌心理テスト”の“信頼”を測定する尺度項目（“雑誌心理テストは心理学の専門的知識に基づいて制作されている”など）とし、第2因子に負荷量.40以上の6項目を“雑誌心理テスト”の“接近”を測定する尺度項目（「買った雑誌に雑誌心理テストがついていたら、必ずやってみる」など）とした。尺度項目の評定値の単純加算をもって尺度得点とした。折半法によるSpearman-Brownの修正値を求めたところ信頼性係数は、“接近”尺度.92 (N=199) “信頼”尺度.94 (N=199)であった。

回答は「そう思う」から「全くそう思わない」の5段階評定法で求めた。

2. 調査対象者

都内私立大学の女子学生236名。回答に不備のあったものを抜き、残りの233名を有効回答者とした。平均年齢は18.9才であった。

3. 調査時期・方法

調査は1989年10月、大学校内の教室に於いて集合調査形式で行なわれた。授業終了後「これから、大学生の意識に関するアンケートを行う」と教示し、質問紙を配布した。質問紙は約20分後に回収された。

第3節 結果

1. 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の尺度の因子構造

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求に関する33項目に対し、因子分析（主成分解・Varimax回転）を行った。因子分析にあたっては、回答の「そう思う」を5点とし、以下4点から1点までの点数を回答に与えた。分析の結果、固有値1.0以上の基準を満たす2因子が抽出された。この2因子の寄与率は、第1因子11.5%、第2因子9.5%である。これをみると、第1因子は自己認識欲求の尺度項目およびその逆転項目に、第2因子は、ネガティブ情報回避欲求の項目に因子負荷量が高かった。自己認識欲求の逆転項目が第1因子に含まれたことから、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求は異なる性質のものであることが確認された。

この結果を基にし、尺度を構成する項目を精練するために、因子負荷量が .35以下のものを除き、残り 25 項目で再び因子分析を行った結果 Table 2-5-1 に示すようになった。

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の 2 因子が抽出されるという結果は、全項目を使用した時と同様の構造であると同時に、第 1 章で自己認識欲求項目について因子分析した時の結果とも一致する。

自己認識欲求に関する逆転項目は、自己認識欲求の構造にどのように位置づけられるのかを明らかにするために含まれたものである。先に述べたように、逆転項目は自己認識欲求因子の中に含まれ、ネガティブ情報回避欲求は単なる自己認識の否定とは異なることが確認された。Table 2-5-1 に示す結果も同様である。

そこで本調査では以下の分析に用いる自己認識欲求尺度項目として、第 1 因子に負荷量の高かった項目のうち、逆転項目を除いた 13 項目を用いた。第 1 章で作成した自己認識欲求尺度項目と比較すると「自分に合った生き方を教えて欲しい」が除かれている点が異なっているが、その他の項目は同様である。

またネガティブ情報回避欲求の尺度項目は、第 2 因子に負荷量の高かった 8 項目を使用した。これは、第 1 章で使用された 7 項目のうち 2 項目が削除され、新たに負荷量の高い 3 項目を加えられている。具体的には「他の人が、自分について言う事はマトハズレな事が多い」「自分について人の評価を聞くのは怖い」を削除し、「自分のイヤな面からは、出来るだけ目をそらしたい」「イヤな思いをしてまで、自分の姿を知ろうとは思わない」「自分を知るという事は、ある面では怖いことだ」を加えた。

これらの尺度の得点化は、各項目を単純加算する形式で行った。また、折半法による Spearman-Brown の修正値を求めたところ、信頼性係数は自己認識欲求尺度 0.97 (N=233)、ネガティブ情報回避欲求尺度 0.83 (N=233) であり、両尺度とも十分な信頼性を有することが確認された。

さらに、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の両尺度得点間の相関は $r=0.09$ (n.s.) となり、両尺度の相関的独立性が示されている。

Table 2-5-1

自己認識欲求に関する項目の因子分析 (Varimax 回転後の負荷量) N=224

項 目	第1因子	第2因子
○1 他の人と比べて、自分の知的能力は、 どのくらいあるのか知りたい	0.668	0.185
○2 客観的に見て、自分の容貌にはどの程度の 魅力があるのか知りたい	0.637	0.042
○3 自分の知識は、人に比べて多いのか、 少ないのか知りたい	0.624	0.010
○4 自分の家庭の経済的地位は、どのくらいにあるのか、 知りたい	0.593	0.090
○5 自分の社交的な能力が、どのくらいあるのか知りたい	0.584	0.014
○6 自分の性的魅力が、どのくらいあるのか知りたい	0.578	0.072
○7 自分の異性との付き合い方は、進んでいるのか 遅れているのか知りたい	0.545	-0.028
○8 自分は異性とうまくつき合っているのかどうか知りたい	0.545	-0.042
○9 自分の大学は、世間でどう評価されているのか、知りたい	0.533	0.087
○10 自分には、責任感があるのかを知りたい	0.501	-0.142
○11 自分が、どのくらい自分に対して厳しいのか、知りたい	0.450	0.065
○12 他人がどんな物にどのくらいお金を使っているのか 知りたい	0.407	0.245
○13 自分の出身高校の評判は、今どうなのかを知りたい	0.374	-0.242
14 自分がどれだけ思いやりがあるかについて、知りたくない	-0.460	0.110
15 自分の頭の回転の速さについては、あまり知りたくない	-0.465	0.126
16 自分の交際範囲が広いがどうかなんて、知りたくない	-0.515	0.132
17 自分の容貌にどの程度魅力があるかについては 知りたいとは思わない	-0.647	0.117
△18 自分に関する、良くないうわさは聞きたくない	-0.050	0.658
△19 自分のイヤな面からは、出来るだけ目をそらしたい	0.062	0.614
△20 自分について知りたくない部分がある	0.009	0.610
△21 イヤな思いをしてまで、自分の姿を知ろうとは思わない	0.032	0.550
△22 知らずに犯したあやまちは、知らせて欲しくない	0.052	0.486
△23 自分について、聞かなければよかったと思うことが、 たくさんある	-0.012	0.435
△24 自分を知るという事は、ある面では怖いことだ	-0.027	0.393
△25 自分についての悪口でも、 真実だったら出来るだけ聞きたいと思う	0.249	-0.565
寄与率	20.4%	9.8%

注) ○のついた項目は自己認識欲求尺度項目として、△のついた項目はネガティブ情報回避欲求尺度項目として使用したことを示している。

2. 自己認識欲求と情報収集手段との関係

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と3つの情報収集手段との相関を算出したところ、Table 2-5-2に示す結果となった。

自己認識欲求は3つの情報収集手段いずれとも有意な相関が見られた。この結果から、「自己認識欲求喚起が情報収集手段を生起させる」との仮説は支持されたと考えられる。

一方、ネガティブ情報回避の欲求は“ネガティブな心理テスト”への“参加意欲”とのみマイナスの有意な相関がみられ、“専門家のテスト”への“参加意欲”・“雑誌心理テスト”への“接近”とは有意な相関は認められなかった。

Table 2-5-2

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の尺度得点と3種の情報収集手段との相関

	自己認識欲求		ネガティブ情報回避欲求	
専門家の心理テスト	0.15*	(221)	-0.04	(222)
ネガティブな心理テスト	0.13*	(221)	-0.17*	(222)
“雑誌心理テスト”	0.19**	(221)	0.12	(222)

* $P < .05$ ** $P < .01$ *** $P < .001$

()内の数値はNを示している。

Figure 2-5-2に基づき、この相関関係を位置づけるとFigure 2-5-3の図が示される。自己認識欲求喚起によって、3手段それぞれを選択しようとする傾向が高まる。一方、ネガティブ情報回避欲求は、否定的な自己情報得てしまう可能性のある“ネガティブな心理テスト”を避けようとするにのみ、影響を与える。

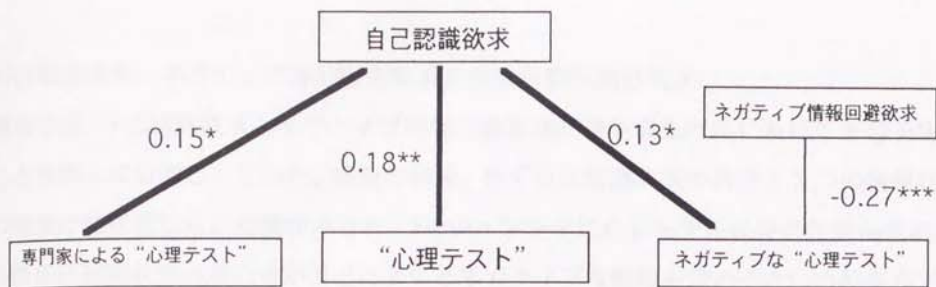


Figure 2-5-3 相関係数に基づく関連図

4. 自己認識欲求とパーソナリティ特性との関連

Rosenberg, M. の Self Esteem Scale の尺度得点と、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度の尺度得点との相関を求めたところ、自尊心と自己認識欲求および、自尊心とネガティブ情報回避欲求との間には、いずれも有意な相関はみられなかった (Table 2-5-3)。

続いて菅原 (1986) の作成した、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求に関する尺度と、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との、尺度得点の相関を求めた (Table 2-5-3)。その結果、自己認識欲求は賞賛獲得欲求と拒否回避欲求、両方と有意な相関が見られた。またネガティブ情報回避欲求は、拒否回避欲求とのみ有意な相関を示した。

Table 2-5-3

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の尺度得点と各尺度の得点との相関

	自己認識欲求	ネガティブ情報回避欲求
自尊心	0.00 (227)	-0.10 (228)
賞賛獲得欲求	0.53** (229)	0.08 (230)
拒否回避欲求	0.37** (231)	0.20** (232)

* P<.05 ** P<.01 *** P<.001

() 内の数値は N を示している。

第4節 考察

1. 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と情報収集行動の関連

本調査では、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求が情報収集行動に及ぼす影響を明確にすることを第1の目的としていた。調査の結果、まず自己認識欲求の高さと3つの情報収集手段との関連には有意な正の相関がみられ、Figure 2-5-2に示すモデルの妥当性が示された。

この際自己認識欲求の高い者が自己に関するネガティブな情報も求めるという結果が示されたことから、自己情報の収集には必ずしも自己概念や自己評価の維持が伴わないことが明らかになった。

次に、ネガティブ情報回避欲求の位置づけである。自己認識欲求に伴い喚起し、情報収集することによって自己評価が低下すると予期される時、自己に関するネガティブな情報を選択的に回避する傾向と推測されていた。本調査の結果、まず両尺度間には正の相関の傾向がみられたものの有意ではなかった。しかしネガティブ情報回避欲求は“ネガティブな心理テスト”とのみ有意な負の相関がみられた。以上の結果からFigure 2-5-2に示すモデルの妥当性が示されたと考えられる。

2. 自己認識欲求尺度について

本調査の第3の目的は、自己認識欲求尺度の精錬にあった。第1章では自己認識欲求が1次元であることが示されたが、これについて項目の内容が「～について知りたい」という肯定項目のみであったためではないかとの疑問が残されていた。そこで本調査では、自己認識欲求尺度の再検討を逆転項目も含めて行った。その結果、逆転項目も含めて第1因子には自己について知りたいか知りたくないかの傾向を示す項目に因子負荷量が高く、この点からも自己認識欲求は1次元であることが確認された。

3. パーソナリティ特性との関連

本調査の第2の目的は、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求とパーソナリティ特性の関連を明らかにすることにあつた。自己認識欲求は、自己概念不明確感を生じる状況で喚起されると仮説されており、状況変数として想定されていた。ただし調査の結果、自己認識欲求と他のパーソナリティ特性との関連の一部が明らかになった。まず自尊感情は自己認識欲求と関連は薄いことが明らかになった。一方、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求はともに自己認識欲求と関連の深いことが明らかとなった。自己認識欲求と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との間に関連が

強かった原因として、賞賛されたいとか拒否されたくないと感じる者は自己概念が不安定になりやすく、従って自己認識欲求も高くなるということが考えられる。

第4章で、自己概念不明確感の操作が不適切であったにもかかわらず自己認識欲求の個人差が情報収集行動に影響を与えたことと併せて、自己認識欲求はある程度の時間的な継続性をもった変数として位置づけることが可能である。

一方ネガティブ情報回避欲求は、拒否回避欲求とのみ有意な相関を示した。拒否回避欲求は、相手から自分について否定的な評価を下されることを避けたいとする心理である。ネガティブ情報回避欲求と拒否回避欲求との間に相関が示されたことから、ネガティブ情報回避欲求の解釈および尺度の妥当性が示されたといえる。

4. 自己認識欲求の仮説モデルとの対応

本研究で明らかになったことを、自己認識欲求の仮説モデルに対応させると次のようになる。まず、自己認識欲求の高いものほど情報収集手段に接近する傾向が強く、自己認識欲求喚起によって情報収集行動が生起することを示すモデルの妥当性が確認された。

またネガティブ情報回避欲求は、情報収集が行われる際に自己評価の低下が予測される時のみ、自己認識欲求に伴う情報収集行動を回避しようとするものであることが確認された。

5. 本調査の問題点と他章との関連

本章では、自己認識欲求喚起が情報収集行動を生起することを確認した。ただし、ここで情報収集手段のひとつとして用いた心理テストは、自己理解の手段としては一般的ではない。第1部で記したように、自己情報収集手段には様々なものが存在する。そこで、第7章では情報収集手段を多種類にし、より広範囲にわたって自己認識欲求との関連を分析する。

またネガティブ情報回避欲求が、自己認識欲求のモデルにどのように位置づけられるのか明らかになったが、本研究では場面想定法を用いている。これが特に実際に収集場面でどのような影響を与えるのか確認する必要がある。そこで第6章では、情報収集によって実際に自己評価が低下するような実験場面を設定し、モデルの妥当性を検証する。

第6章 自己認識欲求喚起に関する実験研究

第1節 目的

1. 問題の所在

自己認識欲求の仮説では、Figure 2-6-1に示すように、自己概念不明確感が自己認識欲求を喚起させると考えている。そして自己概念の不明確感は次の2状況として説明される。すなわち、自己知識間の矛盾に対する意識と、自己知識の不足の意識である。本実験ではこの自己知識間の矛盾と知識の不足を実験的に操作することによって、自己概念不明確感と自己認識欲求喚起の因果関係を明らかにすることを第1の目的とする。具体的には、被験者に共感性テストを実施し、偽のフィードバックを与えることによって、この2状況を実験的に生起した。まず矛盾の意識については、偽のフィードバック（極端に肯定的・極端に否定的いずれか）によって喚起する。既存の知識と矛盾した不一致情報を受け取った被験者は、その側面の自己概念が不明確になると考えられる。さらに知識の不足については、実験者が直接「知識が不足している」と告げることで意識化する。

このような形で、自己概念の不明確感が生起した被験者は自己認識欲求を喚起することが予測される。第4章では不明確感については直接測定していなかったため、偽のフィードバックによって自己概念不明確感が生じたか否かを確認することができなかった。そこで本実験では不明確感の測定を行い、操作によって不明確が生起したか否かを確認するとともに、自己認識欲求との関連を検討する。

本実験の第2の目的は、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求が、情報収集行動に及ぼす影響を明らかにすることにある。前章までは、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と情報収集行動の関連の実証が不十分であった。そこで本実験では、両欲求喚起が情報収集行動に及ぼす影響を実験場面で検討することを目的とする。自己認識欲求の仮説モデル（Figure 2-6-1）によれば、次のような関連が予測される。まず自己認識欲求が喚起された被験者は、そうでない被験者よりも自己に関する情報収集行動を積極的に行う。次に、否定的な結果が得られると予測される場合にはネガティブ情報回避欲求が喚起され、情報収集行動が抑制される。否定的な偽のフィードバックを受けたものは、否定的情報を受け取ると予測するため、そうでない被験者よりも自己のネガティブな側面についての情報収集行動を抑制する。

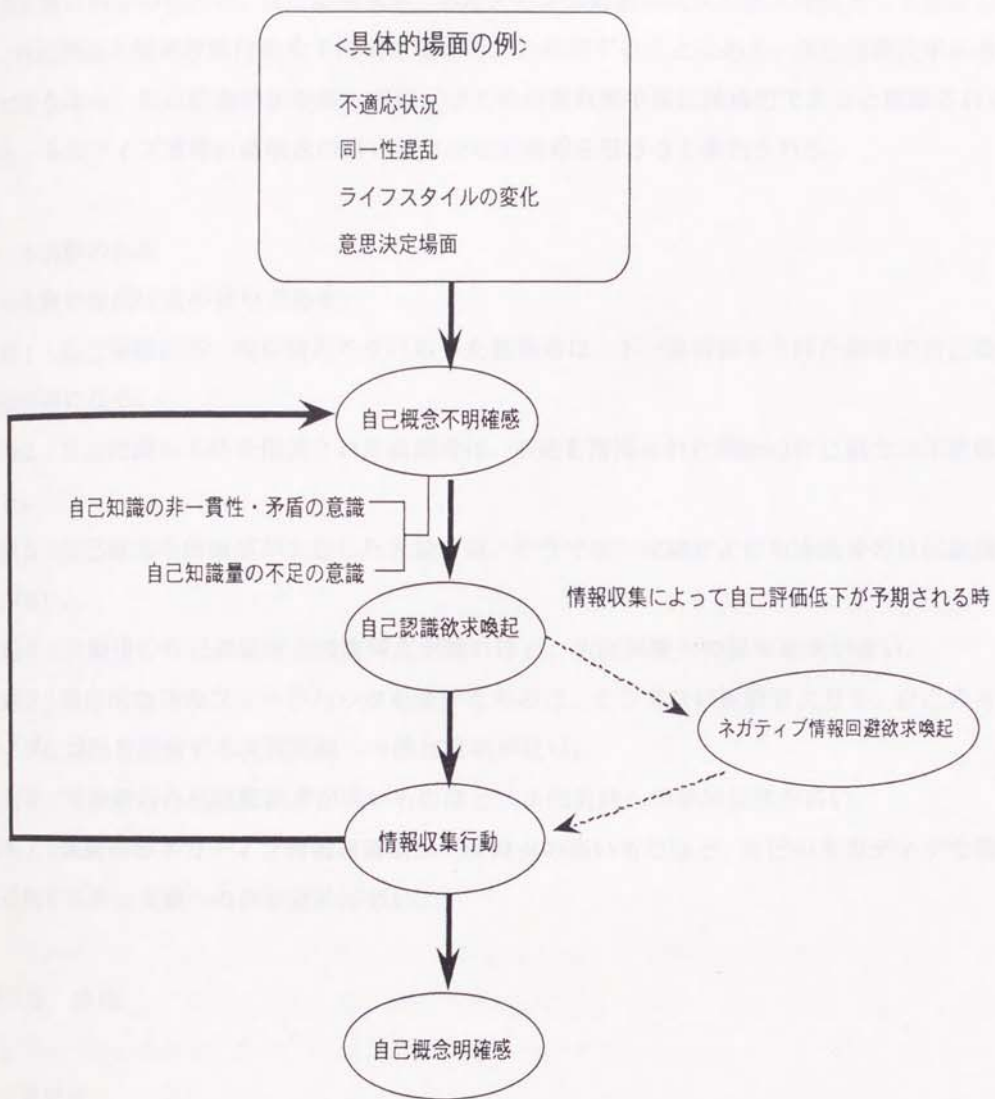


Figure 2-6-1 自己認識欲求の仮説モデル
(第1章で修正されたもの)

本実験の第3の目的は、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求を個人特性として想定した時、自己関連の情報収集行動を予測できるか否かを確認することにある。自己認識欲求の考え方に従うなら、自己認識欲求が高い者は、全ての情報収集手段に積極的であると推測される。一方、ネガティブ情報回避欲求の高い者は否定的情報を避けると推測される。

2. 本実験の仮説

本実験の仮説は次の通りである。

仮説1：自己知識に不一致な情報を受け取った被験者は、不一致情報をうけた側面の自己概念が不明確になる。

仮説2：自己知識の不足を指摘された被験者は、不足を指摘された側面の自己概念が不明確になる。

仮説3：自己概念不明確感が生じた被験者は、そうでない被験者よりも実験後の自己認識欲求が高い。

仮説4：実験後の自己認識欲求尺度得点が高いほど、次回実験への参加意欲が高い。

仮説5：否定的な偽のフィードバックを受けたものは、そうでない被験者よりも、自己のネガティブな側面を指摘する次回実験への参加意欲が低い。

仮説6：実験前の自己認識欲求が高いものほど、次回実験への参加意欲が高い。

仮説7：実験前のネガティブ情報回避欲求尺度得点の高いものほど、自己のネガティブな側面を指摘する次回実験への参加意欲が低い。

第2節 方法

1. 被験者

都内女子大学に所属する1年～3年生、計88名。

2. 実験日時・場所

1995年12月4日～16日にかけて、大学内の実験室で実施した。

実験室には中央につい立てが置かれ、「被験者がテストに参加し結果を説明される場所」と「実験者がテスト結果を集計する場所」が仕切られている。ただし完全に遮断されていないため、実験者が採点している音などが聞こえるようになっている。

被験者は1～3名づつ実験に参加した。2名以上が同時に実験に参加した場合には、被験者

を部屋から途中退出させ、一人ずつを部屋に呼んで結果を説明した。またお互いに実験が終わるまで他者に結果を知らせないように指示した。さらに、テスト結果提示後の質問紙や参加意向についても、他の被験者の回答が見えないように机を配置した。

3. 実験手続き

(1) 実験の流れ

実験は Table 2-6-1 に示す形で行われた。

Table 2-6-1 実験の流れ

1. 実験前の質問紙調査
2. 共感性テストの実施
3. 共感性テストの結果を提示
4. テスト結果についての質問紙
5. 次回実験への参加意向
6. 実験後の質問紙調査
7. デブリーフィング

実験操作にあたるのは、「3. 共感性テストの結果を提示」である。本実験では提示するテスト結果について、独立変数として提示結果の内容（肯定群・否定群）、知識不足指摘有無（指摘群・非指摘群）を設定し、 2×2 の実験デザインで実験を行う。

従属変数として用いるのは、「4. テスト結果についての質問紙」での自己知識との一致度・自己概念不明確感、「5. 次回実験への参加意向」「6. 実験後の質問紙調査」での自己認識欲求（自己認識欲求尺度およびテストに対応する自己の側面について知りたい程度）である。また、「1. 実験前の質問紙調査」での自己認識欲求およびネガティブ情報回避欲求尺度得点は、実験後の質問紙調査の結果との関連分析に使用した。

(2) 実験前の質問紙

被験者には実験参加前に質問紙を渡され、実験当日に持参することを求められる。

質問紙は、以下の項目が含まれている。

1. 自己認識欲求尺度

第1章で作成した14項目を用い、同様に得点化を行った。

2. 自己の共感性について知りたい程度 (RNE)

「自分が人の気持をどの程度感じとれているのか知りたい」について、当てはまる程度を「5. あてはまる」～「1. あてはまらない」の5件法で回答を求めた。

この「共感性について知りたい程度」については、以下RNE (Recognition Need for Empathy) と記す。

3. ネガティブ情報回避欲求尺度

第5章で作成した8項目を用い、同様に得点化を行った。

4. 自尊感情尺度 (山本ら, 1982)

「5. あてはまる」～「1. あてはまらない」の5件法で回答を求め、同様に得点化を行った。

(3) 共感性テストの実施

被験者は「共感性テストの開発を目的とする実験」と説明され、実験に参加する。実施する共感性テストについては、既にいくつかの調査が行われ、かなり正確に測定できることが分かっていると説明された。そして最終的なバージョンとして発表する前に、実際にテストを実施してもらい結果を受け取った時の感想を聞きたいと告げた。

被験者は、実験室に入り質問紙法と投影法によるテストを行う。質問紙テストは、加藤・高木(1980)の情動的共感性尺度と、辻(1993)の他者意識尺度の項目を用いた。投影法テストはTAT図版1枚を用い、「図版の主人公が今どのような気持ちであるのかを、5分間で出来る限り読み取る」ように求められる。いずれのテストについても、回答は分析対象外とした。

(4) 共感性テスト結果の提示

テスト実施後、被験者は共感性テストの結果として、2つの得点を知らされる。また提示結果の意味を明確にするために、正規分布のグラフに被験者の得点を記入したものを提示しながら説明を行った。

1. 共感性得点

被験者は、まずテスト結果として本人の共感性の高さを示される。結果および説明内容は2つの実験条件によって異なる。

<肯定群>

あなたの共感性得点は195点でした。この得点は、同年代の大学生女子の分布の中で、上位5パーセントに入っています。これは、あなたが人の心の動きに非常に敏感であることを示しています。

<否定群>

あなたの共感性得点は105点でした。この得点は、同年代の大学生女子の分布の中で、下位5パーセントに入っています。これは、あなたが人の心の動きに非常に鈍感であることを示しています。

2. 共感性に対する知識量得点

被験者は、続いて共感性に対する知識量について説明される。知識量については次のような解説が加えられる。「このテストはあなたが考えている自分の〈共感性能力〉と、実際に測定された〈共感性能力〉との間のズレの性質を分析することにより、あなたが自分の共感性について、どの程度様々な側面から判断を行ったかも得点化できるようになっています。」

結果は、2つの実験条件によって異なる。

〈自己知識不足指摘群〉

テストの結果、あなたのD得点（ズレ得点）は55点で、過去のデータから判断すると、かなり高い得点です。これはあなたが自分が持っていると考えている〈共感性能力〉と、実際の〈共感性能力〉との間にはズレが大きかったことを意味しています。つまりあなたは、自分の持っている共感性能力の程度がよくわかっていないようです。これは、あなたが自分の共感性について一面的にしか理解しておらず、正確に判断するための知識が不足しているためと考えられます。

〈自己知識不足非指摘群〉

テストの結果、あなたのD得点（ズレ得点）は15点で、過去のデータから判断すると、かなり低い得点です。これはあなたが自分が持っていると考えている〈共感性能力〉と、実際にもっている〈共感性能力〉との間にはズレが少ないことを意味しています。つまりあなたは、自分の持っている共感性能力の程度がよくわかっているようです。これは、あなたが自分の共感性について様々な面から理解しており、正確に判断するための知識が十分にあるためと考えられます。

(5) テスト結果についての質問紙

被験者は結果提示後、テスト結果に対する感想を知りたいと説明され、質問紙に回答を求められる。質問紙は次の質問項目から成っている。

1. 結果の一致度

「結果は、あなたが考える共感性能力の程度とどの位一致していましたか。」との質問について、「5. 全く一致していた」から「1. 全く一致していない」の5件法で、回答する。

2. 結果の好ましさ

「結果はあなたにとって、どの程度好ましいものでしたか。」との質問について、「5. 非常に

好ましい」から「1.非常に好ましくない」の5件法で回答する。

3. 自己の共感性に対する不明確感

「テスト結果を提示されたことにより、自分の共感性能力に対する考えは、どの程度明確になりましたか。」との質問について、「1.以前より明確になった」から「4.かえって分からなくなった」までの4件法で回答を求めた。

(6) 次回実験への参加意向

続いて、実験者は被験者に対し、テストの妥当性を確認するために引続き共感性を測定するもうひとつのテストに参加してほしい旨を伝える。コメントの性質が異なる3人の評定者がいるが、3人の評定実験それぞれにどれだけ参加したいかを測定する。教示は次の形で行った。

「この実験が終了後、しばらくしてから、別の形の共感性テストを実施して、今回の結果と比較してテストの妥当性の確認を行う予定です。あなたにもぜひ、もう一度テストに参加してほしいと考えています。テストの形式の説明をした後に、次回のテストにどの位参加したいかを教えてください。次回のテストは、質問紙形式ではなく、実際にあなたにある女性と直接会話してもらい、その人が会話の過程であなたの共感性の程度を判断します。その判断をあなたに伝え、あなたの感想を伺うというものです。共感性の判断をする女性は別の大学の大学院生で、全部で3人います。このうちの一人があなたと話をします。ただし、この3人には以前にもある実験で共感性の判断を頼んでいます、それぞれ判断のタイプが違ってきます。

Aさんの判断…かなり厳しい

(共感性に関して、相手の悪い所を中心に指摘するタイプです。)

Bさん…かなり甘い。

(共感性について、相手のよい所を中心に指摘するタイプです。)

Cさん…AさんとBさんの中くらい

(共感性について、相手のよい所と悪い所を半分づつ

指摘するタイプです。)

実際に参加してもらう時には、あなたの意見を尊重して相手を選びたいと考えています。あなたは、どの人の判断によるテストだったら受けてもいいと考えますか。あるいは、どの人の判断でもテストを受けてもいいと考えますか。逆に、どの人によるテストも受けたくないでしょうか。Aさん・Bさん・Cさんの判断に基づくそれぞれのテストについて、どの程度参加したいかを教えてください。」

この教示の後、3人の判断によるテストそれぞれについて、「5.参加したい」から「1.参加したくない」の5段階評定で回答を求めた。

(7) 実験後の質問紙調査

実験者は被験者に「上記のテスト結果の参考として、性格と共感性の関連を検討したい」と告げ、実験後の質問紙調査に回答してもらった。質問紙には、実験前に実施した質問紙の中から自己認識欲求尺度とRNE（自己の共感性について知りたい程度）を用いた。

(8) デブリーフィング

上記の手続き終了後、実験者は被験者に対しデブリーフィングを行った。その結果実験手続きに疑問を示した被験者はいなかったため、88名全員を分析対象者とした。

第3節 結果

1. 実験操作の検討

(1) 結果の肯定・否定

フィードバックが肯定的・否定的と受け取られた否かについて検討した。

肯定群・否定群で結果の好ましさに関する回答を比較した結果、肯定群の好ましさ得点は $M=7.4$ ($S.D.=1.66$)、否定群の好ましさ得点は $M=4.1$ ($S.D.=1.24$) で、肯定群の方が有意に結果が肯定的と受け取ったことが示された ($t=10.04$ $df=86$ $P<.001$)。

(2) 自己概念不明確感の生起

本実験では仮説1・2として以下の2点を挙げていた。

仮説1：自己知識に不一致な情報を受け取った被験者は、不一致情報をうけた側面の自己概念が不明確になる。

仮説2：自己知識の不足を指摘された被験者は、不足を指摘された側面の自己概念が不明確になる。

仮説検証にあたり、まず実験操作により自己概念不明確の生起に差がみられたかを検討した。知識不足の指摘有無（指摘群・非指摘群）×結果の内容（肯定群・否定群）の4群別に不明確感の程度を算出したところ、Table 2-6-2 に示すようになった。

Table 2-6-2 自己概念不明確感の生起程度
(実験条件の比較)

	指摘群	非指摘群
肯定群		
M	2.09	1.95
S.D.	0.95	0.81
N	23	21
否定群		
M	2.81	2.39
S.D.	0.98	0.84
N	21	23

これについて、2要因の分散分析を行ったところ、結果の肯定・否定の主効果のみが有意であった(肯定群 $M=2.0$ (S.D.=0.88)、否定群 $M=2.6$ (S.D.=0.92)、 $F(1,84)=9.22$ $P<.001$)。知識不足の指摘の有無の主効果はみられず(指摘群 $M=2.4$ (S.D.=1.02)、非指摘群 $M=2.2$ (S.D.=0.88)、 $F(1,84)=1.68$ n.s.) また、交互作用も有意ではなかった($F(1,84)=0.55$ n.s.)。以上の結果から、自己知識の不足を指摘するという本実験の操作では共感性に対する不明確感を生起することはできず、仮説2は支持されなかった。このため、実験操作として行った知識の不足の指摘有無の2群については、以後併せて分析を行った。

続いて、仮説1の検討のために、既存の自己知識とテスト結果の矛盾が自己の共感性に関する不明確感を生起させたかについて次の分析で確認した。始めに、結果が自分で考えていた共感性とどの程度一致していたかについて回答した「一致度」と、結果によって共感性が明確になったか否かを尋ねた「不明確感」との相関を求めた。その結果、両者の間には $r=-0.56$ ($P<.001$) と有意な相関がみられ、既存の自己知識とテストによって提示された結果の矛盾が大きい被験者ほど、自己の共感性について不明確だと感じることを示されている。この点から、自己知識間の矛盾に気づくことが自己概念不明確感を生起させることが確認され、仮説1は支持された。

なお、提示したテスト結果の肯定・否定で共感性に対する明確感が異なることも考えられたため、既存の自己知識と結果の矛盾に対する回答に基づき全体を「一致群 N=37」と「不一致群 N=51」の2群に分け、結果の肯定・否定（肯定群・否定群）とで、共感性不明確感について2要因の分散分析を行った。その結果、肯定・否定については主効果の傾向がみられるものの有意ではなかった（肯定群…M=2.6 (S.D.=0.92) 否定群…M=2.0 (S.D.=0.88) $F(1,84)=2.98 P<.1$ ）。また「矛盾の意識」との交互作用もみられなかった。以上の点から、テストによって生じた自己の共感性に対する不明確感は主として既存の自己知識との矛盾に基づくことが示唆された。

2. 自己認識欲求の生起

本実験では第3の仮説として以下を設定した。

仮説3：自己概念不明確感が生起した被験者は、そうでない被験者よりも実験後の自己認識欲求が高い。

本実験では自己認識欲求を、自己認識欲求尺度得点とRNEの2つの指標を用いて尋ねている。分析に当たっては、まず両指標の変化を確認した上で、自己概念不明確感と実験後の自己認識欲求についての関連分析を行った。

(1) 自己認識欲求尺度得点の変化

テスト前後で測定した自己認識欲求尺度得点は、実験前がM=46.3 (S.D.=9.56)、実験後はM=46.0 (S.D.=8.94) となった。平均値の差の検定を行ったが、有意差はみられなかった ($t=0.58$ $df=87$ n.s.)。

この結果から、全体としては偽の自己情報を提示することにより、自己認識欲求には変化がみられなかったことが示される。

(2) RNEの変化

本実験では、「人の気持ちをどの程度理解しているかについて知りたい」(RNE) について「あてはまる」～「あてはまらない」の5件法で尋ねている。この間に対する回答を実験前後で比較したのがTable 2-6-3である。

Table 2-6-3 RNE (自分の共感性について知りたい程度) (%)

共感性について知りたい	テスト前	テスト後
あてはまらない	0.0	0.0
ややあてはまらない	1.1	0.0
どちらともいえない	11.4	11.4
ややあてまる	36.4	53.4
あてはまる	51.1	35.2

これをみると実験前後を通じて「あてはまらない」はおらず、「ややあてはまる」「あてはまる」が回答の中心で、分布は全体として知りたい方向に偏っている。

さらに、「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点と得点化し実験前後の得点を比較した。その結果、実験前はM=4.4 (S.D.=0.73)、実験後はM=4.2 (S.D.=0.64) となり、両尺度得点の平均値の差の検定を行うと、RNE得点は低下する傾向がみられたが有意ではなかった ($t=1.79$ (df=87) $P<.1$)。

(3) 自己概念不明確感と自己認識欲求喚起

仮説3の検証のため、テストによって自己の共感性がどの程度明確・不明確になったかの得点と、実験後の自己認識欲求の2つの指標の関連分析を行った。

まず第1の指標である自己認識欲求尺度得点については、自己概念不明確感との相関は $r=-0.01$ (n.s.) と有意ではなかった。一方RNEについても相関は $r=-0.10$ (n.s.) と有意ではなく、共感性に対する不明確感が直接、共感性を知りたいという傾向には結び付かないことが示された。この結果から仮説3は支持されなかった。

ただし、不明確感の高低で全体を2群(明確群N=50(テスト前よりも明確になった・少し明確になったと回答したもの)・不明確群N=38(テスト前よりも少しわからなくなった・わからなくなったと回答したもの))に分け、結果の肯定・否定とで2要因の分散分析を、実験後のRNEについて行った。2×2の4群の別にRNEの平均値を算出したものをFigure2-6-2に示す。分散分析の結果、不明確感の高低の主効果は有意ではなかったが ($F(1,84)=0.02$ n.s.)、結果の肯定・否定の主効果の傾向と ($F(1,84)=3.40$ $P<.1$)、有意な交互作用 ($F(1,84)=4.41$ $P<.05$) がみられた。

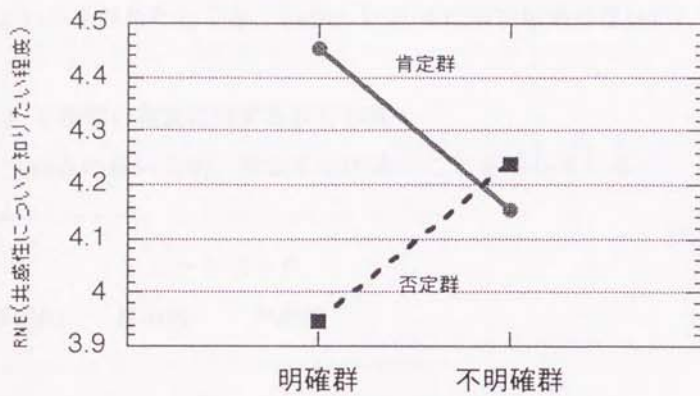


Figure 2-6-2
自己概念明確・不明確群別にみた
自分の共感性について知りたい程度

自己概念が明確になったか不明確になったかだけでは知りたい程度には直接影響しないことから、自己を知ろうとする傾向を自己概念不明確感と直線的に結び付けて考えることはできない。ただし知りたい程度について、不明確感と結果の好ましさを合わせて検討すると、異なる動きが示される。Figure 2-6-2に示したように、自己概念が明確な時には肯定的な情報を求め、否定的な情報を避ける、しかし自己概念が不明確になった時には、内容が肯定的か否定的かには関係なく情報を求めることが生じることが示唆される。

一方自己が不明確な場合には、結果の肯定性否定性が無関連になる。これは、自己概念が不明確になった場合には、それを明らかにするために、どのような情報であっても知りたいとする自己認識欲求の基本的仮説に一致している。

3. 情報収集行動について

(1) 3種類のフィードバックに対する参加意向の比較

被験者には、次回の実験に参加した場合には、どの人と組むかによって3種のフィードバッ

ク(肯定的フィードバック・否定的フィードバック・中間的フィードバック)のいずれかを受け取る可能性がある」と説明している。実験に参加して3種のフィードバックそれぞれをどの程度受けてもよいかを尋ねたところ、Table 2-6-4 に示す結果となった。

Table 2-6-4 3種類の実験に対する参加意欲
(得点の低い方が、参加希望の高いことを示している)

変数名	フィードバック		
	否定的	肯定的	中間的
M	3.0	2.9	1.9
S.D.	1.37	1.15	0.91
N	88	88	88

この参加意欲に差がみられるか、被験者内で1要因の分散分析をした結果、有意な主効果がみられた ($F(2,174) = 39.35$ $P < .001$)。多重比較を行った結果、否定的結果と肯定的結果の間には有意な差はみられなかったが ($t = 0.71$ $df = 87$ n.s.)、中間的結果は否定的な結果 ($t = 7.90$ $df = 87$ $P < .001$)、肯定的結果 ($t = 7.52$ $df = 87$ $P < .001$) いずれよりも参加意欲が高かった。

中間的結果は、否定的部分と肯定的部分両方を半分ずつ指摘すると説明されていた。このため、最も客観的で正しいものと受け取られたと考えられる。肯定的結果が必ずしも好まれなかったことから、自己高揚動機はここでは示されず、むしろ自己査定的な欲求の存在が示唆される。

(2) 自己認識欲求と情報収集行動

本実験の第4の仮説は、「実験後の自己認識欲求尺度得点が高いほど、次回実験への参加意欲が高い」というものである。

この仮説を検証するために、テスト後の自己認識欲求尺度得点およびRNEと、3種類のフィードバックの参加意向について相関を求めた。Table 2-6-5 に示されるように、RNEは否定的フィードバック・中間的フィードバックの2つと有意な相関がみられ、仮説は支持され

た。ただし、自己認識欲求と3種類のフィードバックについてはいずれも有意な相関はみられなかった。この点から、自己認識欲求尺度は、特定の側面に限定された自己認識欲求の測定の結果として生じる情報収集行動を予測する指標としては、適切とは言い切れないと考えられる。

Table 2-6-5 自己認識欲求およびRNEと、3種類の実験の参加意欲との相関

変数名	フィードバック		
	否定的	肯定的	中間的
自己認識欲求	-0.01	-0.01	-0.02
RNE	-0.22*	-0.15	-0.24*

さらに、明確群と不明確群を分けて、テスト後の自己認識欲求およびRNEと、3種類のフィードバック実験への参加意向について相関を求めたところ Table 2-6-6 に示すようになった。

Table 2-6-6 自己認識欲求およびRNEと、3種類の実験の参加意欲との相関
(共感性明確群別)

変数名		フィードバック		
		否定的	肯定的	中間的
明確群 (N=50)	自己認識欲求	-0.04	0.02	0.06
	RNE	-0.04	-0.01	-0.17
不明確群 (N=38)	自己認識欲求	0.03	-0.07	-0.04+
	RNE	-0.44**	-0.36*	-0.32+

これを見ると、共感性が不明確である場合に、参加意欲と知りたい程度との関連がより強くなっている。この点からも、自己概念不明確感から生じた自己認識欲求が、情報収集行動を生

起させるとの仮説が支持されたといえる。逆に明確群では、知りたいという意識はあっても、それが実際の行動にはつながっていない。

(3) 予期される結果と情報収集行動

本実験の第5の仮説は「否定的な偽のフィードバックを受けたものは、そうでない被験者よりも、自己のネガティブな側面を指摘する次回実験への参加意欲が低い」であった。

RNEは全体として知りたい方向に偏っていたが、分布に基づきそれを「共感性を知りたい」について「3. どちらともいえない」「4. ややあてはまる」と回答した「RNE中群」(57人)と、「5. あてはまる」とした「RNE高群」(31人)に2分した。この2群と、結果の肯定・否定で、参加意欲について2要因の分散分析を行った。その結果、否定的フィードバックと中立的フィードバックの参加意欲について欲求の主効果がみられた。

否定的フィードバック参加意欲

RNE中群 M=3.2 (S.D.=1.35)

RNE高群 M=2.6 (S.D.=1.34) (得点が低いほど参加したいことを意味する)

RNE群の主効果…F(1,84) = 5.23 (P < .05)

肯定・否定群の主効果…F(1,84) = 1.01 (n.s.)

交互作用…F(1,84) = 0.37 (n.s.)

中立的フィードバック参加意欲

RNE中群 M=2.0 (S.D.=0.95)

RNE中群 M=1.6 (S.D.=0.77) (得点が低いほど参加したいことを意味する)

RNE群の主効果…F(1,84) = 4.55 (P < .05)

肯定・否定群の主効果…F(1,84) = 0.01 (n.s.)

交互作用…F(1,84) = 1.17 (n.s.)

以上のように、結果の肯定性・否定性は参加意欲には無関連であり、RNEが高い被験者の方が情報収集行動に積極的に参加することが確認された。

この結果から、仮説5は支持されなかった。

4. 特性としての自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と情報収集行動

本実験では、仮説6・7として以下の2つを設定していた。

仮説6：実験前の自己認識欲求が高いものほど、次回実験への参加意欲が高い。

仮説7：実験前のネガティブ情報回避欲求尺度得点の高いものほど、自己のネガティブな側面を指摘する次回実験への参加意欲が低い。

両仮説の検証のために、実験前に測定した両欲求が、実験場面での欲求喚起や情報収集行動とどのように影響するのかを検討した。

自己認識欲求の高低×ネガティブ情報回避欲求の高低で、3種のフィードバック実験への参加意欲について2要因の分散分析を行った。その結果、有意な主効果がみられたのは、否定的フィードバックへの参加意欲であった。ここではネガティブ情報回避欲求の主効果がみられ、ネガティブ情報回避欲求高群のほうが参加意欲が低いことが示された。肯定的フィードバックおよび中立的フィードバックについては、群による主効果はみられなかった。

否定的フィードバック参加意欲

実験前の自己認識欲求群の主効果… $F(1,84) = 2.11$ (n.s.)

ネガティブ情報回避欲求の群の主効果… $F(1,84) = 6.16$ ($P < .05$)

交互作用… $F(1,84) = 0.09$ (n.s.)

ネガティブ情報回避欲求低群 $M = 2.7$ (S.D. = 1.43)

ネガティブ情報回避欲求高群 $M = 3.3$ (S.D. = 1.26)

(得点が低いほど参加したいことを意味する)

以上の結果から、ネガティブ情報回避欲求は否定的情報収集行動を避けるとの仮説が支持された。ただし、特性としての自己認識欲求と情報収集行動の関連については明確にはならなかった。

第4節 考察

1. 自己認識欲求の喚起

本実験の第1の目的は、自己概念不明確感が自己認識欲求を喚起させることを実験場面で検証することであった。

この目的をふまえ、自己認識欲求の仮説モデルに沿って以下の2つの実験仮説を設定した。

仮説1：自己知識に不一致な情報を受け取った被験者は、不一致情報をうけた側面の自己概念が不明確になる。

仮説2：自己知識の不足を指摘された被験者は、不足を指摘された側面の自己概念が不明確になる。

本実験では被験者に共感性テストを実施し、偽のフィードバックを与えることによって、自己概念不明確感を生起することを試みた。分析の結果、共感性についてのテスト結果と既存の自己知識とが一致していないと感じる被験者ほど、結果によって自己の共感性についての考えが不明確になったと回答していた。この結果から、仮説1が支持された。これは自己知識間の矛盾が自己概念不明確感を生起させるという自己認識欲求仮説モデルの妥当性を示したものと見える。ただし、実験操作として行った自己知識不足の指摘では共感性の不明確感には明確な差がみられず、仮説2は支持されなかった。これは、知識の不足を実験者が被験者に告げる形では自己知識の不足が感じられなかったためとも推測される。

2. 自己概念不明確感と自己認識欲求喚起

本実験では仮説3として「自己概念不明確感が生起した被験者は、そうでない被験者よりも実験後の自己認識欲求が高い」をたてた。

仮説検証のために、まずテスト結果提示後の共感性不明確感と実験後の自己認識欲求尺度得点の相関を求めたが、有意な値は示されなかった。また、共感性不明確感とRNE（共感性について知りたい程度）との相関も有意ではなく、仮説3は支持されなかった。

ただし受け取った結果の肯定性・否定性を併せて検討すると、自己概念不明確感と自己認識欲求との関連が示された。すなわちテスト後に自己概念が明確であるときには知りたい傾向は肯定的な時にのみ高く、否定的な情報を受けた時には知りたい程度は大きく低下する。しかし自己概念が不明確な時には結果の好ましさにかかわらず、知りたい欲求が同程度喚起される。これは、自己概念が不明確な時には自己にとって肯定的な情報でも否定的な情報でも、明確にするための情報であれば区別なく求めるという自己認識欲求の特徴を示すものである。

3. 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と情報収集行動

本実験の第2の目的は、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求が、情報収集行動に及ぼす影響を明らかにすることにあった。

この目的をふまえ、本実験では自己認識欲求の仮説モデルを本実験場面に対応させた以下の仮説を設定した。

仮説4：実験後の自己認識欲求尺度得点が高いほど、次回実験への参加意欲が高い。

仮説5：否定的な偽のフィードバックを受けたものは、そうでない被験者よりも、自己のネガ

ティブな側面を指摘する次回実験への参加意欲が低い。

分析の結果、共感性について知りたいと感じる被験者ほど、否定的フィードバックや中立的フィードバックを受け取ると推測される次回実験への参加意向が高かった。この結果から、自己の特定の側面についての認識欲求が高まった場合には、人はそれを解消するためにその側面が明らかになると推測される情報収集手段に積極的に接近することが確認され、仮説4は支持された。

さらに、上記のような傾向は、自己の共感性が不明確と判断した被験者のみでみられ、明確な被験者には有意な関連はみられなかった。この点からも、自己認識欲求とは自己概念不明確感から生じるものであり、この場合の欲求が自己情報収集行動を生起させるといえる。

自己認識欲求と情報収集行動の関連が明確になった一方で、ネガティブ情報回避欲求との関連は十分明らかにはならず、仮説5は支持されなかった。当初は否定的な結果を受け取ったものは、その後否定的結果を受け取ると予期するために、ネガティブ情報回避欲求が喚起され自己概念が不明確な際の情報収集行動が抑制されると推測された。しかし分析の結果、操作された結果の好ましさと自己認識欲求の高低で2要因の分散分析を行ったが、関連がみられたのは自己認識欲求のみであった。さらに全体を通してみると、中間的なものが好まれ、肯定的なだけのフィードバックは選択されにくい。この結果は自己高揚の動機よりも自己査定の動機の方が強くみられることを示している。

4. 特性としての自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と情報収集行動

本実験の第3の目的は、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求を個人特性として想定した時、自己関連の情報収集行動を予測できるか否かを確認することにある。この目的をふまえ、本実験では次の仮説を設定した。

仮説6：実験前の自己認識欲求が高いものほど、次回実験への参加意欲が高い。

仮説7：実験前のネガティブ情報回避欲求尺度得点の高いものほど、自己のネガティブな側面を指摘する次回実験への参加意欲が低い。

両仮説の検証のために、実験前に測定した両欲求が、実験場面での欲求喚起や情報収集行動とどのように影響するのかを検討した。その結果、ネガティブ情報回避欲求が否定的な情報収集を低下させることが明らかとなり、仮説7が支持された。これは、ネガティブ情報回避欲求が情報収集行動に影響を及ぼすことを仮説する、自己認識欲求モデルの妥当性を示すものである。また、ネガティブ情報回避欲求尺度を用いることにより、その後の情報収集行動の予測が可能となる。

ただし、テスト前の自己認識欲求と情報収集行動とは明確な関連は示されず、仮説6は支持されなかった。また、テスト前のRNEと次回実験への参加意欲との間にも明確な関連はみられなかった。この結果は、自己認識欲求尺度得点によって行動を予測することが必ずしも成功しないとことを意味している。

5. 自己認識欲求の仮説モデルとの対応

本実験で示された結果を自己認識欲求の仮説モデルに対応させると以下のようになる。まず、既存の自己概念に不一致な情報を提示されると、自己概念が不明確になることが確認された。

また、自己概念不明確感が自己認識欲求を喚起することは間接的に示された。すなわち、具体的には自己概念が不明確な場合には、自己にとって肯定的な情報が提示されて既存知識との間に不一致が生じても、肯定的な情報が提示されて既存知識との間に不一致が生じても同様に、自分を知りたいという傾向がみられた。一方、情報によって自己概念が明確になった時には、自己にとって肯定的な情報が提示された場合だけ自分を知りたいと感じた。このうち、自己概念不明確時に生じる自己への関心については、自己認識欲求のモデルに示されたものである。しかし、自己概念が明確な時にも自己への関心が生じる流れは、自己認識欲求の仮説モデルでは予測されていなかった。肯定的な情報が提示されて自己概念が明確になった時に、自分を知りたいとする傾向は、自己高揚動機が扱った心理であると考えられる。

さらに、自己概念が不明確になり、特性を知りたいとしたものほど、次回実験への参加という形で自己情報収集行動を生じることが示され、モデルの妥当性が確認された。一方、自己概念が明確な時は自己を知りたいという傾向が高まったものの、行動を生起させることは確認できなかった。

また、Figure 2-6-1に示す仮説モデルでは、ネガティブ情報回避欲求が情報収集行動を低下させることを示している。本研究では、否定的な結果を受け取った者ほどネガティブ情報回避欲求を喚起させるため、情報収集行動を低下させると推定していた。しかし、提示する結果の肯定・否定性では情報収集行動には差はみられず、モデルを実証することはできなかった。ただし、特性としてネガティブ情報回避欲求が高い者は、実験場面での否定的な情報収集の低下をもたらすことが示された。これは、ネガティブ情報回避欲求が自己評価を低下させる情報収集を回避させようとするものと位置づける自己認識欲求モデルの妥当性を示すものである。

第7章 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の関連 1)

1) 本章は、「上瀬由美子・堀野緑 1995 『自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景 — 青年期を対象として—』 教育心理学研究,43,1-9.」を共同執筆者の許可を得て転載し、加筆したものである。

第1節 目的

1. 自己認識欲求喚起の背景

自己認識欲求は自己概念不明確感をもたらす状況で喚起されると仮説されているが、第4章では自己概念不明確感の実験操作が不十分であったにも関わらず、自己認識欲求の高低および自己情報収集行動に差がみられた。また第5章ではパーソナリティ特性との関連も有意であった。この点から、自己認識欲求は状況変数であると同時に、比較的継続した特性との関連も強いと推測される。ただし、自己認識欲求が比較的永続した特性との関連がみられたのは、その喚起原因である自己概念不明確感が一定期間継続しているためと考えられる。そこで本章では質問紙による調査を行い、従来の自己研究において、自己概念不明確感をもたらすことが指摘されている特性として相互依存的自己理解を取り上げ、自己概念不明確感および自己認識欲求との関連を検討することを第1の目的とする。

相互依存的自己理解とは、自己を他者との相互関係から認識しようとする傾向である。この視点は、自己のあり方を文化的に比較しようとする研究分野から指摘されることが多い。例えば南(1983)は、日本人の自我構造の特徴として、他者から見られた自分である「外的客我」の意識が強いことを挙げている。そして、主我と客我の不安定から日本人は自我不確実感を持ちやすく、常に他者との相対関係を気にすると論じている。一方、Markus & Kitayama (1991)は「独立的自己理解」「相互依存的自己理解」の区分を提出している。いずれも文化に規定された自己の様態を示したものであるが、前者は西欧文化に多くみられる形で自己が自律的で独立しており個人が独自性を主張することが必要とされる考えである。一方、後者は日本を含むアジア文化に多くみられる形で、個人が互いに結び付き調和することが重視される考えである。高田(1992a,1993)は、Markusらの視点をふまえて両傾向を測定する尺度項目を作成するとともに、自尊感情や社会的比較との関連を検討している。その結果、相互依存的自己理解傾向の強い者は類似他者との比較を多く行うことが明らかになっている。また、日米青年の回答の比較から、相互依存的自己理解傾向が自己概念の不安定や自己評価の低さに結び付くことが示唆

されている。

2. 自己認識欲求と情報収集行動

自己認識欲求のモデルでは、欲求喚起によって情報収集行動が生じると仮説されている。第3～第6章でこの仮説の妥当性が指摘されたが、ただし関連が検討された情報収集行動はテストや実験参加など直接他者から情報を入手する形式に限定されていた。しかし自己認知の方法はShoeneman (1981) が分析したように、様々な形式がある。そこで本調査では様々な情報収集行動について場面想定法を用いて被験者に尋ね、自己認識欲求およびネガティブ情報回避欲求との関連を検討する。

3. 本調査の仮説

本調査で扱う変数を、自己認識欲求の仮説モデル (Figure 2-7-1) に基づいて位置づけると Figure 2-7-2 に示すようになる。まず、相互依存的自己理解が第1の原因としてあり、自己概念の変動性が媒介となって、自己認識欲求を喚起する (仮説1)。ただしこの自己概念の変動性は、自己概念の不安定性を示す指標の一つとして扱う。

次に自己認識欲求喚起によって情報収集行動が生起する (仮説2)。この際第3章・第6章の結果から、自己認識欲求の高い者は自己情報を提供する収集行動全般に積極的であると仮説される。

一方、ネガティブ情報回避欲求は、否定的な情報収集が予期される場合に自己認識欲求の喚起によって生起し収集行動に影響を及ぼす (仮説3)。

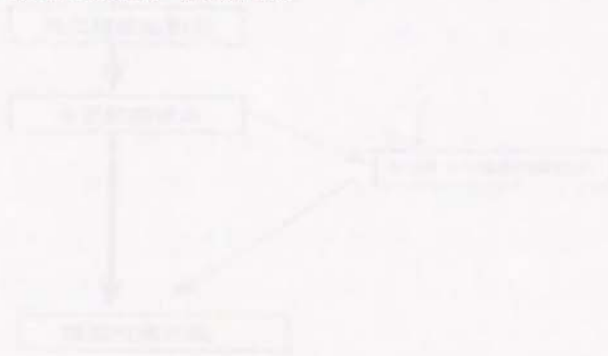


Figure 2-7-2. Conceptual model of information collection behavior.

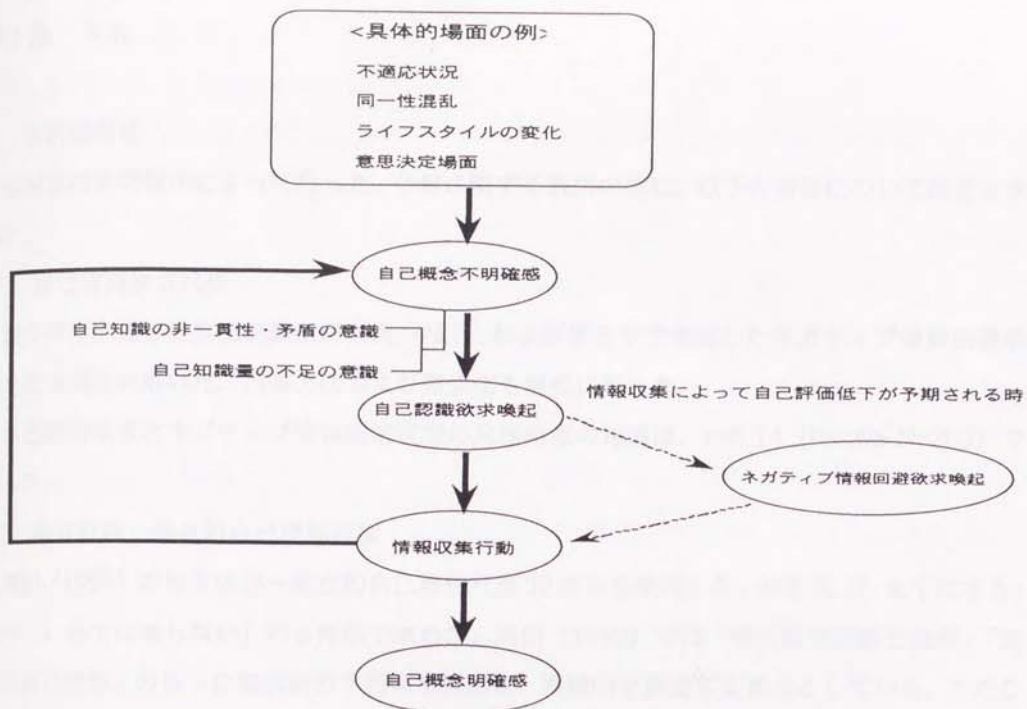


Figure 2-7-1 自己認識欲求の仮説モデル
(第1章で修正されたもの)

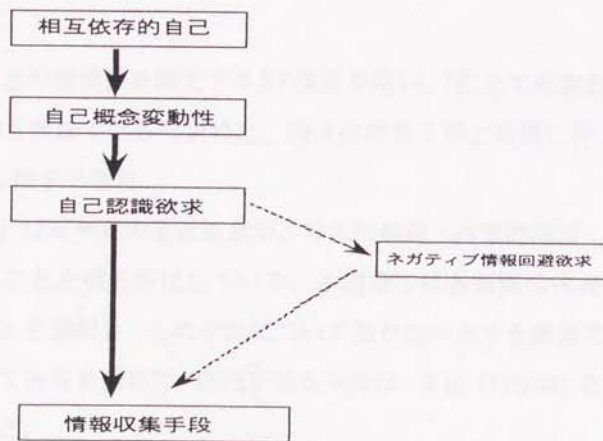


Figure 2-7-2 本調査の作業仮説

第2節 方法

1. 質問紙構成

本調査は質問紙法によって行った。年齢に関する質問の他に、以下の項目について回答を求めた。

(1) 自己認識欲求尺度

第1章で作成した自己認識欲求尺度14項目、および第5章で作成したネガティブ情報回避欲求尺度8項目を用いた。回答方法および得点化も同様に行った。

自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の尺度得点の相関は、 $r=0.14$ ($P<.05$ $N=303$) であった。

(2) 相互依存-独立的自己理解尺度

高田(1993)の相互依存-独立的自己理解尺度39項目を使用した。回答は「5.あてはまる」から「1.あてはまらない」の5件法で求めた。高田(1993)では「相互依存的自己理解」「独立的自己理解」の各下位要因別の平均値を算出し、両傾向を測定する得点としている。ただし高田(1992b)では、全体として相互依存的自己理解と独立的自己理解のいずれかの傾向の強い者は、もう一方の傾向が低いとの指摘がなされている。そこで本調査では、両尺度項目の回答を単純加算し、相互依存的自己理解尺度の得点から独立的自己理解尺度の得点を引き、これを「相互依存的自己理解」得点として使用した。

(3) 自己概念の変動性

第2章で作成した自己概念の変動性を測定する27項目を用い、「5.とても変わりやすい」から「1.全く変わらない」の5件法で回答を求めた。得点化は第2章と同様に行った。

(4) 自己情報の収集行動に関する項目

山本・松井・山成(1982)は青年期の自己概念が、対人的側面・内面的側面・外面的側面の3側面から構成されていることを明らかにしている。本調査では各側面の代表的項目である「やさしさ」「生き方」「容貌」を選択し、それぞれについて知りたいとする場面では、どの手段をどの程度用いるかについて回答を求めた。自分を知る手段は、高田(1992a)を参考にして独自に以下の6項目を作成した。

- ・自分と人を比べる
- ・自分自身を観察してみる
- ・過去の、人が自分に言ったことや態度を思い出す
- ・人に直接尋ねる

・それとなく、人に尋ねる

・考えるヒントがありそうな本や雑誌を読む

この3側面6項目、計18項目についてそれぞれの手段を使用しそうな程度を尋ね、「3. すると思う」「2. どちらともいえない」「1. しないと思う」の3件法で回答を求めた。

2. 調査対象者

調査対象者は、首都圏の国立大学・女子短期大学の学生305名（男子90名・女子215名）。平均年齢は19.5歳である。

3. 調査期日および実施方法

1994年1月、各大学の教室において心理学概論の授業終了後、質問紙による集団実施法で行った。

第3節 結果

1. 自己情報収集行動

「やさしさ」「生き方」「容貌」の3側面それぞれについて知りたい時、6手段をどの程度用いるかについての回答は、Table 2-7-1に示すようになった。

Table 2-7-1

自己の各側面について知りたい時、各手段をどの程度用いると思うか (%)

自己の側面	やさしさ			生き方			容貌		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3
手段							1…しないと思う	2…どちらともいえない	3…すると思う
自分と人を比べる	17.7	18.7	63.6	21.3	23.3	55.4	11.5	20.0	68.5
自分自身を観察してみる	5.6	20.3	74.1	7.9	13.8	78.4	6.6	14.5	78.9
過去の、人が自分に言ったことや態度を思い出す	6.2	10.5	83.3	10.2	18.0	71.8	12.5	14.8	72.8
人に直接たずねる	57.7	23.6	18.7	62.0	22.6	15.4	62.6	23.0	14.4
それとなく、人にたずねる	36.4	29.2	34.4	47.5	29.8	22.6	44.6	22.6	32.8
考えるヒントがありそうな本や雑誌を読む	41.0	28.9	30.2	41.6	24.3	34.1	38.4	23.0	38.7

自己の側面によって手段選択の割合は少しずつ異なっているが、「自分自身を観察してみる」「過去の、人が自分に言ったことや態度を思い出す」の割合が高く、それに「自分と人を比べる」が続いている。逆に、「人に直接尋ねる」「それとなく、人に尋ねる」「考えるヒントがありそうな本や雑誌を読む」は選択率が低い。

さらに、「やさしさ」「生き方」「容貌」の3側面6手段計18項目の回答を併せて因子分析(主成分分解)を行い、固有値の変化から5因子を抽出した。各因子の固有値は、第1因子3.81、第2因子2.26、第3因子1.68、第4因子1.60、第5因子1.47である。

この5因子についてVarimax回転を行った結果、第1因子は3側面の「人に直接尋ねる」「そ

れとなく、人に尋ねる」に負荷量が高く、「他者への質問」とされた。第2因子は3側面の「考えるヒントがありそうな本や雑誌を読む」に負荷量が高く、「雑誌・本」と命名された。第3因子は3側面の「自分と人を比べる」に負荷量が高く、「他者との比較」と考えられた。第4因子は「やさしさ」「生き方」の「過去の、人が自分に言ったことや態度を思い出す」に負荷量が高く、「社会的フィードバック」と命名された。第5因子は3側面の「自分自身を観察してみる」に負荷量が高く、「自己観察」と命名された。以上5因子の累積寄与率は60.1%であった。

各側面に負荷量の高い項目を尺度項目とし、得点を単純加算する形で尺度得点を算出した。

2. 各変数の関連

仮説の検討を行うために、パス解析を行った。本調査で扱った変数の仮説に基づく因果関係は次のようになる。第1に「相互依存的自己理解」が自己概念変動性の原因として設定される。第2に、自己概念変動性が自己認識欲求の喚起要因となる。第3に、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求が5つの情報収集手段の背景として設定される。

以上の仮説に基づき解析を行った結果、Table 2-7-2 に示す結果が得られた。

Table 2-7-2 重回帰分析の結果 (標準偏回帰係数)

説明変数	基準変数				
	他者への 質問 (294)	雑誌・本 (294)	他者との 比較 (294)	社会的フィ ードバック (294)	自己観察 (293)
“相互依存的自己”	-0.10	0.00	0.23***	-0.06	-0.12
自己概念変動性	0.10	0.15*	0.05	0.10	0.07
自己認識欲求	0.15*	0.22***	0.24***	0.13*	0.17**
ネット型情報回避	0.03	-0.01	0.04	0.05	-0.09
重相関係数	0.20*	0.29***	0.42***	0.16	0.19*

説明変数	基準変数		
	自己概念 変動性 (294)	自己認識 欲求 (294)	ネット型 情報回避 (294)
“相互依存的自己”	0.17**	0.37***	0.00
自己概念変動性		0.15**	0.23***
自己認識欲求			0.07
ネット型情報回避		0.07	
重相関係数	0.17**	0.42***	0.26***

()内はN ***P<.001 **P<.01 *P<.05

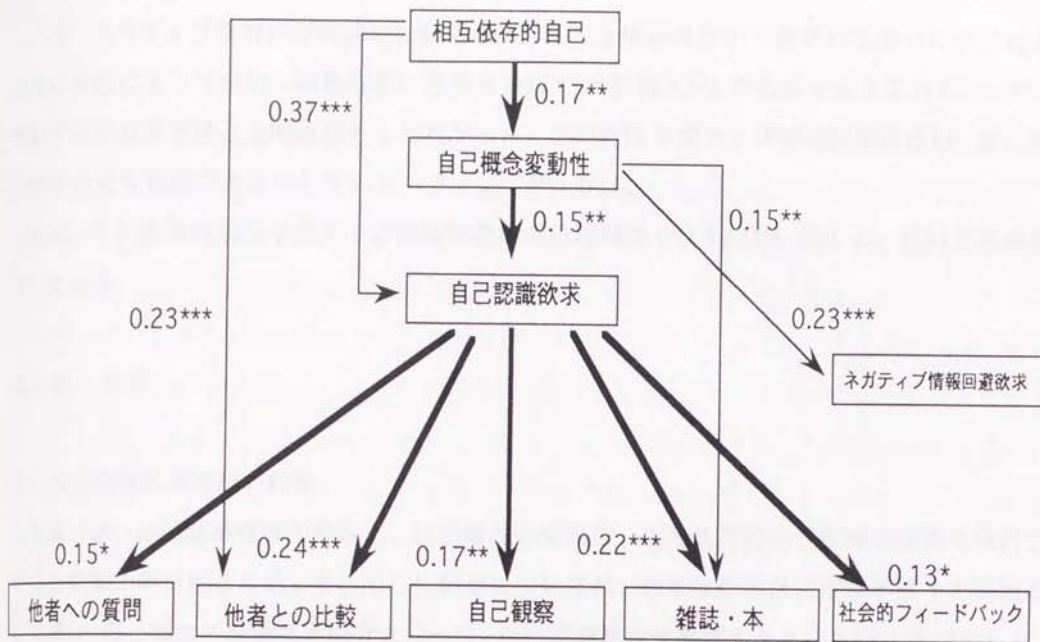


Figure 2-7-3 各変数の関連(数値はパス係数)

注 標準偏回帰係数の検定の結果、有意なもののみを図に示した

*** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

これを図化したのが Figure 2-7-3 である。

“相互依存的自己理解”は自己概念変動性との間に有意なパスを示し ($\beta = .17$ $P < .01$)、自己概念変動性は自己認識欲求との間に有意なパスを示している ($\beta = .15$ $P < .05$)。この結果は、相互依存的自己理解が自己概念不安定を媒介として自己認識欲求を喚起させるという仮説1を支持するものとなっている。ただし、“相互依存的自己理解”は自己認識欲求との間にも直接パスを示している ($\beta = .37$ $P < .001$)。この点から、相互依存的自己理解が自己認識欲求喚起に影響を及ぼす過程には、自己概念不安定を媒介とする間接的な過程と、直接的な過程とがあると解釈される。

また、情報収集行動の心理的背景として、本調査では自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求を仮説していた。このうち自己認識欲求は全ての収集手段との間に有意なパスを示し、仮説2が支持された。

一方、ネガティブ情報回避欲求については「否定的な情報収集が予期される場合に自己認識欲求の喚起によって生じし収集行動に影響を及ぼす」(仮説3)との仮説を立てていた。しかしはいずれの収集手段とも関連はみられなかった。この他にネガティブ情報回避欲求は、自己概念変動性と有意なパスを示している ($\beta = .23 P < .01$)。

なお、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の相関は $r=0.14 (P < .05)$ と、低い正の値を示している。

第4節 考察

1. 自己認識欲求喚起の背景

本章では、自己認識欲求の喚起と、自己概念の変動性、相互依存的自己理解の関連を検討することを第1の目的とした。そしてこの関連については、相互依存的自己理解が第1の原因としてあり、自己概念の変動性が媒介となって、自己認識欲求を喚起するとの仮説1を設定した。

分析の結果、相互依存的自己理解が自己概念の変動性をもたらし、自己認識欲求を喚起させるという仮説が検証された。自己認識欲求は仮説では自己概念不明確感をもたらす状況によって喚起されるとされていたが、相互依存的自己理解という特性も自己概念不明確感を媒介として自己認識欲求喚起に結び付くことが示された。

2. 自己認識欲求と情報収集行動

本調査では、自己認識欲求喚起によって情報収集行動が生起することを仮説2として設定した。仮説検証のために自己情報収集行動と心理変数との関連を分析したところ、自己認識欲求が様々な自己情報収集行動を促進することが明らかとなった。これは、自己認識欲求喚起が自己情報収集行動をもたらすという、第3章～第7章の結果を確認するものとなっている。さらに関連の仕方についてみると、自己認識欲求は“自己観察”という自己洞察的な手段、“他者への質問”“他者との比較”という他者関係を通じた手段、“心理テスト”や“雑誌・本”という自己や他者関係いずれとも無関係な手段など、様々な自己理解手段との関連を示している。以上の点から、自己認識欲求は情報収集行動全般を喚起させるものであり、喚起後にいずれの手段が選択されるのかについては、他の心理要因が影響及ぼすものと結論できよう。

一方、本調査では当初、相互依存的自己理解傾向を自己概念不安定をもたらす要因として仮説した。しかし以上の結果を鑑みると、相互依存的自己理解傾向は、他者との関わりを広範囲に規定する要因として理解することも可能である。この点については改めて検討を行う必要が

ある。

3. ネガティブ情報回避欲求

自己認識欲求のモデルでは、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求喚起に伴う情報収集行動に影響を及ぼすと仮説されていた。ただし、本調査ではこの関連が明確には示されなかった。

この理由として次のことが考えられる。ネガティブ情報回避欲求は、情報収集行動が行われる際に否定的な情報が予期される時に喚起され、その情報を避けようとするものである。言い換えれば、不明確になった自己概念を明確にすることによって、自己評価が低下すると予想される場合に特に喚起されると推測される。本調査では、場面想定法を用いて情報収集量を測定しているため、「やさしさ」「生き方」「容貌」いずれについても知りたいと回答することが直接自己評価の低下に結び付くとはイメージされにくかったと考えられる。

ところで、パス解析の結果、変動性が高いものはネガティブ情報回避欲求を喚起しやすいことが示唆された。

Campbell (1990) は、自己概念の不明確さが自己評価の低さに結び付くことを指摘している。この点から、変動性の高さは、自己評価の低さを媒介としてネガティブ情報回避欲求に結び付くことが推測される。第5章でもネガティブ情報回避欲求は、パーソナリティ特性のひとつである拒否されたくない欲求と有意な相関を示した。これらの結果から、ネガティブ情報回避欲求は、自己認識欲求喚起の結果自己評価の低下が予期される状況で喚起されるとともに、比較的永続的な特性として位置づけることも可能である。つまり、長期にわたり不明確でそれが自己評価の低下をもたらしているような時には、常に自己情報を回避する態勢をとっているとも推測される。

4. 自己認識欲求の仮説モデルとの対応

本調査は、自己認識欲求が自己概念不明確感によって喚起されることを改めて確認した。さらに、自己認識欲求喚起によって様々な方法による情報収集行動が生じることを確認した。また、ネガティブ情報回避欲求と情報収集行動の関連については明確には示されなかった。これは、本調査で設定した情報収集行動が、いずれも自己評価低下をもたらすものとは予測されないものであったためと考えられた。

5. 本研究の問題点と他章との関連

本研究ではネガティブ情報回避欲求と情報収集行動の関連については明確には示されなかった。上記のようにこれは、本調査で設定した情報収集場面が、いずれも自己評価の低下とは結び付きにくいものであったためと考えられる。第5章や第6章のように、自己評価の低下が明らかに予測できる状況ではネガティブ情報回避欲求と情報収集手段の関連が示されている。この点から、ネガティブ情報回避欲求と自己認識欲求の関連を明確にするには、収集される情報の性質を明確にすることが必要であることが確認された。

第8章 収集される情報と収集手段の関連 1)

1) 本章は、「上瀬由美子 1990 『自己認識欲求に関する研究 (3)』 日本グループ・ダイナミックス学会第38回大会発表論文集, 79-80.」に加筆したものである。

第1節 目的

第3章～第7章では、自己認識欲求の高い者ほど自己に関する情報収集手段へ強く接近する事が確認された。ただし、ここで明らかになったのは、自己認識欲求喚起に伴う情報収集量の増加という量的な問題である。そこで本章では質問紙法による調査を行い、自己認識欲求喚起に伴って生起する情報収集行動は質的に異なるのか否かについて検討する。

第7章では、様々な手段と自己認識欲求の関連を検討しているが、場面想定法で用いられた知りたい自己の側面は、3側面に限定されており、側面別の差は明確ではない。さらに情報収集手段も6つに限定されていた。

そこで本調査では収集する情報の内容と手段を多様にし、自己認識欲求の高さと併せて検討することを本調査の目的とする。

第2節 方法

1. 調査対象者

調査対象者は都内私立大学女子学生236名である。このうち回答に不備のあったものを除き、残りの233名を有効回答者とした。平均年齢は18.9才である。

2. 質問紙構成

(1) 自己に関して知りたい情報とその収集手段

“自分に関する～を知りたい時”という11場面を設定し、何を使ってそれを知ろうとするかについて、回答を求めた。

11場面の設定にあたっては、大学院生11名を対象の予備調査（自分について知りたい事を自由記述してもらう形式）を行なった。その結果を整理して、自己について知りたい内容を次にあげる11個に決定した。

1. 将来に関するもの3項目

・自分にはどんな職業が向いているのか

・今後の進路はどうすれば良いのか

・自分にあったアルバイト

2. 外見に関するもの 2 項目

・自分にはどのような髪型が合うか

・自分にはどんな洋服が似合うのか

3. 恋愛に関するもの 2 項目

・自分にあった恋人はどのような人なのか

・自分の異性との付き合いは、進んでいるのか遅れているのか

4. 能力に関するもの 2 項目

・自分が今勉強している事は自分に合っているのか

・自分の趣味をもう少し向上させるにはどうしたら良いか

5. 対人関係に関するもの 2 項目

・自分の性格で直したい部分があり、どうしたら良いか

・対人関係をもっと円滑にする為に、自分はどのようにふるまえば良いか

手段については、あらかじめ場面ごとにいくつか用意しておき、その中からあてはまるもの全てに○をつけてもらった。用意した手段は、“自分で考える”“友人に聞く”“先生に聞く”“家族に聞く”“先輩に聞く”““心理テスト”をやってみる”“専門の雑誌を読む”“専門家や詳しい人に聞く”“専門の本を読む”“その他”である。また、11の場面は5場面と6場面に分けられ、質問紙にはそのどちらかが掲載されている。

(2) 自己認識欲求に関する項目

第5章で作成した自己認識欲求尺度13項目を用い、回答方法および得点化も第5章と同様に行った。

第3節 結果

1. 自己に関して知りたい内容と、情報収集手段の関連

11の場面における各手段の選択率を求め、その値について双対尺度法を用いて分析した。双対尺度法は、西里(1982)によって開発されたものであり、多変量カテゴリーカルデータの構造分析のための手法である。データマトリックスの分散比を用いる等の方法により、行の重みづけと列の重みづけの間の双対関係を表現するものである。外的基準によらず、内的一貫性の原

理からカテゴリーの数量化を行う点で、質的データにおける主成分分析に対応するものとも位置づけられている (Nishisato, 1991)。

本研究では、分析にあたって、回答手段としてあらかじめ設定されていない場合が多かった“回りの人”と“先生”を除いた9つの手段をX値、場面をY値として解析した。

各軸に対するスコアをXとY同時に平面にプロットした結果、Figure 2-8-1に示すようになった。布置を見ると、手段と内容の組み合わせは大きく4つの群に分かれている。まず、図の上の方には、「異性」「恋人」などについて知りたい場面がまとまっており、恋愛問題に関するグループと考えられる。この問題には、“雑誌心理テスト”“雑誌”が情報収集手段として選択されている。また“友人”も、やや接近している。

次に、図の中央には、「対人関係」「性格」「アルバイト」「洋服」などの問題が集中しており、身の回りの問題に関するグループと考えられ、これには、“友人”“自分”の2つの手段が選択されている。

図の下の方は、「進路」「勉強」「職業」などの問題が集まり、将来に関する問題のグループと考えられる。これには“先輩”“家族”が手段として選択されている。ただし、「勉強」と「職業」は“自分”とも接近している。

これら3つの群と離れて、図の左側には、「髪型」という問題が位置し、この問題の解決には“専門の本”と“専門家”の2つの手段が選択されている。

以上の結果から、回答者は求める内容によって、情報収集の手段を選択している事が示された。人は自分自身について何か知りたい事が発生した場合には、問題に応じて、最も有効な情報を与えてくれると予測できる手段を、選択していると考えられる。

2. 自己認識欲求の高さと、手段選択の関係

自己認識欲求の尺度得点の高低で全体を3群(H群・L群・M群)に分け、それぞれの群ごとに再度、双対尺度法を用いて分析した。その結果、H群とL群のプロット図はFigure 2-8-2、Figure 2-8-3のようになった。

H群とL群を比較すると、おおまかな問題と手段との配置は類似しているが、場面と手段の分離の程度に差がみられる。H群では、問題と手段とがいくつかのグループに分かれて、それぞれが分離する傾向がある。それに対しL群は、各プロットは中央近くにまとまる傾向がある。

以上の事から、自己認識欲求の高い者は低い者に比べ、自己に関して情報を収集する場合に、有効な手段を選択して接近する事が推測される。

自己認識欲求が低い場合の自己情報収集行動は、自己確証過程にあたるものと考えられる。

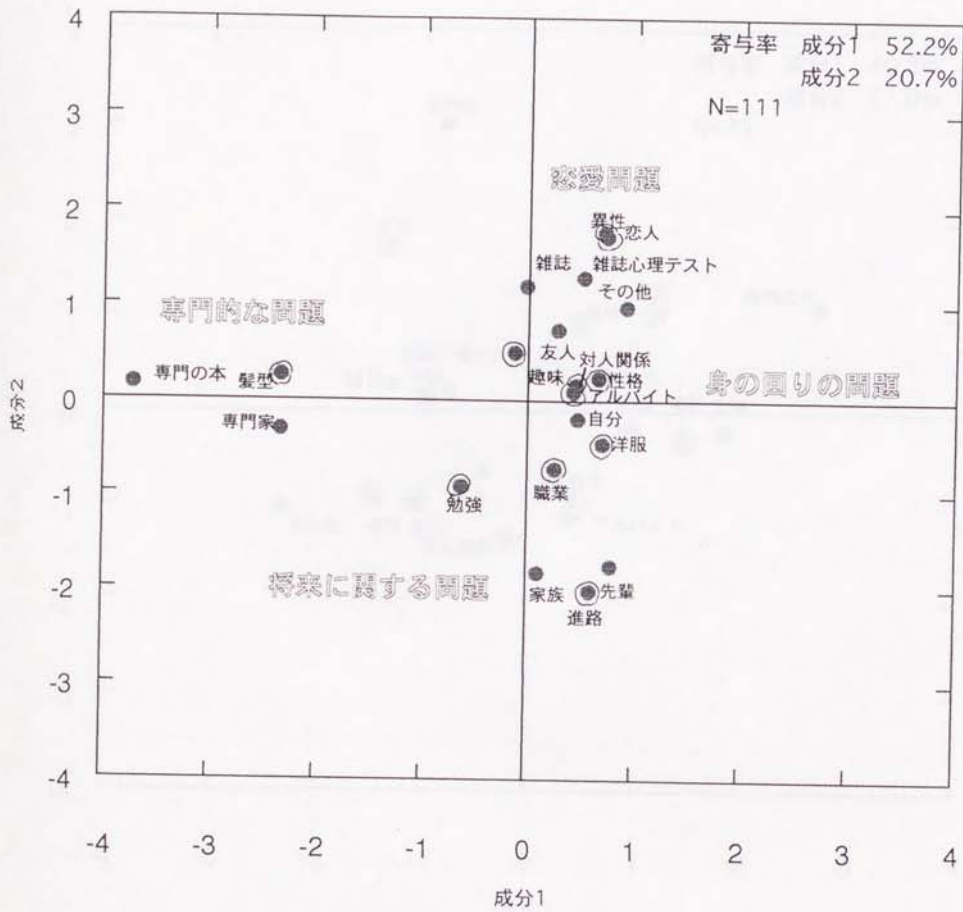


Figure 2-8-1 自己認識欲求の内容と情報収集手段の関係

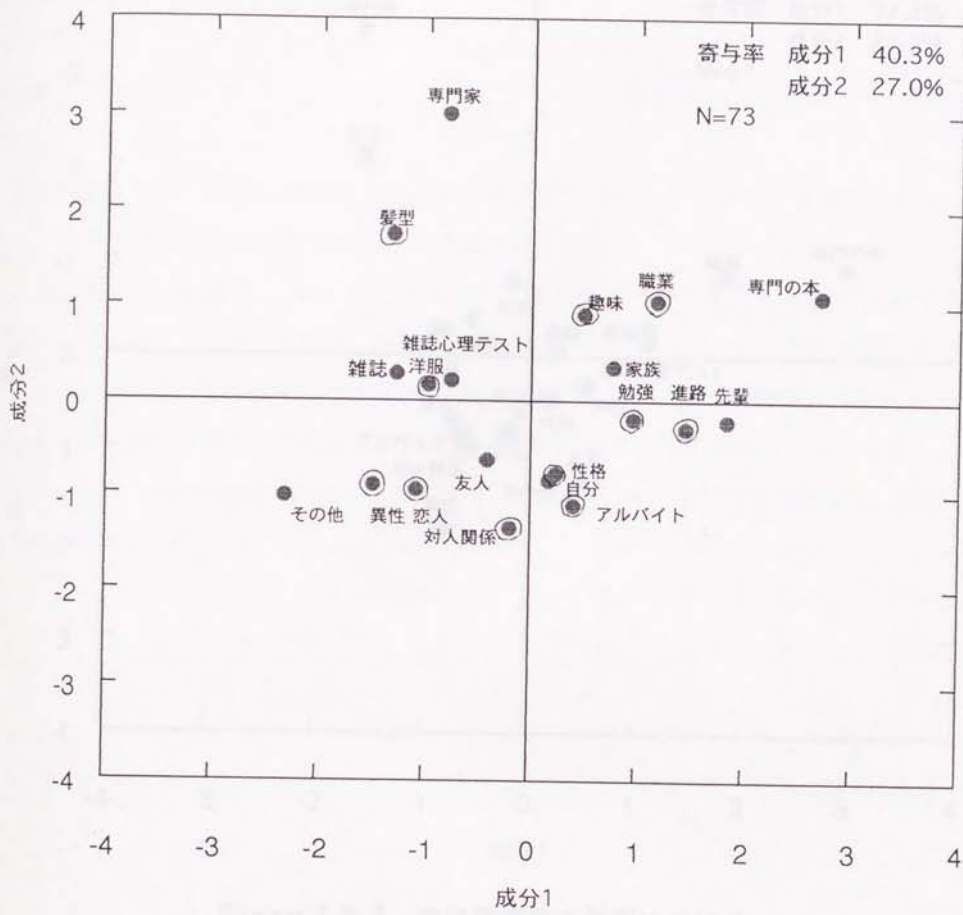


Figure 2-8-2 自己認識欲求高群における
自己認識欲求の内容と情報収集手段との関係

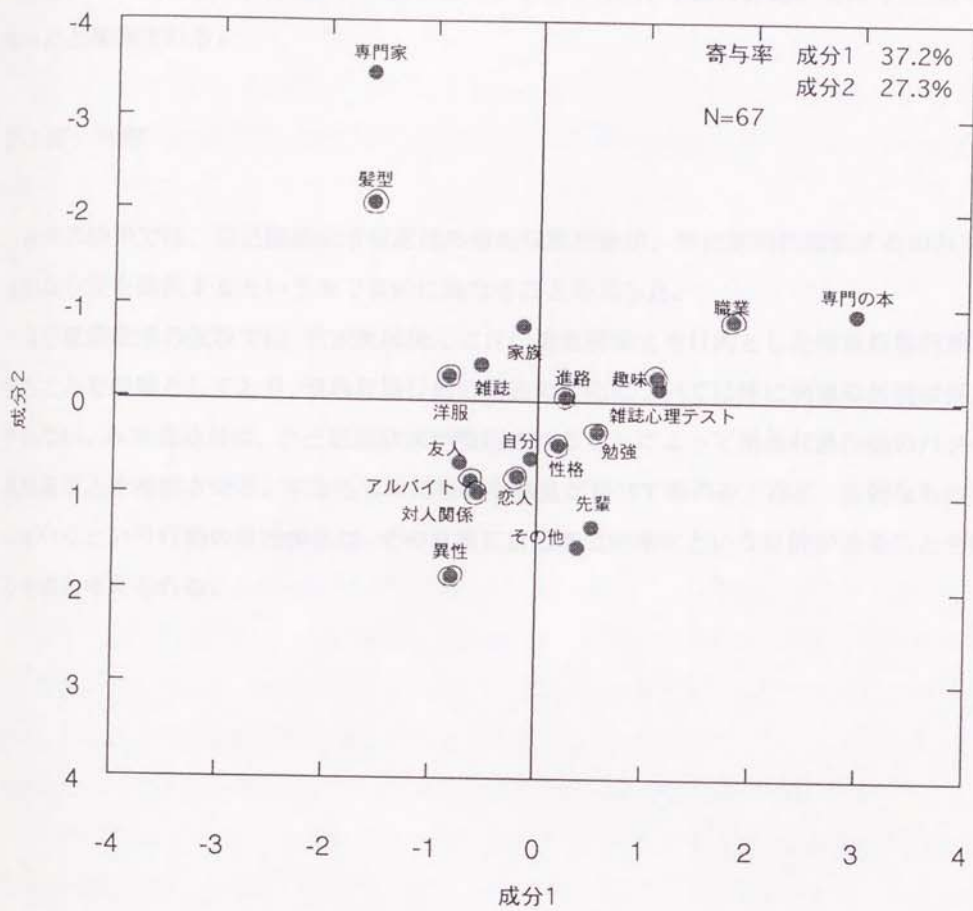


Figure 2-8-3 自己認識欲求低群における
自己認識欲求の内容と情報収集手段との関係

この際の情報収集は、自己確証理論に従えば意識的ではない。自己の何を明確にしたいかという意識のない回答者は、情報収集手段に漠然と接近する為、手段の分離が明確ではない結果になったと推測される。

第4節 考察

本章の結果では、自己認識欲求喚起後の情報収集行動が、単に量的に増加するのみでなく、有効な手段を選択するという形で質的に異なることを示した。

自己認識欲求の仮説では、欲求喚起後には自己概念明確化を目的とした情報収集行動が生起することを問題としており、情報収集行動の構造の変化については特に明確な仮説は提示されていない。本調査結果は、自己認識欲求が喚起されることによって情報収集行動のパターンが異なることを推測させる。すなわち単に情報収集量が増加するのみでなく、有効なものを選択していくという行動の質的变化は、その背景に自己概念明確化という目的があることを確認するものと考えられる。

第9章 自己認識欲求と他のパーソナリティとの関連

第1節 本章の目的

本章では3つの調査を実施し、自己認識欲求と他のパーソナリティとの関連を分析する。これによって、自己認識欲求尺度で測定された心的傾向の性質をより明確にすることができると思われる。

また併せて、この結果から自己認識欲求の妥当性を検討する手がかりを得たいと考える。

第2節 調査1

1. 目的

調査1では、外的統制・内的統制感と、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との関連を検討する。

自己への関心の高まり現象と併せて取り上げられるのが、占いや自己啓発セミナーなどの手段である。これらはいずれも自己情報収集に際して、他者の意見を尋ねそれに従う方法をとるものである。ここには、自分の行動を自分自身でコントロールするのではなく、他者の基準に従おうとする心理が窺われる。そこで本研究では、Rotter (1966) の Locus of Control の尺度を用い、他者の基準に従おうとする心理と自己認識欲求の関連を検討する。

Rotter (1966) は、自分の行動がその結果をコントロール出来るという信念が、行動の学習や遂行に影響すると考えた。ここで、自分の能力や技能によって結果がコントロールされているという信念を内的統制 (Internal Control)、結果が運や他者などの外的要因によってコントロールされているという信念を外的統制 (External Control) と呼んだ。この外的-内的統制のことを Locus of Control という。

2. 方法

(1) 質問紙構成

本調査は質問紙法によって行った。年齢に関する質問の他に、以下の項目について回答を求めた。

1. 自己認識欲求尺度

第1章で作成した自己認識欲求尺度14項目および、第5章で作成したネガティブ情報回避欲求尺度8項目を使用した。回答形式は、「5. あてはまる」から「1. あてはまらない」の5件法

であり、得点化は作成した各章と同様に行った。

2. 外的統制・内的統制に関する項目

鎌原・樋口・清水（1982）の Locus of Control 尺度を用い、5件法で回答を求めた。

(2) 調査対象者

調査対象者は、首都圏の国立大学・私立大学・女子短期大学の学生655名（男子196名・女子457名・不明2名）。平均年齢は18.6歳である。

(3) 調査期日および実施方法

1993年4月、各大学の教室において心理学概論の授業終了後、質問紙による集団実施法で行った。

3. 結果

尺度の相関は、Table 2-9-1 に示すようになった。

Table 2-9-1 各尺度の関連

		自己認識欲求	ネガティブ情報回避欲求
外的統制	全体	0.15*	0.22**
		(631)	(642)
	男子	0.16*	0.23**
	(186)	(191)	
	女子	0.16*	0.20*
	(443)	(449)	
内的統制	全体	0.04	-0.14*
		(630)	(641)
	男子	0.11	-0.09
	(189)	(194)	
	女子	-0.01	-0.19*
	(439)	(445)	

自己認識欲求は外的統制と有意な正の相関を示すが、内的統制とは無関連である。この点から、自己認識欲求は、自己や環境の行動の原因を外的な要因に置き、自分自身にコントロール感の無い人ほど高いと指摘される。自己の行動の説明を外部におく場合には、状況によって提示される情報が変化する可能性が高い。従って、既存情報と新情報の矛盾が生じやすいため、自己概念不明確感を結果として高めているのではないかと推測される。

また、ネガティブ情報回避欲求は外的統制と正の、内的統制と負の相関がみられた。外的統制感をもつ場合、自己の行動の基準は他者にある。従って自己に否定的な情報を他者から提示された時には、それを正確な情報と受けとめるため直接自己評価の低下に結び付く。従って、否定的情報を常に避けたいという心理との結び付きが示されたと考えられる。同様に、自分に基準がない人ほど他者の否定的意見を避けようとする解釈される。逆に、内的統制感が強い場合には、収集した他者からの情報が間違っていたと感じれば、それを棄却することが可能である。このため、自分を知りたい時に否定的情報を避けようとする心理は低くなると考えられる。

第3節 調査2

1. 目的

調査2では、同調・依存傾向および決定依存傾向と、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との関連を検討する。

近年の自己認識欲求の高まりの例として各種のセミナーや「心理テスト」(中島,1992)の流行を挙げることができる。これらの流行については、自己理解のための情報を他者に全面的に依存するような受け手の姿が問題として指摘されることが多い。例えば宮本(1989)は、最近の「心理的技法を用いた各種セミナー」に参加する人々の中にみられる受け身の態度を批判している。また上瀬(1991)は“雑誌心理テスト”の受け手の中に、他者の提示した情報を無批判に取り入れる者が多いことを明らかにしている。これらの指摘はいずれも、「自分がすべきことや進む方向を他者に決めてもらおうとする」傾向を、近年の自己認識欲求の高まりに結び付けて論ずるものである。この傾向を本調査では“決定依存”と呼ぶこととする。ただし、両者の関連について実証的研究はなされておらず、理論的推測にとどまっているため本研究ではこれを確認する。

また、決定依存項目は従来の対人態度の中では、同調傾向に最も類似している。そこで本調

査は、この傾向を測定するもうひとつの尺度として、加藤・高木（1981）の対人態度尺度の中から、「同調・依存」の下位尺度を使用し、同様に自己認識欲求との関連を検討する。

2. 方法

(1) 質問紙構成

本調査は質問紙法によって行った。年齢に関する質問の他に、以下の項目について回答を求めた。

1. 自己認識欲求尺度

第1章で作成した自己認識欲求尺度14項目、および第5章で作成したネガティブ情報回避欲求尺度8項目を用いた。回答方法および得点化も同様に行った。

2. 決定依存の項目

本調査では、決定依存に関する以下の6項目を独自に作成した。「何か重大なことを決める時には、人にアドバイスを求めることが多い」「重大なことを決める時には、自分ひとりで決定する」「自分でいろいろなことを決定するのが苦手だ」「何事も、自分で考えるより、人に決めてもらった方が気が楽だ」「普段、友人にいろいろと相談をもちかける方だ」「悩んだり困ったりした時には、できるだけ自分の力で解決しようとする方だ」。いずれも「5. あてはまる」から「1. あてはまらない」の5件法で回答を求めた。ただし「重大なことは自分ひとりで決定」「悩んだ時は自分の力で決定」の2項目は、逆転項目として「あてはまらない」を5点として得点化した。

尺度の内的一貫性を確認するために主成分分析を行った結果、第1主成分に全ての項目が.40以上の高い負荷量を示し、第1主成分の固有値は2.69であった。そこでこの6項目を単純加算する形式で尺度得点を算出した。尺度の α 係数は $\alpha = 0.82$ である。

3. 同調・依存の項目

加藤・高木（1981）の対人態度尺度の中から、「同調・依存」5項目を使用し、「5. あてはまる」～「1. あてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

(2) 調査対象者

調査対象者は、首都圏の国立大学・女子短期大学の学生305名（男子90名・女子215名）。平均年齢は19.5歳である。

(3) 調査期日および実施方法

1994年1月、各大学の教室において心理学概論の授業終了後、質問紙による集団実施法で行った。

3. 結果

結果は Table 2-9-2 に示すようになった。

Table 2-9-2 各尺度の関連

		自己認識欲求	ネガティブ情報回避欲求
決定依存	全体	0.31*** (302)	0.08 (302)
	男子	0.40*** (88)	-0.09 (88)
	女子	0.27*** (214)	0.16* (214)
同調・依存	全体	0.30*** (305)	0.18** (305)
	男子	0.23* (90)	0.07 (90)
	女子	0.33*** (215)	0.23*** (215)

自己認識欲求は決定依存、同調・依存いずれとも有意な正の相関を示している。自分を知りたいという気持ちには、他者に決定の基準を置き、自己にかかわる決定を他人にまかせようとする心理が強く関わっていることが推測される。これは同調や依存傾向が、他者に基準を置くという意味で外的統制感とある意味で類似の心理であることと関連があるとも考察される。

また女子では、ネガティブ情報回避欲求と決定依存、同調・依存と有意な相関を示している。これも、他者に基準がある場合には、他者からの自己情報が直接自己評価の低下に結び付いてしまいやすいためと解釈される。

第4節 調査3 1)

1) 本調査は、「上瀬由美子・松井豊・古沢照幸 1991『血液型ステレオタイプの形成と解消に関する研究』都立立川短期大学紀要,24,55-65.」に発表したものを、共同執筆者の許可を得て再解析したものである。

1. 目的

調査3では、自意識特性、YG性格テストと、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との関連を検討する。

自己認識欲求は自己概念が不明確であることを感じ、自分を知りたいとする傾向を示すものである。不明確である自己を意識し、情報収集を求めている状態は、自己に関心が向いた状態として捉えることができる。既存のパーソナリティ尺度の中で、自己へ関心を向けやすい程度を測定する尺度として自意識尺度がある(Fenigsteinら,1975;菅原,1984など)。自意識尺度は、人が自己に関心を向けやすい程度には個人差があるとの考えに基づいて作成されたものである。自己認識欲求が喚起された状態が自己に関心が向いた状態を示すものと考えれば、自己認識欲求の高い人ほど自意識尺度も高くなると推測される。Fenigsteinら(1975)によれば、自意識の傾向は自己の外的・対人的側面に注意を向けやすい「公的自意識傾向」と、自己の内面に注意を向けやすい「私的自意識傾向」に分かれるという。自己認識欲求は、特に関心を向ける自己の側面については考慮しないため、自己認識欲求の高い者は、公的自意識・指摘自意識とも高いことが推測される。そこで本調査では、菅原(1984)の自意識特性と自己認識欲求との関連を検討し、上記の推測を確認することを目的とする。

一方、第1章の結果からは、不適応状態が自己概念不明確感を媒介として自己認識欲求喚起に結び付くことが示されている。この不適応状態が一定期間継続すると、パーソナリティにも影響を及ぼすと考えられる。それは、例えば抑うつ感や劣等感等に結び付くと考えられる。従って、抑うつ感・劣等感等の不適応性を示すパーソナリティ特性が高いものは、自己認識欲求も高い状態にあると考えられる。本調査では、不適応感その他のパーソナリティを測定する尺度としてYG性格テストを用い、自己認識欲求との関連を検討する。

2. 方法

(1) 質問紙構成

本調査は質問紙法によって行った。年齢に関する質問の他に、以下の項目について回答を求

めた。

1. 自己認識欲求に関する質問

第5章で作成した自己認識欲求尺度、およびネガティブ情報回避欲求尺度を用いた。回答は「5. そう思う」～「1. そう思わない」の5件法で求めた。

2. 公的自意識・私的自意識

菅原(1984)の自意識尺度の項目21項目を使用し、回答は「5. そう思う」～「1. そう思わない」の5件法で求めた。

3. 矢田部ギルフォード性格検査の結果

矢田部ギルフォード(YG)性格検査(成人版)を別に実施し、本調査では各性格尺度について、結果の点数の記入を求めた。

(2) 調査対象者

都内公立短期大学生、女子231名。

(3) 調査期日および実施方法

調査は1990年5月、各大学の講義室において集合調査形式で実施された。

3. 結果

(1) 自意識特性との関連

自意識特性と自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との関連はTable 2-9-3に示すようになった。自意識特性は、自己に注意を向けやすい程度を測定するものである。一方自己認識欲求は、いま個人が自己に関心を向け、自己を知りたいと感じているかを測定するものである。自己の公的部分・私的部分に注意を向けやすい人が現時点での自己への関心も高い傾向があることを示す本調査の結果は、自己認識欲求尺度の基準関連妥当性を示すものと考えられる。

またネガティブ情報回避欲求は、公的自意識とは無関連で、私的自意識と負の相関を示している。私的自意識の強い人は、自己の規準で行動することが知られており、内的統制感に近い概念である。内的統制感とネガティブ情報回避欲求は負の相関を示しており、本調査結果はこれと一貫するものである。

第5章でネガティブ情報回避欲求は、賞賛獲得欲求とは無関係で拒否回避欲求とのみ関連を示していた。賞賛獲得欲求・拒否回避欲求はいずれも公的自意識に強い人にみられる欲求として菅原によって提示されている。ネガティブ情報回避欲求が公的自意識とは無関連であるとの本調査結果は、ネガティブ情報回避欲求が関連するのは拒否回避欲求に限定されることを確認するもの位置づけられる。

Table 2-9-3 各尺度の相関係数

変数名	自己認識欲求	ネガティブ情報回避欲求
公的自意識	0.43*** (222)	0.02 (222)
私的自意識	0.26*** (222)	-0.20** (222)

()内はNを示している。

*** P<.001 **P<.01 *P<.05

(2) YG性格テストと自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との関連

YG性格テストと自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度得点との相関係数は、Table 2-9-4に示すようになった。

これを見ると、主観的で非協調的で思考的に内向な人ほど自己認識欲求が高いことが示されている。主観性の高さは、非現実的で過敏な性格を、非協調性の高さは対人関係の不適応を、思考的外向の低さは思慮深さや些細なことを気にする性格をそれぞれ示している。いずれ傾向も不適応的で自己に意識を向けた状態を示す心理である。第1章では自己認識欲求は不適応感と有意な関連を示しており、その間には自己概念不明確感が推測された。本調査結果も、主観的で非協調的で思考的に内向な人が自己概念不明確感を感じやすく、結果として自己認識欲求を喚起させやすいものと考えられる。

ネガティブ情報回避欲求は、抑うつ性と負の関連を示す他はいずれも有意な相関は示されていない。

Table 2-9-1 各尺度の相関係数

変数名	自己認識欲求	ネガティブ情報回避欲求
抑うつ性	0.09 (186)	-0.18* (184)
回帰性傾向 (気分の変化)	0.06 (184)	-0.04 (183)
劣等感	0.07 (185)	0.04 (183)
神経質	0.11 (186)	0.03 (184)
主観性	0.24*** (186)	-0.12 (184)
非協調性	0.21** (186)	0.04 (185)
攻撃性	0.14 (186)	-0.05 (185)
活動的	0.10 (186)	0.05 (185)
のんきさ	0.14 (186)	-0.04 (185)
思考的外向	-0.21** (186)	0.07 (185)
支配性	0.10 (186)	-0.11 (185)
社会的外向	0.14 (186)	-0.04 (185)

()内はNを示している。

*** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

第5節 全体的考察

3つの調査全体を通して、自己認識欲求は自意識特性および統制感と関連の深いことが示された。自己認識欲求は現在、自己に関心をもっているかを測定するものである。自意識特性は、自己の内面や外面に関心を向けやすい程度を示すパーソナリティ特性であるが、特性として自己に関心を向けやすい人は現在も自己に関心を向けていることが予測される。自意識特性と自己認識欲求の相関が示されたことは、自己認識欲求尺度の基準関連妥当性を示す結果と位置づけられる。

自己認識欲求と、統制感・同調・依存・決定依存との関連は、他者志向的で他人まかせの傾向が、自己認識欲求の喚起と関連が深いことを示している。他者に基準をあわせようとする傾向の強い者は、自己の基準で情報選択を行わないため、他者から構造化されていない自己情報を受けることになる。このため他者から不一致な情報を取り込みやすく、自己概念が不明確になりやすいと推測される。このため、これら外部に基準をおく特性が自己概念不明確感を媒介として、自己認識欲求を喚起させたのだと解釈される。これは第7章において、相互依存的自己と関連が示されたことと一致している。

またYG性格検査との関連は、現在不適応状態にあって自己に意識を向けやすい人ほど自己認識欲求が高いことを示している。これは不適応感が自己概念不明確感を生起し、自己認識欲求を喚起させるという自己認識欲求の仮説モデルの妥当性を示唆するものである。

一方ネガティブ情報回避欲求は、私的自意識と負の、外的統制と正・内的統制と負の相関を示している。これは他者に規準を置く傾向とは正の、自己に規準を置く傾向とは負の関連にあるといえる。各節の考察でも述べたように、他者に基準があると他者から提示された情報を、そのまま自分のものとして受け入れざるを得ない。このため否定的な情報を避けようとする傾向が強いと考えられる。反対に、自己に基準があれば都合のよい時のみ情報を利用することができ、積極的に否定的情報を避ける必要がない。このため、外的基準の高い人はネガティブ情報回避欲求が高く、内的基準の高い人はこの傾向が低いものと考えられる。

第10章 自己認識欲求の構造と情報収集行動

—青年期以降の女性を対象として— 1)

1) 本章は、「上瀬由美子 1992b 『収集される自己情報の内容と収集手段』 日本心理学会第56回大会発表論文集, 222.」に加筆したものである。

第1節 目的

1. 青年期以降の自己認識欲求

第9章までは大学生男女を対象とした自己認識欲求の喚起の問題を明らかにしてきた。そして従来の発達心理学では、自己への関心は青年期に特徴的なものという指摘がなされている。この点から考えると自己認識欲求は青年期に固有のものとなる。しかしながら、自己認識欲求が自己概念不明確感によって喚起されるとの仮説に従えば、青年期以降の人間であっても自己認識欲求が存在すると予測される。

そこで本章では、青年期以降の女性を対象とした調査を行い、自己認識欲求が青年期以降にも存在するといえるのか否かを明らかにすることを第1の目的とする。

2. 求められる自己情報

第1では既存の研究をもとに自己認識欲求の項目を作成し、それにどの程度あてはまるかで自己認識欲求尺度の項目を作成した。ただし、第1章で尺度作成の基にした山本ら(1982)の研究は大学生の自己概念の構造研究であり、内容に偏りがあった可能性もある。そこで本調査では、対象を青年期以降に広げ、さらにあらかじめ項目を作成することなく、回答者に自己認識欲求の内容について自由記述することを求める。これによって、自己認識欲求尺度項目の内容の妥当性を検討することを本調査の第2の目的とする。

3. 自己認識欲求喚起の状況

自己認識欲求の仮説では、欲求喚起の原因として自己概念の不明確感を想定している。第9章までは仮説に従い項目をあらかじめ設定したが、自己知識の非一貫性・矛盾や知識量の不足以外にも自己認識欲求を喚起させる状況があることも予測される。そこで本調査では、自己認識欲求が喚起される状況を自由記述で求め、仮説の妥当性を検討することを第3の目的とする。

4. 自己情報収集手段

これまで自己概念が形成される際の方略についてはいくつかの研究が行われている。例えば自己のパーソナリティ特性を自覚するに至った経緯を分析したSchoneman(1981)は、自己知識は「自己観察」が中心になって獲得されることを明らかにしている。ただしSchonemanの研究では既存の自己概念の形成過程を再認する形で手段を調査しているため、手段の選択と個人の意図との関連は検討されていない。そこで本調査では意図的に人が自己情報を収集する際に用いる手段を特に取り上げ、これを明らかにする事を第4の目的とする。

第2節 方法

1. 質問紙構成

本調査は、質問紙法によって行った。年齢に関する質問の他に、以下の項目について回答を求めた。

- (1) 自分について現在知りたいと感ずることがあるか（「よくある」「ある」「ない」の3件法）
- (2) 自分についてどのようなことが知りたいか（自由記述）
- (3) 自分について知りたいと思う時はどのような時か（自由記述）
- (4) 自分を知りたい場合、実際に用いる手段（自由記述）

2. 調査対象者

都内女子大学、通信教育学部学生（女子）332名。回答者の約半数は20代で平均年齢は32.3才(SD=9.15)である。

3. 調査期日および実施方法

調査は1991年7月、配布回収法によって行った。各教室で授業終了後に質問紙を配布し次回（翌日）の授業時に回収した。

第3節 結果

1. 求められる自己情報

自己について知りたいと感ずることがあるかとの質問については、次のような回答傾向がみられた (Table 2-10-1)。

Table 2-10-1 「自分について知りたいと感ずることがあるか」についての回答

変数名	N	よくある	ある	ない
10-20代	155	27.1	50.3	22.6
30代	84	19.0	56.0	25.0
40代以上	76	19.7	36.8	43.4
全体	315	23.2	48.6	28.3

全体を通してみると、「ある」が半数近くと高く、「よくある」を併せると7割以上の回答者が普段自分について知りたいと感ずることがあることを示している。第9章までは大学生を中心に自己認識欲求を検討してきたが、対象者を大学生以降の女性に広げた本調査でも同様に自己への関心が示されたことから、自己認識欲求を年代を越えた問題として扱うことの妥当性が示されたと考えられる。

続いて、自己について求められる情報の検討を、自分について知りたいことが「よくある(全体の23%)」「ある(48%)」と回答した者を対象として行った。自由記述の分類に際しては、これまでWAI (Who Are You) テスト分類の枠組みとして比較的広く用いられている梶田(1987)の枠組み、および山本ら(1982)の自己認知の枠組を参考としてカテゴリーを作成した(Table 2-10-2)。カテゴリーの作成および分類は調査者が行った。分類後、全回答から60人分の回答をランダムに抜き出し、心理学系助手2名がカテゴリー分類を行った結果、 $\alpha=0.52$ であった。

分類の結果、現在の自己に関する記述が多く、中でも性格に関するものが多数を占めた。次いで挙げられたのは「自己の適性・可能性」であった。

山本ら(1982)では、自己認知の枠組みとして、外面的側面・能力的側面・内面的側面を提出しているが、本調査においては外面的側面は少なく、内面的側面・能力的側面が主であることが明らかとなった。

自己認識欲求尺度項目と比較すると、尺度ではこのような項目がほぼ網羅されており特に偏りはない。ただし、可能性・志向性についての割合が相対的に多いことから、青年期以降の男女を対象とする場合には「可能性」に関する項目を増加させた方がよいと推測される。

Table 2-10-2 求められる自己情報

N=222

内 容	%
<自己の現状>	
能力	能力 11.5
	体力・生理的側面 1.4
	その他 2.4
性格	性格 31.1
	長所 2.4
	短所 5.3
	個性 1.9
	意志の強さ 1.4
	その他 4.8
考え・行動の評価	自分の考えや行動が正しいか 5.3
	価値観 1.9
	自分の判断や行動の原因 5.3
	その他 4.8
他者との関係	他者からどう見られているか 9.1
	他者との相性 1.4
	その他 5.3
不可知な本質	本当の自分・本質 10.0
	自分の本心・気持ち 6.2
	その他 0.5
自分の改善法	1.9
外見	1.4
<可能性・志向性>	
	本当にしたいこと 16.3
	自分にとってよい生き方 6.7
	適性・可能性 21.1
	未来の自分の姿 5.7
	運命 2.4
	自分の存在意義 1.9
	今すべきこと 2.9
	その他 0.0
<過去の自分>	
	1.0
<その他>	
	6.7

(%) はそのカテゴリーに該当する回答を記述した者の割合

2. 自己について知りたいと感じる時

自己について知りたい感じる時（喚起状況）の検討は、自分について知りたいことが「よくある（全体の23%）」「ある（48%）」と回答した者を対象として行った。「どのような時に知りたいと感じるか」の問に対する自由記述方式の回答をKJ法によってまとめたところ、Table 2-10-3 に示す結果となった。

分類の結果「不適応状態」や「対人関係の不適応」が状況として多く挙げられ、自己への関心は不適応感と強く関連していることが明らかとなった。また「決断をする時」「生き方を考えた時」「人生の転機」はいずれも選択的状況であり、これは既存の自己知識では対応できない場面であり、自己知識量の不足の状況にあたりと考えられる。この場面は従来の発達心理でアイデンティティ再確立の時期とされたものに対応する。一方「他者評価を気にする時」など自分が評価される状況においても自己への関心が喚起されることが示されている。これは従来自覚状態の文脈で扱われてきた側面であると考えられる。

以上いずれも自己認識欲求仮説モデルで、「自己知識の矛盾・不一致の意識」「自己知識の不足の意識」としたものと対応している。この点からも、モデルの妥当性が示唆される。

Table 2-10-3 自己関心の喚起状況

N=216

知りたいと感じる時	%
〈決断をする時〉	
決断や選択をする時	19.4
迷っている時	7.9
〈不応状態〉	
失敗をしたりうまく行かない時	14.4
落ち込んだ時	6.9
行き詰まったり壁にぶつかった時	2.8
悩みのある時	3.7
感情的になった時	4.6
不安感・自信喪失の時	2.3
自分が他人より劣っていると感じる時	2.3
〈対人関係における不応〉	
他者と意見が対立した時	3.7
他者に自分の考えがうまく伝わらない時	1.9
対人関係にトラブルが生じた時	13.9
〈自分が評価される状況〉	
他者評価を気にする時	2.3
自分の行動を振り返って評価する時	1.4
子供や部下の教育をする時	4.6
責任ある仕事をする時	2.8
適性を知りたい時	4.2
自己紹介・自己PRをする時	0.9
〈生き方を考える時〉	
将来を考えた時	8.8
自分の生き方に疑問を持った時	3.7
〈自己知識の矛盾〉	
他人から自分の気づかない面を指摘された時	3.7
自分の知らない面に気付いた時	1.4
〈人生の転機〉	
人生の転機	5.6
新たに何かを始める時	5.6
〈その他〉	
余裕や考える時間のある時	1.9
漠然と知りたい	2.8
忙しい時	2.3
常に知りたいと感じる	0.9
自分がわからない時	7.9
その他	10.6

(%) はそのカテゴリーに該当する回答を記述した者の割合

3. 自己情報の収集手段

自分について知りたいことがあるとした者に対し、実際取る手段について自由記述方式で尋ねた。結果をSchoneman(1981)の分類を参考にしてまとめたところ、収集手段の中心は「社会的フィードバック」「自己観察」で、「社会的比較」はほとんど用いられていないことが示された (Table 2-10-4)。

Schoneman(1981)の研究では認知経路再認の際に「自己観察」は全員に、「フィードバック」は3/4の人に、「社会的比較」は半数の人に一度は挙げられた事が示されている。手続きが異なるため比較は難しいが、本調査では相対的に「社会的比較」の割合が低めである傾向が窺える。以上の結果から、人が自己情報を意図的に収集する場合には社会的比較の選択順位は低いことが示唆されたといえる。ただし、手段の選択は求められる情報の内容とも関連があると予測され、両者を関連づけた検討が必要である。

Table 2-10-4 求められる情報の収集手段 N=204

情報収集手段	%
＜自己観察＞	
自分で考える	36.3
過去の自分を思い出す	13.7
行動をおこし結果をみる	8.8
リラックス・気分転換	7.8
日記や手紙メモを書く	6.9
経験を経て自然にわかる	4.4
＜社会的フィードバック＞	
人に話したり・聞いたりする	42.6
本を読む	14.2
占い・心理テスト	9.8
雑誌・テレビ	1.0
＜社会的比較＞	
他者と比べる	3.4
＜避ける＞	
	1.5
＜考えない・なにもしない＞	
	2.0
＜わからない＞	
	2.5

(%) はそのカテゴリーに該当する回答を記述した者の割合

4. 回答者の年代と自己への関心

(1) 自己への関心の強さ

全体を年代によって「10-20代」「30代」「40代以上」に分け、「自分について知りたいことがあるか」の問いについて回答に差がみられるかを検討した。回答傾向については、Table 2-10-1 に示した通りである

カイ2乗検定の結果、各年代によって回答に有意な差がみられた ($\chi^2=13.49$ $df=4$ $P<.001$)。そこで、「よくある」を3点、「ある」を2点、「ない」を1点に得点化し1要因の分散分析を行った。その結果、年齢の有意な主効果がみられ ($F(2,312)=4.04$ $P<.05$)、年齢が上がるにつれ「知りたい程度」は減少していることが示された。さらに多重比較を行った結果、「10-20代」と「40代以上」との間に有意な差がみられた。各年代の平均値をTable 2-10-5 に示す。

Table 2-10-5 自己を知りたい程度の年代別比較

変数名	N	M	S.D.
10-20代	155	2.0	0.70
30代	84	2.1	0.66
40代以上	76	2.2	0.76
全体	315	2.1	0.72

(2) 自己への関心の喚起状況

全体を「10-20代」「30代」「40代以上」に分け、内容に関する各カテゴリーに該当する回答をした者の割合を比較した。

その結果「迷った時」では10-20代が、逆に「常に」では40代以上が高かった。また「他者評価」において差のある傾向がみられた。しかし、その他の多くの側面についてはいずれも年齢による差はみられなかった。この点から、自己への関心については年齢による変化がみられるものの、喚起の状況に関する年齢の差は明確にならなかった。ただしこの結果には、調査人数が少ないことと、自由記述という方法を用いたことが関連するとも考えられ、引続き検討が

必要である。

Table 2-10-6 求められる自己情報（年代によって差のみられたもの）

n	該当する回答をした者の割合			カイ自乗値 (df=2)
	10-20代	30代	40代以上	
迷った時	12.6	3.5	0.0	8.35 *
悩みのある時	2.5	0.0	3.7	5.98 +
常に	0.0	0.0	5.3	9.35 **

値(%)は、その項目に該当する記述をしたものの割合を示す。

(3) 求められる情報の内容

全体を「10-20代」「30代」「40代以上」に分け、内容に関する各カテゴリーに該当する回答をした者の割合を比較した (Table 2-10-7)。

その結果「体力・生理」において有意な差が、また「他者評価」において差のある傾向がみられた。しかし、その他の多くの側面についてはいずれも年齢による差はみられなかった。

Table 2-10-7 求められる自己情報（年代によって差のみられたもの）

n	該当する回答をした者の割合			カイ自乗値 (df=2)
	10-20代	30代	40代以上	
体力・生理	0.0	1.7	5.6	5.99 *
他者評価	13.3	5.0	2.8	5.34 +

第4節 考察

1. 青年期以降の自己認識欲求

本調査では、青年期以降にも自己認識欲求が存在するか否かを確認することを第1の目的とした。本調査の結果、青年期以降の回答者にも「自己を知りたい」と感じることもあることが示されたが、その程度は年代の上昇に従って低くなることが示された。

自己認識欲求は自己概念の不明確感から生じると仮説されている。自己知識は経験を通じて蓄積されるため、年代が上がるにつれ自己に関する知識が増加することが推測される。自己概念不明確感をもたらすひとつの状況として自己知識量の不足が仮説されているが、従ってこの状況は経験に基づく知識の増加に反比例して減少すると考えられる。また自己知識の非一貫性や矛盾も、経験によって自己概念が統合されるに従い少なくなることが想像される。従って、各年代で自己知識の矛盾や量の不足が意識されるにしても、全体としては自己認識欲求は低下するという本調査結果が示されたのだと考えられる。

2. 求められる自己情報

本調査では、幅広い年代を対象として自己について知りたい情報を尋ね、自己認識欲求尺度項目の内容の妥当性を検討することを第2の目的とした。自由記述をまとめた結果、求められる自己情報は、査定理論が扱った能力に限定されず、「可能性」「性格」などを中心とし、自己概念全般にわたることが明らかとなった。

第1章で作成された自己認識欲求尺度項目は、山本ら（1982）の自己認知の枠組みと同様、外面的側面・能力的側面・内面的側面の項目を含んでいた。しかし、本調査で示された自由記述の内容では外面的側面は少なく、内面的側面・能力的側面が多かった。

本調査では回答者が青年期以降の女性であった。この結果から、自己認識欲求として求められる情報は年代によって変化すると考えられる。

3. 自己認識欲求喚起の状況

自己認識欲求は、自己概念の不明確感から喚起されると仮説されている。さらにその不明確感には、自己知識の不一致・矛盾と知識不足の意識化の2つの状況があると推測されている。

本調査で示された自己認識欲求喚起状況の中で、「考えと行動のギャップがあった時」「他人から自分の気づかない面を指摘された時」「自分の知らない面に気付いた時」など、自己概念が

不安定になった状況が挙げられている。これは、自己概念内の知識と、あらたに獲得した知識が矛盾していた状況と言い替えることもできる。この状況は、自己概念不明確化をもたらす、自己知識の非一貫性・矛盾の意識化にあたる状況と推測される。

一方、「決断をする時」「生き方を考えた時」「人生の転機」という選択的状況も、挙げられている。これは、新たな場面に遭遇したり決断に当り知識不足が意識化された状況と位置づけられる。以上の点から、自己認識欲求が「自己知識内の非一貫性・矛盾の意識化」「自己知識の不足の意識化」による自己概念の不明確感から生じることが示唆された。

ただし、最も多く挙げられていたのは日常生活の不応感である。不応場面は、従来の自己知識では新たな場面に対応できず、自己を再構成する必要の生じた場面と考えられる。この時、自己概念内の既存の知識やその構造は新たな場面に対して矛盾したものであると同時に、新たな再構成や新しい知識が必要な状況でもある。従って、不応場面とは「自己知識内の非一貫性・矛盾の意識化」「自己知識量の不足の意識化」両方を含む状況と位置づけられる。不応感と自己認識欲求の関連は、第1章で確認されている。

また、「他者評価を気にする時」など自分が評価される状況においても自己への関心が喚起されることが示された。これは従来自覚状態の文脈で扱われてきた場面と考えられる。自覚状態理論では、自己に関心が向いた場合には当該状況の基準に合うよう行動の促進が生じることを明らかにしており、その背後には自己と基準の不一致を低減させようとする動機が存在すると解説している。本調査で挙げられた「自分の行動を振り返って評価する時」「子供や部下の教育をする時」などは自己知識の非一貫性や矛盾を意識した状況と言えるが、「責任ある仕事をする時」「適性を知りたい時」などは自己知識量の不足を意識した状況と考えられる。パーソナリティ特性の関連でも、公的自意識や外的統制との関連が強いことを合わせ考えると、他者を意識するという同様の心理傾向から自己への関心が示されたと考えられる。

以上のように、様々な状況が自由記述によって挙げられたが、全体では自己概念不明確感が生じる背景として「自己知識の非一貫性・矛盾の意識」「自己知識量の不足感」で説明でき、モデルの妥当性が確認されたと考えられる。

4. 自己情報の収集手段

Schoneman (1981)の研究では認知経路再認の際に「自己観察」は全員に、「フィードバック」は3/4の人に、「社会的比較」は半数の人に一度は挙げられた事が示されている。手続きが異なるため比較は難しいが、本調査では相対的に「社会的比較」の割合が低めである傾向が窺える。以上の結果から人が自己情報を意図的に収集する場合には社会的比較の選択順位は低いことが

5. 自己認識欲求仮説モデルとの対応

本調査は自由記述をまとめる方法で分析を行っているため、量的分析に基づくモデル検証は行っていない。ただし、自己認識欲求の仮説確認をする上で、明らかになった点を以下にまとめる。

まず、自己認識欲求は「自己知識の非一貫性・矛盾」あるいは「自己知識の不足」を意識するという状況で生じる自己概念不明確感によって喚起されると仮説されている。自己認識欲求喚起の状況をまとめたところ、その内容のほとんどが「自己知識の非一貫性・矛盾」「自己知識の不足」を意識する状態に含まれており、仮説の妥当性が示された。

また自己認識欲求の内容は自己概念のあらゆる側面にわたっており、人のもつ自己を明らかにしようとする傾向を自己認識欲求の概念で説明することが有効であることを示唆している。

さらに、青年期以降の様々な年代を対象としても自己認識欲求が示されたことから、このモデルが普遍的な心的メカニズムを示すものであることが確認された。

6. 本調査の問題点と他章との関連

本調査の一番の問題点は、調査対象者が特定の大学のサマースクーリングに参加した女性に限定されていたことにある。本調査結果は青年期以降にも自己認識欲求が存在することを示したが、自己の問題について特に意識している者がスクーリングに参加したとも考えられる。従って、青年期以降の男女の一般的な回答傾向を見るには、代表性の高い調査対象者を抽出する必要がある。この点を考慮して、第11章以降ではサンプリング調査の結果をもとに、自己認識欲求のあり方を検討していく。

また、本結果では求められる情報の内容の年代差については明確にはならなかったが、大学生を対象として行った既存の研究と比較すると、自己の可能性といった項目について知りたいとする程度が高い。逆に外的側面については、相対的に求められる割合が低い傾向にある。この点を含め、青年期以降では求められる情報全体が低下するのか、あるいは特定の年代で特定の側面に関心が推移するのか等については、次章(第11章)以降で幅広い年代の回答者に同様の質問を行うことにより検討する。

第11章 高校生にみる自己認識欲求¹⁾

1) 本章は「福富護(監) 1996 『続現代高校生のライフスタイル・意識・価値観』 ライフデザイン研究所」で発表したものを、共同研究者の了解を得て再解析したものである。

第1節 目的

9章までは、主として大学生を中心にして自己認識欲求のモデル検証を行ってきた。10章以降は様々な年代の男女を対象として、自己認識欲求概念の妥当性の検証を行うとともに、自己認識欲求の発達的变化を検討する。

本章ではまず高校生を対象として質問紙調査を行い、大学生以前の自己認識欲求の性質について検討することを試みる。さらに、高校生でも自己認識欲求モデルが適用できるのかを検討する。

1. 自己認識欲求の発達的变化

本章の第1の目的は、現代高校生がどの程度自己認識欲求をもっているのかを検討することにある。

青年期は、自己に関心が向い、自分を問直す時期であると言われている(西平,1979; Spranger,1924)。その一方で現代の青年は、以前のように真剣に自己追求することが少なくなったという指摘もある(加藤,1980;宮崎,1989)。本調査では、自分についてもっと理解したいとする傾向を測定する自己認識欲求測定項目を独自に作成し、現代高校生が自己に対する関心をどの程度もっているのかを検討する。

2. 自己認識欲求仮説モデルとの対応

次に、日常生活やパーソナリティ特性との関連を検討し、自己認識欲求の喚起モデルが、高校生を対象としても適応できるか否かを確認することを第2の目的とする。

本調査で自己認識欲求との関連を検討するのは、次の項目である。

(1) 日常生活の適応感に関する項目

第1章では、日常生活に不適応感を感じている大学生ほど、自己認識欲求が高いことが示されている。ここで不適応は、自己概念の不明確感をもたらす背景として位置づけられている。

本調査では、この関係が高校生にもあてはまるか否かを明らかにするために、「家庭適応」「学校適応」の2側面から不適応感を測定し、自己認識欲求との関連を分析する。

(2) 同一性拡散

高校に通うこの時期は、自己確立の時期にあたる。すなわち、自己概念不明確感を生じる背景として同一性拡散との関連が強いと推測される。そこで本調査で、パーソナリティ特性としてまず、同一性拡散を取り上げて自己認識欲求との関連を検討する。

(3) 劣等感

前章までに考察されたように、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求喚起に伴う情報収集行動が行われる際に、自己評価の低下を予期する場合に喚起するものと考えられている。さらに、比較的永続的なパーソナリティ特性として自己評価が低い場合には、収集される情報で自己評価が低下すると予期する可能性が高くなると推測される。従って、自己評価の低さは、ネガティブ情報回避欲求の高さに結びつくものと位置づけられる。自己評価の低下は状況要因として想定されるが、これがある一定期間続いた状態は劣等感というパーソナリティ要因という形になると考えられる。本調査では、自己評価低下が生じているか否かを、劣等感測定尺度を用いて測定する。

(4) 本調査の仮説モデル

自己認識欲求のモデル (Figure 2-11-1) に、上記の変数を対応させたのが、Figure 2-11-2である。自己概念不明確感を生起させる背景として設定されている場面のうち、不適応状況と同一性混乱を本調査では取り上げた。このうち不適応状況については、家庭での適応と学校での適応の2側面から測定する。

さらに、劣等感はネガティブ情報回避欲求の喚起のしやすさに影響を与えると推測される。

3. 自己認識欲求と他のパーソナリティ特性との関連

本調査の第3の目的は、日常生活やパーソナリティ特性との関連を検討することにある。まず、第9章で関連分析が行われた公的自意識や同調行動を取り上げ、大学生調査と同様の関連が示されるかを検討する。その他に、問題行動・孤独感・精神的疲労といった不適応的な心理と、第9章で自己認識欲求と関連が示された公的自意識・同調傾向を取り上げ、自己認識欲求との関連を検討する。

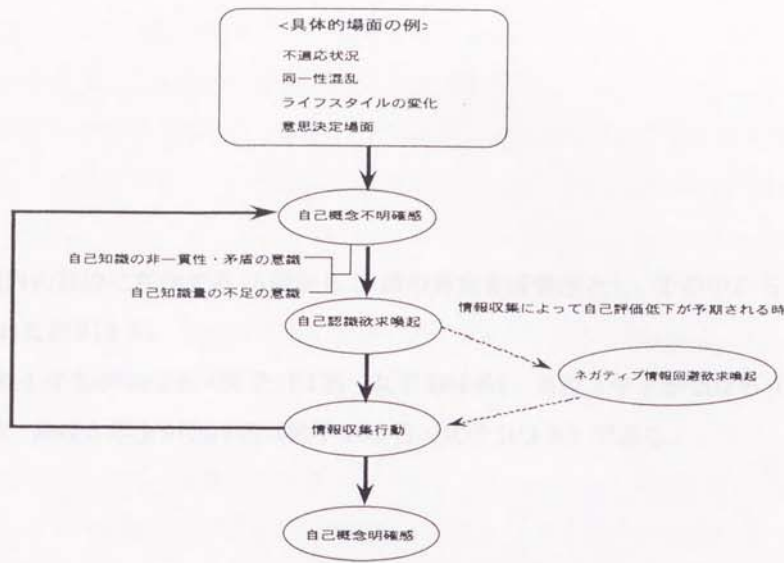


Figure 2-11-1 自己認識欲求の仮説モデル
(第1章で修正されたもの)

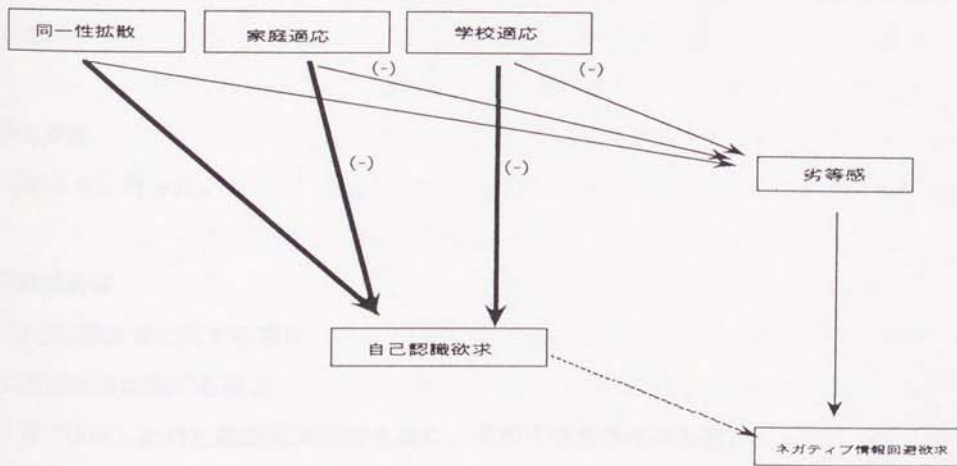


Figure 2-11-2 本調査の作業仮説

第2節 方法

1. 調査対象者

東京50キロ圏内の高校に在学する15歳から18歳の男女を母集団とし、その中からランダムサンプリングされた計611名。

このうち、高校1年生が205名（男子101名・女子104名）、高校2年生が202名（男子102名・女子100名）、高校3年生が204名（男子101名・女子103名）である。

2. 抽出方法

対象地域を町丁単位の地点に分けて、90地点を無作為抽出し（第1段）、各地点の住民基本台帳から該当年齢者を10名ずつ無作為抽出した（第2段）。但し、面接時に対象者が高校に在学していないことが判明した場合には、対象外とした。

3. 調査方法

訪問留置法を用いた。

調査実施以前に両親に調査目的などを説明する依頼状を送付し、了解を得た。留置時には対象者本人に会って、対象者自身の記入を条件に調査を依頼した。回収時には調査票を密封して受領した。

4. 調査期間

1995年5月に行った。

5. 質問紙構成

(1) 自己認識欲求に関する項目

1. 自己認識欲求に関する項目

第1章で作成した自己認識欲求尺度を基に、次の5項目を作成した。

- ・自分についてもっと理解したいと思いませんか。
- ・自分の正確についてもっと詳しく知りたいですか。
- ・自分が本当にしたいことを見つけたいと思いませんか。

・これからの人生で、自分には何ができるかを知りたいですか。

・自分は周囲の人からどうみられているのか知りたいですか。

回答方法はいずれも4件法であるが、選択肢は当該項目の内容によって「よくある（とても知りたい・思う・たくさんある）」～「全くない（全く知りたくない・全く思わない・全くない）」と異なっている。

2. ネガティブ情報回避欲求に関する項目

第5章で作成したネガティブ情報回避欲求尺度から、次の2項目を使用した。

・自分について、聞かなければよかったと思うことがありますか。

・自分について知りたくない部分がありますか。

尺度の得点化に当たっては、回答（4件法）の「たくさんある・よくある」を4点とし「全くない」を1点として、各項目の得点を単純加算した。従って、得点が高いほどネガティブ情報回避欲求が高いことを示している。

(2) 日常生活の適応感に関する項目

1. 家庭適応

本調査では、家庭にどの程度適応しているかを測定する尺度を独自に作成した。使用した項目は、「父母の仲はよその家庭に比べてよい方だと思う」「私は家族から充分愛されていると思う」「うちでは、両親はお互いに協力しあっている」「私の家族の暮らしは恵まれている方だ」「将来は、今のような家庭を自分でも作りたいと思う」「家族と話すのがオックウに感じることもある」「食事の時以外には、家族と顔を合わせたくない」「家族は互いに干渉しない方がよいと思う」の8項目である。各項目について、あてはまる場合を2点、あてはまらない場合を1点（「家族と話すのがオックウに感じることもある」「食事の時以外には、家族と顔を合わせたくない」「家族は互いに干渉しない方がよいと思う」はあてはまる場合を-2点、あてはまらない場合を-1点）とし、8項目の合計得点に、最低得点を1点とするための2点を加算して尺度得点とした。従って、得点が高いほど家庭適応がよいことを示している。

2. 学校適応

本調査では、学校にどの程度適応しているかを測定する尺度を独自に作成した。使用した項目は、「クラブ活動が楽しい」「友人とのつきあいが楽しい」「授業がおもしろい」「よい先生がいる」「学校はつまらない」「学校が楽しい」の6項目である。各項目について、あてはまる場合を2点、あてはまらない場合を1点（「学校はつまらない」はあてはまる場合を-2点、あてはまらない場合を-1点）とし、6項目の合計得点を単純加算する形で得点化を行った。従って、得点が高いほど学校での適応がよいことを示している。

(3) 同一性拡散に関する項目

本調査では、同一性拡散状態を測定する項目を独自に作成した。項目は、「自分自身の何が長所で、何が短所なのかよく分からない」「将来の自分自身について考えたことがまったくない」「現在いいかげんに生きていると将来こまることになると思う」「現在、一番したい事が何なのか自分でも分からない」「今の自分は本当の自分でない気がする」「毎日が単調でつまらない感じがする」の5項目である。回答方法は「はい」「どちらでもない」「いいえ」3件法である。回答結果を主成分分析した結果、「将来の自分自身について考えたことがまったくない」と「現在いいかげんに生きていると将来こまることになると思う」の2項目は第1主成分の負荷量が低かったため、残りの3項目を「同一性拡散」を測定する尺度項目とした。尺度の得点化に当たっては、各回答の「はい」を3点～「いいえ」を1点とし、各項目の得点を単純加算する形で行った。従って、得点が高いほど、同一性が拡散している状態が強いことを示している。

(4) パーソナリティ特性に関する項目

1. 劣等感

本調査では、劣等感を測定する項目として、「東京都大都市高校生の心理的特徴と生活環境」(東京都都民生活局,1979)で用いられた尺度を利用した。項目は、「何かにつけ人より劣っているなど感じる人が多い」「自分をダメな人間だと思ふことがしばしばある」「何に対しても自信を持ってやることができない」の3項目である。回答方法は「はい」「どちらでもない」「いいえ」3件法である。回答結果を主成分分析した結果、3項目の1次元性が確認されたため、この3項目を「劣等感」を測定する尺度項目とした。尺度の得点化に当たっては、各回答の「はい」を3点～「いいえ」を1点とし、各項目の得点を単純加算する形で行った。従って、得点が高いほど劣等感が高いことを示している。

2. 問題行動念慮

本調査では、問題行動につながるような考えをどの程度抱いているかを測定する尺度を独自に作成した。作成した項目は、「学校をやめたいと思うことがある」「死にたいと思うことがある」「家出したいと思うことがある」「人をなぐりたいたいと思うことがある」の4項目である。回答方法は「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法である。回答結果を主成分分析した結果、4項目の1次元性が確認されたため、この4項目を「問題行動念慮」を測定する尺度項目とした。尺度の得点化に当たっては、各回答の「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点とし、各項目の得点を単純加算する形で行った。従って、得点が高いほど問題行動に関連する考えを強く抱いていることを示している。

3. 孤独感

本調査では、孤独感を測定する項目として、「東京都大都市高校生の心理的特徴と生活環境」(1979)で用いられた尺度を利用した。項目は、「自分はひとりぼっちだなと感じることがある」「自分のことをだれも分かってくれないと思う」「自分の本当の心をうちあげられる人がいない」の3項目である。回答方法は「はい」「どちらでもない」「いいえ」3件法である。回答結果を主成分分析した結果、3項目の1次元性が確認されたため、この3項目を「孤独感」を測定する尺度項目とした。尺度の得点化に当たっては、各回答の「はい」を3点～「いいえ」を1点とし、各項目の得点を単純加算する形で行った。従って、得点が高いほど孤独感が高いことを示している。

4. 精神的疲労

本調査では、精神的疲労感を測定する項目として、「東京都大都市高校生の心理的特徴と生活環境」(1979)で用いられた尺度を利用した。項目は、「何となく神経がすり減っている感じがする」「いつも何となくだるい感じがする」「毎日が単調でつまらない感じがする」の3項目である。回答方法は「はい」「どちらでもない」「いいえ」3件法である。回答結果を主成分分析した結果、3項目の1次元性が確認されたため、この3項目を「精神的疲労感」を測定する尺度項目とした。尺度の得点化に当たっては、各回答の「はい」を3点～「いいえ」を1点とし、各項目の得点を単純加算する形で行った。従って、得点が高いほど精神的疲労感が高いことを示している。

5. 公的自意識

本調査では、公的自意識を測定する項目として、菅原(1984)の公的自意識尺度の一部を使用した。項目は、「人に見られていると、つかっこうをつけてしまう」「自分の言ったことを他人がどう受けとったか気になる」「自分の外見を気にする方だ」「人前で何かするとき、自分のしぐさや姿が気になる」の4項目である。回答方法は「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法である。回答結果を主成分分析した結果、4項目の1次元性が確認されたため、この4項目を「公的自意識」を測定する尺度項目とした。尺度の得点化に当たっては、各回答の「あてはまる」を5点～「あてはまらない」を1点とし、各項目の得点を単純加算する形で行った。従って、得点が高いほど、公的自意識が高いことを示している。

6. 同調傾向

友人関係のあり方を中心に、同調傾向を測定する尺度を独自に作成した。使用した項目は、「できるだけ仲間と同じように行動したい」「なにをするにしても皆と一緒にだと安心する」「仲間

はずれにされるのは絶対にイヤだ」「流行遅れになるのはイヤだ」の4項目である。各項目について、あてはまる場合を2点、あてはまらない場合を1点とし、4項目の合計得点を単純加算する形で得点化を行った。従って、得点が低いほど同調傾向が高いことを示している。

第3節 結果

1. 高校生の自己認識欲求

(1) 自己認識欲求

自分について知りたいか、あるいは知りたくないかを尋ねた7項目の回答は、Table 2-11-1に示すようになった。

これを基に、「よくある(とても知りたい)」「たまにある(少し知りたい)」を併せて「肯定層」、「ほとんどない(あまり知りたくない)」「全くない(全く知りたくない)」を併せて「否定層」とし回答を比較した。「自分についてもっと理解したいと思うことがあるか」については、肯定層が69%で、現代高校生においてもこの時期に自己への関心が高まる様子が示されている。さらに、自己の各側面としての「性格」「自分が本当にしたいこと」「今後の人生でできること」「周囲の人からの評価」それぞれについても、肯定層がいずれも7~9割に達している。特に、「自分がしたいこと」「今後できること」と、自己の将来を追求する傾向が高い。

一方、「自分について知りたくない部分がある」「自分について聞かなければよかったと思うことがある」とネガティブ情報回避欲求を示す2項目については、肯定層と否定層が5割づつと2分している。

男女別にみると、すべての項目に有意な差がみられている。肯定層・否定層の2層の形で男女差の検定をすると、「自分について聞かなければよかったと思うことがある」以外で差がみられ、いずれも女子の方が肯定層が多い。

この点から、自己への関心は女子でより高いことが指摘される。ただし女子では「自分について知りたくない部分がある」も男子より肯定層が多かったことから、女子には自分を知りたい一方で否定的な情報を避けたいとするアンビバレントな心理が強いといえる。

性別に学年差を検定したところ、男女ともに有意な差はみられなかった。この点から、高校1年生の時点で自己への関心が既にある程度高まっており、高校在学中はあまり変化しないことが推測される。

Table 2-11-1 自己認識欲求に関する項目の回答

1 自分についてもっと理解したいと思うことがありますか?

	よくある	たまにある	ほとんどない	全くない	不明
男子	23.4	38.5	26	12.2	
女子	23.1	53.1	16.3	7.2	0.3

2 自分の性格についてもっと詳しく知りたいですか?

	とても知りたい	少し知りたい	あまり知りたくない	全く知りたくない	不明
男子	30.3	37.2	19.7	12.5	0.3
女子	36.2	42	14.7	6.8	0.3

3 自分が本当にしたいことを見つけたいと思いますか?

	思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない	不明
男子	65.8	20.4	8.6	5.3	
女子	75.9	18.2	2.6	2.9	0.3

4 これからの人生で、自分には何ができるのか知りたいですか?

	とても知りたい	少し知りたい	あまり知りたくない	全く知りたくない	不明
男子	53.6	27	13.5	5.9	
女子	63.2	28	5.5	2.9	0.3

5 自分について知りたくない部分がありますか?

	たくさんある	少しある	あまりない	全くない	不明
男子	7.2	31.9	40.1	20.1	0.7
女子	7.8	42.3	36.2	13.7	

6 自分について、聞かなければよかったと思うことがありますか?

	よくある	たまにある	ほとんどない	全くない	不明
男子	4.3	42.8	33.2	19.4	0.3
女子	11.1	42.3	36.5	10.1	

7 自分は周囲の人からどうみられているのか知りたいですか?

	とても知りたい	少し知りたい	あまり知りたくない	全く知りたくない	不明
男子	43.1	29.3	17.1	10.2	0.3
女子	44	40.4	13.4	2.3	

(2) 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度

自己認識欲求に関する7項目を因子分析した結果、Table 2-11-2 に示すようになった。

Table 2-11-2 自己認識欲求に関する7項目の因子分析
(Varimax回転後因子負荷量)N=606

変数名	因子 1	因子 2
1.自分についてもっと理解したい	0.715	-0.182
2.自分の性格についてもっと詳しく知りたい	0.824	-0.124
3.自分が本当にしたいことを見つけたい	0.684	-0.065
4.これからの人生でできることを知りたい	0.673	-0.064
5.自分について知りたくない部分がある	0.037	-0.872
6.自分について聞かなければよかったと思うことがある	0.153	-0.842
7.周囲の人からどうみられているか知りたい	0.622	-0.071
寄与率 (%)	36.018	21.875

この結果をもとに、「自己認識欲求尺度」(Table 2-11-2 の1-4,7の5項目を使用)、「ネガティブ情報回避欲求尺度」(Table 2-11-2 の5,6の2項目を使用)を作成した。尺度の得点化に当たっては、各回答の「よくある」を4点～「全くない」を1点とし、各項目の得点を単純加算する形で行った。従って、得点が高いほど両欲求が高いことを示している。

この両尺度得点について男女差を検定したところ、自己認識欲求(男子平均点15.4:女子平均点16.5)、ネガティブ情報回避欲求(男子平均点4.6:女子平均点5.0)ともに、女子の得点が高かった。

2. 自己認識欲求喚起モデルの検証

自己認識欲求モデルの妥当性検証を行うために、パス解析を行った。Figure 2-11-2に示したように、本調査で扱った変数についての作業仮説は次のようになる。第1に、同一性拡散・家庭適応・学校適応が自己認識欲求の喚起要因として設定される。ここで家庭適応・学校適応は低いものほど自己認識欲求が高いとの負の関係が予測される。第2に、同一性拡散・家庭適応・学校適応が劣等感の原因となる。ここで家庭適応と学校適応は、低いものほど劣等感が高いとの負の関係が予測される。第3に、劣等感と自己認識欲求がネガティブ情報回避欲求の原因として設定される。

以上の仮説に基づき解析を行った結果、Table 2-11-3に示す結果が得られた。

Table 2-11-3 重回帰分析の結果（標準偏回帰係数）

基準変数			
説明変数	劣等感 (604)	自己認識 欲求 (600)	ネガティブ情報 回避欲求 (599)
同一性拡散	0.41***	0.17***	-0.01
家庭適応	-0.13***	0.09*	-0.02
学校適応	0.01	0.19***	-0.09*
劣等感		0.23***	0.28***
自己認識欲求			0.18***
重相関係数	0.45***	0.35**	0.38***

これを図示したのが、Figure 2-11-3である。

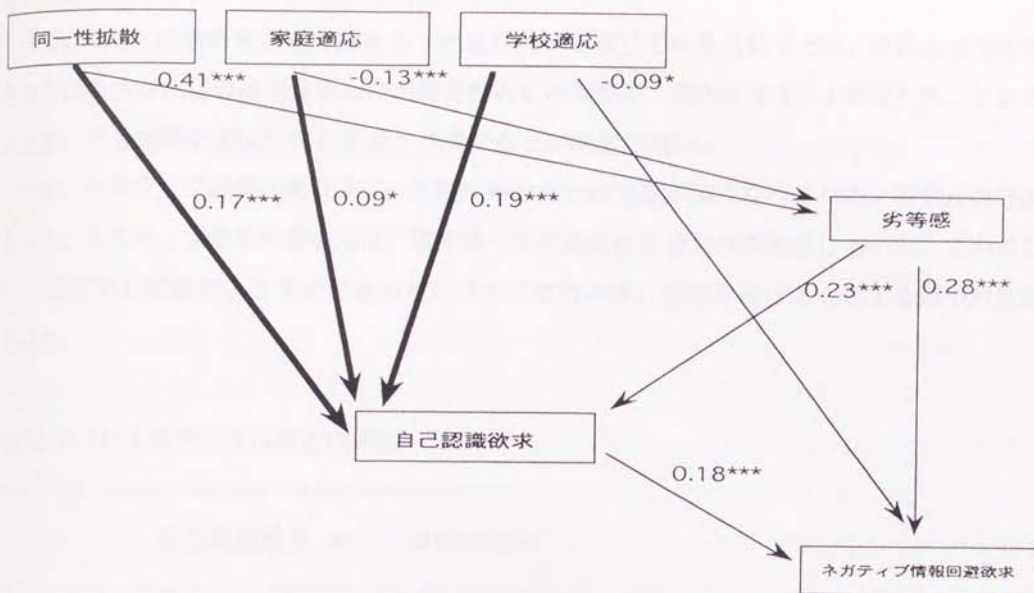


Figure 2-11-3 各変数の関連(数値はパス係数)

*** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

まず、自己認識欲求には、同一性拡散・家庭適応・学校適応、及び劣等感・ネガティブ情報回避欲求のいずれもが有意なパスを示している。この結果は、同一性拡散・家庭適応・学校適応を自己認識欲求の喚起要因とする仮説を一部支持している。ただし、家庭適応・学校適応と自己認識欲求のパスはいずれも正の値を示し、不適応が強いほど自己認識欲求が高いという当初の予測と逆の形になっている。また、劣等感から自己認識欲求への直接パスも仮説では設定されていない。

また、劣等感は同一性拡散と家庭適応とは有意なパスを示しているが、学校適応とはパスは示されていない。本調査では、同一性拡散・家庭適応・学校適応を劣等感の原因と想定していたが、学校適応とは明確な関連がみられなかった。

一方、ネガティブ情報回避欲求は、劣等感および自己認識欲求から有意なパスが示されている。これは、劣等感と自己認識欲求をネガティブ情報回避欲求の原因として設定した仮説を支持している。

3. 自己認識欲求とパーソナリティ特性の関連

さて、自己への理解を求め自分をもっと知りたいと感じている高校生とは、どのような者たちなのだろうか。他の心理尺度との関連を検討した結果を、Table 2-11-4に示した。これを見ると、自己認識欲求は公的自意識・同調傾向との関連が強い。

一方、ネガティブ情報回避欲求は、問題行動念慮との関連が強くなっている。モデルの分析からも、ネガティブ情報回避欲求は、劣等感・学校適応と有意なパスを示していた。この点から、日常生活に問題のある者ができるだけ自分に都合の悪い情報を避けようとする様子が推測される。

Table 2-11-4 他の心理尺度との相関

	自己認識欲求	ネガティブ情報回避欲求
問題行動念慮	0.02 (600)	0.25 ** (602)
孤独感	0.10 * (604)	0.19 ** (606)
精神的疲労	0.06 (604)	0.18 ** (606)
公的自意識	0.43 ** (601)	0.20 ** (603)
同調傾向	0.22 ** (605)	0.17 ** (607)

注) * $P < .05$ ** $P < .01$

第4節 考察

1. 自己認識欲求の発達的变化

本調査の目的は、高校生を対象とした自己認識欲求を行うことにより、大学生以前の自己認識欲求の性質を明らかにすることにあつた。このうち第1の目的は、高校生がどの程度自己認識欲求をもっているのかを明らかにすることにある。本調査では、「自分についてもっと理解したいと思うことがある」「自分の性格についてもっと詳しく知りたい」など自己認識欲求に関する項目を独自に作成し、現代高校生が自己に対する関心をどの程度もっているのかを検討した。その結果、いずれの項目も肯定層がいずれも7～9割に達していた。特に、「自分がしたいこと」「今後できること」と、自己の将来を追求する傾向が高い。この点から、従来の発達心理で同一性確立のために自己に注目する程度が高いと論じられていた高校生では、実際に自己認識欲求が高いことが論証された。特に本調査がサンプリングによって代表性の高い回答者を抽出したことから、データの偏りがないと考えられるため、信憑性は高いと考えられる。

青年期がいつから始まるのかということについては、生理的な変化の開始を始期の基準とすることでは共通しているが、実際には様々な説がある(久世,1980)。ただし、総じて12,3才をその始まりとすることが多い。本調査では自己認識欲求の学年差を測定したが、有意差はみられなかった。すなわち、自己認識欲求は既に高校入学の時点では高まっており、入学後に特に大きく変化することはないことが指摘できる。この結果は、青年期の中心的特徴とされる自己への関心が、青年期前期にあたる中学生の時点で喚起され始め、高校生の時点である程度高まりが安定することを推測させる。

2. 自己認識欲求仮説モデルとの対応

本調査の第2の目的は、自己認識欲求の喚起モデルが、高校生を対象としても適応できるか否かを確認することにあつた。本調査では自己認識欲求の喚起要因として、同一性拡散・学校適応・家庭適応を取り上げた。そして同一性拡散が高いほど、また学校・家庭適応が低いほど、自己認識欲求が高いことを予測した。

パス解析の結果、このうち同一性拡散によって自己認識欲求が喚起されることが確認され、大学生を対象とした調査と同様の結果となった。これにより、自己認識欲求の喚起背景として同一性混乱を位置づける、モデルの妥当性が示された。以上のような同一性拡散と自己認識欲求との関連は、青年期は同一性確立の時期であり彼らが熱心に自己を模索する傾向にあるとの従来の青年心理学の指摘に一致するものとなっている。

しかしながら、自己認識欲求の原因と考えられていた家庭・学校適応は、自己認識欲求と低い有意なマイナスの関連を示し、家庭や学校で適応している高校生ほど自己認識欲求が高いことが示された。これは、大学生を対象とした調査において、日常生活の不適応が自己認識欲求の喚起と結び付いていたのとは逆の結果となっている。同一性拡散は、2つの適応指標と有意な正の相関を示していることが相関分析結果から示されたことから、自己の同一性が拡散したり、結果として自己認識欲求が高まるのは、高校生においては適応的心理であると位置づけられる。

自己への関心が大学生調査では不適応的な心理を示していたのに対し、高校生では適応状態と関連することを示した理由として、本調査では次の3点を理由として考える。

まず第1の原因は、不明確感が生じる側面にあるのではないか。従来の青年心理では、青年期初期に自己への関心が生じるのは、彼らが身体の変化によって自己を意識したり、抽象的思考の発達から自己という抽象概念に気づき始めたためと論じられている(久世ら,1980)。これらが「青年の内部に多くの新しい欲求を生み、それらは全体として人格の中において統合させる方向を目ざしながらも、相互に矛盾対立しながら流動している」(加藤,1980 P.33)。従って、ここで生じる自己への関心は必ずしも外的な要請ではなく、自分自身の内面への関心から発生する。ただし、明確な自己概念を形成していない青年は、自己を意識を向ける際には必然的に、知識間の非一貫性・矛盾や知識不足に気づくことになる。従来の青年心理で、彼らが意識せずにとり入れてきた自分に意識を向けた時に、多様な特性のどれが本当の自分かわからず、「本当の自分は何か」との疑問をもつことが指摘されていた(例えば 山岸,1990)。これは、自己知識の非一貫性・矛盾を表現したものであろう。従って、久世(1980)が指摘するように青年期前期～中期の青年において自己に関心を向けることを発達課題と位置づけるならば、発達の進んだものほど自己概念不明確感を意識し、自己認識欲求を喚起させると考えられるのである。さらに、自己認識欲求を喚起し自己情報を収集しているものほど、自己概念の統合度が進み、知識量は多くなり、明確な自己概念を形成するに至ると考えられる。Damon & Hart (1988)は、自己理解が進んでいる青年ほど周囲との適応が良好であることを示している。従って、自己認識欲求が喚起され、自己概念明確化が進むほど、適応的になると解釈できる。一方、大学生の場合には、高校生のような心身・知力などの内的側面での大きな変化は終了している。従って、自己への関心は主として外的なものである。すなわち、何らかの外的な原因で「対人関係」といった側面で、既存の自己概念では対応しきれない不適応が生じた場合に、改めて自己への関心が高まるものと推測される。

第2に、高校生の時期に行う自己概念の形成は、初めて意識的に行われる自己構築であると

いう点である。アイデンティティ研究が指摘するように、青年期に自己への関心もたれるのは、それ以前の子供時代から無自覚に形成された自己概念を新たに構築するためである。青年期以前には意識的に構造化された自己は存在しない。従って、青年期の自己統合は、初めて自己を意識的に作り上げていく過程なのである。自己知識間の矛盾に気付いた時には、それらを統合するように情報収集すればよい。このため、自己概念が不明確である状況が、心理的な負担になる程度が相対的に低いと推測される。そして、情報を収集し統合することによって、自己認識がさらに深まっていくことになる。Damon & Hart (1988) は青年期を対象とした調査から、知識が多面的なり正確になるほど適応性も高まることを指摘している。本研究の結果はこれと一致している。一方、大学生の場合にはある程度自己概念の構造化が終了している。従って、知識間の矛盾や知識不足によって自己概念が不明確になった場合、明確化にはそれ以前の構造を再統合する必要がある。従って、既存の知識との対立など、多くの場合不適応的な要素が関連すると考えられる。

第3に理由として考えられるのは、社会的な要請の問題である。青年期に自己への関心を持ち、自己を作り変えていくことは、社会的にも好ましいものとして認識されている。言い替えば、自己をつくりあげ、早く大人になることこそが、社会的に望ましい行動として推奨されている (Wells & Stryker, 1988)。従って、自己認識欲求が喚起された状態の自己を、否定的に捉えることを促すことにはつながらない。逆に、大学生になりある程度大人としての自己の形成が求められる状況になると、明確な自己概念を形成し、安定して社会的行動をとることが望ましいものとして要請される。このため、自己が不明確であり自己について情報収集をすることが、欲求喚起者にとってはさらに不適応的な心理と感じられるのだと推測される。

大学生以降では、自己を見つめることは否定的な側面が強いのに対し、高校生では肯定的な意味をもつというこの結果は、自己認識欲求の喚起要因が発達によってその意味を変化させることを示すものである。自己発達に関する研究では、これまで多くが青年期を発達の最終段階と想定していた (例えば Hattie, 1992)。しかしながら、自己情報収集行動を生起させる背景が、青年期前後で変化するとするならば、青年期以降の自己認識欲求の発達についても青年期とは異なるものとして検討する必要があると考えられる。

一方、9章までの大学生を対象とした調査では、ネガティブ情報回避欲求は、自己認識欲求に伴って喚起し、情報収集によって自己評価が低下することが予期される時に情報収集行動を回避するものと位置づけられていた。本調査ではさらに、情報収集による自己評価の低下を予期しやすい個人特性として劣等感を取り上げ、自己認識欲求と同様にネガティブ情報回避欲求の喚起のしやすさに影響するものとして位置づけた。ここでは、劣等感の強いものほど、情報

収集により自己評価の低下を予測しやすいため、ネガティブ情報回避欲求を喚起しやすいと仮説している。パス解析の結果、ネガティブ情報回避欲求はまず自己認識欲求から有意なパスを示し、自己認識欲求に伴ってネガティブ情報回避欲求が喚起されることが示された。さらに、劣等感とネガティブ情報回避欲求の間にも有意なパスが示され、仮説が支持された。この結果から、大学生と同様に高校生においても、自己認識欲求に伴いネガティブ情報回避欲求が喚起されることが確認されるとともに、劣等感というパーソナリティ特性もネガティブ情報回避欲求喚起に影響を与えることが指摘された。

3. 自己認識欲求とパーソナリティ特性の関連

本調査の第3の目的は、日常生活やパーソナリティ特性との関連を検討することにあつた。この目的に従い、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と他のパーソナリティ特性との関連を示した。その結果、自己認識欲求については、第9章と同様に、公的自意識や同調傾向との関連が強いことが示された。公的自意識と同調傾向はともに、他者の視点を重視した傾向である。従って現代高校生が抱く「自己を知りたい」という欲求には、他者に気を使い他者に自分を合わせて行こうとする心理が強く関連していると推測される。第9章では他者に基準を置く心的傾向が、自己概念の不明確感を生じさせやすいことを指摘した。本調査において自己概念不明確感は測定されていないが、本調査結果もこの一連の関連を支持するものといえる。

一方ネガティブ情報回避欲求は問題行動念慮との関連が強くなっている。モデル検証でも指摘されたように、ネガティブ情報回避欲求は不適応感やその結果として生じる劣等感の高いものほど強く喚起されていた。劣等感の高さは、自己評価の低い状態とも言い替えることができる。自己評価が低下している状態では、自己に関して得られる情報は、自己にとって否定的なものとして予期されやすい。従って、自己認識欲求喚起に伴い自己情報収集行動が行われる時には、その情報によって自己評価が低下させることを回避しようと、ネガティブ情報回避欲求が喚起される。問題行動念慮の高い者も、劣等感の高いものと同様に否定的な自己の姿を予期しやすいため、ネガティブ情報回避欲求と関連が高いと解釈できる。

4. 本研究の問題点と他章との関連

本調査では高校生を対象としたランダムサンプリングによる調査を行い、自己認識欲求の喚起背景についての結果が大学生を対象とした前章までの結果と異なることが示された。ただし、自己認識欲求のメカニズムが自己の発達とどの様に関連するのかについては、青年期以降の多様な年代を対象として調査を行い、それを本研究結果と対比させる必要がある。そこで次章

(第12章)では40代・60代の男女を対象としたランダムサンプリングによる調査を行い、自己認識欲求の仮説モデルを検証する。

「自己認識欲求」とは、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。

1. 研究の目的

1.1 自己認識欲求の概念

自己認識欲求とは、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。この欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。

自己認識欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。この欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。自己認識欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。

自己認識欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。この欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。自己認識欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。

1.2 研究の意義

自己認識欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。この欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。自己認識欲求は、自己の存在意義や価値を認識しようとする心理的欲求のことである。

第12章 中高年にみる自己認識欲求¹⁾

1) 本調査は、「上瀬由美子 1995 『中高年の自己認識欲求』 日本心理学会第59回大会発表論文集,69.」で発表したものを再解析したものである。

第1節 目的

1. 青年期以降の自己認識欲求の存在

自己を知りたいと感じ自己情報をもとめることは、青年期の特徴として論じられることが多い。これは、自己への関心が主として青年期における同一性確立の過程で生じると位置づけられてきたことに関連している。

しかし自己認識欲求のモデルでは、自己認識欲求は自己概念の不明確さをもたらす様々な状況によって生じると仮説している。従って、欲求喚起は青年期の問題には限定されない。

実際に、第10章に示した青年期以降の女性を対象とした調査結果からも、自己認識欲求は青年期に特有のものではなく、継続して存在し得るものであることが示された。ただし、第10章の調査対象者は大学のサマースクーリングの参加者という偏りのある標本であった。特に自己に関心をもった人々が、スクーリングに参加しているとも考えられる。また回答者が女性に限定されていた点から、男女差は検討されていない。

そこで本章では、まず自己認識欲求が、青年期の自己への関心の現象として限定されず、青年期以降の男女にも存在することを確認することを第1の目的とする。対象年代は20代以降のあらゆる年代を対象とすることが望ましいが、本調査ではまずこの中から40代と60代の男女を取り上げた。これは既存の発達研究(例えばLevinson,1978)において40代が中年への過渡期、60代が老年への過渡期とされており、ライフイベントや心身の変化と自己認識欲求の関連をより検討しやすいと考えたからである。また調査に当たっては、調査対象者としてできるだけ偏りのない40代・60代の男女を調査対象者として抽出する。

2. 自己認識欲求の年代差

さらに本調査では、自己認識欲求の年代差を検討する。第10章では年代が上がるにつれ自己認識欲求が低下することが示された。このような10章の結果を確認するために、本調査では40代と60代の回答結果を比較することによって年代差を検討する。

さらに、本調査では自己認識欲求が喚起される自己の側面についても、年代差の検討を行う。

従来の自己概念研究では、自己概念の構造自体は成人期で完成されるとされてきた。しかし、第10章では自己認識欲求が喚起される側面について年代による差があることが示唆されている。

以上の点をふまえ、自己認識欲求を側面別に検討し年代による差について考察を行うことを第2の目的とする。

3. 自己認識欲求喚起の喚起要因に関するモデル検証

最後に本調査では、中高年の自己への関心の背景にあると指摘されることの多い「心身の変化」「ライフイベント」「社会参加意識の喪失」が、自己概念不明確感や自己認識欲求にどのように結び付いているかを検討することを第3の目的とする。

従来のアイデンティティ研究では、心身の変化や、様々なライフイベントが自己を再考することに結び付く点を指摘している（岡本,1985など）。しかしこれらの研究は、アイデンティティの地位と心身の変化等を結びつきを検討するものであり、自己への関心については実証研究は行われていない。この視点を自己認識欲求のモデルで説明すると、次のようになる。

まず「心身の変化」「ライフイベント」は、個人がそれまで経験したことの無い新たな状況である。これは、個人がそれまで収集してきた自己知識では適切に対応できない状況であると同時に、それまで抱いていた自己概念とは一致しない自己の状況でもある。これは、自己認識欲求のモデルにおける、自己知識の非一貫性や知識量の不足を意識する、自己概念不明確感の生じた状況であり、自己認識欲求が喚起される状況と解釈される。すなわち、中高年における自己への関心も、青年期同様のメカニズムで自己認識欲求が喚起された状況と理解できるのである。

自己認識欲求の喚起要因の分析をするにあたり、まず心身の変化については岡本（1985）の研究を参考にして、項目を作成する。岡本（1985）は、中年期の危機的心理を扱った研究の中で、心身の変化に対する意識がいくつかの内容に分類され、さらにこれらは自己の肯定的変化と否定的変化の2つにまとめられることを示している。これらの心理は、自己認識欲求の視点から捉えた場合、個人が従来抱いていた自己概念と不一致の情報として位置づけられ、自己概念不明確をもたらすひとつの要因と推測される。一方ライフイベントについては、様々な研究があるがここでは40代・60代の男女が経験しやすいものを選択した。

また「社会参加意識の喪失」については、これまで定年問題に関連してアイデンティティ研究で扱われてきた心理である。本調査はこの問題も自己概念不明確感を生じる背景として捉え、分析に加える。ただし、40代も併せて検討するため、既存の研究（岡本・山本,1992a）を参考

としながらも、独自に項目を作成した。

本調査で取り上げる要因を自己認識欲求の喚起モデル (Figure 2-12-1) にあてはめたのが、Figure 2-12-2 である。

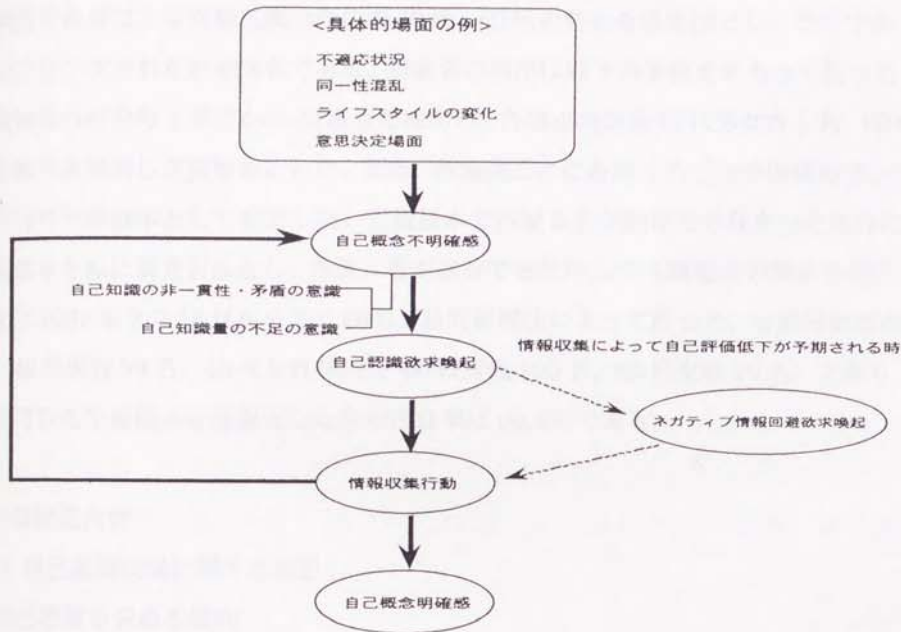


Figure 2-12-1 自己認識欲求の仮説モデル (第1章で修正されたもの)

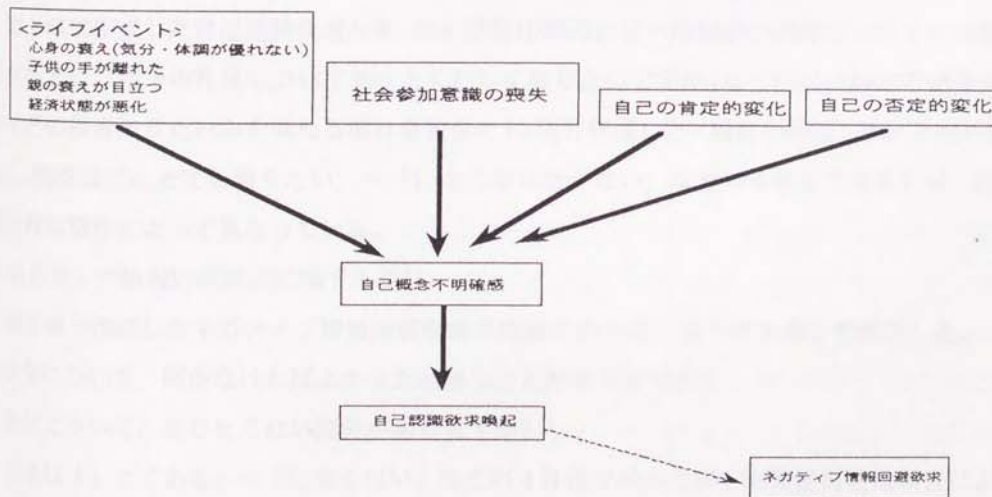


Figure 2-12-2 本調査の作業仮説

第2節 方法

1. 調査方法

調査対象者は、東京都三鷹市在住の40代・60代の男女を母集団とし、その中からランダムサンプリングされた計613名である。対象者の抽出は以下の手続きをもって行った。まず調査対象地域内の全町丁単位から20地点を抽出し、各地点内から40代男女各5名、60代男女各5名を無作為抽出し正規標本とした。また、各地点ごとに各層5名づつを同様のサンプリング法を用いて予備標本として設定した。正規標本で各層5名が回収できなかった地点については、予備標本を順に調査対象とし、各層5名が回収できた時点で当該地点の調査を終了した。調査期間は1995年2月18日から2月26日。訪問留置法によって行った。有効回数標本数は、397名(40代男性99名、40代女性99名、60代男性100名、60代女性99名)であり、正規標本と使用した予備標本を母数とした有効回収率は64.8%である。

2. 質問紙内容

(1) 自己認識欲求に関する項目

1. 自己理解を求める傾向

「あなたは“自分についてもっと理解したい”と思うことがありますか」という質問について、4件法で回答を求めた。

2. 側面別の自己認識欲求

第1章で作成した自己認識欲求尺度、および第10章の自己への関心の内容についての分類結果をもとに、「自分の性格についてもっとくわしく知りたいですか」など自己の特定の側面についてどの程度知りたいかを尋ねる項目を独自に15項目作成した(項目の例はTable 2-12-2参照)。回答は「4. とても知りたい」～「1. 全く知りたくない」などの4件法で求めたが、回答選択肢は項目によって異なっている。

3. ネガティブ情報回避欲求に関する項目

第5章で作成したネガティブ情報回避欲求尺度項目のうち、以下の2項目を使用した。

・自分について、聞かなければよかったと思うことがありますか?

・自分について、知りたくない部分がありますか?

回答は「4. よくある」～「1. 全くない」などの4件法で求めたが、回答選択肢は項目によって異なっている。

(2) 自己認識欲求喚起の背景に関する項目

1. 危機的心理

岡本(1985)の項目を参考とし、中年期の心身の変化を示す項目を6項目独自に作成した。回答は3件法。この6項目について因子分析(主成分分解・バリマックス回転)を行った結果、2因子が抽出された。第1因子は「最近、体力が衰えてきた」「何かをやりはじめるには遅すぎると感じる」「人生の残り時間が少ないことに不安」「以前のように仕事はかどらなくなった」の否定的な自己の変化に関する4項目に負荷量が高く「否定的変化」と命名された。第2因子は「周りの条件にふりまわされなくなってきた」「以前にくらべて自分らしさを強く出すようになってきた」など肯定的な自己の変化に関する2項目に負荷量が高く「肯定的変化」と命名された。各因子の寄与率は第1因子が31.9%、第2因子が29.2%である。各因子に負荷量の高い項目の回答の得点を単純加算する形で、各傾向を測定する尺度項目とした。

2. 自己概念の不明確感に関する項目

第3章で使用した自己概念不安定の項目のうち3項目に、「自分について分からないと感じる部分がある」「本当の自分を知りたい」の2項目を加えた計5項目を自己概念不明確感を測定する項目とし、2件法で回答を求めた。

3. ライフイベント

高橋・波多野(1990)の例を参考にし、「親と同居するようになった」「大きな病気やケガをした」など独自に25項目を作成した。回答は「あてはまる」「あてはまらない」の2件法である。

ただし回答集計の結果、該当者の少ない項目が多かったため、分析には「体調がすぐれない日が続く」「気分がすぐれない日が続く」「親の衰えが目立つ」「経済状態が悪化」「子供が手を離れた」の5項目のみを用いた。

4. 社会参加意識の喪失

不適応感の指標のひとつとして社会参加意識の喪失を取り上げた。本調査では、「自分は社会の中で、自分なりの役割を果たしていると思う」「自分は、社会の動きから取り残されたように感じる」「世の中の変化が激しくて、ついていけないと感じることがある」の3項目を独自に作成した。ただし「自分は、社会の動きから取り残されたように感じる」については肯定率が低かったため、残り2項目のみを分析対象として使用した。両項目とも「あてはまる」「あてはまらない」の2件法で回答を求めた。

第3節 結果

1. 自己理解を求める傾向

自分についてもっと理解したいと思うかに対する回答結果を Table 2-12-1 に示す。60代男性の関心は他層に比べて低めであるが、全体では「よくある」「たまにある」を合わせた肯定層が5割を越えている。さらに「よくある」を4点～「全くない」を1点として得点化し、回答の平均値について、性(男・女)×年代(40代・60代)の2要因の分散分析を行った。その結果、年代の主効果がみられ、40代の方が有意に得点が高かった(40代M=2.68 (S.D.=0.83) 60代M=2.49 (S.D.=2.49) $F(3,391) = 2.69 P < .05$)。

Table 2-12-1 「自分についてもっと理解したい」と思うことがあるか (%)

	40代全体	40代男	40代女	60代全体	60代男	60代女
N	198	99	99	197	98	99
よくある	16.2	16.2	16.2	12.7	5.1	20.2
たまにある	42.9	41.4	44.4	33.5	38.8	28.3
ほとんどない	33.3	33.3	33.3	43.7	45.9	41.4
全くない	7.6	9.1	6.1	10.2	10.2	10.1

2. 側面別の自己認識欲求と年代差

自己の各側面に対する回答は、Table 2-12-2 に示すようになった。これを図化したのが Figure 2-12-3 である。

両年代とも「現在の健康状態を知りたい」とする傾向が最も高かったが、その他では「自分が今後したいことをみつきたい」「これから出来ることを知りたい」など自己の可能性に対する関心が相対的に高くなっている。

年代・性別に見ると、「社交能力」を除く全ての側面で40代女性の得点が最も高い。逆に60代男性は全ての側面で関心が最も低い。40代男性と60代女性はその間に位置している。

各側面に対する回答について、性×年代の2要因の分散分析を行った結果、Table 2-12-2 に示すようになった。殆どの項目で年代と性の有意な主効果がみられているが、交互作用はいずれの項目についても有意ではなかった。全体を通して、40代の方が60代よりも、女性の方が男性よりも自己認識欲求が高いことが示された。

Table 2-12-2 自己の各側面について知りたい程度

	40代				60代				年代差 の 検定
	N	全体 平均(S.D.)	男性	差	N	全体 平均(S.D.)	男性	差	
社交能力	198	2.47(0.91)	2.40(0.92)		196	2.44(0.87)	2.24(0.78)	< **	2.64(0.90)
性格	198	2.57(0.94)	2.48(0.94)		196	2.43(0.89)	2.26(0.88)	< **	2.61(0.86)
魅力	197	2.31(0.94)	2.12(0.95)	< **	197	2.26(0.87)	2.14(0.82)	< +	2.37(0.91)
生き方	198	2.77(0.98)	2.62(0.98)	< *	196	2.50(0.97)	2.36(0.93)	< *	2.63(0.98)
趣味	197	2.75(1.01)	2.53(1.00)	< **	196	2.50(1.01)	2.36(1.02)	< +	2.63(0.98)
スホーツ	198	2.79(0.97)	2.62(0.99)	< *	198	2.47(1.01)	2.36(0.99)		2.58(1.01)
人より優れている点	198	2.68(0.90)	2.56(0.91)	< +	195	2.39(0.94)	2.24(0.89)	< *	2.55(0.96)
他人が見た自分の姿	198	2.58(0.87)	2.44(0.86)	< *	196	2.42(0.87)	2.35(0.81)		2.49(0.92)
過去の意味	198	2.37(0.86)	2.36(0.85)		194	2.38(0.94)	2.29(0.94)		2.47(0.93)
これから出来ること	198	3.09(0.86)	2.95(0.87)	< *	194	2.81(0.96)	2.67(0.97)	< *	2.95(0.94)
得べき生き方	197	2.51(0.89)	2.36(0.83)	> *	196	2.26(0.91)	2.12(0.92)	< *	2.39(0.88)
自分かしたこと	198	3.16(0.88)	3.00(0.93)	< *	196	2.78(1.02)	2.69(1.02)		2.87(1.01)
他人の気持ちの理解度	198	2.94(0.84)	2.86(0.89)		195	2.72(0.88)	2.55(0.86)	< **	2.88(0.87)
豊かな生活の方法	198	2.93(0.92)	2.83(0.95)		196	2.71(0.97)	2.64(0.99)		2.78(0.95)
健康状態	198	3.23(0.77)	3.13(0.80)	< +	196	3.12(0.93)	3.05(0.99)		3.19(0.87)

注: 値が高いほど、「知りたい」と回答したことを示している。
 + P<.1 * P<.05 ** P<.01 *** P<.001



Figure 2-12-3 自己の各側面について知りたい程度
(Table 2-12-2を図にしたもの)

各側面に対する肯定率（「とても知りたい」＋「少し知りたい」）をX軸、性年代別のグループをY軸として、双対尺度法を用いて解析した。抽出された第1軸と第11軸に対するスコアをXY同時に平面にプロットした結果、Figure 2-12-4 に示すようになった。性・年代によって布置に差がみられるが、これは各年代や性によって、意識される自己の側面が異なるためと考えられる。

プロットのまとまりをみると、60代男性、60代女性と40代男性、40代女性という3つに分かれることが示唆される。60代男性では「健康」「過去の意味」、40代男性と60代女性では、「他人の気持ちがかかっているか」「これからできること」「社交能力」「性格」など、40代女性では「容貌」「スポーツ」「将来すべき生き方」などが接近している。

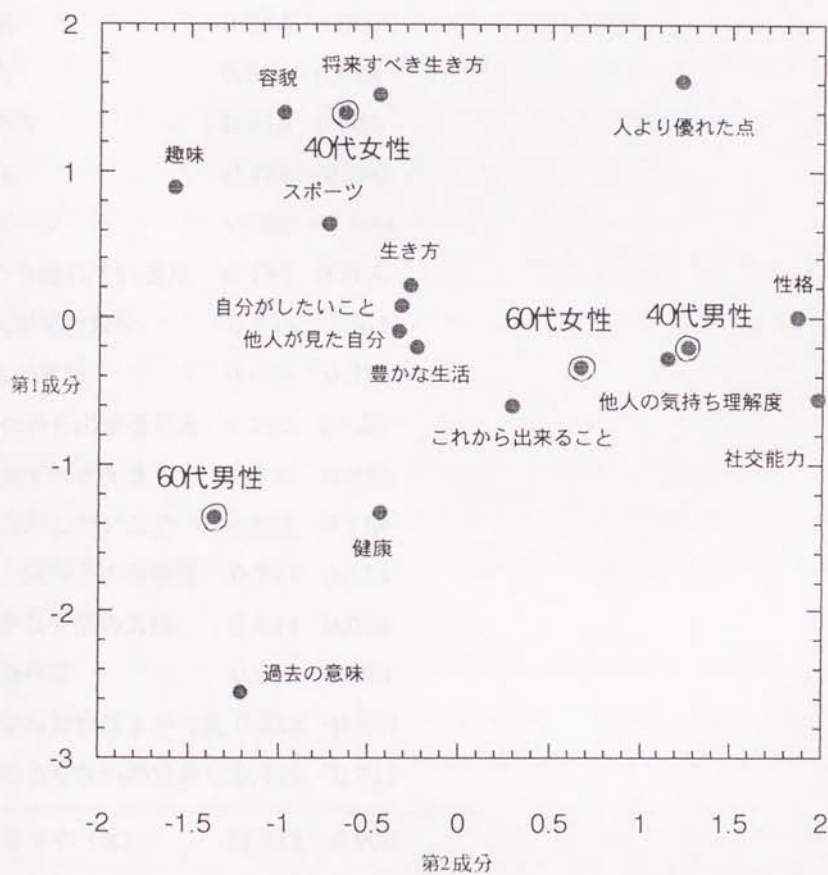


Figure 2-12-4 知りたい自己の側面

3. 自己認識欲求喚起モデルの検証

(1) 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度の作成

自己の各側面について知りたいか否かを尋ねる15項目と、ネガティブ情報回避欲求に関連する2項目を併せて因子分析した結果、Table 2-12-3に示すようになった。

Table 2-12-3 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求に関する項目の
因子分析の結果 (Varimax回転後の因子負荷量)

変数名	因子 1	因子 2
○1. 社交能力	0.726	0.100
○2. 性格	0.794	0.050
○3. 魅力	0.680	0.078
○4. 生き方	0.818	0.081
○5. 趣味	0.768	-0.002
○6. スポーツ	0.702	-0.009
○7. 人より優れている点	0.785	0.105
○8. 他人が見た自分	0.746	0.064
○9. 過去の意味	0.564	-0.288
○10. これから出来ること	0.795	0.150
○11. 将来すべき生き方	0.741	0.043
○12. 自分がしたいこと	0.662	0.118
○13. 他人気持ちの理解度	0.777	0.114
○14. 豊かな生活の方法	0.644	0.078
○15. 健康状態	0.618	0.230
△16. 聞かなければよかった	0.533	-0.651
△17. 知りたくない部分あり	0.495	-0.719
寄与率 (%)	49.442	6.905

注) ○のついた項目は自己認識欲求尺度項目として、△のついた項目はネガティブ情報回避欲求の尺度項目として使用したことを示している。

このうち第1因子は、自己の各側面について知りたいとする項目に負荷量が高く自己認識欲求を示す因子と考えられた。一方、第2因子は「自分について聞かなければよかったと思うことがある」「自分について知りたくない部分がある」に因子負荷量が高く、ネガティブ情報回避欲求を示す因子と考えられる。

この結果をもとに、第1因子に負荷量の高かった15項目を自己認識欲求尺度項目として、第2因子に負荷量の高かった2項目をネガティブ情報回避欲求尺度項目として使用し、いずれも各項目を単純加算する形で得点化した。

(2) 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度得点の年代差

自己認識尺度について性×年代の2要因分散分析を行った結果、性 ($F(1,379) = 13.21 P < .001$)・年代 ($F(1,379) = 9.56 P < .001$) ともいずれも有意な主効果がみられた。

(男性 $M=37.8$ (S.D.=9.83) < 女性 $M=41.5$ (S.D.=10.03))

(40代 $M=41.2$ (S.D.=38.1) > 60代 $M=38.1$ (S.D.=10.40))

また、ネガティブ情報回避欲求尺度について、性×年代の2要因分散分析を行った結果、性の主効果がみられた ($F(1,385) = 4.99 P < .05$)。

(男 $M=4.3$ (S.D.=1.43) < 女 $M=4.6$ (S.D.=1.34))

(3) 自己概念不明確

自己概念不明確感の尺度得点について、性×年代の2要因分散分析を行った。その結果、年代の有意な主効果がみられ ($F(1,393) = 9.26 P < .01$)、性については主効果は傾向にとどまった ($F(1,393) = 3.82 P < .1$)。

この自己概念不明確感の尺度得点と、各側面別の自己認識欲求との相関を算出した。その結果、いずれの側面とも有意な相関 ($0.19 \sim 0.37$) が示され、各側面に共通して自己概念の不明確感が関連することが確認された。

4. 仮説モデルの検証

本調査では、自己認識欲求について2つの質問を設定した。ひとつは自己の各側面についての知りたい程度を合計した自己認識欲求尺度であり、もう一方は「自分について理解したいと感じるか」という問である。両者の得点間には有意な正の相関 ($r=0.52 P < .001 N=382$) が

示されており、類似の傾向を測定していると想定される。ただし完全に同様のものとするには値が低いために、自己認識欲求尺度で測定される自己探求の意識と、「自分について理解したい」という表現で示される自己探求の意識とを分けて、Figure 2-12-2に示す作業仮説の検証を行うこととした。

(1) 自己認識欲求尺度を用いたモデル検証

自己認識欲求喚起に関する仮説に従ってパス解析を行った結果、Table 2-12-4に示す結果となった。これを Figure 2-12-2 に従い図示したのが Figure 2-12-5 である。

Table 2-12-4 重回帰分析の結果 (重相関係数)

説明変数	基準変数		
	自己概念 不明確感 (396)	自己認識 欲求 (382)	ネガティブ情報 回避欲求 (380)
体調悪い日続く	0.03	0.03	-0.00
気分が悪い日続く	0.15**	0.00	0.09*
子供の手が離れた	0.14**	0.04	0.06
親の衰えが目立つ	0.11*	0.07	0.07
経済状態が悪化	0.14**	-0.02	-0.09*
社会で役割果たす	-0.05	0.02	0.01
社会についていけない	0.04	-0.01	0.01
自己の肯定的変化	-0.02	-0.03	-0.06
自己の否定的変化	0.17***	0.13*	0.15**
自己概念不明確感		0.32***	0.13**
自己認識欲求			0.41***
重相関係数	0.39***	0.40***	0.57***

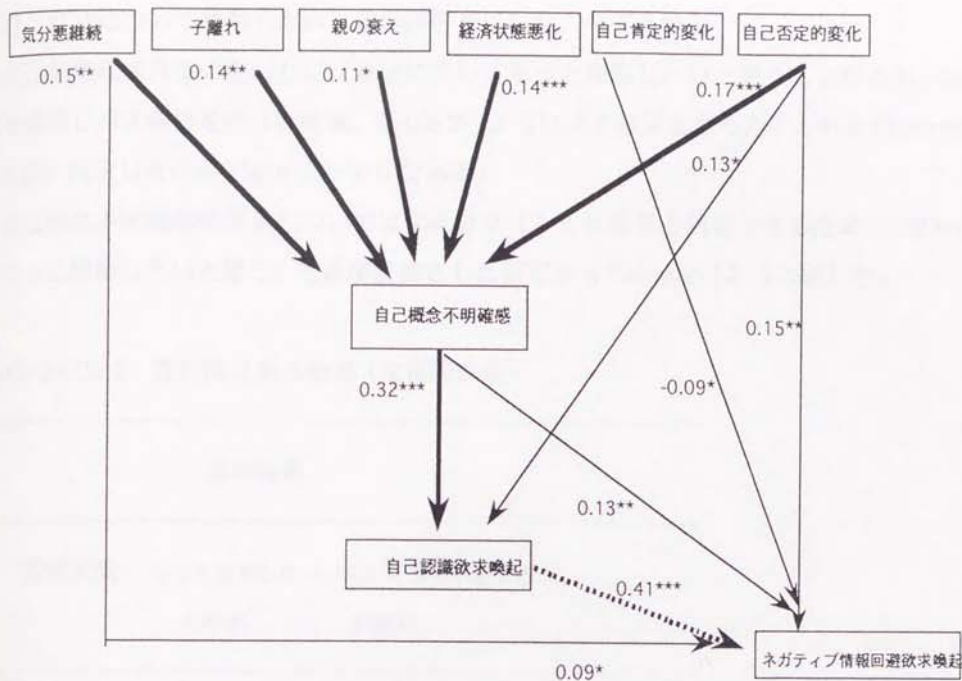


Figure 2-12-5 自己認識欲求と各変数の関連(数値はパス係数)

注 標準偏回帰係数の検定の結果、有意なもののみを図に示した

*** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

これを見ると「気分の悪い日が続いた」「子供の手が離れた」「親の衰えが目立つ」「経済状態が悪化した」などの否定的ライフイベントと、自己の否定的変化の意識が自己概念不明確感に結び付いている。さらにこの自己概念不明確感が自己認識欲求を喚起させており、この一連の関係はFigure 2-12-2の仮説を支持するものである。またネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求と有意なパスを示し、ネガティブ情報回避欲求は自己認識に伴い喚起されるとの仮説が支持された。ただし、その他にも自己の否定的変化や自己概念不明確感とも有意なパスを示していた。

(2) 「自分について理解したい」との回答を用いた、モデル検証

自己認識欲求尺度の変わりに、「自分についてもっと理解したいと思うことがある」の回答結果を使用しパス解析を行った結果、Table 2-12-5に示す結果となった。これをFigure 2-12-2に従い図示したのがFigure 2-5-6である。

自己概念不明確感の背景についてはTable 2-12-4の結果と同様であるため、「自分についてもっと理解したいと思う」を基準変数とした分析からTable 2-12-5に示した。

Table 2-12-5 重回帰分析の結果（重相関係数）

基準変数		
説明変数	もっと理解したい (394)	ネット/ピア情報回避欲求 (387)
体調悪い日続く	0.02	0.00
気分が悪い日続く	-0.03	0.10*
子供の手が離れた	0.04	0.08
親の衰えが目立つ	0.00	0.10*
経済状態が悪化	-0.01	-0.10*
社会で役割果たす	-0.07	0.02
社会についていけない	-0.03	-0.06
自己の肯定的変化	0.16***	-0.12*
自己の否定的変化	0.10*	0.17***
自己概念不明確感	0.37***	0.16**
もっと理解したい		0.33***
重相関係数	0.46***	0.53***

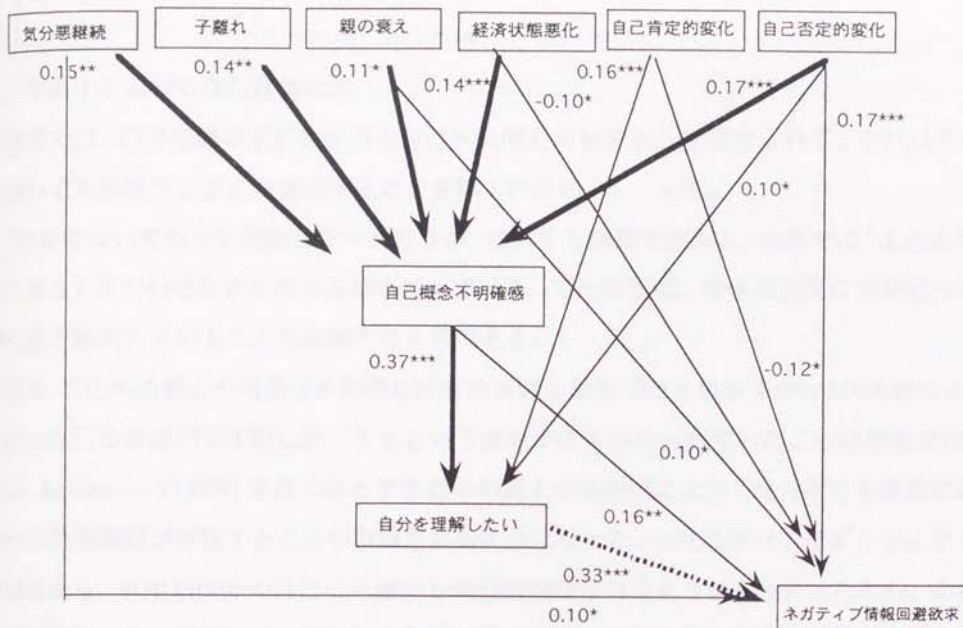


Figure 2-12-6 「自分を理解したい」と各変数の関連(数値はパス係数)

注 標準偏回帰係数の検定の結果、有意なもののみを図に示した

*** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

これを見ると「自分を理解したい」という心理には、自己概念不明確感と同時に自己の肯定的変化と否定的変化が直接パスを示している。これは、自己の変化を感じることで、自己概念不明確感を経ずに、自分を知りたいという気持ちを喚起することを示すものである。特に、これは肯定的変化で強いパス係数を示している。自己認識欲求についてのパス解析では、その背景には否定的変化のみが関連し肯定的変化との関連は示されなかった。

第4節 考察

1. 中高年における自己認識欲求

本章では、自己認識欲求が青年期の自己への関心の現象として限定されず、それ以降の年代においても存在することを確認することを第1の目的としていた。

「自分についてもっと理解したいと思うか」に対する回答をみると、全体では「よくある」「たまにある」を合わせた肯定層が5割を越えている。この結果は、青年期以降にも自己への関心が引続き継続していることを確認するものである。

従来、自己への関心の問題は青年期に特有のものとして位置づけられやすかった(久世ら,1980)。これは自己の発達に青年期に終了するという仮定が広く認められていたことに集約される。ただし、Levinson (1978)をはじめとする近年の成人発達研究により、成人期にも新たに取り組むべき発達課題が存在することが指摘されるようになった。これに伴いアイデンティティ研究の視点から、青年期以降の自己の発達にも関心が向けられるようになった。ただし、これらのアイデンティティ研究では、成人のアイデンティティ・ステータスの確定に研究目的をおいていたり(岡本,1986)、心身の変化や退職などの要因とアイデンティティ・ステータスの関連を分析する(岡本,1985;岡本・山本,1985a b)ことが関心の中心であった。このため、アイデンティティ構築という特殊な場面を離れた場合、青年期に特に高まると論じられている自己への関心を、人は青年期以降にも引続き継続するののかとの問の回答を与える知見は提出されていない。前述のように、本研究は各自様々な状況にある青年期以降の人が、全体として自己への関心をどの程度もっているのかを明らかにしたものである。40代・60代を併せておよそ半数の人が「自分についてもっと知りたい」という意識を現在でも持ち続けていることは、特に同一性の再吟味という特殊な状況になくとも、日常的に自己への関心がもたれていることを示すものといえる。また、本研究は、アイデンティティという視点から離れ、自己の変化・発達を、社会心理学的な自己研究の枠組みから捉えられることを示す点で有効なものと考えられる。

2. 自己認識欲求の年代差

本調査では、自己認識欲求の年代差を検討することを目的のひとつとしていた。

「自分についてもっと理解したいと思うか」に対する回答でも、自己認識欲求尺度得点についても、60代よりも40代の方が、男性よりも女性の方が自己認識欲求の高いことが示された。年代が上昇するに従い自己認識欲求が低くなるとの結果は、第10章の結果と一致している。この

年代差を、本研究は次のように解釈する。毎日の生活の中で、人は自分について様々な情報を得る。これにより、自己概念の全体的知識量は年代に従って増加し、社会的行動を起こす場合に知識の不足が生じにくくなる。また自己認識欲求によって自己概念の知識は非一貫性・矛盾を生じないように統合されていく。このため、次第に自己概念不明確感が生じることは少なくなり、自己認識欲求が低下すると推測される。

一方、自己の側面別に尋ねた知りたい程度の年代差をみると、40代女性では「容貌」「スポーツ」「将来すべき生き方」などに対する関心が相対的に他側面よりも強いことが示されている。40代男性と60代女性は知りたい内容も類似しており、「他人の気持ちが分かっているか」「これからできること」「社交能力」「性格」などと布置が接近していた。一方60代男性は、「健康」「過去の意味」と布置が接近していた。年代を通してみると、40代男女と60代女性では、現在の自己の姿と併せて、将来の自分についての関心が高いことが指摘できる。ただし60代の男性では、現在の自己の他には自己の過去に関心が移行している様子が示されている。自己が発達・変化していくということは、自己の将来を視野に入れていくことと理解するなら、40代男女や60代女性では、現在の自己をさらに変化させより望ましいものへ変えていこうとする意志もっていることが推測される。逆に60代男性では、自己への関心が過去に推移しており、新たな自己変化は望まれていない様子がうかがわれる。

3. 自己認識欲求のモデル検証

本調査では、自己認識欲求喚起のメカニズムが青年期以降の男女においてもあてはまるか否かを確認することを第3の目的としていた。この目的に沿い、自己概念不明確感を喚起させるものとして心身の変化、ライフイベント、社会参加意識の喪失を取り上げ、自己概念不明確感および自己認識欲求との関連を分析した。

自己認識欲求仮説モデルにあてはめてFigure 2-12-2の仮説に基づいて分析を行った結果、否定的なライフイベントあるいは自己の否定的変化が自己概念不明確感に結び付き、自己認識欲求を喚起させることが確認された。この結果から、心身の変化や否定的ライフイベントが自己概念不明確感に結び付き、自己認識欲求を喚起するという自己認識欲求の仮説モデルの妥当性が確認された。高校生調査では、適応が自己認識欲求喚起に結び付いていたが、中高年を対象とした本調査結果は大学生と同様に不適応な状態が自己認識欲求喚起に結び付くことが確認されたと考えられる。

一方、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求に従って喚起するものと位置づけられていた。パス解析の結果、両者の間には有意なパスが示され、仮説は支持された。ただし、ネガティブ

情報回避欲求には自己認識欲求以外にも、自己の否定的変化や自己概念不明確感などからも直接パスが示された。本調査では自己評価の測定はしていないが、これは情報収集によって自己評価が低下するか否かを予測する過程に、現在の自己の置かれた状況から予期を形成するメカニズムのあることが推測される。

さらに本調査では、「自分について理解したい」という心理の生じる背景が、自己概念の不明確感に限定されないことが示された。本調査では、自己認識欲求と同様の心理傾向を測定するものとして、「自分を理解したい」と思うかを尋ねる質問項目を作成し、他の変数との関連を検討した。これを自己認識欲求尺度得点と他の変数の関連形と対応させると、違いがみられた。すなわち、自己認識欲求は自己概念不明確感と自己の否定的変化が喚起要因であったのに対し、「理解したい」との回答は、不明確感の他に自己の肯定的変化・否定的変化が自己概念不明確感を経ずに、直接「自分を理解したい」にパスを示していた。特に肯定的変化のパス係数が高くなっている。

以上の結果から、自己を理解したいとする背景には、自己の否定的変化やそれに基づく自己概念不明確感から生じるものと、不明確感とは無関係の肯定的自己変化から喚起されるものの2つの流れがあると指摘される。このうち、自己概念不明確感を経ずに、自己への肯定的変化から自己を知りたいとする心理については、「自己高揚動機」が関連していると推測される。この自己高揚動機から生じる自己への関心については、第6章の実験状況でも同様に示されていた。すなわち、自己概念不明確感が高い時には、提示された情報の肯定性・否定性に無関係に自己への関心が高まったのに対し、肯定的な情報を提示されかつ自己概念が明確な者も自己への関心を高めたのである。肯定的な自己情報を求めるという自己高揚動機に基づく心理は、自己認識欲求のモデルには含まれていない。しかし、自己を知りたいと感じ、情報収集行動が生起するモデルをより現実に適用可能なものとするためには、自己高揚動機に基づく情報処理過程を含める形に、仮説を修正する必要があると考えられる。

4. 本研究の問題点と他章との関連

本研究では、青年期以降の男女にも自己認識欲求が存在することを示した。ただし、ここで示された欲求が高いのか低いのかを知るためには他の年代との比較が必要である。このため、次章（第13章）では本調査と同様の質問紙を大学生に実施し、前章（11章）の高校生調査の結果とも併せて自己認識欲求に対する回答傾向の比較を行う。これにより、自己認識欲求の発達的变化がより明確になると考えられる。

第13章 高校生・大学生・中高年の自己認識欲求の比較

第1節 目的

本章では第11章および12章で実施された質問紙調査と類似の調査を大学生に実施し、自己認識欲求の年代による変化を検討することを目的とする。

第2節 方法

1. 質問紙構成

本調査は質問紙法によって行った。

(1) 自己認識欲求に関する項目

1. 自己理解を求める傾向

「あなたは“自分についてもっと理解したい”と思うことがありますか」という質問について、「4.よくある」「3.たまにある」「2.ほとんどない」「1.全くない」の4件法で回答を求めた。

2. 側面別の自己認識欲求

第1章で作成した自己認識欲求尺度、および第10章の自己への関心の内容についての分類結果をもとに、「自分の性格についてもっとくわしく知りたいですか」など自己の特定の側面についてどの程度知りたいかを尋ねる項目を独自に15項目作成した(項目の例はTable 2-13-4参照)。これは、第12章の調査項目と同一である。回答は「4.とても知りたい」～「1.全く知りたくない」などの4件法で求めたが、回答選択肢は第12章と同様である。

3. ネガティブ情報回避欲求に関する項目

第5章で作成したネガティブ情報回避欲求尺度項目のうち、以下の2項目を使用した。

・自分について、聞かなければよかったと思うことがありますか?

・自分について、知りたくない部分がありますか?

回答は「4.よくある」～「1.全くない」などの4件法で求めた。回答選択肢は第12章と同様である。

2. 調査対象者

調査対象者は、首都圏の国立大学の学生187名(男子97名・女子90名)。

3. 調査期日および実施方法

1995年6月、各大学の教室において心理学概論の授業終了後、質問紙による集団実施法で行った。

第3節 結果

1. 自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求

(1) 自分について理解したい程度

「自分について理解したいと思うことがあるか」についての回答結果はTable 2-13-1に示す結果となった。男女共に「よくある」「たまにある」を併せた肯定層が8割前後に達しており、自己への関心の高さが示されている。

同様の質問を第11章において高校生 (Table 2-13-2)、第12章については40代・60代 (Table 2-13-3) に行っている。そこで「4. よくある」を4点～「1. 全くない」を1点とし、性 (男・女) ×年代 (高校生・大学生・40代・60代) の2要因の分散分析を行った。その結果、まず性の主効果がみられ ($F(1,1184) = 8.87 P < .01$)、女性 ($M = 2.86 S.D. = 0.85$) の方が男性 ($M = 2.72 S.D. = 0.91$) よりも理解したい程度が高かった。

続いて年代の主効果も有意であり ($F(3,1184) = 17.43 P < .001$)、大学生 ($M = 3.09 S.D. = 0.80$) > 高校生 ($M = 2.83 S.D. = 0.90$) > 40代 ($M = 2.68 S.D. = 0.84$) > 60代 ($M = 2.49 S.D. = 0.84$) の順で理解したい程度が高かった。

また交互作用は有意ではなかった。

以上の結果から、「自分を理解したい」という傾向は大学生で最も高く、次いで高校生、大学生以降は年代が挙がるにつれ知りたい程度は低くなることが示された。

また、全体として女性の方が男性よりも「自分を理解したい」とする傾向が高いことが示された。ただし、年代別にこの性差がみられるかを検討すると高校生のみ有意な差がみられ ($t = 2.70 df = 608 P < .01$ 男性 < 女性)、その他では60代で差のある傾向がみられたもの ($t = 1.66 df = 195 P < .1$ 男性 < 女性)、大学生・40代では有意な性差はみられなかった (大学生 $t = 0.33 df = 185 n.s.$ 40代 $t = 0.51 df = 196 n.s.$)。

Table 2-13-1 「自分についてもっと理解したい」と思うことがあるか (%)
大学生調査の結果

	全体	男	女
N	187	97	90
よくある	34.2	35.1	33.3
たまにある	43.4	40.2	46.7
ほとんどない	19.8	21.6	17.8
全くない	2.7	3.1	2.2

Table 2-13-2 「自分についてもっと理解したい」と思うことがあるか (%)
高校生調査の結果(第11章の結果を再掲載)

	全体	男	女
N	610	304	306
よくある	23.3	23.4	23.2
たまにある	45.9	38.5	53.2
ほとんどない	21.1	26.0	16.3
全くない	9.7	12.2	7.2

注) 分析対象となった611名のうち、1名(女子)は無回答であった。

Table 2-13-3 「自分についてもっと理解したい」と思うことがあるか (%)
40代・60代の男女に対する調査結果(第12章の結果を再掲載)

	40代全体	40代男	40代女	60代全体	60代男	60代女
N	198	99	99	197	98	99
よくある	16.2	16.2	16.2	12.7	5.1	20.2
たまにある	42.9	41.4	44.4	33.5	38.8	28.3
ほとんどない	33.3	33.3	33.3	43.7	45.9	41.4
全くない	7.6	9.1	6.1	10.2	10.2	10.1

(2) 各側面の自己認識欲求

自己の各側面別の自己認識欲求項目に対する回答について、「4. とても知りたい」を4点～「1. 全く知りたくない」を1点と得点化し、平均値を求めたところTable 2-13-4に示すようになった。

これをみると最も高いのは「自分のしたいことを見つけたい」であり、その他「自分にあった生き方」「これから出来ること」など自己の可能性について知りたいとする傾向が強かった。その他では「他人がみた自分の姿」「他人の気持ちの理解度」など他者関係に関わる自分についても知りたい傾向は高い。これらの順位については、第12章の中高年調査の結果と類似している。

ただし、中高年では各項目の男女差が大きかったが、大学生に行った本調査では各項目の性差はいずれも有意ではなかった。

TABLE 2-13-4 自己の各側面に対する関心(大学生)

	全体	男性 N=97	差	女性 N=90
	平均(S.D.)	平均(S.D.)		平均(S.D.)
社交能力	3.05(0.80)	3.01(0.87)		1.89(0.77)
性格	3.24(0.72)	3.25(0.80)		3.22(0.61)
魅力	2.91(0.82)	2.99(0.91)		2.82(0.71)
生き方	3.36(0.83)	3.35(0.94)		3.38(0.70)
趣味	3.11(0.96)	3.05(1.05)		3.18(0.87)
スポーツ	3.12(0.91)	3.14(0.97)		3.09(0.86)
人より優れている点	3.14(0.79)	3.18(0.85)		3.11(0.73)
他人が見た自分の姿	3.23(0.84)	3.14(0.94)		3.31(0.73)
過去の意味	2.74(0.90)	2.76(0.97)		2.72(0.84)
これから出来ること	3.24(0.84)	3.22(0.95)		3.27(0.70)
将来すべき生き方	2.72(0.89)	2.72(0.92)		2.71(0.86)
自分がしたいこと	3.79(0.54)	3.75(0.56)		3.82(0.51)
他人の気持ちの理解度	3.29(0.76)	3.32(0.82)		3.26(0.68)
豊かな生活の方法	3.11(0.84)	3.02(0.95)		3.20(0.69)
健康状態	3.26(0.77)	3.20(0.85)		3.32(0.67)

注 値が高いほど、「知りたい」と回答したことを示している。
+P<.1 *P<.05 **P<.01 ***P<.001

続いて、中高年の回答傾向との差を明確にするために、この回答について、40代・60代の回答を併せて双対尺度法を用いて分析を行った。具体的には、まず各側面に対する肯定率（「とても知りたい」+「少し知りたい」）をX軸、性年代別のグループをY軸として、双対尺度法を用いて解析した。抽出された第1軸と第II軸に対するスコアをXY同時に平面にプロットした。その結果、Figure 2-13-1 に示すようになった。

布置を見ると、大学生では男子では「容貌」「人より優れた点」、女子では「性格」「社交性」「人に見られた点」などが接近している。現在の自己の姿に関心が高く、その中でも対他者的な側面に関心もたれやすいことが示されている。一方中高年では、40代女性が「生き方についてアドバイス」「スポーツ」「趣味」、40代男性・60代女性が「人の気持ちの把握度」「自分がしたいこと」「豊かな生活の方法」「今後できること」、60代男性では「健康」などが接近している。大学生の回答と比較すると、対他者的な問題よりも自己の内的な問題に関心に移り、特に将来の自己の問題に関心もたれやすいことが示されている。

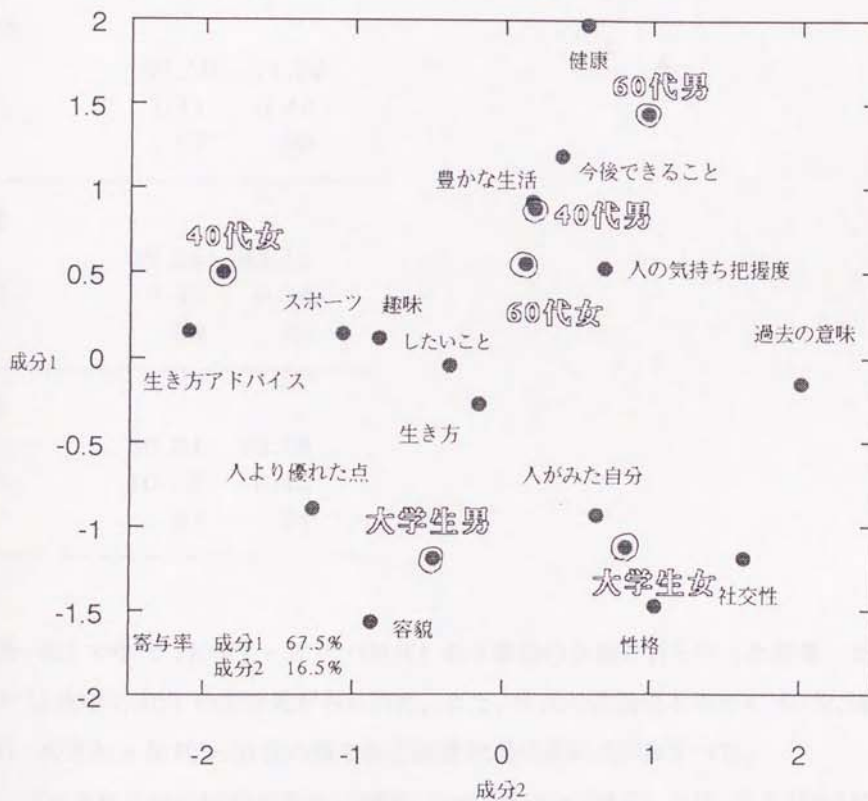


Figure 2-13-1
年代と自己認識欲求の内容

(3) 自己認識欲求尺度得点の変化

各年代によって自己認識欲求の強さに違いがみられるのか検討するために、以下の手続きで分析を行った。

まず、12章と同様に側面別の自己認識欲求に関する項目15項目に対する回答を単純加算して、自己認識欲求尺度得点とした。これらの項目については高校生調査(第11章)では使用していなため、12章の中高年調査における尺度得点とのみ比較を行う。

尺度得点の平均値は、性・年代別にみるとTable 2-13-5に示すようになった。

Table 2-13-5 自己認識欲求の尺度得点

	男性	女性
大学生		
M	47.10	47.50
S.D.	7.71	6.46
N	97	90
40代		
M	39.25	43.12
S.D.	9.39	9.36
N	99	96
60代		
M	36.34	39.78
S.D.	10.12	10.45
N	94	94

性(男・女)×年代(大学生・40代・60代)の2要因の分散分析を行った結果、まず、性($F(1,564)=11.66 P<.001$)の主効果がみられた。また、年代の主効果もみられ($F(2,564)=51.26 P<.001$)、大学生>40代>60代の順で自己認識欲求尺度得点が高かった。

また、性差を年代別に検討すると、40代($t=2.88$ $df=193$ $P<.01$)および60代($t=2.29$ $df=186$ $P<.05$)ではいずれも女性の方が有意に自己認識欲求が高いのに対し、大学生では差は有意ではなかった($t=0.38$ $df=185$ $n.s.$)。

(4) ネガティブ情報回避欲求の変化

続いて、各年代によってネガティブ情報回避欲求に違いがみられるのかを検討するために、以下の手続きで分析を行った。まず、12章と同様にネガティブ情報回避欲求に関する2項目についても、12章と同様に単純加算してネガティブ情報回避欲求尺度得点とした。

尺度得点の平均値は、性・年代別にみるとTable 2-13-6に示すようになった。

Table 2-13-6 ネガティブ情報回避欲求の尺度得点

	男性	女性
高校生		
M	4.74	4.84
S.D.	1.43	1.48
N	302	307
大学生		
M	4.71	4.90
S.D.	1.29	1.13
N	97	90
40代		
M	4.36	4.68
S.D.	1.40	1.27
N	99	98
60代		
M	4.23	4.54
S.D.	1.47	1.42
N	97	95

性(男・女)×年代(高校生・大学生・40代・60代)の2要因の分散分析を行った結果、まず性の主効果がみられた($F(1,1177)=5.23 P<.05$)。また、年代($F(3,1177)=5.42 P<.01$)の主効果がみられ、高校生・大学生の方が、40代・60代よりも自己認識欲求が高いことが示された。またネガティブ情報回避欲求の性差を年代別に検討すると、高校生($t=0.87$ $df=607$ n.s.)、大学生($t=1.06$ $df=185$ n.s.)、40代($t=1.68$ $df=195$ $P<.1$)、60代($t=1.49$ $df=190$ n.s.)

n.s.) いずれも有意な差は示されなかった。

第4節 考察

1. 自己認識欲求の強さに関する年代差

本章では、大学生を対象として行った質問紙調査結果を、第11章の高校生調査、第12章の中老年調査の結果と比較することによって自己認識欲求の発達的变化を検討した。

まず、「自分について理解したいと思うことがある」の形で自己への関心を尋ねた結果からは以下のことが推測される。まず高校生以前に自己認識欲求が高まり始め、大学生にかけて「理解したい」と思う傾向が頂点に達する。そしてそれ以降40代、60代と年代が上がるにつれて漸次欲求は低くなる。また、自己の各側面について知りたい程度を合計した自己認識欲求尺度得点についても、大学生が最も高く、それに高校生が続き、以下40代、60代の順になっている。

以上の結果は、青年中期に自己への関心が大きな問題となり始め、青年期後期で自己が確立するという従来の自己発達の研究知見と一致している。

2. 自己認識欲求の強さに関する性差

「自分について理解したい」と感じる傾向、および自己認識欲求について性差を検討したところいずれについても女性の方が得点は高いことが示された。この点から総じて女性の方が自己認識欲求が喚起されやすいものといえる。

ただしこの性差の現れ方には年代別がみられた。自分について知りたい程度については高校生では女子の方が有意に知りたい傾向が高かった。しかし、大学生以降ではこの差は明確ではない。この点から、女子の方が自己への関心を発達的に早く生起するものと考えられる。

自己の各側面について知りたい程度を尋ねた項目は高校生調査では使用していないため、大学生以降についての比較となった。本調査で示されたように大学生では、いずれの側面についても知りたい程度は男女で差はみられなかった。それに対し第12章で示したように、中老年では各項目とも女性の方が有意に知りたい程度は高かった。

以上の点から考えると、自己の発達は総じて女性の方が早く、特に青年期中期である高校生では男性との差が大きく開くことになる。ただし、大学生では男性についても自己への関心が高まるため、その差はみられなくなる。しかし、その後は総じて女性の方が自己認識欲求が高めである。この差を自己認識欲求のモデルに位置づけて解釈すると、自己認識欲求を喚起させ

る自己概念不明確感が女性の方で生じやすいためということになる。第13章では中高年の自己認識欲求の背景として、「親の老化」「子離れ」といったライフイベントや、自己の心身の否定的変化などが示されていた。本研究の結果と併せると、女性の方がこれらの環境の変化によって影響をより受けやすいために、自己認識欲求が男性よりも常に高くなるものと理解される。

3. 自己認識欲求の質的な年代差

本章では青年期後期以降、大学生および40代・60代の自己認識欲求の内容を比較した。その結果、大学生では自分について知りたいこととして「社交性」「人からみられた自分」「容貌」「人より優れた点」などを挙げやすい。一方、40代女性では「スポーツ」「自分にあった趣味」など、40代男性と60代女性は「豊かな生活の方法」「今後できること」など、60代男性では「健康」などを挙げやすいことが示されている。これらの結果からは、大学生では対他者的な自己の側面に関心が向いやすく、年齢が上昇するにつれて他者との比較を必要としない、内的な自己の側面に関心が移行していく様子が示されている。

この結果は、他の知見から行われた研究結果と合致している。例えばSuls (1986) は自己を認識するのに社会的比較を行う割合は、青年期に最も多く、年齢が上昇するにつれその程度が低下することを示している。社会的比較は、他者の目にはっきりと分かる外的・客観的部分や、他者との相対的な位置関係に規定されやすい社会的部分における自己認識に有効な手段である(高田,1986)。従ってこれらの結果は、青年期ほど対他者関係に自己意識が向いやすいという本研究結果と一致するものといえる。また、自意識の発達的变化研究でも、例えば菅原・山本・松井(1986)が自意識特性の年代による比較から、公的自意識は15歳以降年齢が上がるにつれて低下することを指摘している。これも自己の対人的側面を重視する傾向が青年期以降低下するという意味で、本研究結果と一致するものである。

また自己の認識の仕方の年代による変化を、時間軸で位置づけることも可能である。大学生が知りたいとする傾向の強い「性格」「容貌」などは、いずれも現在の自己の把握という意味が強い。これが40代女性では「自分にあったスポーツ」など現在の自己の把握と併せて、「生き方のアドバイス」など自己の将来に対する関心が相対的に高まってくる。40代男性・60代女性・60代男性の自己への関心は、大学生と対比させて位置づけると、その傾向は類似している。ただし中高年のみで差異を分析すると、40代男性と60代女性では現在の状態の他に、「これからできること」など将来展望に関心が向いやすいのに比べ、60代男性では「過去の意味」といった項目に相対的な関心が高く、自己の把握の基準が過去に推移していることが示されている。

この時間軸の知見は、個人の時間的展望の変化の問題を自己研究の視点から捉えようという発達研究の結果と重ねて検討することが可能である。例えば都筑（1993）は、大学生を対象とした調査から、同一性達成地位にある者は、自分自身の過去・現在・未来をより統合した形で捉え、かつ未来志向的であることを示している。アイデンティティを確立したものが、現在の自分よりも将来の自分をより重視するという都筑の指摘は、本研究結果と一致している。すなわち、大学生では現在の自分に関心が向いやすく、40代になると将来について関心が向いやすいのは、年齢を経て自己が確立したためにより将来を明確に捉えられるようになったためと解釈される。また白井（1991）は、青年期から中年期を対象とした調査を行い、時間的展望の獲得（より遠くの将来や過去の事象が現在の行動に影響を及ぼすという時間的展望の広がりが増大すること、将来に希望を持ち現在の生活に充実を感じ過去を受容するという時間的展望の感覚をもつこと）と刹那主義や展望主義（「現在をしっかり生きることが将来を切り開く」等の項目で測定される）の関連を検討している。その結果、女性では青年期（16-24歳群）が、成人初期（25-39歳群）・中年層（40-55歳群）よりも時間的展望に欠け、刹那主義を肯定する傾向にあった。また男性では成人初期が、青年期や中年期よりも展望主義を否定する傾向にあった。また、変数間の関連から中年層において未来指向性が高いという考察も行われている。白井の研究結果のうち青年期の女子で時間的展望が形成されていないという指摘は、青年が自己の現在の側面をより重視しやすいとの本研究の結果と一致している。また中年層において未来指向性が高いという推測については、本研究の40代の結果と対応している。また白井の調査では、時間的展望と展望主義の相関が男性のみに見られている。この展望主義の形成の性差について白井は、男性は男性役割に基づいて可能性を切り開くよう指向するために展望主義が形成されやすく、女性は補助的労働に従事するため将来計画を決定できず展望主義が一般的な意識とならないためと論じている。本研究では、女性の方が総じて自己認識欲求が高く、女性の方が男性よりも自己概念が不明確になりやすいことが示されている。自己の将来展望を形成することを自己概念の明確化をもたらすひとつの要因と解釈すると、白井の指摘する性役割の違いは、自己認識欲求の喚起の性差を解明する手がかりの一つと考えられる。

なお、時間的展望に関する研究の多くは、この視点が年齢に伴いどの程度広がったかを、時間意識という点から抽象的に測定するものが多い。都筑（1993）や杉山（1995）は、時間的展望の内容的側面の検討の必要性を論じているが、指摘にとどまっている。本研究では、個人が関心を持つ自己の側面を明らかにすることから、時間的展望の広がりを指摘したものである。従って、既存の研究よりも、具体的な形で展望の内容を示す結果となっている。

また、自己の捉え方と時間展望を結びつけた場合、時間的展望の違いが自己認識欲求の高さの

差となって現れたと推測することもできる。すなわち、認識の形が現在型であれば、他者との比較や情報収集を積極的に行うことにより、より正確な把握が進む。また自己の可能性については、外部から情報が得にくいものではあるが、情報収集によって手がかりを得ることは可能である。ただし、自己を自分自身の過去によって認識とするならば、外部から積極的に情報収集をする必要はなくなる。自己認識欲求の強さが年代によって変化するのは、このような認識の形が発達段階によって異なることが影響するためと推測される。

4. ネガティブ情報回避欲求

本章では、ネガティブ情報回避欲求の強さを高校生、大学生、および40代・60代の男女で比較した。その結果、高校生・大学生の方が中高年よりもネガティブ情報回避欲求の高いことが示された。ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求喚起に伴って生起することが9章までの結果から示されている。本章において、自己認識欲求は大学生>40代>60代の順で、ネガティブ情報回避欲求は高校生・大学生>40代・60代の順でそれぞれ高かったことは、ネガティブ情報回避欲求が自己認識欲求喚起を前提するモデルに対応した結果である。

ただし、自己認識欲求が40代から60代にかけて低下していたのに対し、ネガティブ情報回避欲求は40代と60代の間には有意な差はみられなかった。従って、60代ではネガティブ情報回避欲求が喚起しやすい状況にあると推定することができる。

ネガティブ情報回避欲求は、自己認識欲求喚起を前提とし、自己に否定的な情報収集がなされると予期される時に喚起される状況変数であると、これまでの調査・実験から推測されている。同時に予期の過程には、個人差が影響を与えることが、拒否回避欲求や劣等感などのパーソナリティ特性との関連から推測されている。60代でネガティブ情報回避欲求が40代に比べて喚起しやすくなっているのは、この予期過程において否定的な情報を予期してしまうためと考えられる。

第14章 子供をもつ母親にみる自己認識欲求¹⁾

1) 本章は、「上瀬由美子・菅原健介・宮本聡介・井上果子・山本真理子 1994 『若い母親の意識 (2) 若い母親の自己意識・生活意識』 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 256-257.」で発表したものを、共同研究者の了解を得て再解析したものである。

第1節 目的

1. 子供をもつ母親の自己認識欲求の背景

女性のライフサイクルの中で、子どもを産み・育てることは大きな転換期として位置づけられている。自己認識欲求は、自己概念を不明確にさせるような様々な出来事から生じると仮説されている。人生の新たな段階に進んだこの時期の女性は、これまでとは異なる自己を意識したり、子育てのために多くの知識が必要となるため、自己概念の不明確感を生じる要因が多いと考えられる。

本調査では子育ての時期でも特にストレスが多いといわれる、3～5歳の子どもをもつ時期の女性を対象とした質問紙調査を行い、生活意識と自己認識欲求を関連づけて検討する。子育て状況にあってどのような状況にあるものが自己に関心を持ち、自己を知りたいと感じているのかを明らかにすることによって、自己認識欲求の背景をより多面的に分析できると考える。

以上の考えに基づき、この年代の母親の自己への関心はどのような心理背景から生じるかを明らかにすることを第1の目的とする。

この目的に従い、本調査では以下に挙げる項目と自己認識欲求の関連を検討する。

(1) デモグラフィック特性

第11～12章まで、様々な要因と自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の関連が検討されてきたが、デモグラフィック特性については特に検討されていなかった。このため本調査ではいくつかのデモグラフィック特性を取り上げ、どのような社会背景をもった女性が特に自己認識欲求を喚起させやすいのかを明らかにする。ここで取り上げたのは年齢の他に、学歴・生活水準・年収である。

(2) 家族に対する不満

自己認識欲求が対人関係の過程で生起すると考えた場合、本調査の対象者である若い母親にとって重要な意味をもつ他者といえば夫と子供であろう。そこで、本調査では、夫に対する不満と、子供に対する不満が自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求喚起要因となることを想定

して、質問項目に含めた。

(3) 生活感情

自己認識欲求やネガティブ情報回避欲求は、様々な心理背景から喚起されるが、これが自己にとってポジティブな心理状態から生じるのか、ネガティブな心理状態から生じるのかを明らかにする必要がある。そこで、本調査では、生活感情と両欲求との関連を検討する。

(4) 自己への満足度との関連

この時期の女性は、母親の他に、妻として、また一人の女性としてという複数の役割を担っている。そのいずれが自己認識欲求と強く結び付いているのか。この3側面について満足度を尋ね、自己認識欲求との関連を検討する。

(5) パーソナリティ特性

5章・9章・11章では、様々なパーソナリティ特性と、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の関連を検討している。ここでも、ネガティブ情報回避欲求の位置づけや自己認識欲求の性質を明らかにするために、パーソナリティ特性との関連を検討する。ここで取り上げるのは、自尊感情・賞賛獲得欲求・拒否回避欲求である。

2. 自己認識欲求モデルの検証

第11章では高校生を、第12章では中高年を対象とした調査を行い、自己認識欲求仮説モデルの検討および喚起背景について考察を行った。ただし、両調査の対象者が高校生と中高年と限定されたために、20代・30代の壮年期についてはモデル検証を行っていない。

そこで本章では20代および30代の女性を対象とした本調査において、その他の年代のように自己認識欲求の喚起モデルがあてはまるか否かを検証することを第2の目的とする。

本調査で取り上げる各要因を、自己認識欲求の喚起モデル (Figure 2-14-1) に対応させたのがFigure 2-14-2である。

夫・子供に対する不満や、母・妻・女性としての満足度の低さなど日常生活に対する不満は、理想と現実のズレとして位置づけられる。このズレは、自己知識間の矛盾を意識させたり、あるいは状況打開のための知識不足の意識化をもたらすとも考えられる。従って、自己概念不明確感を媒介として、自己認識欲求の喚起に結び付くと予測される。

また11章の結果から、自尊感情が低い場合には、自己関連情報を判断する際に自己評価を低下させることを予期しやすいので、ネガティブ情報回避欲求の高さに結び付くことが推測されている。そしてこのネガティブ情報回避欲求は、自己認識欲求の喚起に伴い喚起されると推測される。

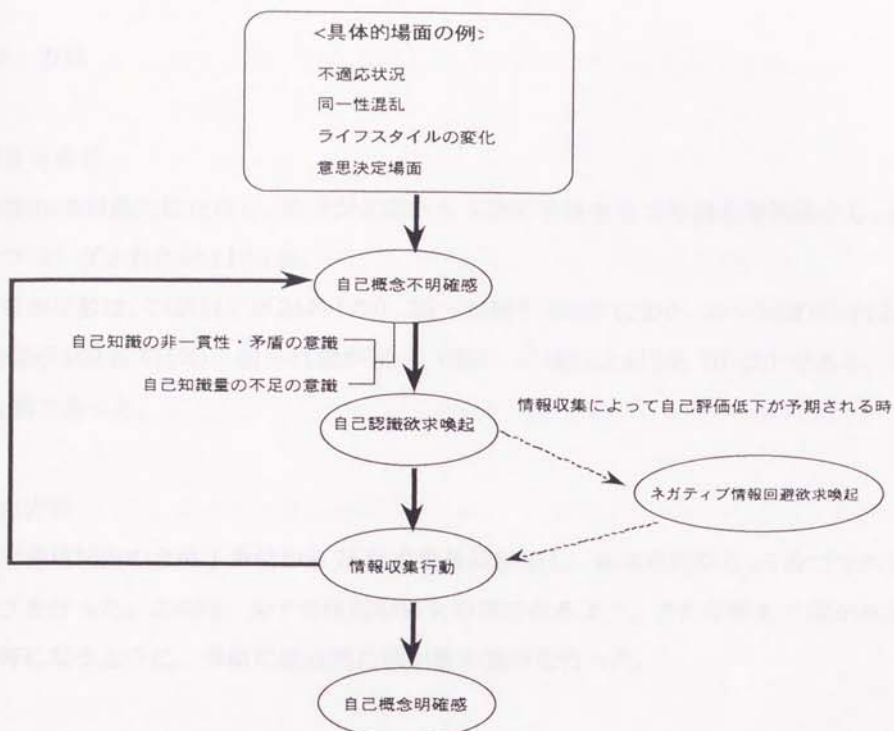


Figure 2-14-1 自己認識欲求の仮説モデル
(第1章で修正したもの)

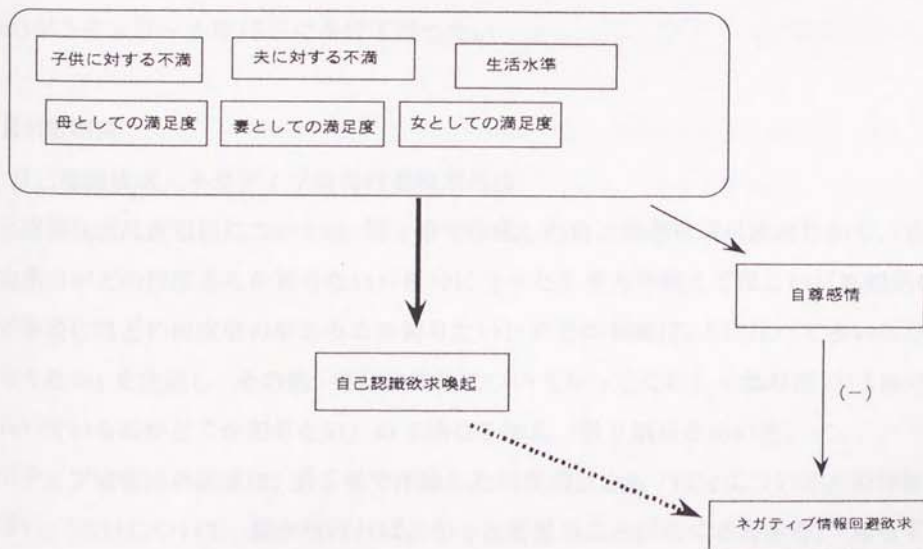


Figure 2-14-2 本調査の作業仮説

第2節 方法

1. 調査対象者

首都圏30キロ圏内に在住し、長子が3歳から5歳の子供をもつ母親を母集団とし、その中からサンプリングされた計1125名。

対象者の年齢は、24歳以下が24名(2%)、25～29歳が326名(29%)、30～34歳が574名(51%)、35～39歳が169名(15%)、40～44歳が30名(9%)、45歳以上が2名(0.2%)である。平均年齢は31.4歳であった。

2. 抽出方法

調査対象地域内の全町丁単位から75地点を系統抽出し、各地点内から15名づつエリアサンプリングを行った。この時、長子の性別が男女均等になるよう、また年齢も3歳から5歳の区分で均等になるように、事前に地点別に抽出数の割当を行った。

3. 調査方法

訪問留置法を用いた。

4. 調査期間

1993年2月2日～2月15日にかけて行った。

5. 質問紙構成

(1) 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度

自己認識欲求尺度項目については、第1章で作成した自己認識欲求尺度項目から、「自分の社交的な能力がどの程度あるか知りたい」「自分に合った生き方を教えてほしい」「客観的に見て、自分の容姿にはどの程度魅力があるのか知りたい」「自分の知識は、人に比べて多いのか少ないのか知りたい」を使用し、その他「自分の性格についてもっとくわしく知りたい」「自分は子育てに向いているのかどうか知りたい」の2項目を加え、計6項目を用いた。

ネガティブ情報回避欲求は、第5章で作成した尺度項目から「自分について人の評価を聞くのは怖い」「自分について、聞かなければよかったと思うことがたくさんある」「知らずに犯したあやまちは知らせてほしくない」「自分についての悪口でも、真実だったらできるだけ聞きた

いと思う」の4項目を使用した。

回答形式は、「5.あてはまる」から「1.あてはまらない」の5件法である。

(2) デモグラフィック特性

1. 学歴

「あなたが最後に卒業した学校はどこですか」という問について、「1. 中学校」「2. 高校」「3. 高専」「4. 短大」「5. 大学」「6. 大学院」のいずれかに○をつけることを求めた。

2. 生活水準

「お宅の生活水準は、ご自分ではどの程度だとお考えですか」という問について、「1. 上」「2. 中の上」「3. 中」「4. 中の下」「5. 下」のいずれかに○をつけることを求めた。

3. 年収

「差し支えなければ、お宅の世帯全体の税込年収は、次にあげてある中のどれにあたるか○をして下さい」という問について、「1. 299万円以下」～「12.1500万円以上」の12件法で尋ねた。

4. 年齢

(3) 家族に対する不満

夫に対する不満と、子供に対する不満について、「5. 大変満足している」から「1. 全く満足していない」までの5段階評定で回答を求めた。

(4) 生活感情に関する項目

「充実している」「苦しい」など24の感情を示し、最近の生活の中で感じる気持ちとしてあてはまるかどうかを尋ねた（あてはまる場合には「はい」、あてはまらない場合には「いいえ」に○をつけてもらった）。

これらの項目のうち、肯定率が10%以下であった5項目を除いた19項目について、主成分解を用いて因子分析を行った。固有値1.0以上の基準を満たす4因子を抽出し、Varimax回転を行った。各因子の回転後の寄与率は、第1因子15.6%、第2因子13.3%、第3因子11.4%、第4因子8.0%であった。

第1因子負荷量の高かった項目は、生き生きした・はれやか・満たされている・元気一杯・楽しい・充実している、であり因子名は「充実感」と名付けられた。同様に第2因子では、むなしい・苦しい・ゆううつ・腹立たしい・はりつめた、で負荷量が高く「抑うつ感」と名付けられた。第3因子は、のんびり・くつろいだ・おだやかな・疲れている、に負荷量が高く、「くつろぎ感」とされた。第4因子では、イライラ・退屈・あせる・何かに追われているよう、に負荷量が高く「ストレス感」とされた。この結果に基づき、各因子に負荷量の高かった項目の

回答（「はい」1点、「いいえ」2点。ただし、「疲れている」については「はい」2点、「いいえ」1点。）を単純加算する形式で4種類の感情の得点化を行った。得点が低いほど、その感情が高いことを示している。

(5) 自己に対する満足度

自己に対する満足度を、「母としての自分」「妻としての自分」「女性としての自分」の3側面について、100点満点で採点することを求めた。

(6) パーソナリティ特性

1. 自尊感情

山本ら（1982）の自尊感情尺度を使用し、「5. あてはまる」から「1. あてはまらない」までの5件法で回答を求めた。得点化は山本ら（1982）と同様に行った。

2. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求

賞賛獲得欲求については、菅原（1986）の賞賛獲得欲求尺度項目から「みんなの注目を浴びたい」「みんなの人気者になりたい」の2項目を使用した。拒否回避欲求については、菅原（1986）の拒否回避欲求尺度項目から「できるだけ敵はつくりたくない」「誰からも嫌われたくない」の2項目を使用した。回答は「5. あてはまる」から「1. あてはまらない」までの5件法で求め、得点化は菅原（1996）に基づいて行った。

第3節 結果

1. 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度

本調査では、自己認識欲求の測定に、第1章で作成した尺度項目に新たな独自の項目を加えた項目を使用した。そこで使用した6項目について主成分分析を行った結果、Table 2-14-1に示すようになった。いずれの項目も第1主成分に0.68以上の高い負荷量を示し、1次元性が確認された。このため、この6項目を単純加算する形で、自己認識欲求の尺度得点を算出した。

Table 2-14-1 自己認識欲求尺度項目の主成分分析 (主成分負荷量)

N=1124

変数名	成分 1	成分 2
自分の社交的な能力がどの程度あるか知りたい	0.708	0.519
自分にあった生き方を教えてほしい	0.754	-0.228
客観的に見て、自分の容姿にはどの程度魅力があるのか知りたい	0.820	0.251
自分の性格についてもっとくわしく知りたい	0.831	-0.116
自分の知識は、人に比べて多いのか少ないのか知りたい	0.832	0.041
自分は子育てに向いているのかどうか知りたい	0.683	-0.497
寄与率 (%)	59.82	10.78

ネガティブ情報回避欲求についてはこれまで使用した尺度項目を用いたが、確認のために主成分分析を行った。その結果は、Table 2-14-2 に示すようになり、いずれの項目も第1主成分に負荷量が高かった。そこで、この4項目をネガティブ情報回避欲求を測定する項目として使用し、得点の単純加算をもって尺度得点とした。このうち「自分についての悪口でも、真実だったらできるだけ聞きたいと思う」は逆転項目である。

Table 2-14-2 ネガティブ情報回避欲求尺度項目の主成分分析 (主成分負荷量)

N=1125

変数名	成分 1	成分 2
自分について人の評価を聞くのは怖い	0.703	0.363
自分について聞かなければよかったと思うことがたくさんある	0.725	0.360
知らずに犯したあやまちは知らせてほしくない	0.713	-0.263
自分についての悪口でも、真実だったらできるだけ聞きたいと思う	-0.396	0.830
寄与率 (%)	42.15	25.45

なお、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の尺度得点の相関は、 $r=0.21$ ($N=1000$ $P<.001$) であった。

2. 自己認識欲求喚起の背景

本研究の第1の目的は自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求が生活意識その他とどのような関連をもつのかを検討することにある。この目的に沿って、まず自己認識欲求の尺度得点の分布から、全体を自己認識欲求低群・自己認識欲求高群に分けた。またネガティブ情報回避欲求についても同様に、尺度得点の分布から全体をネガティブ情報回避欲求低群・高群に2分した。以下では、この尺度得点の高群・低群間で生活意識についての各回答にどのような差がみられるかをもって、両欲求と生活意識の関連を検討する。

(1) デモグラフィック特性との関連

「学歴」「生活水準」「年収」について、自己認識欲求の高低(低群・高群)×ネガティブ情報回避欲求高低(低群・高群)で2要因の分散分析を行ったところ、Table 2-14-3 のようになった。

Table 2-14-3

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の高低別にみた、デモグラフィック特性

	自己認識欲求		ネガティブ情報回避欲求	
	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N
学歴	3.1 (1.25) 539 F=8.92 P<.01	2.9 (1.15) 584	3.1 (1.25) 590 F=2.90 n.s.	2.9 (1.15) 533
生活水準	3.1 (0.60) 539 F=0.15 n.s.	3.1 (0.60) 583	3.1 (0.60) 584 F=0.00 n.s.	3.1 (0.60) 529
年収	5.5 (2.35) 428 F=4.26 P<.05	5.1 (2.10) 484	5.4 (2.30) 491 F=1.21 n.s.	5.2 (2.13) 421

分散分析の結果、学歴と年収について自己認識欲求の主効果がみられ、自己認識欲求高群の方が「学歴」「年収」が低いことが示されている。ネガティブ情報回避欲求はいずれの変数についても、主効果は示されなかった。

また、3変数全てについて有意な交互作用は見られなかった。

(2) 家族関係との関連

「夫への不満」「子供への不満」について、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の2要因の分散分析を行った (Table 2-14-4)。

Table 2-14-4 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の高低別にみた、家族への不満

	自己認識欲求		ネガティブ情報回避欲求	
	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N
夫への不満	2.2 (0.85) 537	2.3 (0.88) 578	2.2 (0.84) 585	2.3 (0.89) 530
	F=0.71 n.s.		F=2.46 n.s.	
子供への不満	2.6 (0.77) 539	2.7 (0.77) 583	2.6 (0.78) 589	2.7 (0.78) 533
	F=5.63 P<.05		F=2.98 n.s.	

子供への不満について、自己認識欲求の主効果がみられ、自己認識欲求の高いものほど子供への不満が高い。

一方、ネガティブ情報回避欲求の主効果および交互作用はいずれも有意ではなかった。

(3) 生活感情との関連

生活感情を測定する「充実感」「抑うつ感」「ストレス感」「くつろぎ感」の各尺度得点について、自己認識欲求の高低（低群・高群）×ネガティブ情報回避欲求高低（低群・高群）で2要因の分散分析を行ったところ、Table 2-14-5 のようになった。

Table 2-14-5 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の高低別にみた、生活感情

	自己認識欲求		ネガティブ情報回避欲求	
	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N
充実感	7.8 (1.76) 540 F=1.39 n.s.	7.6 (1.87) 580	7.9 (1.75) 589 F=15.31 P<.001	7.5 (1.87) 531
抑うつ感	5.6 (1.03) 539 F=3.09 n.s.	5.8 (1.21) 582	5.6 (1.03) 589 F=9.83 P<.01	5.8 (1.21) 532
くつろぎ感	6.1 (1.42) 539 F=0.91 n.s.	6.0 (1.42) 582	6.1 (1.39) 589 F=1.28 n.s.	6.0 (1.45) 532
ストレス感	5.0 (1.00) 540 F=16.34 P<.001	5.3 (1.11) 583	5.0 (1.02) 591 F=10.76 P<.001	5.3 (1.10) 532

自己認識欲求は、ストレス感について有意な主効果を示しており、自己認識欲求高群の方がストレスは高くなっている。

一方ネガティブ情報回避欲求は、充実感・抑うつ感・ストレス感に有意な主効果を示し、ネガティブ情報回避欲求高群の方が、充実感は低く、抑うつ感とストレス感が高いことが示されている。

いずれの変数についても、交互作用はみられなかった。

(4) 自己への満足度との関連

「母としての自分」「妻としての自分」「女性としての自分」に対する満足度について、自己認識欲求の高低（低群・高群）×ネガティブ情報回避欲求高低（低群・高群）で2要因の分散分析を行ったところ、Table 2-14-6 のようになった。

Table 2-14-6 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の高低別にみた、自己満足度

	自己認識欲求		ネガティブ情報回避欲求	
	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N
母としての満足度	67.1 (14.83) 536 F=0.06 n.s.	66.6 (15.53) 582	68.3 (15.03) 588 F=11.61 P<.001	65.2 (15.22) 530
妻としての満足度	61.2 (17.61) 530 F=2.62 n.s.	62.3 (16.41) 577	62.8 (17.14) 580 F=6.62 P<.05	60.5 (16.77) 527
女性としての満足度	58.4 (16.61) 532 F=0.06 n.s.	57.6 (16.16) 581	59.1 (16.16) 584 F=5.53 P<.05	56.7 (16.54) 529

自己認識欲求はいずれの満足度についても有意な主効果はみられなかった。

一方、ネガティブ情報回避欲求は3側面全てについて有意な主効果を示し、どの側面についてもネガティブ情報回避欲求の高群の方が満足度が低い。

また、有意な交互作用は示されなかった。

(5) パーソナリティ特性との関連

「自尊感情」「賞賛獲得欲求」「拒否回避欲求」について、自己認識欲求の高低（低群・高群）×ネガティブ情報回避欲求高低（低群・高群）で2要因の分散分析を行ったところ、Table 2-14-7のようになった。

Table 2-14-7

自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の高低別にみた、パーソナリティ尺度得点

	自己認識欲求		ネガティブ情報回避欲求	
	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N	低群 M (S.D.) N	高群 M (S.D.) N
自尊感情	34.7 (5.74) 539 F=32.83 P<.001	32.1 (5.34) 582	34.8 (5.60) 590 F=66.97 P<.001	31.7 (5.29) 531
賞賛獲得 欲求	4.8 (2.00) 539 F=37.30 P<.001	5.5 (1.93) 584	5.0 (2.09) 590 F=1.18 n.s.	5.3 (1.89) 533
拒否回避 欲求	8.0 (1.87) 540 F=18.52 P<.001	8.5 (1.51) 584	8.1 (1.76) 591 F=13.37 P<.05	8.4 (1.63) 533

自己認識欲求は3つの変数全てについて有意な主効果を示し、自己認識欲求の高いものは自尊感情が低く、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が高いことが示されている。

一方、ネガティブ情報回避欲求は、自尊感情と拒否回避欲求に主効果を示し、ネガティブ情報回避欲求高群は自尊感情が低く、拒否回避欲求が高いことが示されている。

また、3要因いずれについても有意な交互作用は示されなかった。

3. 自己認識欲求モデルの検証

(1) 自己認識欲求モデルの検証

Figure 2-14-2 の仮説に従い、重回帰分析をした結果、Table 2-14-8 および、Figure 2-14-3 に示す結果となった。

本調査の仮説では、夫・子供に対する不満や、母・妻・女性としての満足度の低さなど日常生活に対する不満は、自己認識欲求の喚起に結び付くと推測された。しかし結果を見ると、自己認識欲求に直接パスを示しているのは、子供に対する不満・妻としての満足度・自尊感情(マイナス)・ネガティブ情報回避欲求である。

またネガティブ情報回避欲求は、自尊感情と有意なパスを示していた。これは、自尊感情が低い場合には、自己関連情報を判断する際に自己評価を低下させることを予期しやすいので、ネガティブ情報回避欲求の高さに結び付くとの仮説を検証したものと考えられる。

さらに、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求とも有意なパスを示している。これは、自己認識欲求の喚起に伴い、ネガティブ情報回避欲求が喚起されるとした仮説を検証したものと考えられる。

Table 2-14-8 重回帰分析の結果(標準偏回帰係数) N=894

説明変数	基準変数		
	自己認識 欲求	ネガティブ 情報回避	自尊感情
年収	-0.03	0.01	0.06
生活水準	-0.03	-0.05	-0.08*
夫に対する不満	0.02	0.02	-0.14***
子供に対する不満	0.10**	0.03	-0.07*
母としての満足度	-0.02	-0.06	0.17***
妻としての満足度	0.13**	0.01	0.03
女性としての満足度	-0.02	0.02	0.19***
自尊感情	-0.28***	-0.29***	
自己認識欲求		0.15***	
重相関係数	0.32***	0.38***	0.43***

()内はN ***P<.001 **P<.01 *P<.05

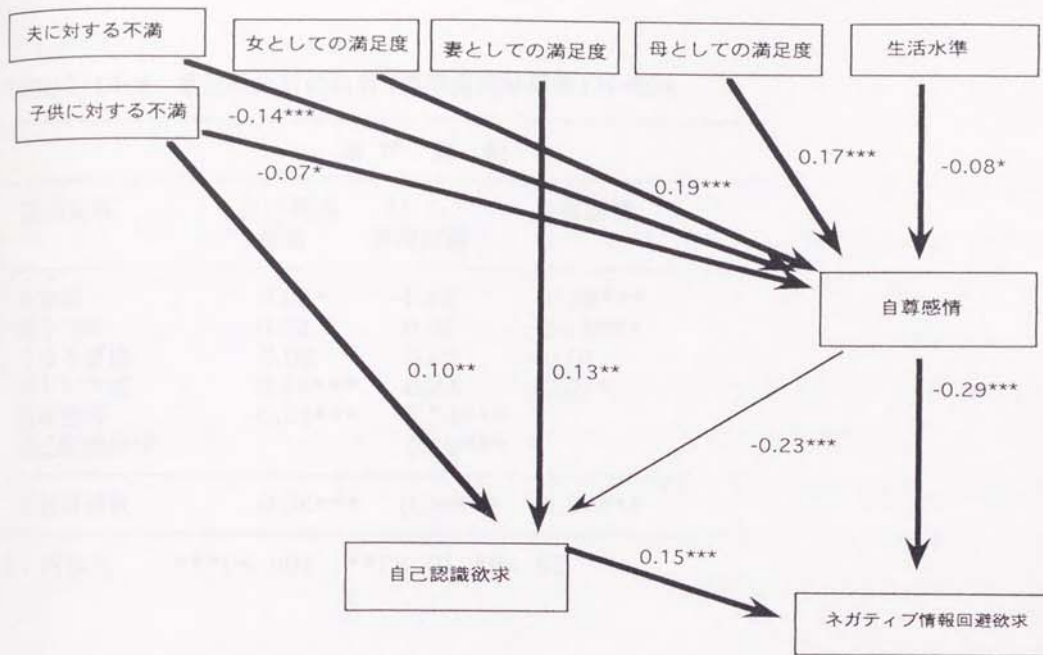


Figure 2-14-3 各変数の関連(数値はパス係数)

注)標準偏回帰係数の検定の結果、有意なもののみを記した。
 *** $P < .001$ ** $P < .01$ * $P < .05$

(2) 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と生活感情の関連

さらに、生活感情のみを取り上げ、自己認識欲求の説明変数とし重回帰分析をした結果、Table 2-14-9 および、Figure 2-14-4 に示す結果となった。

自己認識欲求は生活感情の中ではストレス感と有意なパスを示した。その他では、Figure 2-14-4 に示されたように、自尊感情とネガティブ情報回避欲求と関連が示されている。

一方ネガティブ情報回避欲求は、自尊感情と自己認識欲求と有意なパスを示しているが、生活感情とは関連は低かった。

さらに自尊感情は、くつろぎ感を除く3尺度と有意なパスを示している。

Table 2-14-9 重回帰分析の結果(標準偏回帰係数) N=894

説明変数	基準変数		
	自己認識 欲求	ネガティブ 情報回避	自尊感情
充実感	0.08*	-0.02	0.28***
抑うつ感	0.02	0.02	-0.12***
くつろぎ感	-0.02	0.02	-0.01
ストレス感	0.18***	0.04	-0.07*
自尊感情	-0.24***	-0.24***	
自己認識欲求		0.19***	
重相関係数	0.32***	0.36***	0.37***

() 内はN ***P< .001 **P< .01 *P< .05

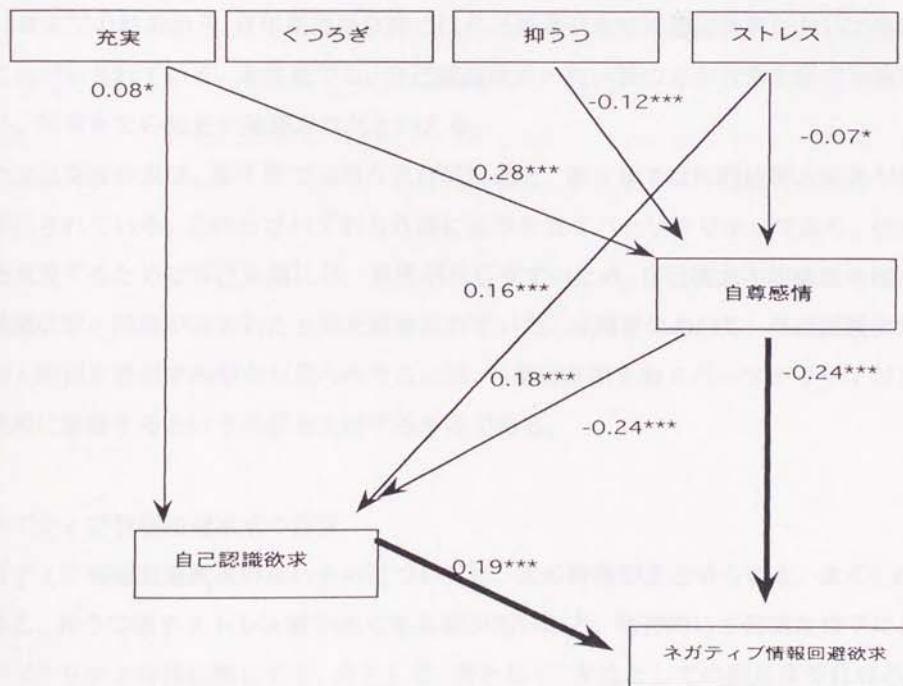


Figure 2-14-4 各変数の関連(数値はパス係数)

注)標準偏回帰係数の検定の結果、有意なもののみを記した。
 ***P< .001 **P< .01 *P< .05

第4節 考察

1. 自己認識欲求の背景

本調査の第1の目的は、自己認識欲求の喚起背景を検討することにあつた。様々な生活意識やパーソナリティ特性について、自己認識欲求の高低およびネガティブ情報回避欲求の高低で2×2の分散分析を行った。自己認識欲求の主効果がみられた結果に基づき、自己認識欲求の高い回答者の特徴をまとめると次のようになる。

まずデモグラフィック特性上では、自己認識欲求の高い者は学歴が低く、年収が低いなど生活レベルに不満を感じている。また生活意識との関係でも、子供への不満やストレスが高い。パーソナリティ特性については、自尊心が低く、拒否回避欲求・賞賛獲得欲求が高いなど、自分について評価が低く対人関係に気を使っている様子が示されている。これらの結果から、自己認識欲求の高さは、総じて日常生活に対する不適応感によって喚起されているとまとめられる。

第13章までの結果から、青年期後期以降には自己認識欲求は不適応状態において喚起されやすいことが示されている。本調査でも、自己認識欲求の高い群の方が日常生活で不適応を感じており、前章までの知見が確認されたといえる。

また自己認識欲求は、第7章では相互依存的自己と、第9章では外的統制と関連が高いとの結果が示されている。これらはいずれも外部に基準を置くパーソナリティであり、他者からの情報を重視するために自己知識に非一貫性が生じやすいため、自己概念不明確感を媒介として自己認識欲求と関連が示されたものと理解されていた。本調査において、自己認識欲求の高い群で対人関係を重視する傾向が見られたことは、外部に基準をおくパーソナリティが自己認識欲求喚起に影響するという推察を支持するものである。

2. ネガティブ情報回避欲求の背景

ネガティブ情報回避欲求の高いものについては、次の特徴がまとめられる。まず生活意識からみると、抑うつ感やストレス感が高く充実感が低いなど、精神的に不健康な様子にある。またパーソナリティ特性に関しても、母として、妻として、女性としての満足度や自尊心が低く、拒否回避欲求が高いことが指摘できる。以上の結果から、ネガティブ情報回避欲求の高い者は総じて自己評価が低下した状態にあることが示された。

ネガティブ情報回避欲求は、自己認識欲求喚起を前提とし、収集される情報によって自己評価の低下が予期される時に喚起するものと解釈されている。そしてこの予期に個人差が影響す

ることが推定されている。例えば第11章では自尊心の低い高校生ほどネガティブ情報回避欲求が高いことが示されているが、これは自尊心の低い者の方が結果によって自己評価を低めることを予期しやすいためと解釈されている。本研究でも、ネガティブ情報回避欲求の低い者の方が自己への満足度や自尊心の低いことが示されており、これは前章までの結果を確認するものである。

3. 自己認識欲求の仮説モデルとの対応

本調査の第2の目的は、20代および30代の女性においても、他の年代のように自己認識欲求の喚起モデルがあてはまるか否かを検討することにあつた。

パス解析の結果、「子供に対する不満」あるいは「ストレス」などの不適応的心理が自己認識欲求に結び付くことが示された。これは、不適応感など自己概念不明確感をもたらす背景が自己認識欲求を喚起させるとの仮説モデルを支持するものである。

またネガティブ情報回避欲求には、「自尊感情」の低さと自己認識欲求からパスが示された。これは、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求に伴って喚起し、また自尊感情の低下がネガティブ情報回避欲求を高めるとの仮説を支持するものである。

以上のように、これらの関係は、いずれも自己認識欲求の仮説モデルと対応しており、自己認識欲求モデルの妥当性が30代を中心とする女性でも確認されたと結論できる。

第III部 総括

第II部では、自己認識欲求仮説モデルの検証のために行った実証的研究（調査11、実験2）を14章に分けて報告した。第III部ではまず第1章で、第II部の各章を要約する。続く第2章では、モデルの検証結果をもとに仮説部分を一部修正した自己認識欲求モデルを提唱する。さらに、第I部の問題提起と関連づけて本研究の意義を述べる。そして最終章では、残された課題と今後の展望を記す。

第1章 各章の要約

1. 第I部の要約

第I部では、自己認識欲求に関する理論的検討を行った。

まず、第1章では従来の自己概念研究をまとめ、現在自己概念がどのように考えられているのかを総括した。

第2章では、自己情報の探求に関する研究を概観した。

第3章では、上記の研究を踏まえ、自己認識欲求という仮説的構成概念および自己認識欲求仮説モデルを提出した。

2. 第II部の要約

第II部では、自己認識欲求との仮説的構成概念の妥当性を検証するとともに、自己認識欲求の仮説モデルで現実場面がどのように説明できるのかを検討することを目的とした。このために11の調査と2つの実験が行われ、その結果を14章に分けて報告した。

第1章 自己認識欲求測定尺度の作成と日常生活の不適応感との関連

大学生女子に対し質問紙調査を行った。大学生の自己認知構造に関する山本ら(1982)の質問項目を基に、自己への関心について尋ねる項目を作成し、因子分析を行った。その結果、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求・自己理解程度の3因子を抽出し、この結果を基に自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求を測定する2つの尺度を作成した。

このネガティブ情報回避欲求は、自己認識欲求のモデルでは提出されていないものであるが、項目の内容から、自己について否定的な内容の情報が収集されることを避けようとする傾向であると考えられた。さらに、自己認識欲求との間には正の相関がみられ、かつ尺度得点の分布から、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求に伴って喚起されるものであると推測された。この考察に基づき、ネガティブ情報回避欲求を含める形で、仮説モデルが一部修正された。

続いて、自己認識欲求の仮説モデルで、自己概念不明確感をもたらす場面として挙げられた中から、日常生活の不適応を取り上げ、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との関連を分析した。その結果、自己認識欲求は、3種類の不適応感(対人関係の不適応・恋愛に対する不満・将来展望の不明確)全てとの間に有意な相関を示した。この結果から、不適応感が自己概

念不明確感を媒介として自己認識欲求を喚起させるとのモデルの妥当性が示された。

第2章 自己概念不明確感と自己認識欲求の関連

自己認識欲求の喚起要因となる自己概念不明確感は、「自己知識の非一貫性・矛盾」「社会的行動を為すのに不十分な自己知識量」のいずれかを意識することによって生じると仮説されている。第2章では、「自己知識の非一貫性・矛盾の意識」の指標として自己概念変動性を、意識されない「自己知識の非一貫性・矛盾」の指標として自己評定の矛盾を取り上げ、自己認識欲求との関連の検討を試みた。また、自己認識欲求喚起モデルで、自己概念不明確感を生じるひとつの場面として例示されている同一性混乱についても、同時に関連検討を行った。

調査は大学生男女を対象として行った。

自己認識欲求の仮説モデルに従いパス解析を行った結果、同一性混乱が自己概念の変動性(自己概念不明確感)を介して、自己認識欲求喚起を喚起させるとの関係が示された。これは、自己認識欲求の仮説モデルを支持するものである。

一方、意識化されない自己知識の矛盾は、自己認識欲求喚起と有意な関係を示さず、自己概念の不明確を意識することが自己認識欲求を喚起させることが明らかとなった。

第3章 自己概念不明確感の背景と自己認識欲求喚起

大学生男女を対象にした質問紙調査を行い、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求・自己概念不明確感・同一性混乱・(情報収集行動のひとつとしての)“雑誌心理テスト”への接近の関連を検討した。

自己認識欲求の仮説モデルに従いパス解析を行った結果、同一性混乱が自己概念不明確感を媒介として自己認識欲求を喚起し、それに伴い情報収集行動が生起するという関係が示された。これは、仮説モデルの妥当性を示すものである。

第4章 自己認識欲求喚起による情報収集行動の実験的研究

本研究では、自己概念不明確感を生じる状況のひとつとされる「自己知識の非一貫性・矛盾」の意識を被験者に生起させ、自己認識欲求仮説の検証を試みた。さらに、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求と自己情報収集に対する態度との関連を検討することで両欲求が情報収集行動に与える影響を検討した。

大学生男女を対象とした集団実験を行い、被験者に偽のフィードバックを与え、その受け止め方から全体を、自己概念に一致した情報を受け取った整合群、不一致の情報を受け取った不

整合群に二分した。

不一致情報が自己認識欲求を喚起させることを確認するために、整合群・不整合群の自己認識欲求尺度得点を比較した。その結果、有意な差はみられず、仮説は支持されなかった。

さらに、自己認識欲求の高低×ネガティブ情報回避欲求の高低で、情報収集量について2要因の分散分析を行った。その結果、自己認識欲求の有意な主効果がみられたが、ネガティブ情報回避欲求の有意な主効果はみられず、交互作用もみられなかった。この点から、情報収集行動に直接影響を与えるのは、自己認識欲求であることが確認された。

第5章 自己認識欲求喚起と、心理テストへの接近に関する研究

大学生女子を対象とした質問紙調査を行い、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求・3つの情報収集手段への接近度・自尊感情・賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の関連を分析した。その結果以下の点が示された。

まず、自己認識欲求は3つの情報収集手段いずれとも有意な正の相関を示し、「自己認識欲求喚起が情報収集手段を生起させる」との仮説が支持された。賞賛獲得欲求・拒否回避欲求はともに自己認識欲求と有意な正の相関を示した。

一方、ネガティブ情報回避欲求は、“ネガティブな心理テスト”とのみ有意な負の相関がみられた。また、パーソナリティ特性との関連分析でも、拒否回避欲求と有意な正の相関が示された。このため、ネガティブ情報回避欲求は、従来自己確認過程や自己評価維持モデルなどに於いて扱われてきた傾向と対応するものと位置づけられた。

第6章 自己認識欲求喚起に関する実験

大学生女子を対象とした実験（共感性の測定。被験者には偽の結果を提示する）を行い、自己認識欲求仮説モデルの検討を行った。本実験では提示するテスト結果について、独立変数として提示結果の内容（肯定群・否定群）、知識不足指摘有無（指摘群・非指摘群）を設定し、2×2の実験デザインで実験を行った。従属変数として用いるのは、テスト結果提示後の質問紙における、自己知識との一致度・自己概念不明確感、次回実験への参加意向等である。

分析の結果、提示結果が自己概念と不一致であったとした者は、一致していたと感じた者よりも自己概念不明確感が高くなった。この結果から、「自己知識の非一貫性・矛盾の意識が自己概念不明確感を生じる」との仮説が支持された。ただし、自己知識の不足の操作による自己概念不明確感の差はみられなかった。

一方、テスト結果提示後の自己概念の不明確感と自己認識欲求の関連は直接的には示されず、

「自己概念の不明確感が自己認識欲求を喚起する」との仮説は検証されなかった。しかし、自己概念不明確感の生起有無×提示結果の内容で、自己の特性（共感性）について知りたい程度について2×2の分散分析を行った。その結果、自己概念が不明確な場合には結果の内容は知りたい程度に影響しないが、明確な場合には肯定的な場合のみ知りたいとする傾向がみられた。さらに、自己の特性について知りたいと感じるものほど次回実験の参加意欲が高く（予期される結果の肯定・否定性の差はない）、特に自己概念不明確感を感じたものほどその傾向が強かった。この点から、自己認識欲求喚起が情報収集行動を促し、否定的な情報でも求めるという傾向が確認された。

第7章 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の関連

大学生男女を対象とした質問紙調査を行い、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求・自己概念変動性・相互依存的自己理解・5種類の情報収集手段（他者に聞く・他者との比較・社会的フィードバック・自己観察・雑誌や本）の利用度（場面想定法）との関連を検討した。

その結果、相互依存的自己理解が自己概念の変動性をもたらし、自己認識欲求を喚起させるという仮説が検証された。

また、自己認識欲求は全ての手段と有意な関連を示し、自己認識欲求が情報収集行動を生起させるとの仮説が検証された。

第8章 収集される情報と収集手段の関連

自己認識欲求の内容によって情報収集手段が異なるか否かを検討するために、大学生女子を対象とした質問紙調査を行った。回答者には場面想定法を用いて、各場面で用いそうな手段を選択することを求めた。

分析の結果、自己認識欲求の高い群では情報収集行動において、知りたい内容と知る手段の構造化が進んでいることが示された。

第9章 自己認識欲求と他のパーソナリティとの関連

自己認識欲求とパーソナリティ特性の関連を3つの調査によって検討した。

まず調査1では、外的統制・内的統制感と、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との関連を検討した。その結果、自己認識欲求は外的統制と有意な正の相関を示すが、内的統制とは無関連であった。また、ネガティブ情報回避欲求は外的統制と正の、内的統制と負の相関がみられた。

調査2では、同調・依存傾向および決定依存傾向と、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との関連を検討した。その結果、自己認識欲求は決定依存、同調・依存いずれとも有意な正の相関を示した。一方、ネガティブ情報回避欲求は、女子においてのみ決定依存、同調・依存と有意な相関を示した。

調査3では、自意識特性、YG性格テストと、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求との関連を検討した。その結果、自己認識欲求は自意識特性については、公的自意識・私的自意識いずれとも有意な相関を示した。またYG性格テストについては、主観性の高さ・非強調性の高さ・思考的外向の低さと関連が示された。一方、ネガティブ情報回避欲求は、公的自意識とは無関連で、私的自意識と負の相関を示した。

以上の結果から、“他者に基準をおく傾向”の高い者ほど、自己認識欲求が喚起されやすいことが推測された。

第10章 自己認識欲求の構造と情報収集行動

青年期以降の女性を対象として、あらかじめ項目を作成することなく、回答者に自己認識欲求の内容・喚起要因・自己情報収集手段について自由記述することを求めた。内容分析の結果、指摘されたのは以下の点である。

まず、自己認識欲求は青年期以降にも存在しており、その内容は、「可能性」「性格」などを中心として自己概念全般にわたる。ただし、自己について知りたい程度は加齢に伴い減少する。

自己認識欲求の喚起の状況として、様々な場面が挙げられたが、全体としては「自己知識の非一貫性・矛盾の意識」「自己知識量の不足感」という、自己認識欲求の仮説モデルで設定された状況として説明できる。

自己情報収集手段については、Schoneman(1981)の研究結果と比べて、「社会的比較」の割合が低めである。

第11章 高校生の自己認識欲求

本章では、高校生を対象として、ランダムサンプリングによる質問紙調査を行った。自己認識欲求と他の生活意識との関連を検討した結果、次の点が示された。

高校生では、同一性拡散が自己認識欲求の原因となっており、これは大学生の調査結果と一致している。しかし、家庭や学校での不適応は自己認識欲求に関連しておらず、むしろ、適応している者のほうが、自己認識欲求は高かった。この点から、青年期中期(高校生)と青年期後期(大学生)との間には、自己認識欲求が喚起される背景が異なるのではないかと考えられ

た。

第12章 中高年にみる自己認識欲求に関する研究

40代・60代の男女を対象としたランダムサンプリングによる質問紙調査を行った結果、次の点が示された。

まず、自己認識欲求は青年期以降にも存在し、その喚起の背景には自己概念の不明確感が存在することが確認された。

また、自己認識欲求の内容は年代によって変化していくことが示された。40代女性では容貌・趣味・スポーツ・将来すべき生き方などについて関心がもたれやすいが、60代女性と40代男性ではこれから出来ること・他人の気持ち理解度・社交能力などが関心の中心となる。一方、60代男性では健康・過去の意味が相対的に興味の高い項目となっている。以上の点から、年代によって自己認識欲求の内容が異なることが指摘された。

第13章 高校生・大学生・中高年の自己認識欲求の比較

大学生に行った質問紙調査の結果を、第11章及び12章の結果と比較し、年代による自己認識欲求の強さを比較した。

その結果、自己認識欲求は高校生から大学生にかけて高まり、大学生において最も高かった。青年期以降は、40代・60代と加齢に伴い自己への関心が低下するが、60代でもおよそ半数が「自分についてもっと理解したいと思うことがある」を肯定していた。この点から、自己への関心が青年期以降も引続き継続していることが示された。

さらに、自己について関心がもたれやすい内容を分析したところ、大学生では自己の現在の対他者的側面に関心がもたれやすいことが示された。それが40代女性では現在の内的な自己の部分から、将来の自分に関心が移り、40代男性と60代女性では自己の将来のことに、そして60代男性では自己の過去に関心が移行することが示された。

第14章 子供をもつ母親にみる自己認識欲求

3歳～5歳の子供をもつ母親について、エリアサンプリングによる質問紙調査を行った。他の生活意識との関連を検討した結果、次の点が指摘された。

まず、自己認識欲求の高いものは、子供への不満・ストレス感が高く、年収が低いなど総じて不適応感が高かった。また、拒否回避欲求・賞賛獲得欲求が高く、他者に基準をおくパーソナリティをもつ傾向にあった。

一方、ネガティブ情報回避欲求の高い者は、母としての満足度・妻としての満足度・女性としての満足度・自尊心が低いなど、総じて自己評価が低い傾向にあった。

第2章 自己認識欲求仮説モデルの検討

本研究は、自己について知ることを求め、自己情報収集行動を生起させる仮説的構成概念として「自己認識欲求」を提出した。本章では、この仮説モデルの検討結果をもとに、仮説部分を一部修正した自己認識欲求モデルを提出するとともに、本研究の意義を考察する。

まず第1節では、本研究で作成した自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度の信頼性・妥当性を改めて確認する。続く第2節では、自己認識欲求の仮説モデルを第II部の調査・実験の結果に基づいて再考し、最終的な自己認識欲求モデルを提出する。さらに、第3節ではこのモデルによって既存の自己探求行動に関する動機づけ理論や自己の発達研究にどのような新たな示唆を与えることが出来たかを考察する。第4節では本研究の意義を考察する。

第1節 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度の信頼性・妥当性

本研究で自己認識欲求の仮説モデル検証のために行われた実験・調査の多くは、本研究で作成した自己認識欲求尺度およびネガティブ情報回避欲求尺度を用いている。モデルの妥当性について論じる前に、この尺度の信頼性・妥当性について総括する。

1. 本研究で使用された自己認識欲求尺度・ネガティブ情報回避欲求尺度

(1) 自己認識欲求尺度

自己認識欲求は「自己に対する認知体系を明確にしたいとする欲求であり、この自己認知体系が不明確になった時、自己に関する情報収集行動を促すもの」と定義されている。第1章では、自己認知体系に関する既存の枠組みに沿って、各側面を明確にしたいか否かを直接尋ねる形で、自己認識欲求の程度を測定する尺度を作成した。自己認知に関する山本ら(1982)の質問項目と、自己について知りたいと感じる傾向を尋ねる項目を独自に作成し、併せて因子分析を行った。その結果、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求・自己理解程度の3因子が抽出されたため、第1因子に負荷量の高い項目を、自己認識欲求の測定尺度として使用した。その後、この項目の1次元性を第3章・第5章で確認したが、最終的には第1章で使用した14項目を自己認識欲求尺度の尺度項目として使用した。

(2) ネガティブ情報回避欲求尺度

ネガティブ情報回避欲求については、本論文の第1部では特に考慮されていなかった。しかし、第1章において自己認識欲求尺度項目を作成する過程で、自己について否定的な情報を避

けたいという傾向を示すネガティブ情報回避欲求の因子が抽出された。そこで第2章、第4章、第5章、と項目を入れ替えて調査・実験にこの因子を含んだ尺度を用い、最終的に第5章で作成した8項目を用いたネガティブ情報回避欲求尺度に決定した。

2. 自己認識欲求の信頼性・妥当性

(1) 自己認識欲求尺度の信頼性

第1章では自己認識欲求尺度(14項目)の信頼性を折半法によるSpearman-Brownの修正値を求めたところ0.98の値を得、信頼性が確認された。

なお第5章では13項目からなる自己認識欲求尺度の信頼性を、折半法によるSpearman-Brownの修正値として求め、0.97の値を得た。

(2) 自己認識欲求尺度の妥当性

1. 基準関連妥当性の検討

本研究では、基準関連妥当性として、予測的妥当性(第7章・第5章・第4章)と併存的妥当性(第9章)について、以下の手続きで検討した。

・予測的妥当性の検討

第7章では、場面想定法を用いて自己について自分をどのような手段で知ろうとするかを尋ね、自己認識欲求の高いものほど5種類の情報収集手段に積極的に接近することを確認した。

第5章で3種の自己情報収集手段への接近と同尺度が有意な相関を示し、第4章では実験場面で自己認識欲求の高いものほど情報収集行動を生起させることが確認された。

・併存的妥当性の検討

自己認識欲求尺度は、いくつかのパーソナリティ特性尺度との関連分析を行った。第9章の調査3では自意識特性と自己認識欲求尺度(13項目)の関連分析を行った。自意識特性は、自己に関心に向けやすい程度を測定する尺度であるが、自己認識欲求は公的自意識($r=0.43$)・私的自意識($r=0.26$)いずれとも有意な相関を示している。自己認識欲求は、自己概念不明確を意識した状態であるが、この時意識化される自己の側面は、公的なもの私的なものいずれでもあり得る。自己認識欲求尺度が公的な自己の側面や私的な自己の側面に注意に向けやすい傾向と関連していると推測されるため、当尺度が測定しようとした自己を知りたいとする傾向と相関がみられた点から、自己認識欲求の妥当性が確認されたといえる。

2. 構成概念妥当性の検討

本研究では、構成概念妥当性として因子的妥当性(第1章・第3章)において以下の手続きで検討した。

第1章・第3章で、自己認識欲求およびネガティブ情報回避欲求の尺度項目を併せて分析し2因子構造が示された。また第5章では、自己認識欲求、ネガティブ情報回避欲求の尺度項目に、自己認識欲求の逆転項目を加えて因子分析を行った結果、同様に2因子構造が確認された。以上の点から、因子的妥当性が確認されたといえる。

(3) 自己認識欲求尺度の信頼性・妥当性

以上のように、第1章で作成した自己認識欲求尺度については、複数の調査を通じて様々な形で妥当性が示されている。信頼性の値の高さも考慮すると、本研究で作成した自己認識欲求は、青年期を対象として使用する場合には、信頼性・妥当性の確認された安定した尺度であると結論されよう。

3. ネガティブ情報回避欲求尺度の信頼性・妥当性

(1) ネガティブ情報回避欲求尺度の信頼性

第5章ではネガティブ情報回避欲求(8項目)の信頼性を、同様に折半法によるSpearman-Brownの修正値として求め0.83の値を得、信頼性が高いことが確認されている。

なお、第1章ではネガティブ情報回避欲求(7項目)の信頼性を折半法によるSpearman-Brownの修正値を求めたところ、0.78の値を得た。

(2) ネガティブ情報回避欲求尺度の妥当性

1. 基準関連妥当性の検討

本研究では、基準関連妥当性として予測的妥当性を次の方法で検討した。第5章では、場面想定法を用いて3種類の自己理解手段(“雑誌心理テスト”・心理テスト・ネガティブな結果を示す心理テスト)に対しどの程度接近するかを尋ねた。その結果、ネガティブ情報回避欲求の高い者ほどネガティブな結果を示す心理テストを回避した。また第6章では、実験終了後に次回実験への参加を求めたが、否定的な結果を得ることが予測される時には、ネガティブ情報回避欲求の高い者ほど参加程度が低かった。以上の結果は、ネガティブ情報回避欲求の予測妥当性を示すものである。

2. 構成概念妥当性の検討

本研究では、構成概念妥当性として弁別的妥当性と因子的妥当性を以下のような手続きで検討した。

・弁別的妥当性の検討

第5章では、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求と、ネガティブ情報回避欲求との関連分析を行っている。賞賛獲得欲求・拒否回避欲求はいずれも公的自意識の高い人に共通してみられる特性

を測定するものであるが、前者は自己顕示的で積極的な対人行動傾向を示し、後者は拒否されることを回避するなど内気で消極的な対人行動傾向を示すものである。相関分析の結果、ネガティブ情報回避欲求は拒否回避欲求とのみ0.20と低い有意な正の相関を示し、賞賛獲得欲求とは有意な相関はみられなかった。ネガティブ情報回避欲求は自己評価の低下を避けようとする心理と位置づけられており、賞賛獲得ではなく拒否回避とのみ関連を示した結果は、この尺度の弁別的妥当性を示すものである。

・因子的妥当性の検討

因子的妥当性は前述のように、第1章・第3章・第5章で、自己認識欲求およびネガティブ情報回避欲求の尺度項目を併せて分析し、2因子構造が確認されている。

(3) ネガティブ情報回避欲求尺度の信頼性・妥当性

以上のようにネガティブ情報回避欲求尺度の信頼性の高さが確認され、妥当性についても複数の調査を通じて示されたと考えられる。

本研究で作成したネガティブ情報回避欲求は、信頼性・妥当性の確認された有効な尺度であると結論される。

第2節 自己認識欲求仮説モデルの検討

第1部で提出された自己認識欲求仮説モデルは、Figure 1-3-1に示すものであった。第II部第1章でこの仮説モデルはFigure 2-1-4のように一部修正され、第2章以降はこの修正された仮説モデルが作業仮説との対応に使用された。

本節では、第II部の実証的見地から仮説モデルの検証結果をまとめ、その結果として最終的な自己認識欲求のモデル (Figure 3-1-1) を提出する。

1. 自己概念不明確感と自己認識欲求喚起

自己認識欲求の仮説モデルでは、自己概念不明確感を示す状況として「自己知識の非一貫性・矛盾の意識」「自己知識の不足の意識」の2つを挙げていた。

(1) 自己知識の非一貫性・矛盾の意識と自己認識欲求

「自己知識の非一貫性・矛盾」の意識が自己認識欲求を喚起させるとの仮説については、質問紙調査 (第2章・第7章) と実験 (第4章・第6章) の2つの形で検証を行っている。その結果、いずれにおいても仮説が支持された。

まず2つの質問紙調査では、自己知識の非一貫性・矛盾の意識を測定する尺度を作成し、自

自己認識欲求尺度との関連分析によって仮説検討を行った。調査の結果、第2章・第7章とも、自己知識の非一貫性・矛盾の意識が高い者ほど自己認識欲求も高いことが示された。この結果は自己認識欲求喚起の仮説モデルを支持するものである。なお第2章では、自己概念内の意識化されていない知識の矛盾を併せて分析を行っているが、この矛盾と自己認識欲求との関連は示されていない。この結果は自己認識欲求の喚起には、自己知識の非一貫性・矛盾を意識する必要があることを確認するものである。

一方、第4章および第6章の実験場面では質問紙調査とは異なり、仮説が間接的な形でのみ6章で支持された。本研究で行った2つの実験では、いずれも被験者に性格テストを実施し偽のフィードバック結果を渡した。ここで既存の自己概念と偽のフィードバックとのズレによって自己知識の非一貫性・矛盾を操作し、自己認識欲求喚起との関連が分析されている。その結果、両実験とも自己概念不明感と自己認識欲求との間の直接的な関連はみられなかった。しかし、第6章で自己概念不明確感の程度と受け取った結果の性質と併せて分析を行うと、自己概念不明確感と自己認識欲求の関連が間接的に示された。すなわち、自己概念が不明確になった場合には、受け取った結果の内容が肯定的であれ否定的であれ、同程度に自己を知りたいとする傾向が示された。しかし自己概念が明確な時には、受け取った結果の内容が肯定的であれば自分の特性を知りたいとする欲求が高まり、逆に否定的であれば欲求は低下したのである。これは既存研究(Latane, 1966 など)で、自己高揚動機に基づく情報収集行動として位置づけられていた傾向に対応するものである。

以上の結果は、自己概念が不明確な時には、収集される情報の内容とは無関係に自己概念明確化のために情報を求める自己認識欲求が喚起されることを確認するものである。その一方で、自己概念が明確な時にも自己への関心が生じた事実が発見されたが、この事実は自己認識欲求のモデルでは説明できない。このため、自己概念が明確な時に生じる自己への関心を説明出来るように、自己認識欲求の仮説モデルを一部修正する必要がある。

(2) 自己知識の不足の意識と自己認識欲求

自己認識欲求の仮説モデルでは、自己概念不明確感が喚起する状況としてもうひとつ、自己知識の不足の意識を挙げている。この仮説については、質問紙調査(第12章)と、実験(第6章)の2つの形で検証を行った。

第12章の質問紙調査では、自己概念不明確感を測定する尺度を作成して自己認識欲求との関連を検討した。ここで作成した尺度では、自己知識の矛盾と同時に知識不足をどの程度感じているかを尋ねる複数の項目を使用し、各項目の1次元性が確認された。この自己概念不明確感尺度得点が、自己認識欲求について有意な正の標準偏回帰係数を示していることから、自己知

識の不足の意識が自己認識欲求を喚起させるとの仮説の妥当性が確認された。

一方、第6章の実験では、被験者に偽のフィードバックを渡す時に、自己知識の量が十分あるかそれとも不足しているかを実験者が告げるという形で、知識不足に関する意識の操作を行った。しかし、この実験操作によってテスト後の自己概念不明確感に差は生じず、仮説は支持されなかった。本実験の手続きでは十分に知識不足の意識を生じさせることができなかったのは、知識不足が客観的な指標ではなく、個人の主観的な充足感によって形成されるためと推測される。つまり、実験場面で知識不足を指摘しても、被験者が日常生活において社会的行動を起こすのに、現実的な不足感を感じていない場合には、それ以上の自己知識を必要としないと考えられる。一方、質問紙調査で知識不足感と自己認識欲求の関連が示されたのは、実際の社会生活の中で知識不足を感じている程度を測定できたためと推定される。従って、個人が自己概念の知識不足を意識化するためには、社会との相互作用をある程度の期間をかけて行い、その中で不適切な社会的行動を重ねて経験することが必要と推測される。

2. 自己概念不明確感の背景

(1) 自己概念不明確感の背景

自己認識欲求の仮説モデルでは、自己概念不明確感の背景として、不適応状況・同一性混乱・ライフスタイルの変化・不適応状況・意志決定場面などを想定していた。本研究ではこれらの状況を例とし、その他様々な場面を含めて自己概念不明確感との関連分析を行った。

このうちまず第10章では、「自分について知りたいと感じる時」について自由記述を求めた。その結果、対人関係等で不適応を感じた時や人生の選択状況などが多く挙げられていた。これらの状況は、これまでの自分では対応しきれない新たな状況であると同時に、自分では受け入れ難い否定的な自己の側面であるとも考えられる。以上はいずれも自己認識欲求仮説モデルで、「自己知識の矛盾・不一致の意識」「自己知識の不足の意識」とされた状況と対応している。

その他の章でも、調査(第2章・第3章)・実験(第6章)によって自己概念不明確感の背景を検討した。まず質問紙調査で自己概念不明確感の背景として確認されたのが、同一性混乱(第2章・第3章)である。また、第1章では、対人関係の不適応・恋愛に対する不満・将来展望の不明確という不適応感と、自己認識欲求との関連分析から、これら不適応感が自己概念不明確感の背景として位置づけられることが示唆された。また第12章・第14章では同様に、子離れ・親の衰え・経済状態の悪化等のライフスタイルの変化と、自己概念不明確感との関連が示唆された。

このように、大学生および中高年調査では、不適応状態において自己認識欲求が喚起されることを示され、不適応感が自己認識欲求を喚起させるとの仮説の妥当性を示した。ただし、高校生を対象とした第11章の結果では、学校や家庭での適応が自己認識欲求の喚起に結び付くという逆の結果を示している。

さらに、自己概念不明確感が生じる自己の側面についても、大学生から60代の間には変化がみられることが示されている(13章)。これは、自己を知りたいという表現が同様に表されても、自分の何について知りたいと感じるかが年代によって異なることを意味している。

この点から、自己概念不明確感が喚起される背景を整理するためには、発達の背景をモデルに含める必要があると考えられる。以下では本研究結果から推定される発達の背景について述べる。

(2) 自己概念不明確感の背景に関する年代差

第11章以降の幅広い年代を対象にした調査から、自己認識欲求の背景となる様々な変数が明らかになっている。例えば、高校生(第11章)では同一性拡散・家庭適応・学校適応が、子供をもつ母親(第14章)では子供に対する不満・年収の低さ・ストレス・自尊心の低さが、また中高年(第12章)では体調不良・経済状態の悪化・自己の否定的変化が、それぞれ自己認識欲求と関連を示していた。これらはいずれも自己概念不明確感をもたらす要因であるが、適応感という視点でみると、高校生と大学生以降とでは、自己認識欲求との関係において異なることが示された。この結果から青年期中期の高校生と、青年期後期の大学生以降の年代との間に、自己認識欲求を喚起する意味が変化するのではないかと考えた。この変化をもたらすものとして本研究では、自己にかかわる以下の発達変化を推測した。すなわち、青年期はこれまで意識的に行われなかった自己形成が初めて行われる。この時、自己への関心を促すのは、身体の発達や抽象的思考能力の発達であり、これらはいずれも個人の内的な意識から発生したものと位置づけられる。従って、外的環境の変化あるいは外界との不適応がなくても、生じるものと考えられる。また、青年期以前には意識的な自己形成が行われていないため、青年期中期に進められる自己構築は新たな作業であり、それ以前の自己概念構造を維持するための精神的ストレスは存在しない。従って、自己が適切に発達している者ほど自己に関心を向け、自己を形成しつつある状態にある。青年中期のこのような自己構築場面は、これまで青年期心理学において同一性拡散の時期として表現されていたものである。

一方、この自己構築は青年期後期、すなわち大学生の時期にはある程度達成された状態になると考えられる。従って、青年期後期以降に自己概念が不明確になる場合には、一度形成された自己概念の中に矛盾が生じたり、外的な要請から自己の変化が求められるなどの背景が存在

すると考えられる。これが、自己の否定的変化や経済状態の悪化、あるいはストレスなどである。この場面は、自己の外部からの要請によって生じるものであり、既存の自己では対応できない不適応状況として認知される。また一度形成された自己を再構築することには、心理的なストレスが伴う。

(3) 自己認識欲求の内容の年代差

本研究では、青年期後期以降の自己の発達に関しても、以下の考察を行った。

第13章では、大学生・40代・60代の男女を対象として、自己のどの側面に関心をもたれやすいかを比較したところ、大学生では「社交性」「人からみられた自分」「容貌」「人より優れた点」などを挙げやすい。一方、40代女性では「スポーツ」「自分にあった趣味」など、40代男性と60代女性は「豊かな生活の方法」「今後できること」など、60代男性では「健康」「過去の意味」などを挙げやすいことが示されている。これらの結果からは、大学生では対他者的な自己の側面に関心が向いやすく、年齢が上昇するにつれて他者との比較を必要としない、内的な自己の側面に関心が移行していく様子が示されている。また自己の認識の仕方の年代による変化を、時間軸で位置づけることも可能である。大学生が知りたいとする傾向の強い「性格」「容貌」などは、いずれも現在の自己の把握という意味が強い。これが40代女性では「自分にあったスポーツ」など現在の自己の把握と併せて、「生き方のアドバイス」など自己の将来に対する関心が相対的に高まってくる。40代男性・60代女性・60代男性の自己への関心は、大学生と対比させて位置づけると、その傾向は類似している。ただし中高年のみで差異を分析すると、40代男性と60代女性では現在の状態の他に、「これからできること」など将来展望に関心が向いやすいのに比べ、60代男性では「過去の意味」といった項目に相対的な関心が高く、自己の把握の基準が過去に推移していることが示されている。

これら自己認識欲求の内容の変化は、発達段階によって、個人が生活する上で重要となる問題が異なるためと推測される。まず、青年期後期は、青年期中期から続いた自己概念の形成が終了しつつある時期である。ここでは、現在の自己の明確化が第1の関心となる。さらに、自らの視点で形成された自己知識が、社会の中でより有効なものとなる過程で、他者の視点を取り入れ、より客観的な知識をもとめると考えられる。青年期で現在の自己についてはある程度客観的で社会的行動を起こすのに十分な知識が形成される。その後問題となるのは、将来の自己である。中年期には、仕事や家族の問題が生活の中で生じるが、この問題に対処するためには、現在の自己だけでなく、将来についての自分の考えを明らかにし、自分の能力を明らかにすることが求められる。さらに、将来の生活が明確になり変化しないと考えられた時には、自分がこれまで生きてきた意味などの過去との統合に関心が移る。不一致状況が生じた場合には

将来が変えられないため、既存知識の変更が求められる。

(4) パーソナリティ特性との関連

自己認識欲求の仮説モデルでは自己認識欲求を、自己概念が不明確になった時に喚起される状況変数として想定していた。しかし複数の調査で、自己認識欲求は様々なパーソナリティ特性と関連を示していた。具体的には、私的自意識・公的自意識（第9章）、同調・依存・決定依存（第9章）、外的統制感（第9章）・賞賛獲得欲求・拒否回避欲求（第3章）、相互依存的自己（第7章）などである。これらの結果は、自己認識欲求を、状況変数としてのみでなく比較的永続的な傾向としても考える必要があることを示している。

自己認識欲求と関連を示したパーソナリティ特性をみると、これらはいずれも他者関係を重視する自己のあり方と関係するものであり、外部に基準をおくパーソナリティとしてまとめることができる。他者に基準をおく場合には、自分自身の知識に基づいて行動するよりも、自分が周囲で何を期待されているのか何をすべきかを、自己が置かれた状況から判断し適切に振舞うことになる。このため上記のような特性の強い者は、新たな場面ごとに自己知識が必要となり自己知識不足を感じやすい。また、周囲が個人に要求することは場面によって変化しやすい。従って、この他者に基準をおくようなパーソナリティ特性を持つものは、蓄積された自己知識間に矛盾や非一貫性を生じやすくなる。このような理由で、他者関係をより重視して自己概念形成を行う者は、自己概念不明確感が生じやすいと推測されるのである。

3. 自己認識欲求喚起と情報収集行動

自己認識欲求の仮説モデルでは、自己認識欲求の喚起は自己情報収集行動を生起すると仮説された。この仮説は、調査（第3章・第5章・第7章）および実験（第4章・第6章）いずれにおいても支持された。

まず調査においては、場面想定法や日常生活の態度の測定により、自己認識欲求と情報収集行動の関連を検討している。具体的には第3章で“雑誌心理テスト”、第5章で“雑誌心理テスト”・一般の心理テスト・否定的な結果を指摘する心理テスト、第7章で5種類の自己情報収集手段と、自己認識欲求の関連がそれぞれ検討された。その結果、いずれの方法についても自己認識欲求の高い者の方が積極的に接近することが示され、自己認識欲求喚起が情報収集行動を生起させるとの仮説が支持された。

また実験場面（第4章・第6章）でも、テスト結果提示後に自己認識欲求が高まった者の方が、自己情報の収集を積極的に行うことが示され、自己認識欲求の喚起が実際の行動を生起さ

せることが確認された。

さらに、自己認識欲求が喚起された場合には、自己情報収集行動が量的に増加するだけでなく、効果的に収集しようとするなど、構造も異なってくるのが第8章で示されている。日常生活でどのような情報収集行動をしているかを尋ね、自己認識欲求の高低別に比較したところ、自己認識欲求が高い者では知りたい内容によって収集手段を区別しており、自己認識欲求を効果的に充足させようとする傾向がみられた。逆に自己認識欲求が低い者では、内容と手段との関係は構造化されていなかった。この内容と手段の関係の構造化は、個人がより正確で適切な情報を得る可能性を高めるものと推測される。自己認識欲求が解消されるのは自己概念の明確化によってであり、そのためには適切な情報が必要である。この時、単に自己情報を量的に多く収集するだけでは適切な情報を得ることは難しい。自己に必要な情報の内容と収集手段の関連を考慮し、行動を起こすことによって効率的に自己概念明確化のための情報を収集することができると考えられる。自己概念の明確化には、ある程度の情報量が必要であり、このため自己認識欲求のモデルに示す「自己概念不明確感→自己認識欲求→情報収集行動」との過程が繰り返されると考えられる。従って、自己認識欲求の喚起したものは、求められる情報内容と手段との関連について、構造化された枠組みをもち、すぐに活性化されやすい状態になっていると推測される。

これらの点から、自己認識欲求が喚起されている者ほど、自己情報をいかに収集するかということについて、より情報-手段の関連がまとまった形で認知されていることが示されたものと推定される。

4. ネガティブ情報回避欲求

本研究では、当初 Figure 1-3-1 に示す自己認識欲求仮説モデルを想定していたが、自己認識欲求の尺度作成の過程(第1章)でネガティブ情報回避欲求の存在が示された。このため、第2章以降では仮説モデルを一部修正して自己認識欲求と対応させる形でネガティブ情報回避欲求の存在を確認していった。

このネガティブ情報回避欲求は、「自分に関する良くないうわさは聞きたくない」といった項目に負荷量の高い因子として提出され、項目の内容からは自己評価を低下させる情報のみを避けようとする欲求と考えられた。さらに、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の相関および分布から、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求喚起を前提として生じることが、第1章から第7章までの結果を通じて示唆された。

さらに、第3章以降では、ネガティブ情報回避欲求と様々な情報収集行動との関連が検討さ

れた。調査では第3章で、場面想定法を用いて3種の自己情報収集行動との関連を検討しているが、ネガティブ情報回避欲求と有意な負の相関がみられたのは“否定的結果を示す心理テスト”のみであった。また、第6章の実験では、ネガティブ情報回避欲求の高い者ほど、否定的な結果を受け取ることが予測される実験への参加意欲が低いことが示された。逆に、調査場面でも実験場面でも、積極的に自己評価を高揚させようとする情報収集行動や、得られる情報の性質が不明確な手段については、ネガティブ情報回避欲求との関連が明らかではなかった。

以上の結果から、自己認識欲求の喚起に伴い情報収集行動が行われる際には、自己にとってどのような情報が収集されるのかを予測する過程が存在し、自己情報収集行動を行うか否かの判断を行っていることが推測される。そして、この予測過程において、情報収集によって自己評価の低下が予測された場合に限定して生じるのが、ネガティブ情報回避欲求であると考えられる。従って、自己認識欲求に伴う自己情報収集行動を現実により近い形で説明するためには、自己認識欲求の仮説モデルを、予測過程およびそこで生じるネガティブ情報回避欲求が含まれるように修正する必要がある。

5. 自己認識欲求モデルの修正

(1) 自己認識欲求仮説モデルの検討結果まとめ

本研究は、「自分を知りたい」とする欲求が喚起され、解消されるプロセスを実証的に検討することを目的とした。そしてプロセスの説明に有効な仮説的構成概念として自己認識欲求を提出し、このモデルの検証を行うことで目的の達成を試みた。

第II部では、複数の調査・実験を通じて、自己概念不明確感によって自己認識欲求が喚起されること、そして自己認識欲求喚起によって自己関連情報の収集行動が生起することが実証された。この結果から、本研究で提出した自己認識欲求の仮説モデルの妥当性が確認されるとともに、自己を知りたいとする欲求が喚起され解消されるプロセスを実証的に検討するという目的を達成できたと結論づけられる。

ただしこの検討過程で、仮説モデルでは十分に解釈できないいくつかの結果が示された。一つは、自己概念が明確な状態にも自己への関心が示された点である。第6章の実験場面では、結果提示によって自己概念の明確感が生じなかった者も、受け取った自己情報が肯定的な時には自分の特性を知りたいと回答する傾向が示された。また、中高年を対象として行った第12章の質問紙調査では、自己の肯定的変化が、自己概念不明確感を経ずに、自己認識欲求喚起に結び付くことが示されている。以上の結果から、実際の自己情報収集場面をより適切に記述するためには、自己認識欲求の仮説モデルに、自己概念明確状態から生じる自己への関心について

説明を加える必要があると考えられた。

また、自己認識欲求喚起に伴って生起することが示されたネガティブ情報回避欲求の存在も、仮説モデルでは想定されていなかったものである。第3章～第7章においてネガティブ情報回避欲求と情報収集行動の関連を分析した結果、この欲求は、自己認識欲求の喚起に伴う情報収集によって自己評価の低下が予期される時に、この情報収集行動を回避しようとするものであることが示された。このため、ネガティブ情報回避欲求を自己認識欲求の情報収集過程に影響を及ぼすものとして、モデルに組み込む必要が生じた。

またその他に、自己概念不明確感をもたらす場面に、発達の背景が関連する点、および自己概念不明確感に“外部に基準をおくパーソナリティ”が影響を与える点を含めることにより、より明確に自己認識欲求の喚起を説明できると考えられる。

自己認識欲求の仮説モデルは全体的な流れでは支持されたものの、以上の結果から、部分的に修正を加える方がより適切なモデルとなると判断される。そこで本研究では、第II部の結果に基づく最終的な自己認識欲求モデルとして、新たにFigure 3-2-1を提出する。以下はこのモデルについて、仮説モデルからの修正点を中心に説明する。

(2) 自己認識欲求モデルの提出

Figure 3-2-1に示したのは、第II部の調査・実験結果に基づいて再検討された、自己認識欲求のモデルである。Figure 1-3-1と比較すると、自己知識の非一貫性・矛盾に基づく自己概念不明確感の状態に関する説明を加えた点、自己概念不明確感が意識化された場合の情報処理過程が加えられた点、自己認識欲求喚起に伴って生起する予期過程についての説明が加えられた点、さらに自己概念不明確感について発達の背景とパーソナリティ要因を加えた点が異なっている。

以下では、これらの修正点について説明を行う。

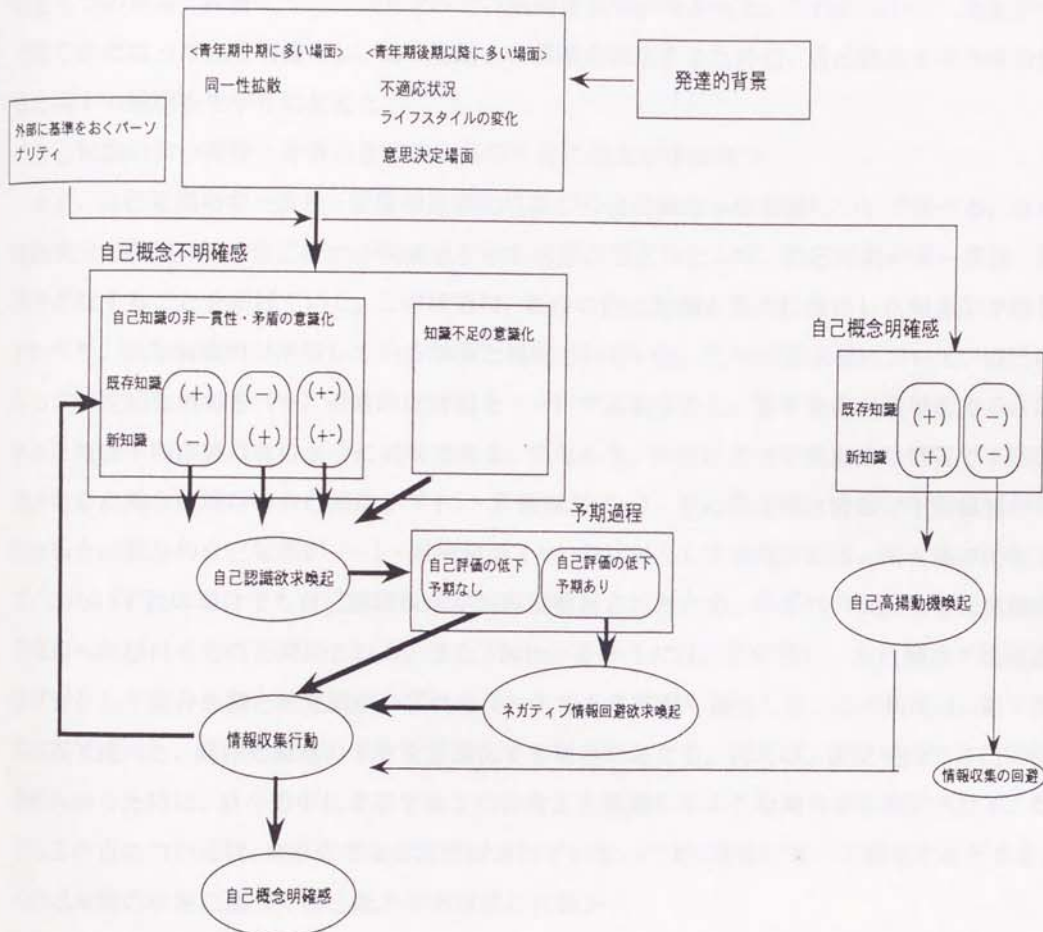


Figure 3-2-1 自己認識欲求モデル (修正後)

1. 自己概念不明確感

自己認識欲求の仮説では、欲求を喚起させる自己概念不明確感は自己知識の非一貫性・矛盾あるいは自己知識の不足の意識化として説明された。ただし、非一貫性・矛盾がどのような意味をもつのか等、詳細についてはモデルでは説明されていなかった。これについて、実証研究で明らかになった点を明確にし、他の理論との関連を明示するために、自己概念不明確感の状態に関する説明をモデルに加えた。

〈自己知識の非一貫性・矛盾の意識化に基づく自己概念不明確感〉

まず、自己知識の非一貫性・矛盾の意識化に基づく自己概念不明確感について述べる。自己認識欲求の仮説では、自己概念不明確感を示す状態のひとつとして、自己知識の非一貫性・矛盾を意識することを挙げていた。この状態は、既存の自己知識と新たに獲得した知識が矛盾していたり、既存知識間が矛盾している場面と説明されていた。この矛盾状態について、自己にとって肯定的な情報を(+) 否定的な情報を(-) で表現すると、第6章の実験場面で示された自己概念不明確感は次のように表現できる。すなわち、自己にとって否定的な情報で不明確感が生じた場合は既存の自己知識が(+)・新情報が(-)、逆に肯定的な情報で不明確感が生じた場合は既存の自己知識が(-)・新情報が(+) の状況として表現される。第6章の結果では、このいずれの場合でも自己認識欲求が同程度喚起されたため、いずれの状況も自己認識欲求喚起へ結び付くものと図示される。また Figure 3-2-1 には、この他に、自己概念不明確感の状況として既存知識と新知識がいずれも(++) である状況も図示した。この状況は、第1部の仮説で述べた、既存知識間の矛盾を意識化する場合にあたる。例えば、決定場面で自己に注意が向かった時に、自分の中に矛盾する2つの考えを意識したような場合がこれに当たる。ただしこの点については、本研究では実証検討されていないため、理論に基づく推論にとどまる。

〈自己知識の不足に基づく自己概念不明確感の状態〉

社会的行動を行うのに自己知識が不足していることに気付く状況では、知識間の非一貫性・矛盾の意識化と異なり、既存知識とのずれは問題とならない。また、知識が存在しないために、情報の性質((+) (-)) は問題とはならない。このため、自己知識不足を感じた者は自己認識欲求を喚起するとの仮説モデルに、特に説明を加えずに用いた。

2. 自己概念不明確感を生起と発達の背景

自己認識欲求の仮説モデルでは、自己概念不明確感を生起する場面として、不適応状況・同一性混乱・ライフスタイルの変化・意志決定場面を挙げていた。調査・実験の結果、これらはいずれも自己概念不明確感の喚起に結び付くことが実証されている。しかし、発達段階によっ

てその関連の方向が異なり、特に青年期中期と青年期後期以降とでは差が大きかった。このため、青年期中期に多い場面として同一性拡散を、青年期後期以降に多い場面として不適応状況・ライフスタイルの変化・意志決定場面を置いた。また、これらの分類差をもたらすものとして、モデルには発達の背景を加えた。モデルでは記述されていないが、ここに含まれるのは以下の2点である。

第1に、青年期中期から後期にかけて自己概念の構造化が進み、それにより自己概念不明確感のもつ意味が変化することである。青年期中期は自己の内的な成熟から自己概念の構造化が新たに行われる時期であり、それに伴い自己概念を再構成するというリスクが少ない。逆に青年期後期以降は、外部からの要請により、一度統合した自己概念を組変えるという意味でリスクが高い。

第2に、自己概念の構造は年代によって進展する側面が異なる。青年期後期では現在の自己、特に対他者的な自己の側面の構築が進む。中年期では、将来のことを考える必要が生じ、内的で未来に関する自己の側面が関心の対象となり、その後は将来展望が変化しない時には、過去の統合が求められる。

3. 外部に基準をおくパーソナリティ

第3の加筆点は、外部に基準をおくパーソナリティを自己概念不明確感を生起させる背景として設定した点である。外的統制・相互依存的自己・同調依存など、自分自身の判断よりも、他者を基準にして物事を判断し決定する傾向のある者は、自己概念不明確感を生起しやすい。これは、他者から矛盾した情報を受けとることから自己知識間に矛盾が生じやすく、また他者にあわせる為に常に新しい要求が自己に向けられて知識不足を感じやすいなどの理由による。

4. 自己高揚動機に基づく情報収集過程

仮説モデルの第4の変更点は、自己概念が明確な場合に自己に向けられる関心について説明を加えた点である。第6章の実験では、自己概念が明確な場合にも、提示された特性情報が肯定的ならば特性についてもっと知りたいという傾向がみられた。この時に示された自己への関心は、自己概念が明確な時に喚起され、かつ自己に肯定的な情報のみを求めることから、自己高揚動機に基づく情報収集行動として扱われていた心理に対応すると推測される。そこで本研究では自己概念明確時に自己の肯定的評価を高めるため「自分を知りたい」とする心理を、自己高揚動機に基づくものとして表現し、自己認識欲求の過程とは区別して自己認識欲求のモデル (Figure 3-2-1) に含めた。このモデルにおいて自己高揚動機が生起した時の自己概念の状

態は次のように図示されている。自己概念が明確な状態とは既存の自己知識が(+)・新情報が(+), 既存の自己知識が(-)・新情報が(-)の状態として示すことができる。そして肯定的な情報を提示された時にのみ「知りたい」とする傾向は、既存と新情報の両方が(+)の場合にのみ自己高揚動機が生起する状態と示される。この自己高揚過程が加えられることによって、第6章の実験結果だけでなく、第12章で自己の肯定的変化が自己概念不明確感を生じずに直接「自分を理解したい」という心理に結び付いていたことも説明可能になる。この場合の自己への関心も、明確な自己概念のうち肯定的な側面を意識した時に、さらに自己評価を高めるよう自己高揚動機が生起したものと推測される。

また、本研究では検証されていないが、既存の自己知識が(-)・新情報が(-)の状態では、これを意識化することは自己評価の低下をもたらすため、自己情報収集行動は行われず、回避されると推測される。

ただし、Figure 3-2-1 に示した、肯定的な知識に基づく自己概念明確化に伴う自己高揚動機によって、情報収集行動が実際に生じるか否かについては本研究では確認できていない。第6章では、自己概念明確群で自分の特性を「知りたい」とする程度と情報収集行動(次回実験への参加)の関連を分析しているが、有意な相関は示されていない。この結果は、次回実験に参加することが自己評価を高めるのに適切なものでなかったためと推測される。

5. 予期過程

第5の変更点は、自己認識欲求喚起に伴って生じる予期過程をモデルに導入した点である。この過程は、自己認識欲求の喚起に伴って生起し、情報収集行動によって収集される情報が自己にとってどのような意味をもつものかを予期する過程である。この際に、新たな情報の獲得によって自己評価が低下すると予期されると、自己認識欲求に伴って否定的情報の収集行動を避けようとする傾向が生じる。これが、各章でネガティブ情報回避欲求として測定された傾向である。このネガティブ情報回避欲求は、自己認識欲求の喚起を前提とし、予測される情報が自己評価を低下させる場合に喚起されるものと位置づけられる。一方、情報収集によって自己評価が低下しないと予期された場合には、ネガティブ情報回避欲求は生じない。従って、自己認識欲求に基づく情報収集行動がそのまま行われることになる。

実際に、第6章の実験では、実験前に測定したネガティブ情報回避欲求の高い者が、実験場面で自己評価低下が予期される情報を回避しやすいことが示された。この結果は、ネガティブ情報回避欲求の喚起が否定的情報の収集行動を回避することを示すとともに、ネガティブ情報回避欲求が特性としての傾向をもつことを示す結果でもある。すなわち、自己認識欲求喚起に

伴う予期過程が個人によって異なることが推測されるのである。従って、ネガティブ情報回避欲求は自己認識欲求喚起を前提とするが、その関連は必ずしも直接的ではなく、予期の形態には個人差があると結論できる。

モデルには記述されていないが、この個人差に影響を及ぼすと考えられるのは、個人の自己評価である。第11章や第14章で行われた質問紙調査では、自尊感情の低下や劣等感の高さがネガティブ情報回避欲求の高さに関連することが示された。自己評価が低い場合には、自己認識欲求に伴って収集される情報によって自己の否定的な側面が明らかになる可能性を高く認知しやすいと考えられる。このため、自己評価の低いものがネガティブ情報回避欲求を喚起しやすいのだと解釈される。

第3節 既存研究との関連

自己認識欲求のモデルは、その喚起と解消の過程にこれまで主に提示されてきた様々な自己研究の知見を位置づける視点を提供した。さらに、モデルの検証過程で、従来の研究知見に新たな知見を提出したといえる。以下では本研究の知見を既存理論に位置づけ、新たに指摘されたことを述べる。

1. 自己探求行動の研究との関連

(1) 自己情報収集行動に関する動機研究の統合

自己情報収集行動を喚起させる動機づけについては、これまで自己査定理論・自己確証理論・自己高揚理論が問題となっていた。本研究は、これらの動機の中で、自己査定動機を基にし、自己概念が不明確な場合に生起するものとして自己認識欲求を設定しこれを確認した。自己査定動機は能力の明確化のみに限定し、理論を展開していたが、本研究の調査・実験により、自己認識欲求喚起によって求められる情報は、能力評価以外の自己概念の多様な側面に関連することが示された。また、自己概念不明確感の生起についても、自己査定動機は明確感が生じた自己の内的状態を詳細には記述していない。自己認識欲求のモデルでは、知識感の非一貫性・矛盾状態や知識不足の状態が、欲求を喚起することを示している。この点から自己査定理論で扱われた状況は、自己認識欲求のモデルによって説明できると同時に、モデルで説明できる現実場面をより広げたものといえる。

一方、第II部の実証研究によって、自己認識欲求のモデルに自己高揚動機が位置づけられた。自己認識欲求モデルの中で自己高揚動機が関連すると考えられるのは、自己認識欲求喚起

予期過程と、自己概念明確時に生じる自己への関心の流れにおいてである。これまで自己査定動機と自己高揚動機の対立という文脈で行われていた研究の多くは、この予期過程に関するものであった(沼崎,1992;越,1994など)。一方、自己概念が明確な時に肯定的な側面を確認することによって自己評価を高めようとする傾向については、Latané (1966) が社会的比較の自己高揚機能として指摘したものに对应するものと考えられるが、両動機を対立的におく研究文脈では、この情報処理過程は考慮されていない。本モデルは、自己高揚動機が予期過程では自己を明確にしようとする傾向を阻害するものであるが、明確感から生じる高揚動機は自己認識欲求とは異なる流れで生じることを明示している。自己に肯定的な情報が得られた時には、自己高揚が可能であるし、その一方で自己認識欲求過程で正確な自己認知が可能である。この2つの流れを示すことにより、自己認知を明確に行う一方で、自己評価を高める情報についてのみさらに情報を求めることによって、自己を高揚させることができる点を、本モデルは説明可能にしている。

本研究では、自己探求行動にかかわる動機のうち、自己確証動機はモデルに含めていない。自己確証が予測するのは、自己概念明確時において、提示された自己概念に不一致な情報は取り入れず、一致情報のみに注目し取り入れることによって自己概念を確認するというものである。しかしながら、第6章の実験では、自己に否定的な情報が提示されて自己概念が明確になった時には自己への関心あるいは情報収集行動が生起しないことが示されている。この点から、本研究では自己確証動機は示されず、モデルに位置づけられなかった。

(2) 自己の正確な把握を求める傾向の確認

本研究では複数の調査を通じて自己認識欲求を測定する尺度を作成し、この欲求の高いものほど自己関連情報の収集行動を生起させることを示した。さらに、自己認識欲求が喚起された場合には、自己評価を低下させる可能性のある情報であっても積極的に取り入れようとすることが示された。

人間が環境に適応するために自己を正確に知ろうとする心理傾向については、これまで様々な理論が問題として扱ってきたが、その多くは論考に留まっていた。既存理論の中で自己査定理論は一連の研究を通してこの心理傾向の実証を試みた点で有効なものであった。しかし、自己査定理論は明確化の対象を「能力」に限定していたために、自己全体の正確な把握を説明するには不十分な理論である。自己認識欲求のモデル検証および尺度作成の過程において、実際に多くの人がこの欲求をもち、その対象は自己のあらゆる側面にわたっていることが示された。

さらに本研究は、自己がもつ否定的情報さえも収集し統合していくという機能を実証した点で有効である。これまでは、この機能について直接測定が行われず、結果として示された行動

から予測する方法を採用していた。そのため、正確な自己認知を求める傾向が自己高揚的な傾向に影響を受けてしまっていた。本研究では、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求の両尺度を使用することにより、否定的情報さえも求めるという自己認識欲求の性質を明示できたといえる。

様々な既存の論考が指摘するように、否定的な自己情報を収集しその情報を自己概念に統合していくことを促す自己の機能は、自己の全体的発達にとって大きな意味をもつものといえる。自己認識欲求は、現実に適応するために正確な自己認知を行うという人間のもつ積極的な姿勢を実証したものと位置づけられる。

(3) 尺度作成

本研究では自己認識欲求を測定する尺度を作成している。このため実験結果に基づいて、背後にある欲求を予測した自己査定理論よりも、より直接的に自己概念の明確化を求める傾向を示すことができた。自己探求行動を検討する際に、課題選択という方法を用いなくても、自己明確化のための行動を予測することが可能になった。また尺度作成により、実験場面のみならず「自己を知りたい」と感じる人々の欲求の強さを位置づけたり、自己への関心の発達の指標としてそれを用いることもできると考えられる。さらに、自己認識欲求と並行してネガティブ情報回避欲求を用いることにより、さらに正確に自己情報収集行動の生起傾向が予測できると考える。

(4) 意識化された不明確感の設定

自己認識欲求モデルは、自己の正確な把握の必要性を知識不足や一貫性について意識した場合にのみ限定し、不明確感が意識されない場合には情報収集行動が生起しないことを確認した。この視点は、動機づけ理論に自己概念活性化の理論を組み込んだものだが、これによりより現実場面を説明しやすい有効なモデルとなっている。自己の正確な把握を扱う既存の研究では、正確な自己把握について様々な規準を設定していた。例えば Allport (1961) は自己認知と他者認知の一致を挙げている。ここでは、知識の正確さはあらゆる部分に求められていた。ただし現実場面では、知りたいと感じられるのはその場面で知る必要性が生じて意識化された部分のみである。このために、自己概念の中にはしばしば知識間の矛盾が存在するままになっている。第2章で明らかとなったように、自己知識間に矛盾が存在していたとしても、それを意識することがなければ自己認識欲求は喚起されない。知識の活性化を想定した自己認識欲求のモデルでは、なぜ自己を正確に知ろうとする一方で、矛盾が常に存在し続けるのかを説明するこ

とができる。

さらに、自己の正確な把握を適応に必須のものとする視点と、非現実的な自己認知が適応に結び付くという Taylor & Brown (1988) の指摘も、自己認識欲求の理論では矛盾なく統括できる。すなわち非現実的な自己認知でも、社会的相互作用を行う上で不都合が生じなければ、不明確感は生じず歪んだ自己認知は継続する。ただし、それが不適応になった時は不一致や知識不足として意識化されるのであり、この場合には自己認識欲求が喚起され、正確な自己認知が促進されるのである。

以上のように、自己認識欲求のモデルは既存の自己把握の理論を包括するとともに、意識された側面のみを明確化の対象として想定することにより、矛盾なく各理論を並列することを可能にするものである。

2. 自己発達研究との関連

本研究では、自己認識欲求というひとつの視点から、様々な年代に対する研究を行った。自己認識欲求は社会心理学の枠組みから構築された理論であるが、自己の発達研究にも結果として位置づけて理解することが可能と推測された。また、自己発達の分脈に位置づけることで、以下の新たな視点を示すことが出来ると考える。

(1) 青年期以降の自己認識欲求の存在

従来の自己発達研究の多くは、その関心の中心を幼児期から青年期までに置いており、青年期以降の自己発達研究は相対的に数が少ない。この原因はこれらの発達研究が自己概念の完成を青年期に達せられるものと想定している (Hattie, 1992) ことに集約される。生涯発達の視点の導入により、最近では青年期以降の自己のあり方も研究対象とされるようになったが、この場合も中年期における身体の変化やその後の定年退職との関連など、自己の変革が必要とされるような特殊な事情と結び付いたものに限定されがちであった (Wells & Stryker, 1988)。このため、本研究が問題とする自己の関心については、青年期以降にも青年期と同様に生じるのか否かについては明らかとされてこなかった。

それに対し本研究では平均年齢30歳の母親達や、中高年を対象として調査を行い、青年期以降にも自己への関心が引続き生じることを示した。例えば「自分をもっと理解したいと思うことがある」の肯定率は40代で59%、60代で46%である。同様の質問について高校生の肯定率が69%、大学生で77%であることと比較すると、値は低下している。しかし60代でも半数近くが依然として自己への関心を持ち続けることを示す本研究の実証データは、自己の完成を青年期に置く発達仮説に疑問を投げかけるものである。またこの調査結果は、大学生のデータ以

外は全てサンプリング理論に基づいて回答者を抽出しており、偏りのない対象者でこれを確認しているために、信憑性の高いデータである。

社会心理学における自己の構造研究では、自己概念は安定と同時に変動するものと捉えている。本研究は多様な年代に対する調査を行うことによって、安定と変動が青年期以降にも引続き生じるという、社会心理学的な知見を確認したものともいえる。ただし、社会心理学的な研究アプローチでは、自己の発達という視点は含まれていない。自己認識欲求のモデルは社会心理学的な理論を基に構築されたが、本欲求によって生じる情報収集行動が単に自己を統合するためではなく、自己に都合の悪いように歪んだ認知を行わずに社会との相互作用を有効に行うための知識を蓄えるという意味で、自己の発達を促す心理過程のひとつと位置づけられる。

(2) 発達段階による自己認識欲求喚起背景の差異

前述のように社会心理学的な視点では、自己の構造や動機づけについて発達差は特に考慮されていない。このため、青年期の自己の形成過程と、青年期以降の特定の状況における自己の形成過程が同様の意味をもつのか否かについて実証的に比較を行った研究は少ない。本研究では、自己認識欲求モデルというひとつの視点から各年代を比較することにより、自己認識欲求の喚起状況、あるいは自己変動や発達に関わる心理的背景が年代によって異なることを示した。具体的には、青年期中期にあたる高校生の自己認識欲求の心理的な喚起背景と、青年期後期以降の自己認識欲求の喚起背景とは意味の異なることが示された。高校生では、自己認識欲求が学校や家庭での適応と結び付き、適応的なものほど自己を知りたいと感じていた。逆に、青年期後期以降の男女では自己認識欲求は日常生活の不満や自己の否定的変化といった不適応感によって喚起されていた。これにより、自己認識欲求の喚起の形が発達の要因によって影響を受け、同一性確立というひとつの視点から同様のものとして扱うことはできないことが明らかにされた。また、自己の構造や動機づけについて発達の要因を含めて考察する必要のあることが、改めて確認されたといえる。

青年期中期の特徴は、自己に関心を向けることと論じられることが多かった。さらにこの自己への関心は、概して「自分が何者かわからない」といった不適応的な心理、あるいは同一性拡散状況と関連づけて説明されることが多かった。これに対し本研究では、青年期中期には同一性混乱から生じる自己概念不明確感が存在しているが、それは必ずしも不適応的な心理ではなく、むしろ発達の進んだものほど自己概念不明確感を意識し、自己認識欲求を喚起させることを指摘した。

(3) 自己認識欲求の内容

上記のように、自己認識欲求のモデル検討によって、高校生とそれ以降の自己認識欲求の喚起の意味が異なることが示された。さらに、本研究では青年期以降の自己認識欲求の内容や、その変動を促す心理的背景が発達段階によって異なることも示されている。すなわち、青年期後期では現在の自己、特に対人的側面に関心が向いやすいが、40代という中年期に入ると現在の自分と将来の自己に関心が移り、求められる自己の内容はより内面的なものになっていく。その後60代の老年期では、男女で差がみられ、女性では中年期と同様に将来の自分を模索する傾向がみられるが、男性では過去の自己の過去の意味に関心が移る傾向が示唆された。

この結果は、他の知見から行われた研究結果と合致している。大学生が自己の対他者的な側面に関心が向いやすく、中高年では内的な側面に関心が高いとの結果については、例えばSuls (1986) が自己を認識するのに社会的比較を行う割合は、青年期に最も多く、年齢が上昇するにつれその程度が低下することを示した結果と一致する。社会的比較は、他者の目にはっきりと分かる外的・客観的部分や、他者との相対的な位置関係に規定されやすい社会的部分における自己認識に有効な手段である(高田,1986)。従ってこれらの結果は、青年期ほど対他者関係に自己意識が向いやすいという本研究結果と一致するものといえる。また、自己意識の発達的变化研究でも、例えば菅原・山本・松井(1986)が自己意識特性の年代による比較から、公的自意識は15歳以降年齢が上がるにつれて低下することを指摘している。これも自己の対人的側面を重視する傾向が青年期以降低下するという意味で、本研究結果と一致するものである。

また自己の認識の仕方の年代による変化を、時間軸で位置づけた場合には、この時間軸の知見は、個人の時間的展望の変化の問題を自己研究の視点から捉えようという発達研究の結果と重ねて検討することが可能である。例えば都筑(1993)は、アイデンティティを確立したものが、現在の自分よりも将来の自分をより重視することを大学生調査に基づいて指摘している。この指摘は、40代になって将来についての関心が相対的に向いやすいのは、年齢を経て自己が確立したためにより将来を明確に捉えられるようになったためと解釈される。また白井(1991)は、青年期から中年期を対象とした調査を行い、青年期の女子で時間的展望が形成されていないこと、中年層では未来指向性が高いことを指摘している。これも、青年が自己の現在の側面をより重視しやすく、中年期でより将来の自己に関心を向けやすい本研究の結果と一致している。なお、時間的展望に関する研究の多くは、この視点が年齢に伴いどの程度広がったかを、時間意識という点から抽象的に測定するものが多い。都筑(1993)や杉山(1995)は、時間的展望の内容的側面の検討の必要性を論じているが、指摘にとどまっている。本研究では、個人が関心を持つ自己の側面を明らかにすることによって、時間的展望の広がりを推測したものである。従って、既存の研究よりも、具体的な形で展望の内容を示す結果となっている。

ところで、白井は男女の比較から、男性は展望主義（長期的展望を持って努力することが必要という考え）を形成しやすく、女性では形成しにくいとしている。この点について白井は、男性は男性役割に基づいて可能性を切り開くよう指向するために展望主義が形成されやすく、女性は補助的労働に従事するため将来計画を決定できず展望主義が一般的な意識とならないためと推測している。本研究では、女性の方が総じて自己認識欲求が高く、女性の方が男性よりも自己概念が不明確になりやすい結果が示されている。自己の将来展望を形成することを自己概念の明確化をもたらすひとつの要因と解釈すると、白井の指摘するような性役割の違いが、自己認識欲求の喚起の性差を説明する手がかりの一つと考えられる。すなわち、長期的展望を女性は形成できないため、自己が不明確になりやすく、自己認識欲求が形成されないとの解釈が成り立つ。実際に、40代では女性よりも男性の方が、将来に関心を向けており、本研究結果は白井の主張と一致している。しかしながら、60代の男女で自己認識欲求の内容を比較すると、女性では相対的に将来の自己に関心が向いやすいのに対し、男性では過去に視点が移っている。白井の指摘と併せると、男性では時間的展望を重視するが故に、ある程度人生が達成されると過去の統合というところに関心が向くと解釈できる。大学生以降では自己認識欲求が不適応感と関連していることが示されていることから考えると、60代では女性の方がより不適応を感じているのだと推定される。しかし、自己発達の視点からは、自己認識欲求を喚起し情報収集を行うことが、自己発達や自己知識の統合を進めるものと考えられる。従って、本研究の結果は、女性の方が自己発達の可能性を老年期以降にも持ち続けていると解釈することも可能である。このような傾向は、女性役割の現代的な特徴を示している可能性があり、自己認識欲求の性差を今後は性役割の社会的変化と結び付けて検討することが求められる。

第4節 本研究の意義

本節では、自己認識欲求のモデル提出の意義を次の4点にまとめる。第1点は、自己認識欲求モデル提出によって、社会心理学の研究分脈でこれまで提出された自己探求行動に関する動機を統合的に理解する視点を提出したこと。第2に、従来はアイデンティティの視点から捉えられることの多かった青年期以降の自己の発達について、新しい研究視点を導入した点。第3は、自己研究に関する社会心理学的研究知見と発達心理学的研究知見を結び付ける枠組みを提供した点。最後に第4の意義として、近年の社会現象として取り上げられることの多い自己への関心の高まりについて、説明力をもつ点である。前節までに各意義については別途述べているが、以下ではこれらの意義をまとめる。

1. 自己探求行動に関する理論の統合

自己情報収集行動については、これまで様々な理論が提出されていた。ただし、それらはお互いに異なる現象を扱っており、統合的視点が求められていた。自己認識欲求のモデルは、自己査定理論を展開させ、明確化の対象を自己概念全体に広げ、自己探求行動全般を説明できるようモデル化したものである。そして、そのモデルの中に自己高揚動機を位置づけた。これにより、広く現実状況を説明できるようになった。また両動機の対立は主として予期過程においてであり、自己概念が明確な状態では、高揚動機が情報収集行動に影響を与えることが示されている。この流れは、自己概念を明確化しながらも高揚が行われるという自己の中の異なる過程を明示したものといえる。

2. 自己の発達に関する新しい知見の導入

本研究では、自己認識欲求というひとつの視点から、様々な年代に対する研究を行ったことにより、青年期および青年期以降を併せて自己への関心のあり方を比較することができた。この結果として自己発達の道筋について、次のような独自の考えを提出することができたと考えている。

従来、自己意識や自己概念の構造の発達の研究では、青年期をその完成段階とすることが多かった(Hattie, 1992 など)。また青年期以降を扱うにしても、主として同一性という一つの視点からのみ、再構築や発展を論じていた。

これに対し、本研究では自己認識欲求の視点から自己の発達を捉えることにより、同一性といった次元とは別に、自己意識の年代差に関する発達の变化的道筋を示すことができた。

まず自己へ関心をもつことの意味が、青年期中期にあたる高校生と、大学生を含む青年期後期以降の間で変化することが示された。高校生では、自己認識欲求が学校や家庭での適応と結び付き、適応的なものほど自己を知りたいと感じていた。逆に、青年期以降の男女では自己認識欲求は日常生活の不満や自己の否定的変化といった不適応感によって喚起されていた。この理由として、本研究は自己意識の喚起要因の差・自己概念の変化についての心理的負担や社会的要請の有無などを推測した。

また、自己のどの側面に自己認識欲求が喚起されやすいかについても、大学生から60代に至る過程では、自己について知りたい内容が自己の対人的側面から内的側面に、自己の現在から未来そして過去へ推移していくという流れが推測された。この知見は、人間の自己構築についての道筋を示すものと考えられる。

3. 自己研究に関する社会心理学的研究知見と発達心理学的研究知見を結び付ける枠組みの提供

自己認識欲求のモデルでは、社会心理学の枠組みから理論を構築した。しかし、自己概念不明確感の生起の背景を様々な年代を対象として確認したことから、不明確感の背景には個人の発達が影響を与えていることが明らかとなった。これまでの社会心理学における自己研究は、主として既に完成した自己概念の構造や情報処理過程を明らかにすることに研究主眼を置いており、そこには発達の視点はなかった。ただし、情報処理過程の背景を明確にするためには、そこに発達の視点を導入しなければ、自己概念不明確感の背景要因の点で、不十分な説明しかできない。

逆に、発達の視点に基づいた既存研究では、青年期以降の自己発達は同一性の視点を基本として変化・発達を捉えていた。本研究は、この自己発達の研究に社会心理学的な視点を導入したものである。自己概念の変化を普遍的なものとする視点の導入により、アイデンティティの再構成の視点を中心に論じられた各場面を、不適応やライフスタイルの変化あるいは意志決定場面などを同様のものとして位置づけ、自己知識の非一貫性・矛盾や不足の意識という形に置き換えて概念化することができた。これにより、より普遍的に自己への関心の問題を捉えることができるようになったと考えられる。

このように自己認識欲求のモデルは、自己への関心の問題について、社会心理学的な視点と発達の視点を結び付ける枠組みを提供した点で、自己研究に貢献したと考えられる。

4. 現代社会における自己への関心の高まりに関する解釈の提示

本研究で提出した自己認識欲求モデルは、現代社会にみられる自己への関心の高まりの現象に解釈の枠組みを示した点も有効なものと考えられる。以下、モデルに基づいた考察を述べる。

(1) 普遍的な心的過程としての自己認識欲求

現代社会では自己への関心が高まっていると言われていたが、本研究ではここにみられる「自分を知りたい」という心理を人間に共通の普遍的なメカニズムとして位置づけ、それを実証することを試みた。

複数の調査を通じて、自己認識欲求の背景には、自己の否定的変化や同一性混乱、あるいは対人関係の不適応や生活水準の低さなど、年代や性別によって様々な原因が存在していることが示された。しかし個々の背景は異なっても、それらを自己概念不明確感をもたらす状況として集約し、自己認識欲求モデルに位置づけることが可能であることが明らかとなった。これらはいずれも、自己知識間の非一貫性・矛盾に気付いたり、社会的行動を起こすのに自己知識が不十分であることに気付く状況であり、自己概念不明確感を生じるが故に必然的に自己認識欲求が喚起されたのだと言い替えることができる。

このように考えると、自己認識欲求の喚起自体は特に現代的なものということではなく、人間の普遍的な心的過程のひとつであるといえる。そしてこれまで自己への関心が論じられる際には、背景となる不適応状況が強調されるなど特殊な心理として記述されることが多かった。しかし、本研究では実験場面で生じる一時的な自己認識欲求から、自己の不適応や否定的変化によって生じる自己認識欲求までをひとつのモデルで説明可能にしている。自己認識欲求モデルは、自己への関心の問題をより一般的な心理として説明することを可能にしたものと結論づけられる。

(2) 自己認識欲求モデルからの説明

最後に、序章で述べたような、近年の自己認識欲求の高まりと、これに併せて論じられることの多い様々な自己情報収集手段になぜ人々が魅きつけられるのかについて、自己認識欲求モデルに基づいた解釈を示す。

まず、自己認識欲求が喚起される背景である。Baumeister (1987) は、現代のような自己追求を求める傾向について、身分や役割が明確な行動指標を与えていた以前の固定的な社会構造が崩壊した結果と指摘している。鑑 (1990) はこれを「予定アイデンティティ」から「選択的アイデンティティ」への移行との視点から論じている。また、伊藤 (1995) は具体的に、テンポの速すぎる社会的変化・価値観の多様化・家庭崩壊現象などを近年の自己への関心の高まりの背景として論じている。これらの状況は、自己認識欲求モデルでは自己概念不明確感をもたらすものとして解釈できる。急激な社会的変化や価値観の多様化は、これまで正しいと考えて

いたことが、新たな場面では正しくないというような矛盾した経験を生じやすくさせる。さらに、変動性の高い社会では既存の自己知識では対応できない場面が生じる可能性が高く、自己が適応するために常に新しい知識が求められる。個人が蓄積してきた自己知識間に矛盾や非一貫性をもたらしやすく、自己知識の不足を感じやすいこれらの状況が、自己認識欲求を高めていると推定できる。また、固定的な社会構造の崩壊、あるいは「選択的アイデンティティ」への移行は、自分自身に指標を求める必要から、自己知識の矛盾や不足を意識しやすくなると考えられる。同時に外的な枠組みの欠如により、不明確になる自己概念の側面が広がり、不明確感の解消も困難になるため、「自己概念不明確感→自己認識欲求→情報収集行動」というループが常に繰り返されていることが推測される。

次に、様々な自己情報収集行動が存在する中で、自己調査・自己啓発セミナー・“心理テスト”・占い・宗教などに対して特に関心が高まった理由について考えてみたい。

まず、上記のような自己概念不明確感をもたらす状況では、自己認識欲求が喚起されやすいので、情報収集手段一般に接近しやすくなっていることが予測される。ただし、特にこれらの手段に人気が高いのは、自己認識欲求モデルの予期過程が関連するためと推測される。自分を知りたいと感じていても、自己の否定的な面が明らかになりそうだと感じられる場合には、実際に情報収集行動を行って自己概念を明確にすることが行われぬ。すなわち、自己認識欲求が喚起しても自己概念明確化には至らないことになる。このような時、占いや“心理テスト”等の手段は、自己情報収集手段として選択されやすい。これらは信憑性が低いため、もし否定的な情報が提示されたとしても、信憑性が低いという理由で自己知識に含めず、その情報による自己評価の低下を避けることができると判断されるためと考えられる。

情報収集手段として特定のものに人気があつまる背景としてもうひとつ考えられるのが、これらが他者による外的な基準で判断された自己情報であるという点である。自己認識欲求のモデルでは、自己概念不明確感に影響を与える要因として、外部に基準をおくパーソナリティを位置づけていた。外部に基準をおくパーソナリティをもつ人ほど自己概念が不明確になりやすいため、自己認識欲求を喚起しやすいと推測されている。従って、近年の自己への関心についても、このようなパーソナリティをもつ人が中心になっていることが予測される。実際に、近年自己を知る手段として注目されている、自己調査・“心理テスト”・占いなどは、いずれも他者から直接的に自分についての情報を得る形態をとったものである。すなわち、自らの基準で情報を集めていくというよりも、他者の基準で評価された自己の姿をそのまま受け入れようとする姿勢が示されている。

さらにこの中でも特に、自己啓発セミナーや宗教は、それぞれの立場に基づく価値観をもつ

た情報を、個人に提供するものである。これらの手段による情報収集行動は、社会的行動を起こすための自己知識を増加させ、一貫性を生じさせる意味では有効である。ただし、提供される情報が必ずしも個々人に対応したものとはいえず、場合によっては不適切であり有効な自己理解手段とはいえないことが問題となっている(酒井,1995)。さらに、自己概念を形成する上で、他者基準に基づく知識体系をそのまま取り入れると、既存の自己概念と新情報を一貫させることが難しく、自己概念明確化には至らない可能性がある。例えば自己啓発セミナーに参加しても、日常生活に戻ると再び不適応を起こすような状況(酒井,1995)がこれにあたる。既存の自己概念に新たな自己知識が統合されない限り、矛盾によって自己認識欲求が喚起し続けることになる。

しかし逆に、自己概念全体が不明確になり、自己知識の構造が混乱して統合されていない状態の個人には、むしろこれらの手段は自己概念明確化には有効となる。自己啓発セミナーや宗教は単に自己情報を提供するだけでなく、自己知識の構造自体の変化を求めるものである(酒井,1995; 西田,1995)。従って、これらの手段に基づいた自己情報収集を行い自己を体系化すれば、自己概念が明確で安定した状態に至ることが予測されるのである。言い替えば、自己概念不明確感が大きい者ほど、明確化を行うための基準を提供する外的手段に魅力を感じるものと考えられる。このような手段に接近するのは若者に多いと指摘されているが(伊藤,1995)、それは彼らが自己概念の構造自体を再編している時期であることに関連している。この他にも、青年期以降の危機的移行期(山本・ワップナー,1992)にあたる者も、自己知識を統合する枠組みを含む、これらの手段に魅力を感じるものが予測される。

第3章 課題と展望

本章では最後に、本研究に残された課題と今後の展望について述べる。

1. モデルの検証

今後に残された課題として第1に挙げられるのは、自己認識欲求モデルのうち実証されていない部分について検討を行うことである。本研究では自己認識欲求のモデルを提出し、全体としてその妥当性が示された。しかし、自己知識不足感に基づく自己認識欲求喚起、自己高揚動機が喚起された時の情報収集行動、情報収集行動からもたらされる自己概念明確化などについては、十分に実証されていない。自己知識の不足感に基づく自己概念不明確感の生起や情報収集による自己概念明確化等は、いずれもある程度の時間を経過し、情報処理過程を積み重ねることによって至るものであろう。このため本研究では用いられたような短期間の実験法や、一時点での心理傾向を測定する質問紙法では実証が困難であると推測される。従って、今後モデルの検討を進める際には、ある程度の長期的展望をもった研究計画が必要であろう。具体的には、例えば長い時間をかけて他者と交流を行うような実験場面の設定や、自己概念不明確感の生起状況や実際の情報収集行動の記述を求めることを継続するような質問紙法などを行い、全体としての自己認識欲求や自己概念の変化を分析することなどが方法として考えられる。

さらに、本研究ではモデル構築の過程でパス解析を用い、分析の結果示された統計的な有意差を根拠として変数間の関連を位置づけた。特に、自己認識欲求の発達の背景に関する知見は、主としてこの手法に基づいて理論構築を行った。ただし、例えば高校生調査(11章)における適応感と自己認識欲求の関連のように、関連係数が有意ではあるが十分に高いとはいえないものも存在している。このため、今後は分析方法や研究方法を多様にし、引続きモデルの妥当性検証を続ける必要がある。

2. 自己認識欲求尺度の精錬

続いて課題として残されているのは、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求尺度の精錬である。信頼性の検討結果では、いずれも一定水準を越える信頼性係数を示し、妥当性についても複数の方法を用いて検証がなされた。この結果、両尺度は青年期を対象とする場合には有効であることが確認された。ただし、信頼性係数の値や基準関連妥当性の検証が十分であるとは言い切れず、引続き尺度を精錬する必要があると考えられる。また、本尺度は大学生を対象として作成されており、それ以外の回答者を対象とした調査では新たな尺度項目が作成されてい

る。これらについては、信頼性・妥当性とも検証が行われていない。自己認識欲求の内容が年代によって異なることについては、第13章の結果が示す通りである。今後は、幅広い年代を対象として実施できるような尺度の開発および精練が求められる。

3. 自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求の個人差

本研究では、自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求を状況変数として位置づけている。ただし尺度得点にはばらつきがみられ、第14章で両尺度得点の高群と低群とでは、生活意識や自己意識について差のみられた側面が多かったことなどから、これを比較的永続的なパーソナリティ特性のひとつとして捉えることも可能と考えられる。自己認識欲求・ネガティブ情報回避欲求を個人差のひとつとして位置づけた時には、これが日常生活の行動に差をもたらすだけでなく、自己概念の構造や自己発達にも影響を与えるものと推測される。例えば、自己認識欲求が高い場合には情報収集行動が頻繁に行われるために、自己の構造化が進むと考えられる。また、自己認識欲求とネガティブ情報回避欲求を組み合わせれば、自己認識欲求が高くてもネガティブ情報回避欲求も高いものは自己概念が明確化しにくく、結果として自己に都合のよいように認知が歪んでいる可能性も指摘される。今後は、自己認識欲求やネガティブ情報回避欲求の個人差が、長期的な自己の変化にどのような差をもたらすのかを検討したいと考えている。

4. 自己構造研究との関連づけ

社会心理学における自己研究は、これまで成人期の完成した自己の構造を明らかにすることに主眼を置いており、自己認知構造の変化を扱ったものは少ない。情報処理による変化が扱われる場合でも、主として実験を中心とした短期間の情報処理過程に限定されている。しかし、自己は始めから完成したものとしてあるものではなく、生まれてから生涯を閉じるまで多量な情報を処理し、変化していくものである。

本研究は社会心理学的な研究枠組から自己認識欲求の理論を提出したが、その過程で青年期中期から後期の間に適応と自己認識欲求との関係が変化することや、自己概念が不明確になる側面が年代によって変化することが示された。これは、自己構造変化の形が発達に伴い変化することを示すものである。ただし、本研究では、この発達が自己概念のどの部分に影響し、何を変化させたのかについては未検討である。今後は、本研究の知見を生かし、発達に伴う自己の構造変化を長期的な視野をもって明らかにしたい。

同様にして本研究では、自己概念不明確感が生じた側面の性質についても、未検討である。

Linville (1985) の自己複雑性モデルや、自己認知の構造と自己評価の関連を分析した研究(山本ら,1982;本間ら,1992)の結果を考慮すると、不明確感が生じる側面によって、自己認識欲求喚起の程度、予期過程における情報処理の形などに差が生じることが推測される。従って、今後は自己概念不明確感が生じた自己の側面の性質を考慮し、この差が自己認識欲求の喚起と解消の過程にどのような影響を与えるかを検討することが必要である。

5. 社会現象との関連分析

前章で述べたように、自己認識欲求の喚起と解消は個人内の過程であるが、自己概念不明確感の生じる背景という点で現在の社会状況との接点をもつ。自己認識欲求モデルは、なぜ現代社会で自己への関心が高まるのか等の問題について、その解釈の枠組みを提供できることが指摘されている。ただし、この社会的背景と自己認識欲求の関連については、本研究では十分な実証研究は行われなかった。社会のあり方やその変化が個人の自己認識欲求に与える影響を実証的に明らかにするために、今後は社会的な相互作用を含めた実験場面の設定や、フィールドスタディなどの多様な手法を用いて研究を展開していきたいと考えている。

6. まとめと展望

序章で述べたように、自己に関心をもち、自己を理解しようとする傾向を人間の普遍的な特徴とする考えは、一般に広く普及している。その一方で、自己への関心の高まりは現代社会における特徴的な現象であるとの指摘も存在する。本研究では、自己認識欲求モデルを用いることにより、自己探求が人間の基本的な自己過程であると同時に、社会現象に影響をうける構造をもつことを示した。これにより、自己への関心を普遍的なものとする視点と、自己への関心の高まりを現代的なものとする視点を、同様の枠組みから説明可能にしたと考えられる。また、実証研究の中で明らかにされたように、自己認識欲求は対人関係の不適応感や生活の変化等と強く関係しており、社会的な存在としての人間の性質を改めて確認するものと位置づけられる。

本研究では自己探求行動について、社会心理学的な研究枠組みに基いてそのメカニズムの検討を行った。ただし、「自分とは何か」という問いに示される自己探求は、古来より哲学や文学のテーマであり、その時々思想あるいは研究法に基づいて様々な視点から説明が試みられてきた。自己をめぐる視点は現在、以前にも増して一層複雑となっており、自己を身体や細胞と同義とするとの生物学者あるいは生理学者の考えがある一方で(例えば中村,1996;養老,1996)、身体を持ち込むのは混乱を持ち込むだけにすぎない場合を指摘する哲学者の考えもある(例えば山内,1996)。また本研究のように社会とのつながりを重視する視点もあれば、社会

とは全く無関係なものと切り離す考えもある。自己とは何かを問う、これらの様々な視点に位置づければ、本研究が取り上げた自己への関心、あるいは自己への問いは、自己にかかわる問題のうち限定されたごく一部であるといえるだろう。

しかしながら、この「自分とは何か」という深遠な問いの前では、各研究者が自分の立つ学問分野から、限定された方法と視点をもって真実を探し出す他はないように思われる。その結果として、それぞれが提出する知見はそれぞれの領域の限界を反映するものになるが、これら真実を照らす複数の光によって、自己に対する多面的で深い考察が可能になると考えられる。このため筆者自身は、社会心理学的な立場に立って自己を扱う限界を意識しながらも、今後も社会的な存在としての自己に注目し、またこれを実証的に解明していくという姿勢をとりつづけていきたいと考えている。

引用文献

- アドラー A. 高尾利数 (訳) 1987 人間知の心理学 春秋社
(Adler, A. 1927 *Menschenkenntnis*.)
- Alloy, L. B., & Abramson, L. Y. 1979 Judgment of contingency in depressed and nondepressed students: Sadder but wiser? *Journal of Experimental Psychology: General*, 108, 441-485.
- オルポート G. W. 豊沢登 (訳) 1959 人間の形成 理想社
(Allport, G. W. 1955 *Becoming*. New Haven: Yale University Press.)
- オルポート G. W. 今田恵 (監訳) 1968 人格心理学 (上・下) 誠信書房
(Allport, G. W. 1961 *Pattern and growth in personality*. New York: Holt, Rinehart & Winston.)
- Anderson, J. R. 1976 *Language, memory, and thought*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 安藤清志 1987 様々な測定尺度 末永俊郎 (編) 社会心理学研究入門 東京大学出版会
Pp. 211-228.
- 蘭 千壽 1990 パーソンポジティヴィティの社会心理学 北大路書房
- Baumeister, R. F. 1987 How the self became a problem: A psychological review of historical research. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 163-167.
- Baumeister, R. F. 1991 Suicide as escape from self. *Psychological Review*, 97, 90-113.
- Bem, D. 1972 Self-perception theory. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 6. New York: Academic Press. Pp. 1-62.
- Bower, G. H., & Gilligan, S. G. 1979 Remembering information related one's self. *Journal of Research in Personality*, 13, 420-432.
- Broxton, J. A. 1963 A test of interpersonal attraction predictions derived from balance theory. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 66, 394-397.

- Bugenthal, J. F. T., & Zelen, S. L. 1950 Investigations into the self-concept. I: The W. A. Y. technique. *Journal of Personality*, 18, 483-498.
- Campbell, J. D. 1990 Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 538-549.
- Carver, C. S. 1975 Physical aggression as a function of objective self-awareness and attitude toward punishment. *Journal of Experimental Social Psychology*, 11, 510-519.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1981 *Attention and self-regulation: A control-theory approach to human behavior*. New York: Springer-Verlag.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1990 Principles of self-regulation: action and emotion. In E. T. Higgins & R. M. Sorrentino (Eds.), *Handbook of motivation and cognition*. Vol. 2. Pp. 3-52.
- Cheek, J. M., & Briggs, S. R. 1982 Self-consciousness and aspects of identity. *Journal of Research in Personality*, 16, 401-408.
- Cooley, C. H. 1902 *Human nature and the social order*. New York: Scribners.
- Crary, W. G. 1966 Reactions to incongruent self-experiences. *Journal of Consulting Psychology*, 30, 346-252.
- Damon, W., & Hart, D. 1988 *Self-understanding in childhood and adolescence*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duval, S., & Wicklund, R. A. 1972 *A theory of objective self-awareness*. New York: Academic Press.
- エリクソン E. H. 仁科弥生 (訳) 1977 幼児期と社会 1 みすず書房
(Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: Norton.)
- エリクソン E. H. 岩瀬庸理 (訳) 1969 主体性<アイデンティティ>-青年と危機- 北望社
(Erikson, E. H. 1968 *Identity - Youth and Crisis*. New York: Norton.)
- Feather, N. T. 1969 Attribution of responsibility and valence of success and failure in relation to initial confidence and task performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 13, 129-144.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical*

- Psychology*, 43, 522-527.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- フェスティンガー L. 末永俊郎 (監訳) 1965 認知的不協和の理論 - 社会心理学序説 - 誠信書房
(Festinger, L. 1957 *A theory of cognitive dissonance*. Stanford : Stanford University Press.)
- フロイト S. 井村恒郎・小此木啓吾他 (訳) 1970 フロイト著作集第6巻 自我とエス 人文書院
(Freud, S. 1923 *Das Ich und das Es*.)
- 福本博文 1993 心をあやつる男たち 文藝春秋
- 福富護 (監) 1996 続現代高校生のライフスタイル・意識・価値観 ライフデザイン研究所
- Hattie, J. 1992 *Self-concept*. New Jersey : Lawrence Erlbaum Associates.
- Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal relations*. New York : Wiley.
- Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy theory: A theory relations self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-340.
- Higgins, E. T. 1989 Self-discrepancy theory: What patterns of self-beliefs cause people to suffer? In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 22. New York : Academic Press. Pp. 93-136.
- 本間道子・上瀬由美子・布川由紀 1993 自己概念の認知的構造と自己評価に関する一考察 - 大学生を対象として - 日本女子大学人間社会学部紀要, 3, 147-154.
- 堀野緑・上瀬由美子 1994 青年期における自己情報収集行動 教育情報研究, 10, 55-62.
- 井上祥治 1992 自己概念 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (編) セルフ・エスティームの心理学 Pp. 48-56.
- 伊藤美奈子 1995 占い・新宗教がもつ現代的意味 菊池聡・谷口高士・宮元博章 (編) 不思議現象、なぜ信じるのか - ころの科学入門 - 北大路書房 Pp. 145-160.
- James, W. 1890 *The principles of psychology*. New York : Holt, Rinehart, & Wiston.
- Jones, E., Rock, L., Shaver, G., Goethals, G., & Ward, L. 1968 Pattern of performance and ability attribution : An unexpected primacy effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 10, 317-340.

- 梶田徹一 1988 自己意識の心理学<第2版> 東京大学出版会
- 梶田徹一 1994 自己意識心理学への招待 有斐閣
- 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 1982 Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- 上瀬由美子 1990 自己認識欲求に関する研究(3) 日本グループ・ダイナミクス学会第38回大会発表論文集, 79-80.
- 上瀬由美子 1991 “雑誌心理テスト”の現状と受け手の心理 日本心理学会第55回大会発表論文集, 653.
- 上瀬由美子 1992a 自己認識欲求の構造と機能に関する研究—女子青年を対象として— 心理学研究, 63, 30-37.
- 上瀬由美子 1992b 収集される自己情報の内容と収集手段 日本心理学会第56回大会発表論文集, 222.
- 上瀬由美子 1995 中高年の自己認識欲求 日本心理学会第59回大会発表論文集, 69.
- 上瀬由美子 1996 自己認識欲求と自己概念不明確感の関連 東京女子大学紀要<論集>, 46, 83-98.
- 上瀬由美子・堀野緑 1991 情報収集行動と自己認識欲求の関連について 日本グループ・ダイナミクス学会第39回大会発表論文集, 101-102.
- 上瀬由美子・堀野緑 1995 自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景—青年期を対象として— 教育心理学研究, 43, 1-9.
- 上瀬由美子・堀野緑・関口元子 1989 雑誌心理テストの心理学的考察—その1— 日本心理学会第53回大会発表論文集, 235.
- 上瀬由美子・松井豊・古沢照幸 1991 血液型ステレオタイプの形成と解消に関する研究 都立立川短期大学紀要, 24, 55-65.
- 上瀬由美子・菅原健介・宮本聡介・井上果子・山本真理子 1994 若い母親の意識(2) 若い母親の自己意識・生活意識 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 256-257.
- 加藤隆勝 1980 青年期の自己形成 久世敏雄・加藤隆勝・五味義夫・江見佳俊・鈴木康平・斎藤耕二 青年心理学入門 有斐閣 Pp. 29-61.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情緒的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
- 加藤隆勝・高木秀明 1981 青年期の自己概念と対人態度、社会意識、価値観との関係 筑波大学心理学研究, 3, 51-70.

- 近藤裕 1995a ほんとうの自分と出会う本 法研
- 近藤裕 1995b 「本当の自分」を生きる心理学 KKベストセラーズ
- 越良子 1994 目標と達成可能性認知が自己査定行動の生起に及ぼす影響 心理学研究, 65, 364-370.
- Kuhn, M. H. & Mcpartland, T. S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.
- 桑原知子 1991 人格の二面性について 風間書房
- 久世敏雄 1980 青年期とは何か 久世敏雄・加藤隆勝・五味義夫・江見佳俊・鈴木康平・斎藤耕二 青年心理学入門 有斐閣 Pp. 1-27.
- 久世敏雄・加藤隆勝・五味義夫・江見佳俊・鈴木康平・斎藤耕二 1980 青年心理学入門 有斐閣
- Latané, B. 1966 Studies in social comparison: Introduction and overview. *Journal of Experimental Social Psychology: Supplement*, 1, 1-5.
- Lecky, P. 1945 *Self-consistency: A theory of personality*. New York: Island Press.
- レビンソン D. J. 南博 (訳) 1980 人生の四季—中年をいかに生きるか— 講談社 (Levinson, D. J. 1978 *The seasons of a man's life*. New York: Knopf.)
- Linville, P. W. 1985 Self-complexity and affective extremity: Don't put all of your eggs in one cognitive basket. *Social Cognition*, 3, 94-120.
- Linville, P. W. & Carlston, D. E. 1994 Social cognition of the self. In P. G. Devine, D. L. Hamilton, & T. M. Ostrom (Eds.), *Social cognition: Impact on social psychology*. New York: Academic Press. Pp. 143-193.
- 町沢静夫 1990 ボーダーラインの心の病理 創元社
- 真木悠介 1993 自我の起源 岩波書店
- Markus, H. 1977 Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 63-78.
- Markus, H., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Markus, H., & Nurius, P. 1986 Possible selves. *American Psychologist*, 41, 954-969.
- マスロー A. H. 上田吉一 (訳) 1964 完全なる人間 誠信書房

- (Maslow, A. H. 1962 *Toward a psychology of being*. D. Van Nostrand Co. Inc.)
- ミード G. H. 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収 (訳) 1973 現代社会心理学体系10 精神・自我・社会 青木書店
- (Mead, G. H. 1934 *Mind, self, and society: From the standpoint of a social behaviorist*. Chicago: University of Chicago Press.)
- Mettee, D. & Smith, G. 1977 Social comparison and interpersonal attraction: The case for dissimilarity. In J. Suls & R. Miller (Eds.), *Social Comparison Processes*. Washington, DC: Hemisphere. Pp. 69-101.
- Meyer, W., Folks, V., & Weiner, B. 1976 The perceived informational value and affective consequences of choice behavior and intermediate difficulty task selection. *Journal of Research in Personality*, 10, 410-423.
- 南 博 1983 日本的自我 岩波書店
- 宮本裕 1989 企業研修での“自分”発見の実情 青年心理, 77, 61-65.
- 宮崎和夫 1989 自分と向き合わない高校生へ 青年心理, 77, 52-60.
- 水原泰介 1981 社会心理学入門<第2版>-理論と実験- 東京大学出版会
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2)-Self-Differentialの作製- 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.
- 中村桂子 1996 唯一無二の私が生まれる ビオス, 2 哲学書房 Pp. 18-29.
- 西田公昭 1995 マインド・コントロールとは何か 紀伊國屋書店
- 西平直喜 1979 岩波講座子供の発達と教育6 青年期の発達の特徴と教育 岩波書店
- 西里静彦 1982 質的データの数量化 朝倉書店
- Nishisato, S. 1991 Possibilities and limitations of dual scaling. 日本心理学会第55回大会発表論文集, S64.
- 沼崎誠 1992 自己能力診断が可能な課題の選好を規定する要因(2)-能力の統制可能性と重要・有益性および自己能力予測- 実験社会心理学研究, 32, 15-26.
- 沼崎誠・工藤理恵子 1995 自己の性格特性の判断にかかわる課題の選好を規定する要因の検討-自己査定動機・自己確証動機- 心理学研究, 66, 52-57.
- 岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 295-306.
- 岡本祐子 1986 成人期における自我同一性ステータスの発達経路の分析 教育心理学研究, 34, 352-358.

- 岡本祐子・山本多喜司 1992a 定年退職期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 185-194.
- 岡本祐子・山本多喜司 1992b 退職および老年期への移行 山本多喜司・ワッフナー S. (編著) 1992 人生移行の発達心理学 北大路書房 Pp. 282-303.
- Osgood, C. E. & Tannenbaum, P. H. 1955 The principle of congruity in the prediction of attitude change. *Psychological Review*, 62, 42-55.
- Pleban, R., & Tesser, A. 1981 The effects of relevance and quality of another's performance on interpersonal closeness. *Social Psychology Quarterly*, 44, 278-285.
- ロージャズ C. R. 友田不二男 (編訳) 1966 ロージャズ全集第3巻 サイコセラピー 岩崎学術出版社
(Rogers, C. R. 1951 *Client-centered therapy: Its current practice, implications and theory*. Boston: Houghton.)
- ロージャズ C. R. 友田不二男 (訳) 1966 人間の生成の意味するもの ロージャズ全集第12巻 精神療法 岩崎学術出版社 Pp. 115-137.
(Rogers, C. R. 1956 What it means to become a person. In C. E. Moustakas (Ed.), *The self*. New York: Harper and Bros. Pp. 195-211.)
- ロージャズ C. R. 友田不二男 (訳) 1966 十分に機能している人間 ロージャズ全集第12巻 精神療法 岩崎学術出版社 Pp. 61-86.
(Rogers, C. R. 1963 The concept of the fully functioning person. *Psychotherapy: theory, research and practice*, 1, 17-26.)
- Rogers, T. B., & Kuiper, N. A. 1979 Evidence for the self as a cognitive prototype: The "false alarms effect". *Personality and Social Psychology Bulletin*, 5, 53-56.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and adolescent self image*. Princeton: Princeton University Press.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the self*. New York: Basic Books.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monograph*, 80, 1-28.
- 酒井和夫 1995 分析・恐怖の洗脳テクニック リヨン社
- Scheier, M. F. 1976 Self-awareness, self-consciousness, and angry aggression.

- Journal of Personality*, 44, 627-644.
- Scheier, M. F. 1980 Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 514-521.
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. 1983 Self-directed attention and the comparison of self with standards. *Journal of Experimental Social Psychology*, 19, 205-222.
- Scheier, M. F., & Carver, C. S. 1988 A model of behavioral self-regulation: Translating intention into action. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 21. 303-346.
- Scheier, M. F., Carver, C. S., & Gibbons, F. X. 1979 Self-focused attention, awareness of bodily states, and suggestibility. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1576-1588.
- Schoeneman, T. 1981 Reports of the sources of self-knowledge. *Journal of Personality*, 49, 284-294.
- Silverman, I. 1964 Self-esteem and differential responsiveness to success and failure. *Journal of Social Psychology*, 69, 115-119.
- 島蘭進 1992 新新宗教と宗教ブーム 岩波ブックレット, 237.
- 下斗米淳 1990 社会的フィードバックへの対処方略の類型化と、その選択に際しての規定因に受け手の感情が及ぼす効果 社会心理学研究, 6, 52-61.
- 白井利明 1991 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の研究 心理学研究, 62, 260-263.
- シュランガー E. 原田茂 (訳) 1973 青年の心理 共同出版
(Spranger, E. 1924 *Psychologie des Jugendalters*.)
- 菅原健介 1984 自意識尺度日本版作成の試み 心理学研究, 55, 184-188.
- 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について— 心理学研究, 57, 134-140.
- 菅原健介・山本真理子・松井豊 1986 Self-consciousnessの人口統計学的特徴 日本心理学会第50回大会発表論文集, 658.
- 杉山成 1995 時間次元における諸自己像の関連から見た時間的展望 心理学研究, 66, 283-287.

- Suls, S. 1986 Comparison processes in relative deprivation: A life-span analysis. In J. Olson, C. Herman & M. Zanna (Eds.), *Relative deprivation and social comparison*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 95-116.
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27, 215-220.
- Swann, W. B. Jr. 1983 Self verification: Bringing social reality into harmony with the self. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 2. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 33-66.
- Swann, W. B. Jr., & Hill, C. A. 1982 When our identities are mistaken: Reaffirming self-conceptions through social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 59-66.
- Swann, W. B. Jr., & Read, S. J. 1981a Acquiring self-knowledge: The search for feed-back that fits. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 1119-1128.
- Swann, W. B. Jr., & Read, S. J. 1981b Self-verification processes: How we sustain our self-conceptions. *Journal of Experimental Social Psychology*, 17, 351-372.
- 多田富雄 1993 免疫の意味論 青土社
- 多田富雄・中村桂子・養老孟司 1994 「私」はなぜ存在するか 哲学書房
- 高田利武 1986 自己概念に対する社会的比較の影響: 青年期と成人化の比較(2) 日本心理学会第50回大会発表論文集, 531.
- 高田利武 1992a 他者と比べる自分 サイエンス社
- 高田利武 1992b 独立的・相互依存的自己と自尊感情および社会的比較 日本グループ・ダイナミックス学会第40回大会発表論文集, 109-110.
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較-日本人大学生にみられる特徴- 教育心理学研究, 41, 339-348.
- 高橋恵子・波多野誼余夫 1990 生涯発達心理学 岩波書店
- 鐘幹八郎 1984 同一性概念の広がりと基本的構造 鐘幹八郎・山本力・宮下一博(編) アイデンティティ研究の展望 I - 1950~1981 - ナカニシヤ出版 Pp. 39-58.
- 鐘幹八郎 1990 アイデンティティの心理学 講談社
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 1984 外国文献の時代的推移と研究の方法論的検討 鐘幹八郎・山本力・宮下一博(編) アイデンティティ研究の展望 I - 1950~1981 - ナカニシヤ

出版 Pp. 59-98.

- Taylor, S. E. & Brown, J. D. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
- Taylor, S. E., Kemeny, M. E., Aspinwall, L. G., Schneider, S. G., Rodriguez, R., & Herbert, M. 1992 Optimism, coping, psychological distress, and high-risk sexual behavior among men at risk for acquired immunodeficiency syndrome (AIDS). *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 460-473.
- Tesser, A., & Campbell, J. 1983 Self-definition and self-evaluation maintenance. In J. Suls, & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 2. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 1-31.
- Tesser, A., Campbell, J., & Smith, M. 1984 Friendship choice and performance: Self-evaluation maintenance in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 561-574.
- Tesser, A., & Paulhus, D. 1983 The definition of self: Private and public self-evaluation management strategies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 672-682.
- 東京都都民生活局 1979 東京都大都市高校生の心理的特徴と生活環境
- Trope, Y. 1975 Seeking information about one's ability as a determinant of choice among tasks. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 1004-1013.
- Trope, Y. 1979 Uncertainty-reducing properties of achievement tasks. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1505-1518.
- Trope, Y. 1980 Self-assessment, self-enhancement and task preference. *Journal of Experimental Social Psychology*, 16, 116-129.
- Trope, Y. 1983 Self-assessment in achievement behavior. In J. Suls & A. G. Greenwald (Eds.), *Psychological perspectives on the self*. Vol. 2. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 93-12.
- Trope, Y. 1986 Self-enhancement and self-assessment in achievement behavior. In R. M. Sorrentino, & E. T. Higgins (Eds.), *Handbook of Motivation and Cognition*. New York: Gilford Press. Pp. 350-378.

Trope, Y., & Ben-Yair, E. 1982 Task construction and persistence as means for self-assessment of abilities. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 637-645.

辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房

都筑学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.

和田万紀 1992 目標達成行動における自己能力関連情報の収集方略について 心理学評論, 35, 293-310.

Weiner, B., & Kukla, A. 1970 An attribution analysis of achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 15, 1-20.

ウェルズ L. E. ・ストライカー S. 1993 ライフコースにわたる自己の安定性と変化 東洋・柏木恵子・高橋恵子 (編集・監訳) 生涯発達の心理学 2 巻 気質・自己・パーソナリティ 新曜社 Pp. 71-111.

(Wells, L. E., & Stryker, S. 1988 Stability and change in self over the life course. In P. B. Baltes, D. L. Featherman, & R. M. Lerner (Eds.), *Life-span development and behavior*. Vol. 8. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 191-229.)

White, R. 1959 Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, 66, 297-333.

Wicklund, R. A., & Duval, S. 1971 Opinion change and performance facilitation as a result of objective self-awareness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 7, 319-342.

山岸明子 1990 青年の人格発達 無藤隆・高橋恵子・田島信元 (編) 発達心理学入門II 東京大学出版会 Pp. 11-30.

山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

山本多喜司・ワップナー S. (編著) 1992 人生移行の発達心理学 北大路書房

山内志郎 1996 「私」とは何か ビオス, 2 哲学書房 Pp. 88-101.

養老孟司 1996 自己と身体 ビオス, 2 哲学書房 Pp. 76-78.

謝辞

本論文は、数多くの方々のご指導とご支援のもとに成った。

何よりも、筆者の指導教官である日本女子大学の本間道子先生に厚く御礼申し上げたい。本間先生には、学部学生の頃から多くの暖かいご指導を賜った。自由に研究問題を考え、主体的に研究課題を進めることを常に奨励して下さり、その一方で論理的な論文構成を行う大切さを論じて下さる先生のもとで、この論文は完成した。

また、聖心女子大学の松井豊先生にも、本論文の方向付けや内容について、有益なご示唆や助言をいただいた。松井先生は、未熟な筆者の考えにも、常に興味をもって耳を傾けて下さり、丹念にご指導して下さった。本論文は、先生の暖かいお言葉に支えられて完成した。

さらに本論文は、他の先生方との共同研究を通じて学んだことを礎としている。貴重な研究を私なりに再分析・再解釈することを快く許していただくとともに、有益なご示唆やご助言をいただいた先生方に、あらためて感謝の意を表したい。

上記以外にも、研究を進めるにあたり、多くの方々にご指導、ご支援、ご配慮をいただいた。厚く御礼申し上げたい。

